
魔法少女リリカルなのはA ' S 銀月の王と夜天の主

ライラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA，S 銀月の王と夜天の主

【Nコード】

N5322N

【作者名】

ライラ

【あらすじ】

とある呪われた力のせいで少年は願った「みんな、僕を忘れますように」

呪われた魔導書の精霊は願った「誰でもいい、主達を助けてくれ」と……

望んで手に入れた力のせいで居場所を亡くした少年と、望まず手に入れた力で居場所を失った精霊の願いが交わるとき、新たな物語の幕が開ける。

この作品はコードギアス反逆のルルーシュ LOST COLORS の主人公ライがギアス篇終了後にリリカルなのはの世界に飛ばされるお話です。

設定の独自解釈やオリジナル設定、ライというキャラの多少の改変や、多数のオリキャラが登場するのでそれらが許せない人は『戻る』事を推奨します。

プロローグ 分かれ……そして（前書き）

受験生や勉強などで忙しいのに書き始めてしまった処女作品です。
なので出来はかなり酷く、展開は中二病、なんらかの因果で現実で
の作者を知っているというのなら関係性がギクシャクしかねないの
でお気を付け下さいww

プロローグ 分かれ……そして

神根島にある遺跡の祭壇で僕は願う

「みんなが、僕を忘れますように————」

優しいみんなのことだ、僕が消えればきっと悲しんでくれるだろう

だけど、僕のせいでみんなが悲しむのは嫌だ

こんな僕に色を与えてくれたみんなを、僕を失うという悲しみの色に染めたくないから

体の中が焼けるように熱い

もはや慣れさえも覚えるギアスの暴走

この力がある限り僕はみんなと一緒に居ることは出来ない

だからこそ僕は願う、この身に宿る王の力、人の運命を歪めるギアスの力に————

記憶喪失だった僕を受け入れてくれた生徒会のみんな、黒の騎士団のメンバー

一人一人の顔を思い浮かべながら強く祈る

あの人たちの記憶の中から僕という存在が全て消えてしまうという事実が胸が締め付けられる、後悔の念が湧きあがる

もう後戻りはできない

一緒に居たい、共に同じ時間を過ごしたいという思いを無理やり押さえつける

それが……僕の抱えた罪だから

次第に遺跡の中心にあるサークルが放つ光が強くなる。不思議だ、今まであんなに僕の人生を狂わせたギアスの光とよく似ているのにとことなくその光は温かい。

まるで力を吸われるようなその感覚に僕は身を委ねる
光と共に願いが世界へ広がっていくのを感じながら

再び、幾年とも知れぬ眠りに就くため、睡魔が僕を襲う

（ああ、次に目覚めるのは何時だろうか？ 百年後か千年後か、もしかしたら二度と目覚めないかもしれない）

出来るなら僕なんて二度と目覚めない方が世界の為なのだろう
軽い一言でも人の人生を歪める力なんて世界には存在しない方が
良い

しかし、予想はあっさりと裏切られ、頭の中に“声”が響き渡る

『どこの誰でもいい、どんな手段でもいい、もし私の声を聞いているなら、この絶望の輪廻を、絶ち切っては貰えないか』

あの優しい主と一途な騎士たちだけでいい、救っては貰えないか
烈火の将、風の癒し手、蒼き狼、紅の鉄騎、そして我が主……………
神でもいい、悪魔でもいい
どうか……………あの子らを救ってくれ』

深い悲しみを帯びた女性の声、よく響くその声に、願いに

何故か心を揺さぶられる

薄れゆく意識の中、誰とも知れぬその“声”に僕は答えを返す

「駄目……なんだ！」

もう僕は誰とも関わりたくない……いや、関われない……
この力がある限り、もう……誰とも……！

きっと君の大切な人たちも傷付けてしまう」

まどろみに沈みつつある意識の中、必死に声を絞り出す
いや、もしかしたら声は出ていなかったかもしれない
だが、僕の思いが届いたのか“声”は応えてくる

『そうか……ならば、これは契約だ。』

その力、私が抑えよう……仮にも魔導書であるこの身なら――
――』

「ま……て、一体、何を言って……？」

その“声”を最後まで聞き終わる前に僕の意識は途絶えた

……？……？……？

――八神家リビングにて――

少女――八神はやての日課は同世代の小学生のそれとは大きく逸

脱している、

朝、昼、晩、全ての食事を自分で作るというものだ。

もちろん親の手伝いとかそういった物ではなく献立から食材選び、主導は基本的にその少女にある。

しかし、普段ならスムーズに行くはずの作業も今は滞っていた、朝食を作る際に使っていたであろうおたまを握ったままポカンと目の前で起きている不可思議な現象を眺めているせいである。

「なあ、シグナム？ 闇の書がなんか光ってんねんけど何かあったん？」

関西弁訛りの言葉で、たった今起きてきた同居人のシグナムに尋ねる。

「っ！？……いえ、私には分かりかねますが。（バカな、まだ闇の書の蒐集は400ページにさえ達して いないのに、管制人格が起動するのか？）

……それより何が起こるか分かりません、念のため主はやては下がっててください！」

普段から凜としていて、冷静なヴォルケンリッターの将——シグナムがここまで血相を変えらるということはそれだけ現在の事態が良くないことなのだろう、と大まかに推測を付けたはやては自らが座っている車椅子を後ろに移動させる。

そうこうしている内に残りの同居人である三人——シャル、ヴィータ、ザフィーラが駆け付けた。（まあ、ザフィーラは狼形態ではあるが）

「え？ ええ！？ 一体何が起こってるの？」

「知るかよ。それよりこれにどうにかするのが先だろうが」

「ふむ、ヴィータに一利あるな、下手をすれば魔力反応を嗅ぎつけられるかもしれん」

しかし闇の書に不用意な干渉をすれば自分たちの身に何が起こるか分からないという状況でシグナム達が取れる行動の数は決して多くはなく。結果的にはやてを守るために各々が騎士甲冑を展開し静観する　しか手立てが無かった。

「うーん、なんかさっきより光が強くなってるけど、これ爆発するんじゃない？」

先日テレビで放送していた映画の影響のせいか、やたらと物騒な事を呟くはやて。その割には緊迫した雰囲気や欠片も纏っていないあたり、それほど事態を危険視していないようにも見える――というのも当然だ、彼女にとって闇の書は物心ついた時からずっと傍にある、要するに生活の一部なのだ。それが自分に危害を加えるような事になる筈は無いと確信している。

「は、はやてちゃん。いくらなんでもそれはない、と思うんだけど。でもさっきからどんどん闇の書の発する魔力も強くなってるし……もしかしたら？」

「おい、シャル！！不吉なこと言ってるねーでお前は今起きてる事態の解析と、魔力隠蔽の結界の維持に務めてりゃいいんだよ！」

そうこうしている内に目の前も見えないほど強い光に室内が満たされる。瞼を閉じていなければ網膜を焼かれるというほどの強く鋭い銀色の光――

次の瞬間

ドスン、という“何か”が部屋のフローリング張りの床に落ちるような鈍い音が聞こえた。

その音の主の強襲という可能性に備えるために、シグナムとヴィ

ータはそれぞれ手に構えていた武器を振り回せるように体勢を整え、ザフィーラとシャルははやてを守るための術式を全力で展開する。

しかし、いつまで経っても襲撃の気配はなく闇の書が放っていた光も徐々に弱くなる。

そして、光が完全に収まったとき八神家の目の前に現れたのは――

「人、だと？」

「ほえ？みんなのお知り合いやないの？」

「いえ、私たちは全然――」

「知らないよ？」

目の前に現れたのは異形の類でもなければ害意を持った敵ではなく、静かに横たわる人間。

黒い（おそらく学生服だろう）服に身を包んだ外見年齢は大方シグナムと同じくらいであろう銀髪の少年だった。

先ほど聞こえた鈍い音の正体――それはこの少年が床に落ちた音だったのである。

「つて、大変や！この人、意識が無い。

ザフィーラ、この人ベッドに運ぶの手伝ってや。それとシグナムはお湯温めてきて。

シャルは念のために魔法で病気が無いか調べてな。ヴィータは私と一緒にこの人の替えの服探すの 手伝ってくれる？」

「――了解！！」

あまりもの異常事態に目を白黒させているヴォルケンリッターの面々にはやてが呼びかける。

的確かつ冷静な判断を下したはやてに尊敬の念を抱きながらも、

それぞれの役目を果たすため迅速に騎士達は一端疑問を頭の片隅に置きやり、行動に移す。

こうして八神家の慌ただしい一日の幕が開けたのであった。

プロローグ 分かれ……そして（後書き）

どうも、作者のライラです。

ここまで読んでいただいたみなさんありがとうございます。

初投稿作品なので非常に拙い文章ではありますが、頑張っていると思います。

ライというキャラのイメージはゲームをプレイした人それぞれで微妙に違ったりするので、この作品を読んで『ライはこんな事しねーよ!』と不快に思わせてしまわないかへタレな作者は本気でビクビクしていますが、それでも続きを読みたいと思って頂けたら幸いです。

第一話 過去の過ちと新たな出会い（前書き）

なんかグダグダになってしまいましたが、今話はライの過去について触れています。

狂王時代のライの一人称は『私』です。彼の抱えている闇と罪を手く描写できたか自信はありませんが、読んで頂けると嬉しいです。

第一話 過去の過ちと新たな出会い

ある日突然闇の書から現れた男の子。

男の人にこう言うのは失礼なんやけど、とても“綺麗”というのが一番しっくりくる感想。

触ったらさらさらと揺れそうな銀髪と真っ白な肌。絵本から飛び出してきた白雪姫って説明されたほうが納得してしまいそうや。瞳の色は何色なんやろうね？

魔法少女リリカルなのはA・S 銀月の王と夜天の主始まります。

第一話 過去の過ちと新たな出会い

それは遠い過去の現実。夢幻。虚像。

かつての『私』は守りたかった、異国の人間の血が流れているというだけで他の王族から疎まれ、いつ暗殺されるかも分からない母上や妹を。しかし、所詮政略結婚で生まれた”形だけの皇位継承権”など何の役にも立たなかった、生かすも殺すも気分次第……私達はそんな不安定で曖昧な立ち位置の人間だったのだ。

『“力”が欲しい、家族を守るだけの“力”が』

『君がぼくの願いを一つだけ叶えてくれるなら、あげようか？王の力を』

そんな私に力を与えたのは年端もいかない小さな子供、見た目通りの年齢でないことはすぐに分かった。喉笛を切っても死なずに、老獪さを兼ね備えた子供など薄気味悪いだけだ。

本人は『魔法使い』と名乗っていたがそんなことには今となって

は興味がない

たとえ相手が悪魔だろうが魔王だろうが力をくれるなら私は進んで契約を交わしただろう。

その結果、手に入れたのはギアスの力。いかなる命令でも一度だけ強制することの出来る絶対遵守の力。

この力で私は異母兄弟共を事故死させた。半分は血のつながった兄弟を殺す事に罪悪感を覚えなかったわけではない。ただ、私は興味が無かったのだ。

目の前で物言わぬ冷たい骸になった兄達。心底どうでもよかった、息子を失い嘆き悲しむその親も。次王候補を失った後見人達の絶望も——私はそこに『色』を感じる事が出来なかった。

自分を取り巻く世界に『色』なんて感じなかった。

玉座を奪ったとはいえ、王の権力や財宝なんぞ何の価値も感じない。

私が望むのは母上と妹の絶対なる安全、彼女たちが安心して過ごせる世界。

だが、内なる敵を滅ぼしても、小国であったその国は常に敵国からの侵略の脅威に晒されていたのだ。

大切なものを守るため。

ギアスを使い、策を張り巡らし、自らも戦場へ出ることで確実に敵を打ち滅ぼしていった。

己が国力を増強させるための政策は結果的に民の生活を豊かにし、国民からは賢王と崇められ、逆に隣国からは残虐で非道な狂王と恐れられた。

その過程でどれだけの血を流しただろう？

裏切り者は処刑し、逆らうものには肅清を下した。

すべては——愛しい母上と妹を守るために

不思議なものだ、『大切な人を守るため』という大義名分さえあれば人はどこまでも残酷になれる。

——しかし、夢は最も残酷な方法で崩されていく——

「我が国はかつて、まともな兵力も持ち合わせぬ弱小国であった……だが今は違う！ 忠実なる臣民諸君のおかげでかつてないほど大きな力を得た——」

北の大国に進軍を開始する前夜、兵の士気を向上させるために開いた演説。静と動、緩急つけた話術、民草の集団心理を利用した心理誘導、それらの賜物だろう。広場には兵士以外にも自国の国民達が大勢集まっているというのに静まり返っている。それはさながら王宮直属の占星術師のお告げを待つ大臣たちのようでもあった。

「——しかし、今度は北の蛮族共が我が国の国土を踏み荒らそうとしている。

そんなことを許してよいのか？ このまま罪のなき民が略奪され、蹂躪されるのをただ見過ごしていてよいのか？

否——！

諸君達の未来を拓くため、我々は蛮族共を討たねばならない——！

「——」「オオオオオオオオオオオツツ——！！」「」「」「」

我ながらとんだ道化を演じていると思う。

国民の未来のためなど大義名分を掲げていても、それは所詮自国を脅かす敵を滅ぼす言い訳に過ぎない。これが母上と妹を守るための障害にさえならなければ見ず知らずの蛮族共が自国の民をいくら殺そうが興味は無い。

国力を削がれるから打ち滅ぼす、実に短銃な理由だ。

「敵を討ち滅ぼせ！！未来は我が名と共にある！！」

本来ならば兵を鼓舞するためだけのその一言が全ての引き金となった。

「敵を殺せ！！ライ陛下の為に」

「「「「殺せ殺せ殺せ殺せ！！」」」」

「「「「滅ぼせ滅ぼせ滅ぼせ滅ぼせ！！」」」」

広場に集まっていた若者が手に手に武器を取り、敵を殺せと叫びだす。

血気盛んな若者達がそうすることはこれといって珍しいことではなかった。精々人の波に吞まれて数名ほどの人間が怪我するというのはいつも通りのオチ……

だが……

「何が、起きている……？」

最初は目の前で起きている事が信じられなかった。

若い兵士が槍を掲げた。

敵を貫くために。

足腰の弱そうな老夫婦が木槌を手にとった。

敵の脳髓を砕くために。

気よさそうな城下町の料理人が包丁を構えた。

敵の肉を切り裂くために。

気難しいことで有名なきこりが斧を掴んだ。

敵の首をはねるために。

夫と喧嘩して機嫌を損ねていた主婦は剃刀を振り回した。

敵の喉元を？き切るために。

小さな子供は尖った木の枝や堅い石ころを手を持つ。
敵を倒すために。

王宮前の広場に集まっていた、性別も職業も年齢もなにもかもがバラバラな人間全てに共通する事実。

それぞれが、目を真紅に染め北の蛮族を討ち滅ぼすために武器を構える。

異常を通り越して、何もかもが異質で歪なその光景。

兵士の一人がかかげる剣——まるで返り血など浴びた事のないのではないかと思うほど磨き上げられた剣の側面に映る己の顔を見たとき、全てを悟った。

両目の光彩は真紅に染まり、瞳の奥からは今にも羽ばたかんとする不死鳥を彷彿とさせる不気味なマークが浮かび上がっていた。

——ギアスの暴走——度重なる使用によって限界寸前まで来ていたギアスの力がついに暴走した。

本人の意思に関係なく、ギアスは『敵を討ち滅ぼせ』と広場の民衆に絶対遵守の命令をかけてしまった。

「やめろ！！策もなく突っ込んで相討ちにでもなるつもりか！？やめるんだ！！」

必死に私は進軍する軍を止めるために声を張り上げた。

一度かけてしまったギアスは二度と取り消せない。

たとえば王が命令しようと、刃が胸を貫こうとギアスのかかった民衆は最後の瞬間まで命令を果たそうとする。

その軍は数週間かけて最後の一人が動かぬ骸に変わるまで『敵を滅ぼす』為だけに進軍を続けた。

人としての情を捨て、命を維持するための食事や睡眠も一切行わない、統率など欠片も無い、死を恐れない狂った暴力の流れ。

結果、北の蛮族の国はとてつもない損害を被り、放っておいても周囲の国から攻め滅ぼされるほどに弱体化した。

そして……——亡骸と瓦礫の山、空に立ち上る黒い煙と赤黒い血で大地が汚された戦場跡で、私は最も恐れていた現実と対面することになる。

幾百、幾千、幾万の亡骸の山などよりもよほど恐ろしい現実と――

「はは、うえ？……動いて……下さい。

こんなに真赤に服を汚して、風を引きますよ」

「サク、ラ？……お願いだ、目を開けてくれ。

また私と折り紙を折ろう……そうだ、君の名前の元になった花……母上の祖国から取り寄せたんだ。

あんなに見たがっていただろう？……目を、開けてくれ……お願い、だから」

そこで見つけたのは冷たくなり、瞳を閉じた母上と、我が妹サクラ。

母上の祖国の人間には珍らしくない（残念ながら私には受け継がれなかった）綺麗な黒髪も、着ていたドレスもベツトリと赤黒い血で汚れている。手に握られているのは乾いた血がこびり付いたナイフ。

これは何かの間違いだ！何かの夢だ！

そうだと思い込もうにも心のどこかで私は気付いてしまった。

？お前は、自分の守りたいものを自分で壊したんだよ”

”因果応報”

世界が、価値観が、生きる理由が、全てが音を立てて崩れ去ってゆく。

「うわあああああああ！！！！！」

喉が裂けるのではないかというほど大きな自分の叫び声と共に跳ね起きる。

しかし、すぐに自分が居るのは戦場跡でもなければあの世でもないことに気付いて、汗でベツタリと前髪や、自分が着ているTシャツが肌に張り付く不快感に眉をひそめる。

（全部、夢？……僕が記憶を失う前の）

どうやら、今自分はベッドに寝かされているらしい。

（あれ？なんで？

——確か僕は、またギアスを暴走させて、眠りに就くために神根島の祭壇で……

駄目だ、そのあとが思い出せない）

遺跡にたどり着いた後の記憶が靄でもかかっているかのように曖昧で思い出せない。

だけど、今こうしてベッドで寝ているということはまだ眠りについていないことになる。

少々言葉に矛盾が生じるが、遺跡での眠りは少なくともこんな具体的な形を持った空間で寝汗をかいて飛び上がる様なものではなかったはずだ。

とりあえず、自分が置かれている事態を把握するために今自分が居る部屋を見渡す。

今の今まで気付かなかったが、僕の寝ているベッドの脇に人影を見つける。

車椅子に座り、驚いたように口をパクパクさせている少女――

「な、なりー？」

「へ？ いや、わたしの名前はナナリーちゃいますよ？ 私、八神はやて言います」

「ん？ あ、ああ。すまない……人違いだったみたいだ。

目の前の少女、八神はやてと名乗ったその子をよく見るとナナリーとの共通点は車椅子しかない。

短い茶髪の髪に髪飾りを付け、どことなくしつかりとした雰囲気その少女は、どちらかというと僕やナナリー、ルルーシュの様なブリタニア系というよりは、スザクや神楽耶さまのような日本人系の顔立ちに近いものがある。独特の関西弁訛りや名前からしても日本人だろう。

「えと、その、大丈夫ですか？ 大分うなされてたみたいやけど？」

「いや、ただ少し昔の夢を見ただけ……だ。」

それを聞いて安心したのか、はやてと名乗った少女は安堵のため息を漏らす。

そんなに僕は酷いかなされ方をしていたのだろうか？まあ、夢が夢だから仕方ないと言えば仕方ないのだが……

そして、少しずつだが覚醒に近づいてきた脳が一つの問題を導き出す。

——ギアスの暴走——そう、僕は誰も傷付けないために眠りに就いたんだ。

なのに何故！今もこうして起きている！？

もしも、何かの間違いでギアスが発動したら、その命令がその人の人生さえも歪めてしまうような物だったら。

そして、今最もその危険にさらされているのは目の前の少女——八神はやて——なわけで……

「ところであなたの事ですけど「……るな」へ？」

「僕に、近寄るな……」「あの、何言ってるか全然？」お願いだ、僕を放っておいてくれ！！」

大声で叫んでしまった後に気付いた、今こうして叫んだ僕の声そのものが暴走したギアスの命令であることに。

だけど、この子に害のある命令でなくて本当に良かった。嫌われたり恐れられるならそれが良い、接触の機会が減れば傷付けてしまう可能性もずっと下がる。ここがまだエリア11ならば僕はブリタニア軍に逆らったテロリスト。テロリストを匿った事がバレたらどうなるかなんて考えるまでもない。

そう勝手に納得しようとしたところで——

「はい、分かりました……ってんなわけあるか——っ！！」

耳鳴りがするほどの音量での怒鳴り声が鼓膜を震わせる。

「なっ！な、な、なんで？」

「なんで？そりゃ、突然現れて気絶しといて散々うなされてた人に

”放っておいてくれ”なんて言われて放っておけるわけないやろ！
！どこの漫画の主人公やねん？中二病にもほどがあるわ」

違う、僕が驚いたのはどう見ても小学生くらいの女の子に怒鳴られたからではない（まあ、少しは驚いたけど）

何故ギアスが効かない？

既に一度使ってしまったのか？もしくははやてにギアスが効かない”何か”があるのか？それとも僕の中からギアスの力が消えたのか？そもそもここはどこなのか？

そんなグルグルとした答えの見つからない思考に悩まされる僕を見かねたのか、はやてが声をかけてくる。

「こほん。ごめん、ちよう言い過ぎたかもしれん。あなたもどうしてこんな所におるんかよく分かってないみたいやし、頭ん中グチャグチャなんもしようがないんや、本当にゴメン」

そう言い、手の平を合わせ、申し訳なさそうに謝るはやて。小さな小な子に謝らせるのは少々複雑な気分だ。

「いや、こちらこそ突然失礼な事を言ってしまった、すまない」

「じゃあ、お互いさまゆうことで。」

とりあえず、ここに着替えとタオル置いときますんで。

ええと……？」

着替えと汗拭き用のタオルをベッド脇に置いて口ごもるはやて。

ああ、そういうことか

「すまない、名乗ってなかった。」

僕の名前はライ：ランペルージだ。ライと呼んでくれればいい」

一瞬ブリタニア姓を名乗りかけたけど思いとどまり、一緒にクラブハウスで暮らしていた友人の姓を名乗る。

「じゃあ私の事もライさん、落ちついたら一階に降りて来てください。」

きっと色々混乱してるやろうから、みんなで色々話すことがたくさんあります」

それだけ告げるとはやては車椅子を使い、『ゆっくりしてって下さい』と言い残り部屋から出て行った。

すぐに本題へ入ろうとしなかったのは僕に頭を冷やす時間を与えるための気遣いだろうか？だとしたら相当聡い子だ、と胸中で呟く。

それにしてもなんなのだろうか？

目覚めてから感じているこの妙な感覚――

胸の奥が締め付けられるような、と表現すればミレイ会長あたりなら「それは恋煩いよ！」とか言いそうだが、それは違うと断言できる。そもそも出会ったばかりの女の子に恋慕を抱くというのは何か違う。

なんというか、鎖か何かで動きを制限されるような感覚とでも言えбайいのか。だけど胸の奥にほのかな安心感を感じる。

そこまで考え、一端思考を中断する。

考えても自分には分からないと諦めを付けたのもあるが、何より――

「早く着替えよう。このままだと気持ちが悪い」

寝汗を吸い、肌べつとりと張り付く衣類を何とかしたかったのだ。

こんなところで風邪を引いたとあったら、今後の行動に大きな支障が出る。

ヴォルケンリッター side

はやてがライとの会話を終え、一階に降りて来た後、ヴォルケンリッター一同は念話によって即席の会議を開いていた。

同じ部屋に居るのに空気を媒体として声を発さない念話で会議をしているのは、場合によっては主である八神はやてに聞かれると自分たちが行っている”とある行為”に気付かれる可能性も考慮した結果だった。

『どうだ、シャマル。例の少年について何か分かったか？』

『うん、とりあえず病気や怪我みたいなのは無いみたい』

『アイツが敵かどうかは分かんねーのかよ？』

『落ちつけ、ヴィータ。体を調べてそのような事が分ければ苦労はしない。』

それで、リンカーコアは？』

『そうそう、それ。どういうわけかあの子、ライって名前らしいんだけどちょっとリンカーコアが変なのよ』

『変？というと？』

『なんだかりんカーコアはあるみたいなんだけど、その周りに封印処理みたいな術式があってそれが邪魔でよく分からないの』

『てことはやっぱりそれなりの魔導師ってことかよ？』

『ううん、肝心なのはここからよ』

それまでに出てきた情報でさえ十分に重要だというのに、これ以上があるのか？とシャマルを除くヴォルケンリッターの一同が眉をひそめる。

『あの子のリンカーコアに施されている封印。闇の書のプログラム

と同じものが使われているの』

『なん、だと！？』

『じゃあアイツは闇の書に……』アイツ”に呼ばれたって事なのかよ！』

『あの子が現れた後、闇の書のページが10ページくらい白紙に戻ってたから、たぶん闇の書が備蓄魔力を使って召喚したって事になるわね』

『ふむ、だとすれば我々が下手にあの少年へ手を出すのは得策ではなさそうだな。』

しばらくは様子見に徹するを進言する』

『現状維持がザフィーラの結論か。シヤマルとヴィータはどうだ？』

『……あたしは別にかまわねーよ、もしアイツが敵だったらあたしがぶっ飛ばしてやる！』

『私もザフィーラに賛成。それと、はやてちゃんにはこの事は伏せておいたほうがよさそう』

『よし、そういうわけでこの話題は終わりにしよう。さすがにこれ以上は主はやてに感付かれるかもしれない』

人知れず八神家の一室にて行われた会議は、決定的な解決策を導き出せずに終わる。

しかし、守護騎士達の取れる行動は決して多くはなく、彼女達に立ち止まることは許されない。

一見平穏な日常に現れたイレギュラーがそれらの選択肢に、未来にどう影響を与えるか、それを知るものはどこにも存在しない。

————— 第一話終了 —————

第一話 過去の過ちと新たな出会い（後書き）

『あとがきコーナー（仮）』

作者「さあさあ、やってまいりました、第一回あとがきコーナー。

メンバーはヘタレ作者ことライラと」

ライ「どうも、ライです。というか前のあとがきと大分違うくない？」

作者「いいじゃん、別に。こういうのに慣れていたんだから、こうやってあとがきに作者やキャラが登場するのは私の知る限りスレイヤーズやオーフェンの時代から続く由緒正しい行事ですよ」

ライ「要するに何を言っても無駄ってことだね、はあ」

作者「うおう！ライ君。今作の主人公なのにテンション低いじゃないか！」

ライ「そりゃあ、リアルでは地を這うテンションの低さが売りの作者に眠りを妨げられたんだからテンション低くもなるよ」

作者「なんかどこかの魔王みたいなセリフが混じっていますが気にしなくいい。

今回はゲストも招いてよりコーナーが豪華になる予定ですよ

」

ライ「次回がいつになるかは定かじゃないけどね」

作者「うん、なんかやたらコメントが辛辣だね。しかも的を射過ぎていて反論のしようがない」

ライ「というわけで、次回の更新をのんびりと待って頂ければ、こんな作者でもちゃんと執筆をします。それでは次回まででさようなら」

作者「オチ持ってた！？」

第二話 もう涙は見たくないから（前書き）

二話はなんだか数年後に読み直したら作者が恥ずかしさのあまり壁に頭を打ち付けるような出来になってしまいました。知り合いに見られたら今にも首を吊るクオリティです。

ライのイメージが著しく崩壊する可能性もあります。

誤字脱字など見つけましたらドシドシ連絡してください。

第二話 もう涙は見たくないから

綺麗な藍色の瞳をした男の子——ライって名前らしいです。

でも、彼の目はとても寂しそうで悲しい色をしていました——
——半年前のわたしと同じ色……

なんだか彼を放っておいたらアカン気がします。

だけど……まだわたしには彼を笑顔にする方法は分かりません。

二話 もう涙は見たくないから

服を着替え終えた後。僕はこの家——八神家のリビングで座らさ
れている。

テーブルに向かい合う形で座っているのが僕が目覚めたとき傍に
いた少女、八神はやて。

そしてそのはやてを囲むように座っている三人と一匹——
ピンク色の髪をポニーテイルにして凜とした雰囲気を漂わせる女
性。気のせいではなければ、彼女が纏う雰囲気は歴戦の武人のそれに
よく似ている。

金髪をショートボブにしたことなくおっとりとした雰囲気を感
じさせる女性。

うさぎのヌイグルミ（なのだろうか？）を抱えた、かなり露骨に
警戒の視線を送ってくる赤髪を三つ編にしている少女。

青い、大型犬？（狼にも見えるのだが、日本では既に狼は絶滅し
ているし、そもそも青い狼なんて聞いたことが無い）

これに僕を加えた計五人と一匹が今この部屋に居る者のすべてだ。

「ええと、とりあえずみんな集まったみたいやから話を始めるよ？」
まずは、とはやてが話を切り出す。

「自己紹介が必要やね。」

ライさん、お願いできますか？」

はやてに自己紹介を促され、僕はそれにただ事務的に応える。

「ライ・ランペルージです。よろしく願います」

あまり多くを語る気にもなれなかったので自分の自己紹介は手短かに済ました。そもそも僕の本来の素性は簡単に他人に明かせるような物ではない。

退団したとはいえ、黒の騎士団という組織の中核に関する情報を有している僕は、間違ってもブリタニア軍に捕まるわけにはいかないのだ。

その後も自己紹介は淡々と進んでいった。

はやての紹介によると

ポニーテイルの女性はシグナム。

ショートボブの女性はシャマル。

三つ編みの少女がヴィータ。

大型犬の名前はザフィーラと言うらしい。

名前からしてはやてを除けばイレブン——日本人というよりはブリタニア人のよう。ナンバーズとブリタニア人を区別する今のブリタニアの国是の下ではどうも珍しい光景に見える。

そして、自己紹介の間中僕に注がれていた視線——

それに含まれているのはとても鋭い警戒心。一転すればそれはナイフのように敵を傷つける敵意にもなる。

一つのコミュニティに入り込んだ異物への対処法を模索するその視線は少なくとも友好的とはいえない。

そんな視線がはやてを除く三人（と一匹）から注がれていたよう

な気がするのには気のせいだろうか？

しかし、それぞれの自己紹介が終わってすぐにその視線が何を意味するのかを知ることになる。

「よし、自己紹介も終わったしそろそろ本題に入るで」

「ええ、主はやて。まずは私に話をさせて頂けないでしょうか？」

「うん、ええよ。シグナムの方がわたしより状況把握してるみたいやし」

なにやら二人の間で話をしていたようだったが、直後にポニーテイルの女性——シグナムと名乗った——が話を切り出して来た。

「さて、私はあまり迂遠な言い回しは得意でないのでな、率直に言わせて貰う。

ランペルージと言ったな？、今お前がいるのはお前が元居た世界ではない」

「……はい？」

一瞬。言われた事に対して脳が理解に追いつかなかった。

僕が居た世界とは違う世界？

辺りを見回してみるも“異世界”という単語を連想出来るような物より、日本語で書かれた本やカレンダーを始めとしたごくごく一般的な家庭に置いてある様なものしか見つからない。

こんな状況でそんな台詞を吐けるのは精神病の患者くらいなものだ。

「失礼ですが、何故そう思いになったのか聞かせてくれませんか？
今こうして使っている言語や周囲に置いてある物から考えてもここはエリア11だと思うんですが？」

「エリア11？、やはり我々との間に認識の食い違いがあるな、それに魔法や別次元世界についても知識がないとは……。では、掻い摘んで説明しよう——」

とりあえず彼女の提案でお互いの知識についての誤差を無くすために両方の話を交えながら現状確認をすることになる。

そこから明かされた事実には僕の予想を大きく上回る様なものが沢山あった。

魔法や次元世界、時空管理局という組織やロストログアと呼ばれる魔法アイテムが存在するという事実。

そして僕が居た地球と今ここに居る地球はパラレルワールドであり、どうやら僕はロストログアの起こした次元転移というものによって八神家^{こく}に飛ばされたらしい、ということ。

目の前で話しているシグナムさん達もその闇の書というロストログアの作りだしたプログラムだということ。

文化や地形、気候などに大きな差異は無いようだが歴史は大きく違い、

こちらの地球にはブリタニアや中華連邦、^{ナイトメアフレーム}KMFは存在せず、日本も占領されてなくてエリア11とも呼ばれていない、ということ。大まかに纏めるとこんな所だろうか？

あまりにも突拍子のない話だ。リフレイン末期の患者でももう少しまともな夢想をする。これはそう、リヴァルに何度か見せられた漫画の世界の話にしか聞こえない。端的に言うところ、おかしい”

しかし、残念ながら僕もその”おかしい”部類の人間に入っていると言える。

ギアスと言うオカルト的な力を得、その挙句数百年という時を眠って過ごしたのだ。今更そこに異世界へのトリップが混ざってもさほどの汚点にはなりそうにない。

そもそも、一概にそれらを嘘やデタラメと決めつける要因も存在はしない。

元々僕の人生自体がある意味オカルト的な道を歩み続けているわけだからむしろ否定はできないのだ。

昔から世界中で航行中の艦船や飛行機が突如消息を絶つという事例があつたらしいが、もしかしたらそれらの中にはこういった次元転移が原因のものも含まれているかもしれない。と思考する。

「なるほど……なんとなくですけど、理解しました。

その闇の書という……ええと、ロストログアがこの状況を引き起こしたということですよね？」

「ああ、理解が早くて助かる。そして闇の書の存在については――」

「絶対に他言するな、ということですよね？」

話を聞く限り、時空管理局という組織からすれば闇の書の存在は到底黙認出来るような物でないのは理解できる。

それをわざわざ正直に話すのだ――、

僕をある程度は信用してくれているのか

それとも場合によっては簡単に口封じが出来ると言外に語っているのか、隠しても無駄だと判断したのか

……おそらくはそのどれかの要因が働いたのだろう。見た目は幼子にしか見えないヴィータでさえ触れれば切れるような鋭く固い警戒心を向けて来る。放つ気が歴戦の武人のそれと同等なのだ。その前で自分がどれだけ無力か……あまり試したくはない。

「その通りだ。無理やり異世界に飛ばしておいてそれについて他言するなというのはとても不躰な事で心苦しいのだが……」

「構いませんよ。それに僕は元々帰る家のない身ですから謝る必要ありません」

多分、僕がここに飛ばされたのはその闇の書だけが原因ではないと思う。何らかの形でギアスやあの遺跡が今回の件に関わっている可能性は高い。

だが何故、僕が目覚めてからギアスの力が発動しないのか聞いてみたくはあったが、それを話す事についての躊躇いがどうしても拭えない。

余人がその存在を知って悪用する可能性もある。

僕を助けてくれた人達を騙すようで心苦しいが、わざわざ関係のない人に僕の過去を話して変に気負わせるのも悪い——目の前はやてがそういう少女だというのは話している内にすぐ分かった。

「さて、と。色々ありがとうございました

……では、僕はこれで」

話している最中にシャルさんの入れてくれたお茶を飲み干して、腰を上げる——ごく自然に、客人が家を去るかのよう。

そうすると、案の定はやてが声をかけてきた。

「え？あの、お金や帰る家もないのにどこ行くんですか？」

「いや、これ以上この家でお世話になるわけにもいかない。

大丈夫、こちらの世界と僕が元居た世界に大差がないというのなら生きていくのに困りはしないさ。

もちろん闇の書についても他言はしないと約束する」

そうは言ったが、一つだけ嘘が混じっている。

元々僕はここに居るはずのない——居てはいけない人間なんだ。今はなぜか収まっているとはいえ、いつギアスが暴走を再開するか分からない以上、僕がここに居続けるのは得策ではない。もしも

僕が街の往来で「踊り続けろ」と叫べば、老人も子供も男も女も関係なく死ぬまで踊り続ける。疲労の蓄積で肉が悲鳴を上げて、脳が危険信号を出しても、人々はその命令を遂行するためだけに生き続ける。ギアスとはそんな力なんだ。

遺跡での眠りという選択肢が潰れてしまった以上、僕が取れる選択肢は一つ。

幸い12月の気温なら野宿すれば翌日には……

「ダメっ!!」

立ち上がり、玄関に向けて歩を進めている僕の服の袖を掴む手があった。

勿論、その小さな手の正体は車椅子の少女、八神はやてだ。

「はやて、心遣いはありがたいけど、僕は大丈夫だ。生きていくのに問題はない」

「そんなこと言って……本当は生きようなんてこれっぽっちも思っていないんやろ？」

「っ!？」

弱々しく呟かれたその言葉に真実を射抜かれて僕は一瞬言葉を失った。

こんな小さな子に嘘を見抜かれるなんて……よりもよって一番知られたくない相手に。

「私、分かるんよ。守護騎士のみんなと会うまでは私も病気で死ぬんはそんなに怖くなかった。

今のあなたの目はその時の私と同じ……きっと放っておいたら遠くへ行ってまう」

「……………」

「帰る家が無いんやったらここに住めばええ、お金の心配はあらへん……」

だから、だからそんな悲しそうな目せんって!!」

しまいには涙を浮かべながら懇願してくるはやて。

どう考えても昨日今日に出会った人間に対する態度ではない、見ようによっては慈愛の行動だが、一步間違えばそれは一種の狂いだ。だけど…

(何故だ、何故? 僕は今日会ったばかりの他人なんだぞ!! なのに……何故この子は涙を流す?)

その涙を見ると胸が痛む、嫌だ、見たくない

ふと、目の前で涙を流す少女の姿と最愛なる人達の姿が重なる――

僕が王になると決意して以来、笑顔を見せる回数より涙を流す回数が増えた妹のサクラ

また折り紙と一緒に折ろうと嘘を吐く僕の事を信じてくれたナナリ――

彼女達もこうして人の為に涙を流すことが出来ただろう。そう思うと尚更その姿が重なって……

それに気付いた。気付いてしまった僕の頬を一筋の涙が伝う。

今、僕がすべきことはなんだ?

ギアスの暴走を恐れて自らの命を絶つことか？

違う、優先するのは“今”目の前で流れている涙を止めることだ。

そう開き直ってしまえば行動は早かった。

かつて妹やナナリーにしたようにはやての手をやさしく力を込めて握りながら僕は――

「少し、考えが変わった。

……ここで、お世話になってもいいかい？」

「ぐずっ、ほんとう？」

はやての涙を指で拭いながら力強くうなづく。

「ああ、本当だよ。

だからお願いだ、その涙を止めて笑顔を見せて？」

「うん、分かった。

でも、ライくんも泣いとるよ？」

僕の頬を伝う涙を見つけたのかはやては鼻声ながらもそれを指摘してくる。

さすがにこれは恥ずかしい。

「き、気のせいだよ。それよりもまだ答えを聞いてないよ。

もしダメなら僕は寒空の下、路頭に迷うことになるんだけど？」

話題をそらすため（というか本題に戻すために）わざと悪戯っぽい言葉を投げかける。

それに応えるようにはやては悪戯っぽい笑みを浮かべながら――

「答えはもちろんOKや。

ただし、家の家事とか手伝ってもらおう？ 働かざるもの食うべからず、や」

「ああ、了解した。

これからよろしく頼む」

こうして僕の第二……いや、第三の人生が始まることになった。僕に与えられた時間は決して多くはないだろうけど、たとえそれがうたかたの夢であろうとも新しい生活を楽しみたい。許されるような願いじゃないんだろうけど、せめてその時まで――

――第二話終了――

お・ま・け 『セリフの無かった守護獣』

我が名はザフィーラ。闇の書の守護騎士の一人であり、盾の守護獣の役割を授かっている。

私達は今の主、八神はやての下でお世話になっている。

そして今日は同居人が一人増えた。

名はライ。彼もどうやら我々同様ただならぬ過去を持つものらしい。

だが、決して全てを語っているわけではないだろう。

いかなるものでも受け入れる主はやてのお心の広さには驚くと共に感服するばかりだ。

彼が事態を把握する前に私が狼の姿で話をするとう無用な混乱を招くから一段落付くまで黙っているように、との命を主はやてから私は授かっていたのだが……

もしや、さきほどのいざこざで私の事は忘れ去られているのではないだろうか？

『セリフの無かった守護獣』 完？

第二話 もう涙は見たくないから（後書き）

『あとがき』

なんかもう書いている途中で『あれ？このシーンって自分が書くには荷が重すぎね？』と何度も疑念に駆られましたww
多少の気恥かしさが五割、あまりにも文才に欠ける自分のボキャブラリーの酷さがシーンの良さを損なってしまわないかの心配が五割、キャラ同士の関係性が縮まるまでが早すぎる事に対する読者様からの反感を買う恐れがないかの不安が七割、知り合いにコレ読まれて無いよね？というヘタレ心が三割。全部足して二十割（え？）二百%の大台を突破しますww

と、まあそんな冗談は置いておいて。キャラ同士の関係性に私は重点を置いて行きたいなあ、と思っております。

極端な話、仲良くなるならともかく初対面で少しでも話しただけでフラグが立つのならそれ相応に心理描写やらなんやらを盛り付けて行かないとキャラに違和感が生まれるとでも申しましょうか？

例えるならば、ナナリーに対して危害を加える可能性があるのにルールシュがニコニコとフレンドリーに話しかけてきたら違和感バリバリ。みたいな感じです。

心がけていても、やっぱり私の文才だと限度もあるでしょうが、それでよければ今後も読んで頂けると嬉しいです。

お目汚し失礼しました。

二・五話 エプロンが似合うのは？（前書き）

今回は前回の反動からか、ちょっと軽いノリで作ったつもりです。
まあ、全然時間が進んでない件についてのツツコミは無しの方向で
お願いします。

二・五話 エプロンが似合うのは？

色々あって僕は八神家に居候することになりました。
居候という状況にもはや慣れさえも感じる僕の人生って一体？

いや！考えたら負けな気がする……はあ。

魔法少女リリカルなのはA，S 銀月の王と夜天の主、始まります。

二・五話 エプロンが似合うのは？

八神家の居候として過ごすことになった僕の初めての仕事。
それははやてが夕飯を作る手伝いをする事だった。

「いやー、ライくんって意外とエプロン似合うで」

「ん、そうかい？」

はやてから借りているエプロンは青を基調とした布にデフォルメ
化されたタヌキのアプリケが付いている可愛いものだ。

多分この子の手作りなんじゃないかと思う。

「それにしても、その年で家の家事を一通りこなすっていうの大変
だね、親はどうしたんだい？」

「あー、うん。お父さんもお母さんも私が小さい頃に事故で亡くな
ってもうたから家事はもう私の日課なんよ」

「っ！（馬鹿か僕は！？少し考えたら分かったはずなのに）、すま
ない無神経な事を聞いてしまった」

「あはは、そんなに気に病まんでもえーよ。」

今はシグナムやヴィータやシャマルやザフィーラ、それにライ君が居るから全然寂しくないよ」

小さな笑いを上げて屈託ない微笑みを浮かべるはやて。
ついさっきまで泣いていたのは目の錯覚か何かじゃないかと思うくらいに明るい笑みだった。

年相応とも不相応とも取れるその笑顔に少し不安になる。この車椅子の少女は色々な苦勞をして来たんだろう。

——そんなことを思いながら僕は目の前の作業に集中する。

「ええと、まずは洗つといった野菜を切ってもらおうかな？」

「ああ、それならすでに終わらせといたよ」

「うお！ いつの間に？。それなら、次はそれ炒めてや」

「善処する」

事前に何を作るかは聞いていたので割とスムーズに事が進む。

フライパンに油をひいて僕は目の前の野菜を炒める。まずは火の通りにくい素材から炒めるんだったかな？

勿論、途中で料理酒やら調味料やらを加えるのも忘れない。

「むむう」

「ん？もしかしてどこか間違ってたかい？」

横のはやてが僕の手元を覗き込みながらうなづいてくるので一抹の不安を感じながらも聞いてみる。

もしかしたら僕の世界の食に関する知識とこちらの世界の食に関する知識とでは差があるのかもしれない。異なる歴史を歩んだ地球ならば当然ながら文化も違う、文化が違えば食に変化があってもそうおかしいことではない。

しかし、すぐにそれは杞憂に変わる。

「いや、料理酒入れるタイミングといい、調味料の分量といい、見事なまでにお手本通りやなあって」

「はは、お褒めの言葉ありがとう」

「もしかしてライくんって主夫とかやってたん？」

「まさか、僕に既婚歴は無いよ」

そんな他愛のない話を続けながらもはやては卵を割ったりフライパンに油をひいたりと時間を無駄にしない。

この子の方がよっぽど主婦に向いてるような気がする。

というか、こうして料理をしていて一つおかしいことに気付いたんだが――

元々僕はそれほど料理が得意ってわけでは無かったはず。

王だった時代には、毒殺を防ぐために料理人にはギアスをかけていたのだから、そもそも凝った料理に挑戦する理由も無かった。

なのに今は料理本にでも乗っているようなお手本通りの“知識”が頭の中に入っている。

多分バトレーに脳を弄られたとき植えつけられた知識の一つなんだろうけど……一体バトレーはムニエルの作り方だの上手にピザを焼く方法だのを人の頭に植え付けて何をするつもりだったんだろう？

「……執事か何かにでもしたかったのか？」

「どうしたんや？ライくん」

「ああいや、なんでもない」

「そう？ならええんやけど」

どちらにしても、異質な知識が知らないうちに脳内へ埋め込まれていた事には不快感しか覚ええない。

役に立つ知識を埋め込んでくれたことには関してはバトレーに感謝すべきなのだろうか？

それとも人の眠りを妨げて体や脳を弄ったことに腹を立てるべき

だろうか？

まあ、二度と出会うことはないだろうから意味はないのだけど……

「あらあら、美味しそうね。」

「はやてちゃん、ライ君、私も手伝うわよ」

僕が考え事をしている最中にでも近づいてきたのか、エプロンを着たシャルさんが横に立っていた。

個人的な感想だが、女性らしいピンクのエプロンがよく似合っていると思う。

「そうですか？ じゃあ少し手伝ってくれませ——」

「「止めるおとおお！！！」」

「きゃっ、なんなの！？」

「こら！ シグナムにヴィータ、今は夜なんやからあんまり大声出したらあかんよ。近所迷惑」

「もうしわけありません、主はやて」 「ごめんはやて」

決死の形相でシグナムさんとヴィータ（＋ザフィーラ）がキッチンに突撃してきた。（まあ、二人ははやてに怒られて静かになったけど）

なんというか、食事にがつつくというよりは、命の危険を感じた人間の叫びによく似ているような気がする。

……とはいってもたかが夕飯の準備で死者が出る訳もないのだから、なぜそこまで必死なのか全然想像できない。

「突然どうしたんですか、二人とも？」

「いや、シャルに料理をさせるなど忠告に来たのだ」

「シャルの料理はギガマズだからな」

「そ、そんなことないわよ！ 最近は上手になってきたのよ」

「砂糖と塩を間違えた挙句、ただの水と料理酒を間違えたのか？」

「うう！……」

「やっぱギガマズじゃねーかよ」

「しくしく。ねえザフィーラ聞いて、シグナムとヴィータちゃんが酷いのよー」

シグナムさんとヴィータに完膚なきまで叩きのめされたシャマルさんだが、遂にはザフィーラにすがりつきだした。

なんというか……動物に話しかける姿は憐れに思えてきたよ。

「俺も二人の意見に賛成なのだが……」

お前も疲れているだろう、ゆっくり休んでいればいい」

「そんな、ザフィーラにまでえええええ！？」

最終的にはザフィーラにまで慰められるというか突き放されるというか……シャマルさんは泣きながらどこかへと走り去って行ってしまった。

ん？ザフィーラ？

「ザフィーラが、喋った！？」

「ああ！そーいや忘れとったけど、ザフィーラは喋れるし人の姿にもなれるんやで」

「やはり……忘れていらしたのですか。」

なぜだか落ち込んでいる（ようにも見える）ザフィーラ。力強い毛ヅヤと長い牙から連想できる勇猛な獣の姿とそれは妙な事にもマッチしていた。

まあ、彼にも色々あるんだろうから余計な口出しはすまい。

「氣を取り直して自己紹介をするが、我が名はザフィーラ。守護騎士の一人にして主はやてに仕える守護獣だ

これから同じ屋根の下暮らすもの同士、よろしく頼むぞ」

「あ、ああ。こちらこそよろしく」

さすがは魔法世界の住人。

こんな絵本の中みたいなお展開になるとは思ってたなかった。探せば妖精とかも出てくるかもしれない。

「ラーイークーん？」

手がおるすになつとるでー」

「おっと、そうだったね」

「それと、ザフィーラとシグナムとヴィータはシャル探してきてくれへん？」

多分そのへんで“の”の字でも書きながら落ち込んでるやろうからすぐ見つかると思うよ」

「わかったよ、はやて」 「了解しました」 「匂いをたどればすぐ見つかります」

三者三様の返答をしつつもはやての言うとおりに残ったヴォルケンリッターはシャルさんの搜索に駆り出される。

そこにあるのは主の命令に従う騎士、というよりは家族の為に何かをするという温かい”日常”

それだけでみんなの絆の深さが窺い知れる。その光景を”羨ましい”と思ってしまうあたり、まだ完全に僕が八神家に溶け込めていないのだと思う。そもそも完成された内輪のコミュニケーションは他所からすればそう見えるものなのだろう。

……そうだ、僕は僕で料理の途中だったんだ。

———そして数十分後———

完成した温かい料理を机上に置き、夕食を始める八神家一同と僕の姿があった。

もちろん、十分ほど前八神家の近くで保護されたシャルさんも一緒だ。

「やっぱはやての料理はギガウマだ——！！」

「ありがとうな、ヴィータ。」

そやけど野菜も食べなあかでー、今日の野菜炒めはライくん特製や」

「はーい」

「ふむ、なかなか美味いぞ。やるな、ランペルージ」

「どれどれ……お！はやてには負けるけどなかなかウマイじゃねーか」

「そこまで褒められるような物じゃありませんよ、昔知り合いに教えてもらったレシピ通りに作っただけです」

ルルーシュ直伝の特製ドレスシングがこんな形で役に立つとは思わなかった。

これで散々仕込まれた甲斐があったというものだ。

「私もお料理したかったのにい」

なんだか恨めしそうな視線が突き刺さる。
そんなに料理したかったんですか、シャルさん？

「あ、そういえば」

そして、料理も残り少しという程度に差し掛かった頃。

突然はやてが”何か思い出した”とでもいうように声を上げる。
デザートでも用意していたのだろうか？

「どうかしたのかい？」

「うん。ライくんがこの家で暮らすからには色々と必要やなー、つて」

「ああ、確かに」

今現在僕が着ているのはザフィーラが人間形態のときに着る服らしい。

正直なところダブダブな上に夏服なので、もしこれを着て屋外に出れば好奇の目線に晒されるのは確実だ。

「だけどいい、さすがに日用品全部を用意させるのも悪いよ」

「いや、全然そんなことないって。」

それとも、ザフィーラの服が洗濯中の時にシグナムやシャルの服借りて生活する、ゆうんやったら話は別やで？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう言ってくるはやて。なかなかこの娘は機転がきくらしい。

そう言われてしまったら、こちらから言えることは何もない。両手をあげて降参の意思を示す

「僕の負けだ。お言葉に甘えさせてもらおう」

「よっしゃ、決まりや。じゃあ明日の朝にでも買い物に行くで。」

ライ君の洋服選びはシャルも手伝ってや？」

「は〜い♪」

気が付けば当の本人そっちのけで盛り上がるはやてとシャルさん。

「いや、必要最低限の物でもいいんだけど……って聞いてないか」

「大変だなランペル〜ジ。私達は付いていけないが……精々頑張れ」

「シャルの着せ替えか、あれは辛いぞー」

「え”！」

なんだか大変な事になりそうだ——まさかこの予感がある意味最悪の形で当たる事になるとはこのときの僕は思ってもいなかった。

————二・五話終了————

二・五話 エプロンが似合うのは？（後書き）

『あとがきコーナー（仮）』

作者「こんばんは、そろそろこのコーナーにも名前を付けなきゃなあと思い始めたライラです」

ライ「こんばんは最近作者が鬱すぎるストーリーりっばっか妄想して自分の行く末が心配なライと——」

はやて「中の人ネタで私に超能力でも付けようかと本気で悩みだした作者を張り倒したい八神はやてがこのコーナーをお送りします」

作者「じよ、冗談だって。別にはやてに透視能力付いたりライを失明させるような展開にはしないって」

ライ「一体お前は僕に何をさせるつもりだったんだ——！！！」

作者「それは秘密です☆」

はやて「やたら更新が早いからちよっとは見直したんやけど、やっぱりおしおきが必要やね」

作者「ちよ、ストップストップ！！」

いくらなんでもラグナロク受けたら死ぬから

というかあんた本編でまだ魔法覚えてないだろ！？」

ライ「大丈夫、この手のコーナーはそういう設定は無視された空間なんだから気にするだけ無駄だよ」

作者「ギャーーーー！！！！」

はやて「さてと、作者もほどよく蒸発したし」

ライ「これで次回まで——」

はやて&ライ「さようなら」

第三話　ブリタニア　無き　世界（前書き）

いやあ、そろそろ戦闘描写入れないと読者様達に見放されるんじゃないかと心配になり始めたんですがグダグダ過ぎて入れられませんでしたorz

誤字脱字などありましたら連絡ください、感想も頂けると作者は喜びます（↑気持ち悪いです）

第三話　ブリタニア　無き　世界

僕が新たに得た居場所” 八神家”

まだたった一日しか共に過ごしていないけれど、僕はこの色鮮やかな居場所を” 愛おしい” と思えるようになっていく。

願わくば彼女達が悲しみの色に染まらない世界であらんことを……

第三話　ブリタニア　無き　世界

「あ、これなんかライくんに似合うんとちゃう？」

「いやいや、はやてちゃんこっちもいいんじゃない」

「お客様、こちらなんて良いのではないでしようか」

「……はあ」

デパートの洋服売り場の一角で僕は今日何度目とも知れないため息を吐く。

事の始まりにさかのぼる事数分前。

『僕はあまり服に興味は無いのでおまかせします』

正直な話、現代、しかも異世界の標準的な衣服というのが自分の知識とどれほど差異があるのか自信がなかったというのもある。周囲を歩いている人間を見る限りそれも杞憂になりつつあるわけだが……

その言葉を聞いた瞬間、はやてとシャルさん（と、なぜか一緒に居る女性店員さん）の目の色が変わったような気がした。

それ以来、彼女達は一体どこから引っ張り出してきたのか分から

ないほどの洋服を品定めしながら論議をしている。

まあ、それだけなら全然問題は無いし、むしろ嬉しいのだけど――

「なんで持ってこられるのが女物の服ばかりなんだ？」

なんというかフリルの付いた可愛い服や、ロングスカート果てにはメイド服やチャイナ服なんていう、どう考えても普通の洋服売り場に置いてないような物の姿もチラホラ見える。

（もしかして、こちらの世界ではそういうのが常識で僕の知識が間違ってるんじゃないか？）

そう思い込んでしまうほど彼女達のノリは良い。なんで店員さんも一緒に盛り上がるのかは全く理解できないが・・・

シグナムさんやヴィータと一緒に来なかったのはこれを見越していたな。と気付いても“後の祭り”とはこういうことをいうのかな？とぼやくのが精々だ。

はやてとシヤマルさんにミレイ会長の面影を見たのは言うまでも無い。

「ここはやっぱり猫耳かしらね？」

「いやいや、そんなベタに走るよりかはこっちの狼耳の方がええと思うで」

「いえ、お客様こちらのカチューシャなんかもよろしいのではないのでしょうか？」

「全力で遠慮させていただきます！」

とりあえずこれ以上放置しておくとは着売り場（勿論女性用）にまで連れて行かれるような気がするので抗議する。

その後も、僕が男の沽券とプライドと意地をかけて全力全霊で拒否し続けた結果、なんとか普通の服を買ってもらう事に成功した。

「またのご来店、お待ちしておりますーす」

というわけで、今僕の手元の買い物袋には白いコートやセーターなど、冬場を過ごすのに必要な服やはやてに選んでもらった部屋着（男物）

を始めとした生活用品の類がギッシリと詰まっている。

「疲れた……」

「男の子がそんなんやったらだらないでー」

「だったら僕に女物の服なんて着せようとしなくてくれ。」

第一僕が女物の服なんて着ても気持ち悪いだけだろう？」

「この子、本当に自覚ないのね」

「せっかく女の子みたいない顔してるのに勿体ないな」

シャルマルさんとはやてが不吉な事を言っていたがきつと幻聴か何かだ、そうに違いない、うん。

ついでに、はやてが持っている買い物袋の中から猫の耳やうさぎの耳の様なものが見えた気がしたけどそれも幻か何かに違いない！そこでふと、ルルーシュが男女逆転祭りなるものについて語るとき。苦虫を噛み潰したような、忌々しい過去を消し去りたいような顔をしていたのを思い出す。

君も……苦勞してたんだね、ルルーシュ。

そうやって軽い現実逃避に浸っていた僕を見かねたのかはやてが声をかけてきた。

「あ、まさかそんなに傷つかれるとは思ってなかったんや、ゴメン」「いや、いいんだ。ところで他にもう行くところはないのかい？とりあえず必要なものは一通りそろったと思うけど」

「後は病院行って足の検査するだけやからライくんはもう帰っててええよ」

「別に気は使わなくていい、僕も付いて行くよ」

「でも荷物も重いだろうし、検査には時間がかかるからはやてちゃん言うとおりに帰った方がいいんじゃないかしら？」

そういえば今僕が持っている買い物袋にはそれなりの重さがある。人一人がとりあえず生活するための生活必需品が一通りそろっているのだから当然だ。

幸い、生徒会の仕事でこれとは比べ物にならない量の荷物を運んだりしていたからそれほど苦にはならない、とはいってもそこまで気遣いされてしまっただけはそれを無下にするのも悪い。

「分かった、じゃあ僕はちょっとこの街を見て回りたから一足先に帰らせて貰うよ」

「ああ、そんならちょっとやけどお小遣い渡しとくよ。くれぐれも勝手にどっか行ったりせんようにな？」

「やれやれ、僕はそんなに信用無いかい？」

「とりあえず普通にお小遣い渡そうとしたらライ君は気使って受け取ろうとせんやろうなってくらいには信用しとるよ」

両手が塞がっているところで、無理やり学生服のポケットに日本の紙幣をねじ込まれたのでそれを拒む事は出来なかった。

まあ、こうやってお金を渡される時点でそれなりに信用されているんだとは思いたい。

はやて達と分かれて十数分、僕はだまかに方向性を決めて歩き続けている。これといって目的地があるわけでもない、いわゆる散歩というやつだ。

（こうやって街を散策すると、記憶喪失だった頃を思い出すな）

今思えば、生徒会の人々と一緒に過ごしていた頃が人生の中で最も幸せな部類に入る時間だったと思う。

ミレイ会長が比喩抜きで『山のような』書類を持ってきて、僕とルルーシュがそれを処理したり。書類の山を見てげんなりするシャーリーやリヴァルにミレイ会長が激励を飛ばしたり。”おしとやか“設定のせいで強く拒否できないカレンは黙々と書類に向かったり、二ナは部屋の隅でパソコンにずっと向かっていたような気がする。そして軍の仕事で遅れてきたスザクにも山ほどの書類が回される……ん？書類の処理ばかりな気が？

気が付けば昨日見たこの町——海鳴市——の地図でいうなら商店街の大通りの端にあたる部分に来ていた。

街を見て回りたい、というのははやてやシャルさんの気遣いを無駄にしないための言葉でもあったけど

どちらかというと僕個人の願いの方が強い。

神聖ブリタニア帝国の無い世界——他者の手によって支配されていない日本の姿を見てみたかったのだ。

12月の身を刺すように冷たい空気がアッシュフォード学園の制服の隙間から侵入してくる。

自己と他の境界を明確に区別するこの外気は決して嫌いではない。

「とは言っても、さすがに寒いな」

朝には水も氷を張るようなこの温度では外をまともに歩く人

間も多くはない。

今僕が居るのは商店街の中でも比較的飲食店が多く立ち並ぶ区画、昼時ほどではないがそれなりに人が店の中で暖を取っている。

人が集まれば需要が生まれ、需要があれば金が動き、金が動けば人は働く。そうした循環が街を作り、その好循環が続けば人の住みやすい良い街になる、とどこかで聞いた事を思い出す。

「ブリタニアの有無だけでここまで変わるとはな」

先ほどまで僕が居た洋服店、歩いてきた道から見えた多種多様な店。

その大半は日本人が経営して、日本人が客としてやってくる店だった。

元居た世界のトーキョー租界では、ほとんどの店に日本人——イレブナー——が入っても、ブリタニア人からはまともな客としては扱われず

場合によっては店から放り出されたり邪魔者扱いされるような有様だったらしい。

占領以前の日本の話はカレンや扇さん井上さん達から聞いた知識しかなかったけれど、それでも目の前に広がる光景が黒の騎士団のみんなが願い、目指した日本と同じ姿をしているのは想像に難くない。

当たり前のように日本語で喋って、漢字や平仮名で書かれた看板を使い、活気に満ち溢れた人達
だけ——

「僕たちの戦いは一体何だったんだ？」

自問には自答が必要だ。それが意味のない自問だというのは分

かっている。

ただ、ブリタニアがこの世界には無い、それだけのことだ。
経済的な意味でも武力的な意味でも世界の一角を担う大国がなければ影響も大きい。

だけど、自分やカレンや他のたくさんの人達が命を賭けてまで手に入れようとしたものがこうして目の前にあると、自分達の戦いは本当にちっぽけなものだったんじゃないか？という錯覚に陥ってしまう。

この平和な光景を取り戻すためにどれだけの人間が血を流したか——多くの日本人の血が国土を染め上げた。知識だけではなく実感として理解出来る今ならそれがどういう事か理解出来る。

へその問いに私は答えかねますが、そうして虚脱感に浸るほど貴方にとってはこの光景が心の中を占める割合が大きいということではないでしょうか？

「なっ!？」

突然聞こえてくる女性の声に反射的に身構える。

決して帰ってくるはずのない問いに答える者があったのだ。

しかし見渡す限り僕の近くに人はいない。ついに幻聴まで聞こえ始めたか……

へライ様、貴方のすぐ傍です、ここです

そうして声の聞こえるところへ視線を向けると——

僕の胸?……いや、声が僅かにくぐもっているところを考えるとアッシュフォード学園の制服の内ポケットから声が発せられているようだ。

そして内ポケットをまさぐって出てきたのは——

「月下?」

正確には月下先行試作機——前の世界で僕が黒の騎士団に所属していた時の愛機、を起動するのに必要な起動キ―

中心に桜色の宝石のような物が埋め込まれている以外は菱型のソレはその起動キーにそっくりだった。

「肯定。次元転移に伴う構成情報の変化、改竄が原因と思われる機能停止からの一時的な再起動に28時間42分30秒を必要としましたが、私は間違いなく貴方の搭乗機であったType-3A月下先行試作機です」

「そんな馬鹿な……と言えるような状況では無いな。

月下、君はどうしてこんな所に居るのか分かるかい？ 確か黒の騎士団の格納庫に置いてきたはずだけど」

「というか全長が4m以上、重量も数トンあるナイトメアを持ち出すのは不可能なわけだが、そもそも起動キーも持ち出した記憶はない。」

「否定。私は何故この起動キーを模した姿になったのか、それらの情報は私のデータ領域内には確認できません」

「なんて都合の良い台詞だ。まあ、何はともあれ、君とこうして話が出来て嬉しいよ」

正直な話、盗聴器や通信機の類を考慮しなかったわけではないが、今現在僕自身のおかれている状況から考えるとそれは考えづらい。この海鳴という街がブリタニアに用意された偽物で、八神家の人や周囲の通行人が全てブリタニア軍の回し者———というのなら話は別だが。

「ライ様、私です。こうして自我を持ち貴方と言葉を交わすことが出来るこの状況を好ましく思っています」
「そう、か。だけど僕は一つ君に謝っておかなきゃならない事がある。」

藤堂中佐救出作戦の時は本当にすまなかった。

僕の扱いが雑だったばかりに愛機である君を戦場に置き去りにしてしまった」

そう、あれはチョウフ基地での出来事。

月下の機動系に支障が出たので、已む無くデータのみを取り出して自爆させるしかなかった。

乗り捨てるのはただのKMF、戦争の道具で敵を討つための兵器。所詮は弓や槍の延長線上に過ぎないと割り切るには余りに辛い別れだった。

へいえ、あれは私の性能がライ様の操縦技術に劣っていただけです。貴方に落ち度はありません。

それに、その言葉が聞けただけで私にとってはこれ以上ない幸せです」

女性的な声の電子音を発しながら桜色の宝石を点滅させる月下。

そんな台詞を言えるのは今時、英雄譚に出てくる騎士や、軍の新兵教練用ビデオに出てくる理想の『兵士』程度だと思っていた。

桜色がどちらかというとピンク色に変わっていたのは照れくさかったからだろうか？

へそれより、これ以上の屋外活動はお勧めできません。一度どこかで体を温める事を提案します」

「ああ、そうさせて貰うよ。一応お金はあるからね、向こうに見える喫茶店で何か頼むよ」

へそれが良いです。

それと、未だに私の中に眠る幾つかの圧縮情報の解析、及び解凍に機能の大半を割く必要がありますのでこれから一時的な休眠状態に入る必要があります、もし私が必要な時は呼んでください」

「了解した、ゆっくり眠ってくれ」

そのやり取りの後、深夜の街から少しづつ光が消えて行くように桜色の宝石部分がゆっくりと光を失った。いわゆる睡眠状態スリープモードなのだろう。

ふとそこで、冷気を伴った風が背を撫で僕は身震いする。同郷の人間、ではなくとも自分を知ってくれている者に出会えたおかげで時間が経つのを忘れてしまっていたのだ。

いい加減指先がかじかんできた。そろそろ体を温めよう。

どこか暖房の効いた場所は無いか？ そう思い、目の前に見える喫茶店へ視線を向ける。

——翠屋——と看板が立てかけられた喫茶店には、オープンテラスがあるのだがいくらなんでもこの時期、この時間に店外で食事をするような酔狂な客は皆無だ。もちろん僕もそんなつもりはなく暖房の効いた店内に入る。

幸いな事に店内は割と空いていた。中に居るのは大体高校生くらいの女の子三人と、中学生位の男の子が二人、小学生くらいの女の子二人が机の上に宿題らしき物を広げているだけ。まあこの時間帯にしては混んでいる方だと思う。

「ホットコーヒーを一つ」

「か、かしこまりました」

店内に入るとすぐに注文を取りに来たウェイトレスさんにコーヒーを注文して席に座る。暖房がほど良く効いた店内は心地よい。どうでもいいけど、さっきのウェイトレスさんの挙動が微妙にギクシャクしていたのはなんでだろう？

……ああ、よく考えたら僕の外見は外国人そのものだ。言葉が通

じるか不安だったんだろうな。こんな簡単な事にも気付けないとは、もう少し冷静にならねば。

まあいい、あれこれ考えていても仕方ない。

注文してすぐに運ばれてきたコーヒーに口をつけながら思考を巡らせる。

本当におかしなものだ。

元々は記憶を取り戻す手掛かりを得るために黒の騎士団に入った。活動の過程で日本解放を行うと言われても、正直なところ日本という国にそれほどの思い入れがあったわけではない。

それがいつの間にか目的が入れ替わっていた。

いつか、カレンや千葉さん、黒の騎士団のみんなが願う物を僕も見てみたい。そう思うようになった

だからこそ今こうして自分一人がこの平和な光景の中に居る事に罪悪感とも虚脱感とも取れる複雑な感情を抱いている。

喉の奥を流れる黒い液体は今の僕の気分を表しているように苦い。

「あの、大丈夫ですか？少し顔色が悪いですよ」

気が付くと目の前に栗色の髪をツインテールにした少女――先ほどまで近くのテーブルで宿題をしていた小学生――が立っていた。

その表情に含まれているのは不安と心配。考え事をしていた僕の顔はそんなに切羽詰って見えたのだろうか？

「あ、ああ。僕は大丈夫だ、何も問題ない」

「そう、ですか。ふう、よかった。

この辺じゃあまり見かけないですけど、どこかの学校の生徒さんですか？」

ふと、その少女の目線が僕の顔から着ている制服に移る。

黒地に金の刺繍が施された——日本の一般的な学生服のイメージを外れた学生服。

そういえば今僕が着ているのはアッシュフォードの制服、もちろんこの世界にアッシュフォード学園などあるはずもなく、見慣れない学校の制服を着た人間が両手いっぱい買い物袋を持ってこんなところにいたら違和感を覚えるのは当たり前だ。

もちろん異世界の学校の制服です、などと言えるはずもなく——

「いや、最近こちらに引越して来たんだ。日本が冬だという事を忘れていて他に着る服が無かったから昔通っていた学校の制服を引っ張り出して来たってところかな（一応、嘘ではないな）」

「ほえ、てことは外国の方だったんですね。

わたし、高町なのはって言います、あなたは？」

「ライ・ランペルージだ。ライと呼んでくれ」

「ライさん、ですか。もし日本の事で分からない事があったら遠慮せずに聞いてくださいね？」

そう言うと、なのはは年頃の少女らしい明るい笑みを浮かべる。

多分僕が苦い顔をしていたのは、外国人が慣れない日本の文化に苦戦しているとても解釈したんだろう。まあ当たらずとも遠からずなわけだが。

どのみち、先ほどまで暗い考えに浸っていた身としてはその笑顔は救いになる。

と、その時。

「なのはー、ちょっとこの漢字が読めないんだけど手伝って？」

「うん、りょーかいだよーフェイトちゃん。」

「……うにゅう、よ、読めない。なんでこんなに難しいのー」

さっきまでなのはと同じテーブルに座っていた少女――長い金髪をリボンで束ねてツインテールにしている――が宿題のプリントらしき物を持って近寄って来た。

顔立的には僕と違って本当に外国人なのだろう。

日本人であるのはに分からない漢字を聞きに来たんだろうけど、二人ともその漢字が読めないように立ち往生している。

目の前で困っている子がいるのに無視するのもアレなので少し手伝おう――

「すまない、ちょっとそれを貸してくれないか？」

「え？ ええと、その、あなたは？」

「あ、フェイトちゃん。この人はライさん、最近この辺りに引越して来た人だよ……」

ライさん、この子はフェイトちゃん、私の友達です」

「ライ、だ。多分君の手助けができと思う」

「ええと、わたしフェイトって言います。あの、その……よろしく、おねがいします」

それだけぱつりと呟くと、フェイトは黙りこくってしまふ。

その様子を見るかぎり人見知りな子なのだろう、と推測を付ける。

自己紹介も終わり、本来の目的を果たすためにプリントへ目を向ける。

さきほど二人があーでもないこーでもないと頭を捻っていた問題は何度も鉛筆で書いては消してを繰り返したのだろう、うっすらと

黒くなっていた。

「ええと、この漢字は『かがみ』と読むんだよ」

「あ、ありがとうございます。わたし、まだ日本の文字が苦手で……」

「それは仕方ないよ。日本語……いや漢字は世界中に存在する言語の中でもかなり難しい部類に入るから」

「へえ、そうなんですか。じゃ、じゃあこの漢字も教えてくれませんか？」

「ああ、これはだね——」

フェイトは遠慮がちに幾つかの漢字を指さして聞いてくる。

引き続き漢字を教える僕を見てなのはちよつと驚いたような表情を作る。

「え？あれ？ライさんって日本に住んでたんですか？」

「いやずつと外国に住んでいたよ。母親が日本人でね、日本語や漢字は大体母親に教わっているんだ。」

それと、二人とも敬語は無理に使わなくていいよ？年下の女の子に敬語を使わせるのは忍びないからね」

「はい、分かりました」

「はい……じゃなくて、うん！」

って、フェイトちゃんそれは敬語だよー」

「うう、ごめんなさい。癖が抜けなくて」

「はは、無理はしなくていい。敬語がいいなら敬語でいいさ」

「もう、フェイトちゃんは相変わらずなんだからー」

あ、そういえばライさ、じゃなくてライ君はお母さんも一緒にこっちへ引っ越してきたの？」

その言葉を聞いて、一瞬返答を躊躇ってしまった。

本当はもう死んでいる、なんて言って二人に気を遣わせるわけにはいかない。

なので僕は再び嘘を吐く。

「母親と妹が居るんだがこっちには来ていないよ。引越してきたのは僕一人で、今は知り合いの家でお世話になっているんだ。」

それより、二人は同じ小学校に通っているのかい？ずいぶんと仲が良さそうだけど」

「うん、フェイトちゃんとわたしは同じ学校に通ってるんだよ、親友なの」

「な、なのは。し、親友だなんて、その…恥ずかしいよ」

「えー、だってそうでしょ？」

「も、もちろん。なのはわたし大切な友達だよ」

「わたしもだよ、フェイトちゃん」

その微笑ましい光景に自然と僕の口元も緩む。

「二人とも仲が良いんだな。友達は大切にしなよ？」

そんな友達がいればきつと満ち足りた人生を送れるはずだ……」

「どうしたの、ライくん？」

「ライ、さん…？」

いつの間にかなのはとフェイトは僕の顔を心配そうに覗き込んでいた。

もしかしてまた表情が曇っていたのだろうか？ どうにもこちらに来て感傷的になりすぎている気がする。

こんな小さな子にも心配されるほど感情がダダ漏れというのはどうにも恥ずかしいな。

そう胸中で愚痴りながらも僕は二人を心配させないために、なんでもないといった感じの表情を作る。

「ああ、ごめんごめん。今のに深い意味はないんだ。」

それよりフェイト、分からない漢字があるんじゃないのか？」

「あつ、そうでした。この部分の文法がよく分からなくて」

「フェイトちゃんだけ、ずるーい。私もここ教えてほしいな」

「分かった、分かったからとりあえず一人ずつ質問してくれ」

その後、二人の宿題の手伝いでそれなりに時間を取ってしまった。出会ったばかりの人間とこうも早く打ち解けるとは思ってたが、それが彼女達の人の良さから来る物だというのは少しの時間接するだけでもよく分かった。きっとあの二人は将来たくさん人の役に立てるだろうな。

それに、二人の人柄に感化されたのか僕の心も少し軽くなったような気がする。

……おっと、早く帰らないとみんなに心配をかけてしまう。

————八神家 玄関————

「ただいま戻りましたー」

……って、はやてもシャルさんも帰ってないのかな？」

玄関を見ても二人の靴が無いのを見るに家にはいないらしい。

病院の検査によほど時間を取られているのかな？

「温かいココアでも用意して待っておこう」

きっと二人とも喜んでくれるだろう。などと考えると僅かに頬が緩む。

（会長達に拾われたころとは大違いだな）

心中でそう苦笑しながらもリビングへとつながるドアに手をかける。

だけど、ドアの先に見えたのは――

「む？」 「ん？」 「……あれ？」

シグナムさんとヴィータだった。

……いや、それ自体に問題は無い。なぜならここは彼女達の家なのだから。問題なのは格好だ。

シグナムさんは、なんとというか、その、非常に大人らしいボディラインが出る下着姿。

ヴィータも、子供らしい体のラインが出るキャミソール姿。

要するに、二人の着替えている最中に僕が入り込んだという事になる。

って、何で僕はそんな冷静に状況を分析してるんだ！！いくらなんでもこの状況はマズイだろ！

「ごめんなさい！ 失礼しました！」

とりあえず謝罪の言葉を手短かに述べて、視線を逸らしながら部屋から退散しようと思ったのだが――それを中断した。

「二人とも、どうしたんですその怪我！？」

「むっ、見られたしまったか」

「ちっ、何でもねえよ！」

「なんでもないはず無いだろう！！なんでそんなにボロボロなんだ！？」

僕の視界に移ったのは二人の体中にある様々な生傷だった。

何かで強く打ったような物から、擦り傷、切り傷のようなものである。

大半はすでに治りかけていたが、中にはついさつき出来ましたと言っても言わんかぎりに血が滲んでいる傷も見える。

こんな傷、普通に暮らしていたらまず出来ない。そんな傷が出来るような事柄にろくなものは思い当たらない。

「シグナムさん、詳しく話を聞かせてくれませんか……」

「ふむ、これ以上隠し立てしても意味は無いな」

「おいっ！シグナム！」

「仕方あるまいヴィータ。放っておいてはいずれ主はやての耳に入る。」

「ならば話すしかあるまい？」

「……分かったよ……」

「聞かせてくれるんですね？」

「ああ、だがな、その前に……」

「その前に？」

ふと、言葉をとぎらせたシグナムさんは何か忘れてないか？とでも問うような瞳で見つめてくる。

「私とヴィータはまだ着替えの途中なのだがな」

「あ……」

言われてみればその通りだ、傷の事に意識が集中して忘れていた。そして今現在、二人に傷の事について問いただしているということは、つまり、その、シグナムさんやヴィータの下着姿を見つめているわけであって。

これじゃあ、完全に僕が悪者《変態》の構図になるじゃないか！！

「す、すみませんでしたっ！！」

僕は可能な限り迅速にその微妙に気まずい空気の満ちた空間から
戦略的撤退するのであった。

———第三話 完了———

第三話　ブリタニア　無き　世界（後書き）

『また見てギアス☆』

作者「どもども、毎度おなじみヘタレ作者のライラです」

ライ「このコーナーは一応今作の主人公らしい、ライと」

はやて「毎度お馴染み八神はやてがお送りいたしまーす」

作者「ついにこのコーナーにも名前が付きましたよー」

ライ&はやて「……………」

作者「お願いなので二人揃って無言でこっちを見つめないでください」

ライ「いや、だって、あまりにも捻りの欠片もないタイトルでちょっと引いてたんだよ」

はやて「作者のネーミングセンスが残念すぎて不便や」

ライ「まあ、ニュアンス的には間違っていないんだけどね」

作者「何気ないフォローが余計辛い。いや、まあ、あれなん德斯ヨ

？一応考えたけど『また見てリリカル☆』とか『リリカルギアス☆』

みたいなものか思い浮かばなかったんだよ！」

ライ「さて、なんだか作者が面倒くさいからこの辺で」

ライ&はやて「また見てギアス」

作者「泣くぞこんちくせう！！」

第四話 明かされる事実、そして……（前書き）

なんというか、今までにない長さでグダグダ感。自分の書きたい事を上手く文章にする難しさを改めて実感しました。豊富なボキャブラリーが欲しい。

おかしな点や、気になる点がありましたら連絡下さい。指摘こそが小説を書く上で技能向上に一番必要なものなので。というか感想を頂けると作者が頑張りますw w

第四話 明かされる事実、そして……

この世界でなら平和な時間を過ごせる
やっとそう実感してきたっていうのに、その淡い期待はあっさ
りと砕け散った

守護騎士達の隠している真実を僕はまだ知らないけど
それを知らされたとき、どうすればいい？ 魔法少女リリカル
なのはA' S 銀月の王と夜天の主始まります。

第四話 明かされる事実、そして……

あれから約数分。

なんとも複雑な心境ながらも、僕はリビングの前の廊下に正座し
ている。この季節にフローリング張りの床というのは予想以上に辛
い。

別にわざわざこの体勢で待たずともよいのだが、あのハプニング
に対する微妙な気負いというかなんというか自分なりの弁解の意味
も込めている。

というかあの傷の事が気になっていちいち細かい事に気が回らな
い状況だ、という方が正確だ。

ドアノブを回す音と共に、いつも通りの服に着替えたシグナムさ
んとヴィータが現れた。

こうして服を着ると二人とも傷の大半は見えなくなる。やはり今
までずっと隠していたようだ。

「あの、怪我の具合は大丈夫なんですか？」

僕が開口一番にその問いを投げかけると二人とも一瞬意外そうな

表情に変わる。

「何か変な事聞きましたか？」

「いや、ただ我らの傷について聞かれるとは思っていたが、まさか原因を聞くより先に身体の心配をされるとは思っていなくてな」

「あたしらは闇の書のプログラムだから傷の治りが早いんだよ、それにあの程度の傷なんて唾でも付けときゃすぐ直る」

「そうですか、それは良かった」

何より優先すべき事を聞いただけなんだが、そんなに变だったかな？

まあ、二人とも問題はなさそうなので一安心といったところか。だが、あの傷の原因が気にならないかといえば嘘になる。

何らかの形で暴行を受けたのか？だとしたら何故？どこで？誰に？

思い当たるパターンが何十通りも脳内に浮かんでは消えるが、何しろ僕が持つ情報自体があまりに少なくそのどれもが推測の域を出ない。

「じゃあ早速、本題に移りますけど。あの『傷』は何なんです？」

切り傷や打撲や火傷、確認出来るだけでも何種類もあったんです。階段で転んだとか言われても信じませんよ」

「やれやれ、あの少ない時間でそこまで観察していたとはな。なかなかの動体視力の持ち主じゃないか」

「茶化さないでください！」

「ああ、分かっている、お前にこれ以上の隠し事が出来ないというのはな。」

まあ、なんだ、百聞は一見にしかずと言うしな。ヴィータ、頼む」「へいへい、分かりましたよ。ったくこっちだって魔力はカツカツ

なのに無理させんなよ」

「すまないな、あとで私の分のアイスも食わせてやるから」

「よっしやあああ！まかせろ！！」

「あの、何を？」

完全に会話から置いてけぼりにされたので僕が口を挟もうとした瞬間――

ヴィータを中心に“何か”が広がる。

それは三角のそれぞれの頂点に円が付いた記号、いや幾何学模様とでも表わすべきなのだろうか？

僕には理解のできない“ナニカ”、理解のできない何らかの法則と記号の組み合わせ。

僕が絶句している間にも徐々に幾何学模様が発している光は強くなる。そんな僕の肩にシグナムさんが手を置き囁く。

「よく見ておけ、ランペルージ。これが魔法という物だ」

『魔法』――言葉通りに捉えるならば魔の法、僕がこうしてここに居る原因となった要因の一つ。

その声に反応して僕がシグナムさんを振り返ろうとした時にはすでに視界は真っ白な光に覆い尽くされていた。

数秒、もしくは数分経っただろうか？

段々と視界が戻ってきた時、目の前に広がっている光景に僕はもう驚きを通り越して呆れさえも覚えた。

日本の12月、冬特有の肌を突き刺すような冷氣などはなく、チリチリと肌を焦がすような熱気を感じるだけ。

足元に先ほどまでのフローリング張りの床は既になく、砂の粒子

による不定形な地面（靴下しか履いていないので物凄く熱い）。

何より目に付くのは、空に浮かぶ惑星？、大気が薄いとか惑星の並びとかそれ以前に月より大きく見える時点でそれが地球上で起こりうる現象で無いのは明白だ。

そして、昨日の夕方に聞かされた魔法、次元世界、次元転移、これらのキーワードから導き出される答えは――

「ここは……地球じゃない？」

「ああ、その通りだ。全く、主はやてといいお前といい順応が早すぎる、まあ物分かりが良い方がこちらとしては助かるのだから」

「いや、まあ慣れとでも言いましょうか。正直驚くのにも疲れましたよ。」

それより、二人ともいつの間に着替えたんですか？……やっぱり魔法ですよ」

「ああ、これが私達の騎士甲冑だ。バリアジャケットとも言うがな」「はやてがデザイン考えてくれたんだぜ」

ヴィータは俗に言うゴシッククロリータに近い印象を持った赤いドレス。

シグナムさんは白とピンクを基調としたジャケットのような服。

僕の記憶の中にある騎士甲冑という単語を連想させるのは要所にいくらか付いている手甲などほんの一部だ。しかし、その服装は決して着用者の動きを阻害しないように出来ているのが見て取れる。

どちらかというとバトルドレスと表現した方がしっくりくる。

しかし、それが魔法関連の代物だというのなら見た目通りの防御力ではないのだろう。僕が知っている全身を覆うタイプのアーマーなどよりも防御能力を上回る可能性だってある。

だが、騎士甲冑と呼ぶからには――

「騎士甲冑の本来の目的……それに、シグナムさん達が持っている

”ソレ” って……もしかして」

シグナムさんの手に握られているのは儀礼剣とは違い、実用性に優れているような西洋風の剣。ヴィータの手に握られているのは小柄な少女が持つにはあまりにも無骨な印象のあるハンマー。

剣とハンマーがそれぞれ砂漠の熱線を浴びて鈍く輝く姿はまさに実戦で使い込まれた武器独特の空気を醸し出している。

「ああ、大体お前が予測している事で正しいはずだ。騎士甲冑は敵の攻撃から身を守り、このレヴァンティンは敵を打ち倒すためにある」

「あたしのグラーフアイゼンだって敵をぶっ潰す為のモンだ」

「そして、それらを用いるからには……誰かと戦っているんですね」
「その通りだ、見せたいものがある、付いて来い」

それだけ言うと、シグナムさんとヴィータは手近な場所にあった砂丘へ登り始める。

不安定でいて、陽炎が生まれるほどに熱い地面をなんとか踏みしめながらも僕はそれに続く。

砂丘を登り終わると、熱気を伴った温かい風が頬を撫でるのが分かる。だけど、その先に見えたのは……

「は、はは。いい加減慣れたとは思っていたけど、いくらなんでも、これは……？」

「砂竜と呼ばれる魔法生物だな、まあ、これを竜と呼ぶ事に抵抗はあるのだが」

ちょうど砂丘が死角になっていて見えなかったが、眼下にはなんと形容すべきか言葉に悩む生物が倒れていた。

先ほどシグナムさんが言った言葉を借りるなら砂竜と呼ばれるソ

レは、どちらかという巨大な芋虫やミミズのような姿をしていた。体中から生えている触手のような物の大半は千切られ、表皮を覆う頑強そうな外殻は砕かれたようにボロボロだ。

時折聞こえる、低く轟くうめき声のような鳴き声から察するに、死んではないようだがその怪物が何者かとの戦いに敗れ、こうして動けなくなっているのを証明するには十分な光景だった。

「まさかコレ、シグナムさん達がやったんですか？」

「リンカーコアを蒐集するためには戦闘不能にせねばならんのでな」「コイツを倒したのはあたしだけだな」

「はあ！？ ヴィータがコレを？（こんな小さな子供がどうやって…）」

「おいてめえ！！なんかあたしの事を子供扱いしてねえか？ これでも数百年は生きてんだぞ」

「いや、そんなつもりじゃ無くて（心を読まれた？）」

手に持つハンマー（グラーフアイゼンというらしい）を僕に向けて若干キレ気味のヴィータ。

なんとか抑えようと必死になっているところでシグナムさんの救いの手が入る。

「おい、ヴィータいい加減にしないか。

どうやら新しい客が来たようだが、それもかなりお怒りの様子だ」

「へっ、そんなもんアイゼンのしつこい汚れにしてやんよ」

「それでこそヴォルケンリッターだ、管理局に気付かれる前に片付けるぞ」

「おうよ！」

別に救いの手ではなかったようだ、というかまた会話に置いてきぼりにされる。……仕方ないというのは分かっているんだけど、ちよっと傷付くな。

そんな事を胸中でばやいている内に『ウオオオオオオオオオオオ！』『！』という地の底まで鳴り響きそうな……いや、地の底から鳴り響くような鳴き声が聞こえ一時的に思考を寸断する。

(しかも、近づいてきてる！？)

数秒後、僕達が居る砂丘から百数十メートルほど離れた所の地面が盛り上がり、眼下で倒れている砂竜と同じような姿の、それでいて一回り大きい砂竜が姿を現した。

それも“三匹”

正直ここまで来ると、昔リヴァルに勧められて見た大作映画（その頃の僕にはあまり面白いと思えなかったが……）に出てくるフルCGでギリシャ神話だの北欧神話だのがデタラメに混ざり合ったような怪物の方が可愛らしく思える迫力だ。まあ、手元にはポップコーンもコーラもなければ、ここはクーラーのきいた映画館ではなく熱気に満ちた砂漠なわけだが……

「もしかしてあたしが倒した奴の親かなんかか？」

「知らん、どのみち私達はあれを倒すだけだ」

「はあ！？もしかしてあの怪物と戦うつもりですか？」

租界に立つ高層ビルでも捻りつぶしそうな大きさの砂竜に目の前の女性達が挑む姿が全く想像できない。

戦うというからには勝算があるのだろうが、それでも危険な事に変わりは無い。

「む？気付かれたようだな。ランペルージは下がっている」

「あたし達もお前を守りながら戦えるほど魔力は余ってねえからな」
「いや、ちよつと待」

「行くぞ！レヴァンティン！！」

「吼えろグラーファイゼン！！」

制止の言葉を振り切り、二人は跳躍する。

いや、あれは跳ぶというよりは飛ぶと言った方がイメージに合っている。

勿論、生身の人間が百メートル以上跳躍する事も飛行する事も普通では考えられないのだが、二人の足が地面を離れる瞬間現れた幾何学模様——おそらく魔法陣と呼ばれる物——に何らかの形で仕組みがあるのだろうと思う。

二人の姿が見る見る小さくなっていく。

もう人が飛ぶくらいでは驚かないつもりではいたけど、どうやら無理そうだ。

遠目に見えるシグナムさんの構えるレヴァンティンから焰の様なものが噴き出し、迫る砂竜の触手をことごとく一掃してゆく。

その横で戦っているヴィータも似たような物だったが、どう見ても10歳に届かなそうな見た目の少女が振り回す鉄槌に翻弄される巨大生物というのはシュールレアリズム以外の何物でもない。

子供の好みそうな冒険譚に出てくる騎士や戦士の様な戦い、元居た世界では空想上でしか行われぬ戦い。

それが現実で行われている光景というのは誰でも見惚れる物だろう？

僕もその例外ではなく、しばらく口を開けずにいた。

「凄いな、あれならグロースターや月下とも互角に戦えるんじゃないか？」

へそれについては否定いたしませんが。

心外です……この私をブリタニアのグロースター如きと同列に扱うなど、ライ様は私を何だと思っているのですか？

「っ！、なんだ、起きてたのか月下」

へ当然です、こんな近場を戦闘を行われて起きぬほど私のレーダーは鈍っていませんよ……

「あれ？なんだか怒って無いかい？月下」

へ否定、私に怒りなどという高尚な感情はプログラムされていません。なのでこんな事態になっても一切私に御呼びがかからなかった事に対しても怒ってなどおりません

あの人たちならブリタニア軍の主力兵器でも簡単に倒してしまうんじゃないか？という疑問を含んだ軽い独り言だったのだが、月下の癪に障ってしまったらしい。

なんとなく電子音声の語気が強く、宝石の点滅も激しい気がする。怒ってないとか言ってるけど、絶対怒ってるよね？

へ全く、貴族専用で成金趣味の様なナイトメアとラクシャータ女史の緻密な設計の下生まれた私と一緒にするなどと……ぶつぶつ……

どうやらよほどブリタニア製のKMFと一緒にされるのが嫌らしい。

皇族や皇族の親衛隊のみが搭乗を許されるグロースターは確かに装飾が派手になる傾向があるが、それでも既存のKMFを上回る機動力を保持しているはずなんだけどな……現に僕もギルフォード卿のグロースターとの戦いでその性能を身をもって体感している。

「本当に済まない！スペック上ではグロースターを上回っている事を失念していた」

へふふ、分かってくださればよろしいのです。それよりシグナム様

とヴィータ様のおかしいですよ」

「ん？」

やっと月下の機嫌を取り戻したのもつかの間、その言葉の言うとおりに再び戦いに目を向ける。

彼女達と砂竜×3の戦いは拮抗している。

そう、『拮抗』しているのだ。

勿論それだけでも凄いわけだが、交戦開始時は二対三という状況ながら二人が優勢だった。

それが今は拮抗している。これは要するに二人の勢いが落ちたか、砂竜達の勢いが増した、もしくはその両方だとも言える。

「かなりマズいみたいだな」

へ肯定。これ以上の戦闘延長は不利な要素しかもたらさないと判断します」

ここからではよく見えないが、シグナムさんもヴィータも動きが鈍っているように見える。

おそらく『本来の実力』が発揮できればあの人外じみた戦いは二人の圧倒的勝利に終わるのは魔法に詳しくない僕でも予想できる。

しかし、今現在あの二人は体中に傷を負った状態で戦っている。

どの傷も軽傷でほとんど出血は無いようだが多分ここ数分の戦いで、治りかけていた傷も開いた可能性がある。

一つ一つの傷は小さくとも、数が増えれば出血量も痛みも増す。

これは常識だ。

そして一定以上の出血量を超えると体中に回る酸素が少なくなり、集中力の半減や瞬間的な思考能力の低下、感覚の麻痺など様々な被害をもたらす……

最も問題なのが、敵が手負いだという事を砂竜達が気付き始めているという事だ。あの怪物達のどの程度の知能があるのか分から

ないが、先ほどから本格的な攻撃は身を潜め、代わりにジリジリと戦いを長引かすような攻撃が多くなっている。

近付かす、小さな攻撃で敵の気力と体力を削ぎ、動けなくなったところへ止めをさす。……まるで人間の様な戦い方、皮肉以外の何物でもない。

——しかし、この拮抗した戦況をこちらに傾ける『何か』があればすぐに決着は付く——

分かってはいるのだが、だからこそ僕はこうして血が出るほど拳を握り締める。

今の僕にこの戦況を覆すほどの“力”は無い、何故かギアスも使えない。僕は魔法が使えるわけでもない。

なんでシグナムさん達が戦っているのかは想像も付かない。

「だけど……これ以上目の前で大切な人が傷付くのは見たくないんだ！！」

『私』が愛し、『私』が殺してしまった愛おしい家族。

僕が願い、そして共に居る事の出来なくなった生徒会みんなや黒の騎士団のメンバー。

そして再び居場所を亡くした僕を受け入れてくれた八神家の人達。

いつだって“力”のせいで人生が狂わされてきた。

“力”が無いからギアスという力を手に入れ、“力”のせいで二度も居場所を失った。

そして今度も足りないのは“力”

〈へならば戦いますか？ライ様〉

「げっ…か…?」

僕の心境を察して声をかけてくる月下。KMF状態ならともかくただの機動キーは僕の平に収まるほど小さい、だけどその声には力強い何かが宿っている。

「戦う? 一体どうやって? 君はこの状況をどうにか出来るのか?」

〈否定。私が単体で行える事などたかが知れています。そもそもその問いは愚問です。

私は貴方の剣として、盾として、戦場を駆ける馬として存在しているのですよ?

たとえばデバイスに姿を変えようと今までも、そしてこれからその事実は変わりません。

貴方が力を欲するなら私を天に掲げてください…:そうすれば私は何度でも力になります、そう…:何度でも

一瞬、月下が何を言っているのか理解できなかった。だが、その言葉を脳内で反芻するうちに自然と苦笑がこみ上げてくる。

再び愛馬と共に戦場を駆けまわれる、そう思うと不謹慎ながらも笑いを抑えられない。

「くっ、はは。…:そうだった、そうだったな。どうやら僕はデバイスという物をよく理解していなかったみたいだ。

僕みたいに愚かな奴が主人で君も大変だっただろう?

もう一度…:力を貸してくれ」

〈御意!〉

月下を天に掲げ、どこまでも響くように叫ぶ。

「月下先行試作機…:機動!!!」

次の瞬間、蒼くそして優しい光が僕の体を覆いつくす。

不思議と力がこみ上げてくるような感覚。まるで日だまりでそよ風に身を任せ眠りに付くような安心感。

光が収まったとき、自分の姿が劇的に変わったのを実感する。

アッシュフォードの制服は姿を消し。

深い海を連想させるような蒼い装甲が胸部を中心に肩や腰を覆う。右腕は流線的でそして鋭角的な手甲に覆われ洗練された美術品のようにも見える。それとは対照的に、どこまでも無骨で攻撃的なイメージを連想させる左腕は、赤い三本の異形の爪が付いている。

足元にはホイルの様なブーツが付属し、顔を覆うのは黒の騎士団が公共の場で活動する際に素性を隠すためのバイザー。

これは、この姿はまるで――

「僕が、月下になっわたしている？」

『へ肯定。月下先行試作機を模したパワードスーツを纏っていると想像してくだされば結構です。』

無論、このバリアジャケット形態とKMF形態ナイトメアフレームの武装もほぼ一致しています。』

そんな僕の問いに答える月下の声。それに呼応するように胸部装甲に埋め込まれた桜色の宝石が明滅している。

しかし、その声は大気を震わせることなく直接脳に響いている。

「これも魔法のなのか？」

『へ肯定。精神通話と呼ばれる初歩的な魔法です、今なら貴方も使えるはずです。しかし今優先すべきなのは……』

「ああ、分かっているさ。行くよ!!」

——こうして銀の王とその蒼き愛機は姿を変え再び戦場を駆ける。
脚部に付いた高機走駆動輪ランドスレーナーの上げる駆動音はまるで主人の復活を祝う愛馬の嘶きのようで——

「くっ！キリが無い」

「ちっ、本当ならこの程度の雑魚なんてすぐにぶっ潰せるのによ」

所変わって、こちらはシグナムとヴィータ。

連戦に次ぐ連戦で残りの魔力も少なくなり、傷のせいで体力も徐々に削がれている。

何百年という時を生きてきた二人にとって、この程度の危機的状況は何度も陥っているし慣れている。

苦戦はしていても僅かにでも勝機チャンスが見つかれば簡単に勝てるはずだ。

しかし、問題なのはその勝機がいつ訪れるかということだ。

こちらが消耗しているのと同様、敵である砂竜達もこちらの攻撃でかなり消耗している。

もしもこの戦いが長引き、砂竜を倒してもその時には管理局員が到着するなどという事態になったら目も当てられない。

一度は打ち破ったとはいえ、カートリッジシステムという新たな力を得た二人の若い魔導師。もし彼女らが駆け付けるようなら今の自分達は負ける可能性が高い——ヴォルケンリッターの将であるシグナムはその事に薄々と感付いている、隣で戦うヴィータもその事は分かっているだろう。

『ならば、逃げるか？』

リンカーコアの蒐集が目的とは言っても別に目の前の敵と無理に戦う必要はない。

時には戦略的撤退も必要だ。

『あのミミズ共が逃がしてくれるんなら、あたしはそれに賛成だぜ。あんなに同族思いな生き物だとは思ってなかったぜ』

『ふっ、まさか。戦いに負けた弱い砂竜なんぞ放っておいたら仲間に食われるのがオチだ』

『うへー、あたしは共食いなんて見たかねえぞ』

『倒した側が何を言う……まあ、確かにこの状況で転移魔法陣を展開する余裕はないな』

お互いに精神通話で軽口を叩きながら脱出のチャンスを伺うが、どうにも隙が見つからない。

一定以上の間隔を開けずに襲いかかる触手は二人に飛行する暇さえ与えず、『触手』の攻撃は行っても『本体』が自ら彼女達に近づこうとしないのでベルカ式の騎士としては決めの一手を打てない。

この小さな無人世界で生態系の頂点に立つ者としてのプライドか

同族を討たれた事に対する仲間の仇打ちか――

自分達という種そのものを脅かしかねない天敵に出会った事で生まれた自衛本能か――

そのどれにしてもシグナムとヴィータにとっては非常に厄介な事には変わらない。

『魔力を大分使ってしまうが、本気を出すか？』

『ああ、背に腹は変えらんねえ』

その瞬間。その場に居た誰もが予測していなかった方向から攻撃が訪れた。

「月下！！」
カイトリッジ・ロード
〈弾丸装填〉

戦場に響き渡る様な澄んだ少年の声と、銀色の魔力弾が砂竜の一匹に向けて吸い込まれるように何発も着弾する光景。

シグナムもヴィータも最初はそれが誰の魔法か分からなかった。ヴォルケンリッターにあんな色の魔力光の騎士はいないし、ならばこの状況で自分達に味方する者に心覚えなど無かったのである。

『二人とも、大丈夫ですか！？』

『ああ大丈夫だ、……ってか、てめえ誰だよ』

『まさか……ランペルージ、お前なのか？』

『ええ、まあそういう事になりますね』

数十メートルほど離れた所から精神通話を飛ばしてくる者にシグナムとヴィータは視線を向ける。

全体的に曲線的なラインを持った蒼と銀、ツートンカラーの騎士
ヤケツト
甲冑に身を包み、顔をバイザーの様なもので隠したその人間。

バイザーの隙間や後頭部から除く柔らかい印象を持った銀色の髪、そして精神通話を通して聞こえて来る聞きなれた少年の声から推測するにその人物の正体はライ・ランペルージだという答えしか出てこない。

『その格好はどうしたんだ？おまえは魔法を知らないんじゃないのか』

『そのはずなんですけど、正直僕もよく分かりません。』

……それに、そんな話をしている余裕もないでしょう？』

『ギャオオオオオオ!!』

確かに、先ほどの魔力弾は砂竜にダメージを与えたものの決定打には程遠い。

むしろ余計に攻撃の勢いが増してしまった感がある。

『どうして貴女達がこんな事をしているか僕には分かりません。だけど、今だけは加勢させてください』

『普段なら、断っていただろうな。』

だが、そのような意地を張れるほどの余裕もない。その力を貸してくれ』

『仕方ねえな、あたし達の足引っ張るなよ』

『ありがとうございます、では手分けして倒しますか?』

『一人一匹というわけか、随分な自信だなランペルジ。しかしそういうのは嫌いでは無いぞ』

『あたしがみんなまとめてぶっ飛ばしてやんよ!』

そして、騎士達は互いに視線を合図にそれぞれの敵に武器を向け、対峙する。

(さて、あんな事を言いはしたけどハンドガンじゃあ倒せそうにないな)

あの状況を打開するには、ああして砂竜の包囲網を崩しさえすればいい。そうすれば彼女達はすぐに決着を付ける。

だけど、こうなってしまえば魔法戦というものに全く慣れていない自分がどの程度出来る事があるのか予測できない。

『へライ様、私と貴女の力を信じて下さい』

『ああ、分かっているさ』

幸い、自分に割り当てられた砂竜は三匹の中でも一番傷付き、弱った個体だ。これなら勝てる——そう思うわけではないが、考えるだけでは何も始まらない。

（アレを倒すには月下の間合いに持ち込むしかない！）

月下の主兵装の日本刀——廻転刃刀——を構え、移動手段の一つである高機走駆動輪を駆使し砂竜の間合いに入り込む。KMFに登場するのは根本的に操作方法が違うとはいってもそれが出来ないわけではない。

僕の事を敵と認識した砂竜がその身体から生える何本もの触手を使い、敵を捕らえるために凄い勢いで襲いかかってくる。

それらをスラロームで避け、避け切れない触手は廻転刃刀で切り落しながら距離を縮める。

刃がチェンソーと同じ原理で高速回転する廻転刃刀は、人間の腕ほどの太さの触手を易々と両断し、切断面からは粘性の高い液体——砂竜——の血液が飛び散る。

戦場で感じるいつも通りの高揚感。それがいつもより増幅される。原因は考えるまでもない。

KMFだった時、月下先行試作機は僕の動きをどんな機体よりも細かくフィードバックしてくれた。

操縦桿を握るほんの僅かな動きにでも対応してくれた、ゼロ曰く唯のパイロットには乗りこなせない暴れ馬は僕にとっては身体の一部のように動いてくれる愛馬だった。

それが今では？僕の体の動きに合わせて月下が動く“ではなく”僕の体の動きこそが月下の動き”になっている。

こうなってしまうえばナイトメアとは使い勝手が根本的に変わってしまうが、そんなことは関係ない。

体中を巡る高揚感。愛馬と戦場を駆ける事に対する歓喜。これらの感情を感じるたびに自分は戦場で生きる事に慣れ切ってしまったんだと実感する。

あっさりと触手を切断された事でいきり立った砂竜は大木のように長く太い尾に生えた鋭い刺を僕目がけて突き出して来た。

鉄板や壁などいとも簡単に付き破りそうな攻撃は寸分たがわずに『心臓』を貫く為に加速する。

これが砂竜の持つ最も確実に敵を葬る方法。

しかし、それはあまりにも”シンプル”過ぎた。

正確に目標を狙う攻撃というのは攻撃進路が予測しやすいのだ。

僕は高機走駆動輪の向きを僅かに変え、その”予測進路”の外側に体を移動し、廻転刃刀を下段に構える。

(分かる、これからどうすればいいのか分かるぞ)

知識ではなく感覚がそれを教えてくれる。第六感なんて曖昧な物に頼り過ぎるのは危険だと理解していても、次に自分が何をすべきか確信できた。

「月影^{つきかげ}!!」

〈弾丸^{カートリッジ}装填^{ロード}〉

僕の掛け声をトリガーに

バシユッ!という空気の排出音と共に葉莢の様なものが廻転刃刀の柄から排莢され。それに合わせ廻転刃刀に変化が訪れた。

刀の峰部分から銀色の光が放出される。瞬間的にはあるがその銀色の光がもたらすのは莫大な推進力。

ならば廻転刃刀はどうなるのか？——答えは簡単だ。

超高速で回転する日本刀は莫大な推進力を得て、その刃を通常ではありえない速度で振り上げる。

そしてその進路にあったのは”今まさに僕の心臓を狙って突き出されている砂竜の尾”

ハンドガンでも決定的なダメージを与えるには至らなかった砂竜の外殻はバターの様に容易く切断される。

「ギャオオオオオオオ！」

尾を切り落とされ、度重なる戦いで触手の大半を失った砂竜はこの瞬間初めて恐怖を覚えた。

それはこの世界の生態系の頂点^{トップ}に立ち、竜の名を冠する以上は全く馴染みのない感情。

——このままでは狩られる——今まで狩る側だった存在が狩られる側に回ったとき、そこに生まれるのは困惑、もしくは狂い。

しかし、それでは既に遅かった。

岩よりも堅い己の外殻に突き刺さる一本のハーケン付きワイヤーそして、そのワイヤーを巻き戻すことで宙を飛び、己の額に着地する小さな影。

生態系の頂点の座を奪われた”竜”が見たのは赤黒い光と「すまないな」という小さな声。

その意味を砂竜が理解することは無かった——

「まさか輻射波動機構も再現されてるとはな、驚いたよ」

〈当然です。その輻射波動と神楽^{きょうだい}様に決めていただいたこのカラーリングこそが私を他の同型機と分け隔てる最も大きな差なので

すから」

誇らしげに声を発する月下。

藤堂さんや四聖剣の人達が搭乗する月下は彼女の妹？や弟？に当たるとのらしい。

輻射波動機構——非常に短い間隔でマイクロ波を照射して掴んだ対照の分子を振動させ莫大な熱量を生み出すことで敵を倒すという月下に装備されていた兵装。

こうして月下がデバイスになったことで細かい仕組みが大きく変わってしまったらしいが、基本的に使い方は変わらない。

左腕部に装備されているこの赤い三本爪を見ると、紅い髪の少女の姿が脳裏をよぎる。異形の五本爪を颯爽と振り回して常に戦場では僕の先を行き、背中を預け合ったその少女の姿を——

（っ！、一体僕は何を考えているんだ。今はそれよりも優先する事があるだろう）

「そうだ、シグナムさんとヴィータは？」

目の前で倒れている砂竜（驚くべき事にまだ生きている）から視線を逸らし、二人の居る方角へ向ける。

「ふむ、私達ならすでに戦いを終えているぞ」

「あたし達をなめんじゃねーぞ、お前がビリだよ」

数十メートルほど先で倒れた二匹の砂竜（今僕が倒した奴より大きい）とケロリとした表情で目の前に立っている二人の騎士。

「なかなかやるじゃないかランペルジ。おかげで手間が省けた」

「よ、良かった二人とも無事で（あれ？もしかして僕って必要無か

ったんじゃあ……)」

「よくやった」と僕に向けて囁き、シグナムさんは僕が倒した砂竜に近づいていく。

「あっ！。危ないですよシグナムさん」

「問題無い、この様子ならしばらくは動けないはずだ。それよりヴィータ」

「言われなくても分かっていますよーだ。『いつ管理局の奴らがここに到着するか分からないから転移の用意をしておけ』だろ？」

「その通りだ」

砂竜のすぐそばまで近づいたシグナムさんは砂竜の額に向けて手を掲げる。

「一体何を？」そう聞こうとした僕の言葉は途中で飲み込む事になる。

砂竜の体の中から光り輝く”何か”が出てきたのだ。

砂漠に降り注ぐ熱線の下で鈍く光り輝く水晶のようなそれは人や生き物に魂があるのならそのような姿をしているんじゃないかと思わせる。

次の瞬間にはヴィータが発動した転移魔法とやらの視界を遮られ何も見えなくなる。

そして光が収まったとき、小さな無人世界の砂漠には三人の姿は無かった。

——それから数分後・同世界——
先ほどまで激戦が繰り広げられていた砂漠に再び転移魔法の放つ

輝きが現れる。

しかし、展開しているのは剣十字を中心とした三角の魔法陣ではなく、円状の魔法陣。

そこから現れたのも、ベルカ式の騎士ではなくミッド式の魔導師。

栗色の髪をツインテールにし、見る物に天使を連想させるような白いバリジャケットに身を包んだ少女と。

金色の長い髪をツインテールにした、前者とは対照的に死神を連想させるような黒いバリジャケットに身を包んだ少女。

そのどちらも、地球では小学校に通っているような年齢だ。

「こちらフェイト・テストロッサ。目標地点に到達しました」

「おなじく高町なのは。目標地点に到達しました。だけど人は誰もいないよ？」

なのはの言うとおり、その場には倒れた数匹の砂竜を除いて他に誰かが居る様子もない。

幼さを残した、というか幼い顔立ちの二人の少女は空に向けて話しかけているように見えるが。実際には空中にモニターのようなものが展開されて、その先にいる女性と話をしている。

その会話先の女性。短い茶髪で、ピヨコンとはねた髪（俗に言うアホ毛というもの）が特徴のエイミー・リミエツタ執務官補佐は「やっぱ手おくれだったかー」と呟きながら手の平を額に当てる。

『ゴメンねー、なんか無駄足踏ませちゃったみたいだよ』

「あの、全然いいんだよ。エイミーは何も悪くないよ？」

「そうそう、だから落ち込まないでエイミーさん」

『うん、二人ともありがとね。今そっちにクロノ君と調査部隊の人が事後調査の為に向かってるから二人は海鳴の方へ帰っておいで』

「え、でもそれじゃあクロノがお昼ごはんに遅れちゃうよ？」

『ダイジョブだって、クロノ君には私が後で焼きそばでも作ってあ

げるから。

放っておいたらあの子は食べられる消しゴムみたいな酷い味のレ
ーションかじりながら仕事するような子なんだよ」

「いや、それはフォローにさえなっていないと思うんですけど……」

『ええい、ゴチャゴチャ言わない。リンディ提督が昼食作って待っ
てるんだから冷める前に帰ってきなさい、なのはちゃんのご家族に
は連絡入れとくから』

「はーい」

こうして再び転移魔法により二人の魔導師の姿が消えた事により、
ちいさな無人世界に静寂が訪れる。

—————それからさらに十数分後。 八神家にて—————

なんだかんだで、僕たちが八神家を留守にしていた時間は1時間
にも満たなかったらしい。

そして、僕は今リビングでシャルさんとはやてを除くヴォルケ
ンリッターの一同と話し合いをしていた。(先ほどまでザフィーラ
は別の次元世界で蒐集とやらを行っていたらしい)

図らずとも、昨日と似たような構図になっているわけだ。

だけど、そこで聞かされた闇の書やリンカーコアに関する話は僕
がここに飛ばされてきた事なんかとははるかに問題の次元が違った
………

「そ…んな。はやての命が…長くない？」

「ああ。闇の書の呪い……主はやてが生まれたときから共にあった
闇の書は主の身体と密接に繋がっていた。

抑圧された魔力は未成熟な主のリンカーコアを蝕み、健全な肉体機能さえ阻害した。だから主はやては足が不自由なのだ

そして、このまま放っておけば闇の書の呪いは主の内臓まで蝕み、最終的には主を殺してしまう」

魔導師の魔力の源であるリンカーコアを、はやての命令を破ってまで蒐集しているという事実を聞いたときは一瞬怒りで我を忘れそうにもなった。だけど、その事実を語るシグナムさんも、ヴィータも、ザフィーラも一樣におのれの無力を憎むような、己の存在を悔やむような表情になっている。それは今この場にいないシャルさんも同じ事だろう。

「……だから、あたし達ははやてを直すためにも……リンカーコアを集めなきゃいけないんだよ！他に方法があるんならどんな方法にでも縋り付いてやる、だけど……他に方法が、見つからないんだよ」
「そして、我らの蒐集について主はやてが知ってしまったえば、心優しい主はきつと傷付く。この盾の守護獣ザフィーラ、主のそのような姿、見たくはない」

「お願いだランペルージ、我らの蒐集を手伝えとは言わん。だがせめて、この事を主はやてには伏せてくれないか」

そんな言葉、そんな真実聞きたくは無かった。

——この世界でなら争いのない平和な時間を過ごせる——
ただそう思って、この幸せな時間に浸りたかった。

勿論、ブリタニアが無いこの世界だって差別や飢餓や、貧富の差。そんな争いの元となる種は呆れるほど沢山あるんだろう。

——せめてはやて達だけでも幸せなら——
そんな考えはどうしようもないほど醜いエゴイズムなものも分かっ

ている、その考えは少し裏返せば『自分達さえよければ他はどうなってもいい』という考えにつながる事も理解している。

だけど、そんな小さな幸せさえも望めないほど神が定めた運命は残酷なのか？

「悪いけど……それはお断りします」

「てめえ!!!」

ヴィータに掴みかかられる。シグナムさんもザフィーラも僕に掴みかかりはしないものの、僅かな敵意をこちらに向けてくる。

「僕にも……リンカーコアの蒐集を手伝わせて下さい」

「「は???」」「」

「僕は元々ここ以外に行く場所なんてありません。

それに、はやてが命の危機に晒される状況を指をくわえて見ていられるような人間に僕は見えますか？」

「だが、私達が行っている事は、どんなに綺麗な言葉で着飾っても犯罪だ。

それに加担してしまえばお前もどうなるか分からないほど阿呆ではあるまい？」

「ええ、全部分かってますよ。分かっているからこうして頼んでいるんです。

もし僕が邪魔だったり、管理局員に捕まって口を割られる可能性があると判断した場合は殺して下さい」

「何がお前をそこまで突き動かす？なぜそこまでしようとする？」

「さて、何故でしょうね。どんな崇高な目的を掲げても根底には必ずエゴがある……僕も自分の感情を着飾るつもりはありません」

何故はやてが死ななければならない？

何も悪い事はしていないのに。自分の様な罪に塗れた人間なんかよりよっぽど生きる価値のある人間なのに。

何故はやてが選ばれた？

僕は宗教で定められた誰にでも救いを与えるような神様は信じていないけど……

神が定めた運命がそこまで残酷ならば僕は、僕は……

相手が世界だろうが、神だろうが反逆してやろうじゃないか。

万人に救いを与える正義の味方^{ヒーロー}に僕がなれるなんて最初から思っていない。

ならばたった一人の少女を救うために僕が罪に汚ればいい。

今までだって同じ事をやってきたじゃないか？ 今度こそ、それを成功させるんだ。

それが――狂った王としてブリタニアの歴史に名を残した男のやり方だ。

シグナムさんもヴィータもザフィーラもずっと無言だった。

やがて、ヴォルケンリッターの意思を代表するようにシグナムさんが口を開く。

「やれやれ……私達の負けだ。どうせお前は何を言っても聞かんだろう。」

そこまでして協力したいのなら好きにすればいい。ただし、私達のやり方に従ってもらうぞ？」

「善処します」

こうして僕は守護騎士達の共犯者になった。

「みんなただいまー。今すぐお昼ごはん作るから待っててやー」

「じゃあ僕が手伝うよ」

玄関の方から聞こえてくるはやての声に笑顔で返答しながら――

――第四話終了――

第四話 明かされる事実、そして……（後書き）

『また見てギアス☆』

作者「ああ、ここ最近ぶっ続けで二次創作書いてたせいで疲れた」

ライ「青春の多大な無駄遣い、と思わなくもないけど。とりあえずお疲れ様」

はやて「……………」

ライ「あれ？どうしたんだいはやて？」

はやて「どうしたもなにも、この話、なんかんやで最後しか私にセリフ無かったやないか！！」

作者「ちょ！ストップ！お願いだからシュベルトクロイツをこっちに向けてないで。」

心理描写や戦闘描写に気が回って書く余裕が無かったんだよ」

ライ「そうだ、落ちつくんだはやて。シャルルさんに至っては重要な場面に出られず、セリフさえなかったんだよ。それに……………」

はやて「それに？」

ライ「僕が輻射波動で作者を消すからはやてが手を汚す必要はないよ」

作者「ちょ、まてい！いくらなんでも生身に輻射波動はグロいって、ギアアアア——！！……………ぽぺ」

ライ「さて、作者が見事に沸騰したところでそろそろお開きの時間だ」

ライ&はやて「またみてギアス☆」

四・五話 前編 男なら自分が言った言葉の責任を取りましょう（前書き）

ふう、何気に学業が忙しくて投稿できませんでした。

そして内容はいつもより酷くグダグダな上、前後編に分けました。

r z

感想が頂けると嬉しいです。

四・五話 前編 男なら自分が言った言葉の責任を取りましょう

ヴォルケンリッターの共犯者として闇の書の蒐集を行う事になった。

もしかしたらはやてを助けたいという気持ちは、過去に自分が犯した罪の意識を薄れさせるための大義名分なのかもしれない……だからといってはやてを見捨てるつもりはない。たった一人の少女のために次元世界の人達に迷惑をかけることになるのも承知している。

全部終わったら裁きでもなんでも受けてやるさ。魔法少女リリカルなのはA'S 銀月の王と夜天の主始まります。

四・五話 前編 男なら自分が言った言葉の責任を取りましょう

ライがヴォルケンリッターの蒐集について知らされた数日後。ライの意識は浅いまどろみの中にあった。

それは、夢としては当たり前のことで起きたら消えてしまう儚い記憶の残滓。

なので上下左右、明暗、遠近のハッキリしないような不明瞭な世界でも納得するのに十分な理由。

だけど、その世界にはたった一つだけ僕の気を引く者が居た。

腰まで届きそうな長い絹の様な銀髪。

白磁を溶かしたように白い肌と、整った顔立ちやプロポーション。
これだけなら夢幻ゆめまぼろしが作り出した願望の投影とでも表現すれば納得
できるほど幻想的な美貌を持った女性だ。

しかし、そのルビーのように紅い瞳が宿す陰鬱な感情のせいで妙
なりアリティが生まれている。

こんな印象的な女性、一度出会えば二度と忘れることは無い。

出会った事はないはずなのに、何故か懐かしさを覚えるその姿。
だからだろうか？意味が無いと分かっているてもその女性に僕が声
をかけようと思ったのは。

『なんで、そんな悲しそうな目をしているんですか？』

足場もなければ上下左右の概念もない曖昧な空間に僕の声が響き
渡る。

しかし、夢の中の女性はただ静かに首を振る。

次第にその女性の輪郭が周囲の空間に溶け込むかのように曖昧に
なっていく。

意識が覚醒に近づきつつある証拠なのだろうが、不意に何とも言
えない焦燥感に心が包まれる。

（あの人を放っておいてはいけない）

『待って……貴女は……一体何な……か……』

必死に手を伸ばすも僕の意識はそこで途切れた。

「う、ううん。……もう、朝か？」

随分と変な夢を見てしまったせいでやけに意識が冴えている。

ただの夢と言ってしまえばそれまでののだが、何かが引かかる。そう、何か大切な事を忘れているのは分かるのにそれが何だか分からないような違和感。

「考えても、仕方ないか」

考えても分からないなら無理に気にする必要もない。

ベッド脇に設置されている電子時計を見ると時刻は12月10日の午前5時。

まだ草木も眠っているような時間だが、二度寝も出来そうにない。そう思いながら重たい瞼を擦っていたのだが、普通では見かけない異質な物が目に留まる。

「闇の、書?……」

まあ表紙に剣十字が付いた特徴的な本が空中に浮かんでいるのだから、今の疑問形自体にはさして意味が無い。

僕が気になるのは――――

「何で僕の部屋に在るんだ？」

狼が喋れるんだから本も話せると思ってはいたけど、重力を無視したかのように目の前を浮遊する魔導書は違うらしい。

だが、何の理由もなく僕の部屋に居るというのも納得がいかないんだが、どこぞのピザ魔女でもあるまいし。

「僕の監視か何か、かな？」

考えられる可能性としてはそれが一番納得できる。

ヴォルケンリッターと共犯関係にあるとは言っても、僕は過去の全てを彼女達に話したわけではない。

僕のデバイス――月下に関して説明する際はどうしても黒の騎士団という組織に所属して戦っていた事を話さざるを得なかったので打ち明けたが、未だにギアスや僕の出生については明かせていない。

無理に隠す必要が無いというのが現実なのだが、だからといって必要に迫られるまでは話す気にもなれない。

――それらも含めて未だに謎の多い僕に対して監視を付けるというのは妥当な判断だとも思えるのだが。

闇の書が軽く揺れる。左右に揺れるその姿は人間でいえば首を振っているように見えなくもない。

「監視じゃないのか」

今度は縦に揺れる。ということは人間でいうと頷いている状態なのかもしれない。

どちらにせよこの魔導書に意識はあるようだ。

「で、結局何がしたいんだ？」

返答は……無い。

まあいいか。いくらなんでもそこまで円滑に本との対話ができる
とは思っていなかったしな。

というか、さっきからずっと一人で本に対して喋りかけているの
もなんだか滑稽に思えてきた。

リビングに降りて朝食の用意でもしようかな。

「とりあえず、出て行ってくれないかな？ 着替えたいんだが」

僕がそう言うと言の書はビクッ！と体（表紙？）を震わせて部屋
から出て行こうとする、が——それなりの速度で飛んでいたせい
か案の定ドアに真正面から激突して動きを止めた。

数秒後には器用に本の角の部分を使ってドアノブを回して出て行
ったんだが、その動作がどうにも可笑しくて失笑する。

「これで蒐集だとかそういうのが無ければ文句は無いんだけどな……」

——数分後——

着替えた後、起動した月下に朝の挨拶をしてリビングの戸を開け
る。

ちなみに待機状態の月下は紐を付けてペンダントの様に首に下げ
ている。

「あれ、シグナムさん？」

誰も居ないと思ってはいたけど特徴的なピンク色のポニーテール
が目に残る。

腕を組んでソファーに座っているが、よくよく観察すると瞳は閉

じているしコクコクと頭が上下している。

（こんな所で寝ると風邪引きそうだな）

とりあえず手近にあった毛布を肩にかけようとした――のだが

……

僕の気配を察知でもしたのかシグナムさんが目を覚ます。

「ん？ ああ、眠ってしまったのか」

「すみません、起しちゃいましたね」

「いや、問題無い。休息は十分に取れたからな」

「怪我の方も大丈夫ですか？」

「あれだけ休めば私もヴィータも完治している、無用な心配はするな」

ここ数日ヴォルケンリッターは大した蒐集を行っていない。

理由は三つ。

一つ目は、限界に達しつつあったシグナムさん達の体力と魔力の回復を行うため。まあ、シグナムさんとヴィータは無理にでも出撃しようとしていたから僕とシャルさんが止めて、余裕のあるザフイーラが幾らか蒐集を行っていたという事だ。

二つ目は、魔法という物に対して全くと言っていいほど知識を持っていなかった僕にそれらを教えるための時間を確保するため。

とりあえず大まかな魔法の原理やミッドチルダ式とベルカ式の二つの魔法体系の存在を教えられたりした程度だ。シグナムさんやヴィータ曰く僕は特殊な例だが、あえて言うなら白兵主体のベルカ式に近いらしい。

そして三つ目。それはシグナムさん達の持つ『アームドデバイス』や僕の月下にも付いているカートリッジシステムに必要なカートリッジという物を補充するための充電期間。

カートリッジ内部に圧縮魔力を事前に溜めておいて瞬間的にそれを開放するのがカートリッジシステムというらしいのだが、どういうわけかシャルさんが作ったカートリッジ——いや、正確には僕以外の人間の魔力が入ったカートリッジとの適合率が異常と言っている位に月下は低いらしく、僕のカートリッジだけは自前で作る必要に迫られたのだ。他にも調べてみると月下はアームドデバイス、ミット式の魔導師が使うインテリジェントデバイスやストレージデバイスとも微妙に仕組みが違うらしく、暫定呼称としてナイトメアデバイスと呼ぶ事になった。

「まあ何はともあれ、怪我が治ったんなら良いです」

それだけ告げて台所に向かおうとしたわけだが、何故かシグナムさんに肩を掴まれる。

「何ですか？シグナムさん」

「ランペルージ、一つ聞きたいのだがお前が使う魔法はみなそのデバイスのサポートありきなのだろうか？」

「ええ、そうですけど」

恥ずかしい話だが、僕が単身で使える魔法はせいぜい念話が限度。砂竜を倒したとはいえ月下のサポートが無ければ何もできなかった。「ああ、発動などはその通りなのだろうが。射撃の照準や剣技そのものに限っては違うだろう？」

「確かにその通りですね、だけどそれがどうかしたんでしょうか？」
段々と嫌な予感が背筋を走りだす。なんだろう、シグナムさんの目の色がおかしいぞ、アレ？

「だからここで少し私と手合わせ願いたい」

「え？……いや、ちょっと待って下さい！いくらなんでも勝てる気がしないんですが？」

「なに、実戦をしようというわけではない。それにお前と共に戦う
以上は実力を把握しておきたい」

確かに、その言い分はもつともだけど。ギラギラと怪しく目を光
らせている人に言われても全然説得力が無い。

こんな時助けてくれる可能性があるのは――

「そ、そうだ。月下からも何か言ってやってくれ」

「何か、ですか？」

「そうだ、頼む（何かフォローをしてくれないと色々マズイんだ）」

へ私は応援しておりますよライ様。黒の騎士団のエースと呼ばれた
貴方の勇姿、しかと録画しておきます！

「フォローにさえなっていないじゃないかああああ！！」

結局、どこから取り出した木刀を押し付けてくるシグナムさん
に逆らう術はありませんでした。

というわけで僕とシグナムさんは八神家の庭で木刀を構えて対面
しているわけだ。

未だ日も登っていないのえ辺りは薄暗い。

吐く息も直ぐに露点へ達し、白い水蒸気に変わる12月の外気は
かなり身に染みる。

いつの間にか起きてきたザフィーラと闇の書、月下は今現在リビ
ングから観戦している。完全に人ごとだと思っないか？

「剣の型など細かいルールは決めない。どんな方法でもどんな手段

でもいい、私から一本取ってみろ」

「了解しました」

もう断るのは諦めた。

四聖剣の人達と初めて会った時もこんな感じで勝負を挑まれたりしたもののだが、こういうのは逆らうだけ無駄なのはどこの世界でも一緒なんだな。

両者とも防具を付けていないこの状況で中途半端に気を抜こうものなら怪我をしかねない、ならば――

「本気でいきますよ？」

「ああ、望むところだ」

その瞬間、周りの空気がガラリと変わったような錯覚に陥るとても澄んでいて、とても鋭い。身を切る冷たい風よりも身の内から湧き上がる熱い高揚感が打ち勝つような感覚。

彼我の距離は数メートル、この状況では無いに等しい距離だ。

先に、シグナムさんが踏み込んでくる。

「はあ！！」

「くっ！」

上段からの鋭く重い切り下ろし。手に持つ木刀でなんとか受け止めるが数秒も持たせる自信はない。

なので木刀の角度を逸らしてその剣撃を受け流す。

このまま防戦に回っても勝ち目はない、そう判断して全力で木刀を横に薙ぐ。

「いい太刀筋だ、だが……」

「なっ！」

かなり自身のある一撃だったのだが、見事に防がれた。そして待っているのはお返しとばかり見舞われる切り上げ。一撃一撃が確実に防ぎにくい部分へと打ち込まれる。再び防戦に追い込まれたので、ジリジリと後退するしかなくなる。こうなったら一か八かの賭けに出るしかない。

シグナムさんの持つ木刀と僕の持つ木刀がぶつかり、甲高い音が周囲に響く。

その瞬間僕は”左手に持っていた木刀を手放した”
罅迫り合いと言ってもいいほど力が拮抗した状況でそれをすれば勿論、シグナムさんは重心をずらされバランスを崩す。

「ちいっ!？」

腰を深く落とし、回転力を加えて正拳突きを放つ。

反則といわれても反論出来ないような手段、だがシグナムさんはふっ、と口元を緩めただけ。

かなり不意打ち気味に放ったのだが、それをギリギリで避けられた。

この不意打ちに失敗した今、姿勢的には僕が絶対的に不利な状況にある。

「なかなか面白い手を使う。だがそれは愚策だったな」

「それは、どうですかね！」

木刀を手放した僕に向けて振り下ろされるシグナムさんの木刀。

僕は“右手に持ち替えていた木刀で弾く”

あえて後ろ手に持つ事で相手の死角に木刀を配置していたのだ。これだけ卑怯な手を使わざるを得ないほど目の前の騎士は強い。

「くっ！」

先ほどの正拳突きはただのフェイク。本命を繰り出すための囮にすぎない。

（藤堂さん、あなたの技使わせていただきます）

予想外の反撃のせいで体勢を崩したシグナムさんに向けて僕は木刀の切っ先を向けて突きを繰り出す。

が、それもまた避けられる。

しかし、この技のオリジナルはそもそも一回では終わらない。

避けられるのを想定して直ぐに引っ込めていた腕の筋力を駆使し、二度目の突きを繰り出す。

確実に肩を狙った一撃なのだがそれは木刀で防がれる。

（ならば、これで終わらせる）

最後の一撃、ギリギリまで収縮させた筋肉の力を一気に解放して木刀の突きを繰り出す。

三段突き——かつて奇跡の藤堂と呼ばれ、機動力で劣る戦車部隊でブリタニア軍のナイトメア部隊に苦汁を舐めさせた武人の技。

ナイトメア戦においても完全に防げる人間はエースパイロットクラスだと言われているその技の再限度はせいぜい6割。

だけどこれなら勝てる。そう確信していたのだが——

「な、にい！」

「これはさすがの私でも危なかったぞ、だがまだ甘い」

体勢を崩した状態から木刀を使い突きの軌道を逸らされた。

焼け石に水とも思われるその行為を成功させるのに一体どれだけの技量が必要か想像もつかない。

ただ一つだけ分かるのは今の本命を無効化された僕が圧倒的に不利な立ち位置にあるという事。

「これで終わりだ!!」

振り下ろされる木刀は吸い込まれるように鳩尾へと叩き込まれる。

「ごふっ!!」

改造によって強化された反射神経や筋肉でも避け切れず、肺からは一切合財の空気が絞り出される。

一瞬、視界が真っ白に染まった。

「あれ? 負けたのか」

気が付けば視界に入るのは段々と白み始めた空。

霜が降りて白くなっている芝生の感触が火照った肌に気持ち良い。

「す、すまない。立てるか? ランペルージ」

「え、ええ。なん、とか」

慌てたような表情でシグナムさんが手を差し出してくる。

一人では立ち上がれそうにないのでその手を掴んでなんとか立ちあがる事に成功する。

「急所は外すつもりだったんだが……」

「僕が無理に回避しようとしたのが悪いんです、気にしないでください」

むしろ急所を外すつもりだったと言われてショックを受けたのは僕だ。

(自惚れるつもりじゃないけど、それでも剣術では張り合える自

信があっただけだな)

正直ここまで実力差があるとは思わなかった、というか男としては非常に情けない。

「だが、先ほどの三連撃は私でもしのぎ切るのがやっとだったぞ」
「はは、あれだけ強烈なカウンターを喰らわされたんです冗談でしょう？」

「いや、本当なのだがな。それより体の方は大丈夫か？」

「頭も打ってませんし、この程度なら少し休憩すれば全快です」
「そうか、それは良かった」

安心したように胸をなでおろすシグナムさん。しかし、少し様子がおかしいような気がする。

どこことなく視線が定まらないというか、挙動不審というか、俯いている姿が妙にしおらしい……

「ところで、ランペルージ。このような事をしておいて私から頼むのは少々不躰な気がするのだがな、その……」

「なんです？ 僕に出来る事なら何でもしますよ」

「本当か？ お前に迷惑をかける事になるぞ？」

「ええ、なんでもおっしゃってください」

「ありがとう、それでだな頼みたい事と言うのはだな……」

「はい」

俯いていた顔を上げたシグナムさんの顔は晴れやかだ。
しかし、その直後僕は後悔することになる。

「もう一度、私と全力で稽古をして欲しいんだ」
「……………はい？」

「やはり私の剣の腕もまだまだだと今の稽古で悟った。だが、己の

技を磨くのに付き合わされるのは迷惑じゃないかと心配だったのだ。

礼を言うぞ、ランペルージ」

「いや、ちょっと待」

「戦場で敵は待ってくれんぞ!!」

へああ、不憫ですライ様。ですが不肖ながらこの月下その勇姿を最後まで録画し続けます」

「いや、ここは止めるべきだと思うのだがな……」

月下とザフィーラの会話が聞こえてきた気がするけど、正直そちらに気を向ける余裕なんて全く無かった。

早朝の澄んだ空気を切り裂き飛来する太刀筋はそのどれもが一瞬気を抜いただけで怪我をしかねないほど鋭く重い。

口は災いの元、昔そう母上が言っていたのを思い出しました。

少女——八神はやての朝は割と早い。

八神家の朝食を作る必要があるのだから当たり前なのだが、今日は普段より半刻ほど早く目が覚めた。

カンッ！カンッ！カンッ！ドスッ！バタリ……

木がぶつかり合うような甲高い音と何かが倒れるような鈍い音。

それが先ほどから一定のペースで繰り返されているのだから気になって起きてしまうのも無理は無いだろう。

「ふわぁ……んん、何の音や？」

半分ほどこしか開いていない瞼を眠そうに擦りながらも寝室を見渡すが、隣で幸せそうにぬいぐるみを抱えて眠っているヴィータ以外に人は見当たらない。

「ドロボウさんやろか？」

ふとそんな事を呟くがそもそも泥棒ならこんな音は立てないし、ザフィーラかシグナム辺りが見つけて泥棒は叩きのめされるのがオチな気がする。

「あ、そうや。朝ごはん作らなあかん」

とりあえず半覚醒の状態でも体が覚えているらしく、普段通りの活動をしようにする辺りが流石と言えるだろう。

隣で寝ているヴィータを起こさないように着替えてはやては一階へ向かうのだった。

—————八神家リビング—————

「あ、ザフィーラに闇の書。おはようさん、今日も早いんやね」

「おはようございます、主はやて」

「おはようございます。はやて様」

「ほえっ？ ええと、どちらさんでしょうか？」

突然聞こえてきた女性の声にキョトンとするはやて。

彼女がリビングに入ってまず視界に入ったのは窓際に座って何かを眺めているザフィーラと闇の書の姿。

何を見ているのか気になってザフィーラの横に置かれていた月下に気付かなかったのだ。

「初めまして、私は月下先行試作機と申します。ライ様のデバイスです以後お見知りおきを」

「こちらこそよろしく願います。私は八神はやて言います」

中心に埋め込まれた宝石が点滅するペンダントに対してはやては

行儀よく頭を下げる。

なかなかシュールな光景なわけだが、それをすんなりと受け入れる主の順応力に対しては相変わらず驚くしかない――

そう内心で思うザフィーラだったが、元来口数が多い方ではない方なので声には出さなかった。

「ああ、ところでさっきから聞こえるこの音はなんなんや？」

「それは“あれ”が原因でしょう」

それだけ呟くとザフィーラは前足を八神家の庭へ向ける。

そこで繰り広げられているのはハリウッド映画さながらの剣劇。木刀が風を切り、一瞬だけ触れ合うように交差してまた離れる。そんな動作が何度も繰り返し行われているのだ。

「シグナムとライくんやないか。なんでチャンバラなんかしてるんや？」

「腕の立つ者を見ると挑みたくなる、シグナムの悪い癖です」

「ああ、なるほど。シグナムそういうん好きやからな。だから剣道場のお手伝いしてるわけやし」

へですが、さすがにこれを三十分も続けるのは好きとかいう次元の話ではないと判断します」

「ええっ！！そんなに続けとったんか！？」

この手の話にそう詳しくないはやてでもそれはさすがにマズイ事くらいは分かる。

いつものジャージを着ているシグナムと、昨日買った黒いインナーを着用したライ。

何度も地面に倒れたのか、ライの服は所々に黒い泥や芝がこびり付いているのが見て取れる。

はやてが起きてくる前からずっとこの常人離れした稽古（という

名の戦い」を続けていたのだとしたら、二人ともかなり冷えているのだろう。

「シグナムー！ライクーーン！そろそろ辞めにせんと風邪引くでー！」
声を掛けられて初めて気付いたとでもいう風に稽古を中断したライとシグナムは声の主へ顔を向ける。

「おはようございます、主はやて。もしかして五月蠅かったですか？」

「ううん、そんなこと無いよ。むしろ早起きできて三文の得や」

先ほどのまでの雰囲気とは打って変わって穏やかな表情になったシグナムは軽くはやてと朝のあいさつを交わす。

「お、おはよう、はやて。ゴメン、今すぐ朝食の準備手伝うから……」

「いやいや、ライくんは休んだ方がええって。唇も真っ青やよ？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

僅かに汗をかいているシグナムに対し、ライは身体の動きがとてもぎこちないというか強張っている。

そう、まるで何度も木刀で叩かれたかのように――――

「二人とも、汗かいて体も冷えたやろうからシャワー浴びた方がええんとちゃう？」

なんならお湯張ってお風呂に入ってもええよ」

「それではお言葉に甘させて頂きます。おい、ランペルジ先に入ってもいいぞ」

「え？ いや、僕は後でも構いませんよ。シグナムさんお風呂好きなんでしょう？」

「いいから先に入れ！」

「は、はあ？」

何故怒鳴られてのか分からないという表情をライはしていたが、これといって断る理由も無いので風呂場に向かって行った。

シグナムのことをそれなりに知る者からしたらこれは驚くに値する事なのだ。

「じゃあシグナムはライ君がお風呂行ってる間に朝ごはん作る手伝いしてくれへん？」

野菜切るだけでええから」

「はい、分かりました」

「ザフィーラはヴィータとシャル起こして来てな」

「お任せ下さい我が主」

———その直後、シグナムとザフィーラの念話———

『風呂好きなお前にしては珍しいな』

『む、まあ、少し熱くなり過ぎたと私なりに反省しているのだ。自制を己に課せないなどまだまだ私も未熟だ』

『だがお前が彼を気にするのも分からなくもないがな、あの戦い方は独特だ』

『ああ、騎士の様に正々堂々とした戦いをしてくると思ったら時折暗殺者のような……いや違う、勝つためにより合理的な戦い方をしている、と言った方が良いな。とにかく変則的で次の手が読めんだ、ランペルージの戦い方は』

『やはり随分と気に入っているようだな、あのまま鍛えたらお前を超えるかもしれんぞ？』

『からかうな、私も仮にヴォルケンリッターの将だ、そうそう負けはせんよ』

一日はまだ始まったばかり、はたして後編ではどうなる事やら？

——四・五話前編 終了——

四・五話 前編 男なら自分が言った言葉の責任を取りましょう（後書き）

『また見てギアス☆』

作者「ど、どうも、THEヘタレ作者ことライラです。やっぱ日常編書くのは難しいですね」

ライ「シリアス書いても同じこと言うんだから結局は意味無いよね」
はやて「しかもグダグダ書いてるうちに前後編に分けざるを得なくなる辺りが

なんかもう駄目駄目やね」

作者「うう、しどい、俺泣いちゃう」

ライ「さて、何故か作者にリヴァルが降臨してきたので今日はこの辺りで」

ライ&はやて「また見てギアス☆」

果たして後編は何時になったら投稿できるのでしょうか？

四・五話 後編 猫と折り紙と指きりげんまん（前書き）

ボキャブラリーが圧倒的に足りないせいで自分が書きたい事を上手く描写出来ない。

というか微妙にライのキャラ崩壊が激しい気がしますorz
そんな駄文でよろしければ読んで頂けると幸いです。

四・五話 後編 猫と折り紙と指きりげんまん

ご、午前中は酷い目に遭った。

何百年も戦い続けてきた騎士ってのはやはり伊達ではないようだ。次の動きを予測して行動を練ってもそれを実力や経験で乗り切られる……上には上がいるんだな。

だけど、こんな生活でも長く続くのならまんざらじゃない。そう思えて……魔法少女リリカルなのはA・S銀月の王と夜天の主始まります。

四・五話 後編 折り紙と猫と指きりげんまん

シグナムさんに変なスイッチが入って約六時間。昼食を食べ終えた僕はソファに座って休んでいる。

稽古が終わった直後は体中の筋肉が悲鳴を上げていたけど、今はそれほどでもない。

（痣になるような攻撃はほとんど受けていないし、何よりシグナムさんはなんだかんだ言っても手加減をしてくれていたらしい……：が、流石にそれだけの実力差を見せられると凹むな）

そもそも人ならぬ身である守護騎士達の年齢は外見とは裏腹に数百を越えているらしい。そしてその存在がゆえに数百年という時間の大半を血と硝煙渦巻く戦場で過ごしたというのだ。

それが意味するのは、シグナムの内には数百年分の剣技が蓄積されているという事。そんな経験値の差を人の寿命で埋めるのは土台無理な話。

「やっぱ手数をもっと増やした方がいいのか」

〈それ以前にライ様も本気では無かったようですが？〉

次こそはシグナムさんに打ち勝つために幾つかの戦闘パターンを脳内でシミュレートしていたら、待機状態の月下が話しかけてくる。

「ん？ ああ、あれ以上は相手を殺したり傷つけるための戦いになるからね。

いくらなんでもたかが稽古で首を賭けるつもりはないよ」

〈確かにそうですね、それは非効率的です〉

元々僕の武術は単純かつ確実に敵を制圧、もしくは殺すための技に特化している。

玉座についていた時も常に暗殺者に狙われていたため騎士道だとか競技的な意味の武術よりは『何時いかなる時、どんな状況でも敵と相対し続ける』為の武術を習っていたような気がする。

正直な話、常日頃から武器を携帯し続けるのは困難なので身近にある物さえも武器として扱わないと生きていけなかったのだ。

そこへバトラーがあれこれと現代の戦闘技術を体に刷り込んでくれたものだから悲しい事に欲しくもない戦闘技術ばかりが身についてしまっ、自分の中で決まった戦い方というのがどうにも曖昧になってしまった。

「まあ、本気で首を賭けてもシグナムさん相手にどこまでやれるか自信は無いんだけどね」

弱々しく微笑んで見せる。正直な話、死線を乗り越えてきた回数も明らかにシグナムさんが上だ。

〈ならばシグナム様に弟子入りをするというのも一つの手では？〉

「……………死にそうな気がするんだが」

〈大丈夫、ライ様はそう簡単には死にませんよ〉

「とりあえずそれは褒め言葉として受け取っておく」

確かに弟子入りも一つの手だが、既に”マニュアル”を徹底的に刷り込まれ、藤堂さん達との稽古で身に付けたりした日本の剣術などがある以上、他の武術に手を出すことが自分にとってプラスになるかマイナスになるかは正直なところよく分からない。

まあ、剣術以前に僕は他に魔法を習得するべきなのかもしれないが。

（魔法の基礎体系に理数系の知識が必要とはいえ、構築式を一から作るとなれば流石に時間がかかるだろうし。

そうになると、シグナムさん辺りに手伝ってもらうのが手っ取り早いかもしれない）

「おーい、ライ」

（だけど、今現在の月下に備えられている魔法とは別に即実戦レベルで使える上にすぐ習得できる魔法なんて限られるはずだ……）

「おーい、聞いてんのか？」

（となれば、月下の兵装と並行することで本来以上の能力を発揮出来るような補助的なものの方が良いだろうな）

「あたしを無視すんじゃないー！ー！！」

突如、考え事をしていた僕の鳩尾にお見舞いされる鋭い飛び蹴り。飛び蹴りは偶然なのか、午前中シグナムさんとの稽古で打たれた場所と寸分違わない部分にクリーンヒット。肺の中の空気を根こそ

ぎ持っていかれるような衝撃に思いつきりせき込む。

「げふっ！！げほっ！な、何するんだヴィータ、痛いじゃないか」

「何度も呼んでのに答えねえお前が悪いんだよ」

「ああ、そうだったのか。ごめん考え事してたんだ。

「けど仮にも女の子なんだからスカートのまま飛び蹴りは感心しないよ？」

「飛び蹴りをされた事自体にはツツコミ無いんだな」

思いつきりジト目で睨みつけられる。言われてみればその通りだな。

鉄槌を振り回して砂竜と死闘を繰り広げる姿を見たせいですっかりそういった感覚が麻痺したみたいだ。

「まあ、細かい話は置いて。

「僕に何か用事があったんじゃないのか？」

「そうそう、ヒマだからゲームしようぜ」

そう言いヴィータは手元に持っていたゲームのソフトらしきディスクを僕に見せ、次に八神家のリビングに設置されている据え置きゲーム機を指さす。

ここ数日何度かはやとヴィータと一緒にやっているのを見かけたから、僕にも相手をしろという事なんだろう。

しかし、そういったTVゲームの類に僕はどうも疎い傾向がある。そもそも生きていた時代が時代なのでチェスとかならともかくTVゲームなんてした事が無い。

知識があるとすれば時々リヴァルやカレンが話題に出してきた、ブリタニアが日本進攻以前に世界中で流行ったらしい竜の名を冠するRPGや配管工の中年兄弟がさらわれた姫を助け出usrらしいゲーム（きつと配管工を装ったエージェントか何かが活躍するんだろう）

のタイトルくらいだ。

「大体事情は理解したけど、何故相手が僕なんだ？

その手の娯楽物はやった事が無いんだけど」

「はやては今忙しくてゲーム出来なくて、シヤマルもザファイラもシグナムもアクションゲームが苦手

だから残ったのはおまえだけなんだよ」

（それだけの理由で飛び蹴りを受けるのはなんだか腑に落ちないような気もするんだけどなあ）

「まあいい、僕でよければ相手を……って答えを聞く前から既に臨戦態勢ですか？」

「ほらほら、細かい事は気にしないでさっさとコントローラー握れよ」

僕の答えを聞く前にゲームを起動画面にしている辺り答えを聞くつもりは無さそうだ。

そうテンション上がった声で促されるとどうにも断れず、結局二人してテレビ画面の前に座る事になる。

これからやるのは対戦形式のアクションゲーム。

なんでもこっちの世界で30年以上も前から大人気のSFアニメシリーズのロボットを動かして戦う物らしい。

ヴィータ曰く『元の作品？別に知らなくてもゲームとしては楽しめるだろ？』との事なので、多分適当に面白そうなゲームタイトルを選んではやてに買ってもらったんだろう。

「じゃあさっさと始めんぞ！」

「おい、まだ操作方法も分からない人間にそれはないんじゃない……」

僕の抗議もむなしくゲームは戦闘画面へ

画面内でヴィータが操るロボット（白と赤と青のトリコロールが特徴）が何やらビームらしき物をバカスカ撃ってくる。

それに対して適当に選んだ僕の機体（緑色でモノアイ、装備はマシンガン）はまさしく無抵抗で屠られる。必死で操作方法を書いた説明書を読んで抵抗するが当たり前のようにHPゲージは削られ――

YOU LOSE

無情にも僕側の画面に敗北を示す表示が現れる。

「よっしゃあ！買ったあ」

「……………」

「まあ、初めてにしてはよくやった方、ん？どうしたんだライ？」

「……やろうじゃないか」

「はあ？」

「もう一度、今度は負けない……大方のルールは覚えた、次は勝

つ

「よし、もう一回やんぞ！！」

負けたままだというのはどうにも癪だ。

次こそは完膚なきまでに……叩き潰す！！

へはあ、こんなところで負けず嫌いを発揮せずともよいのに

何か月下の声が聞こえてきたような気もするが、聞き流す。今は目の前の戦いの方が重要だ。

ROUND 2

「さっきまでとは動きが違ええ！」

「ルールさえ覚えればこっちの物だ」

ヴィータの機体——今度は全身に砲門を装備した銃撃特化型に
対し、僕のは青い機体で全距離にバランスよく対応できるオールラ
ウンダー（だと説明欄には書いてあった）で挑む。

「このミサイルの雨を全弾回避、って、絶対バグだろ！！」

「思ったより反応遅いな、このコントローラー」

右、右、左、上、△、□、R1、R2、下……駄目だ、ナイト
メアの操縦桿に比べたら反応が遅すぎて使いづらい。

〈秒間十二回以上の入力……大丈夫でしょうかこのコントローラ
ー？〉

何か聞こえてきたが無視。

YOU LOSE

今度はヴィータ側の画面に表示される——勝った。

「そんな馬鹿な！今のはまぐれだ、もう一回！！」

「受けて立とう」

ROUND 3

「今度はスピードで翻弄してやらあ」

「狙い打つ！」

YOU LOSE どちらが負けたかは言うまでもないだろう？

「手動モードで狙撃って、普通当たらねえだろあんなの！？」

「うん？相手の動きを読めば割と簡単に当てられるもんだよ」

その後、何回やっても結果は変わらなかった。

「うう、拡散ビームを避けるってなんなんだよお」

「割と簡単だよ？」

画面の中で流れるリプレイ映像——種が割れるエフェクトと共に速度が増した青いロボットにヴィータのロボットが一刀両断されていった。

「もう一回やる？」

「手加減無しのお前とやって勝てるかあ！！」

突然コントローラーを投げ出してヴィータは走り去ってしまった。どうでもいいけど電源消すのは僕なんだが。

〈少しは手加減したら良かったのでは？〉

「いや、”たとえ遊戯でも勝負である以上は常に全力”が母上から教えられた家訓なんだ」

〈……そうですか、ならばもう何も言いません〉

何故か呆れたような声を発する月下。

何か僕はしただろうか？覚えが無い。

そこで家事が終わったのかはやてがリビングに入ってくる。着ているのは外出用のマフラーや手袋。

「さつきヴィータが涙目で出て行ったんやけど、何かあったん？」

「いや、一緒にゲームをしていただけだよ」

「ふうん？ まあええわ。」

これからちよう出かけるんやけど、ライくんも来る？」

「暇だからいいけど、どこ行くんだい」

「図書館。もうちよいで貸し出し期限が切れるやつがあったから返すついでに何か借りようかと思うてな」

「なるほど」

というわけで八神はやては寒気吹き付ける中を新しい同居人のライに車椅子を押してもらう事で進んでいる。

現在の時刻は昼過ぎ。

冬とはいえそれなりに日が照っているおかげで一日のうちでは最も暖かい時間帯である。

「ちよう気になってたんやけど、ライくんって車椅子の扱いに慣れとるな。知り合いに車椅子の人でもおったん？」

車椅子の扱いというのは、素人がするとうしてもぎこちなくなったり配慮が足りなくなったりするものだ。

例えば、街中で小さな段差を通る時も車椅子の場合それなりに振動が来る。車椅子を押すのに慣れていない人間だとその事を失念して色々ミスをやらかしたりするものだがライにはそういったミスが無い。

小さい頃から（とはいっても今でも小さいが）車椅子を使っているはやてはそれを敏感に感じ取った。

「ああ、親友の妹が車椅子でね。よく押すのを手伝ったんだよ。まあ、当初は色々和不慣れだったせいでその親友にはかなり睨まれたんだけど」

昔の事を思い出したのか、ふとライの目がどこか遠くを眺めるように細くなる。が、直ぐに元通りの表情になり話題を変える。

「で、次の曲がり角はどっちなんだい？」

「へ？あ、ああ次は右や」

「了解」

ライとはやては車道に面する曲がり角を右に曲がる――――その際に曲がり角に車椅子をぶつけたりせず、周囲を見渡して死角から歩行者や自転車が来ないか忘れずにチェックするあたり手慣れている。

これなら病院や介護施設でも十分に働いていけそうやな。と一人はやてが胸中でライの事を評価していた時はふと、ライの纏う雰囲気が変わる。

「どうしたんや？ラ……？」

ライが口の前で人差し指を立て、『静かに』というジェスチャーをされるので出かかっていた声を引っ込めるはやて。

やがて声を潜めてライが囁きかけてくる。

「何か、聞こえないかい？」

「……？」

首を横に振る事ではやてはそれに応える。
が、よく聞き耳を立てると、何か聞こえるような気がしなくもな

い。

「にゃあ」 「にゃあ」

「猫さん？」

「多分ね、近くにいます。しかも二匹以上」

今の鳴き声を聞けばそんなことは分かり切っているわけだが。肝心なのはなぜそこまでして気配を殺すのかということなのである。それをはやては聞きたかったのだが、どうにも話してくれるような雰囲気ではない。

「探そう」

何故か目の色を変えて謎の進言をしてくるライ、藍色の目には期待の色が宿っている。

「へ？ ああ、うん、猫さんの事やね？ ええよ」

その後、ライとはやては十分ほどかけて猫の鳴き声を頼りに近くの路地へ入ったり、脇道に入ったり（以下略）して猫を探し続けたのだが、残念ながら声は聞こえても中々その姿を拝む事は出来なかった。

「なあ、ライくん？」

「ん？ なんだいはやて」

せめて尻尾だけでも見えないかと周囲へ意識を向け続けているライへ声をかける。

「そこまでして猫さん探す必要は無いんやし、そろそろ図書館に

行かへん？」

「そんな、せめてもう少し……いや、やっぱいいか、はやての言うとおりだな……うん」

「（うわあ、ちょっと落ちこんどる）そんなに気落とさんでも猫さん探しはまたしようや？」

「なっ、べ、別にそこまで猫に固執してるわけじゃないよ」

猫さん搜索網（はやて命名）を辞めると聞かされ、普段からあまり表情を変えないライがションボリした（ように見えた）ので氣遣ったのだが、本人にその自覚は無いらしい。

はやてからしたらそんなライの姿はここ数日で見せていた大人っぽい雰囲気とは違い子供らしくて微笑ましく思える。

『なあ、やっぱライくんって……』

『へええ、私見ながらかなりの猫好きと見ております。今までも何度か街中で猫を探すものの見つけれず落ちこんでいたのを見た事があります』

『ふふ、意外と可愛いトコもあるんやね』

『へその意見には同感です。ちなみに、よく財布を落としたりもしますよ』

『ほほう、無駄な所でスペック高そうなのにつかり属性まであるとは稀有な存在やね』

『それを指摘すると本人が落ち込むので言って上げないで下さいね。自覚もないようなので』

『了解や♪』

といった感じで女同士？で秘密の念話が行われたりもしたのだが、残念ながら話題の中心人物は気付けはすもない。

結局、ライとはやての二人が目的地に着いたのは時計の針が午後二時前を指す頃になった。

入口でカウンター業務の人と顔を合わせたとき両者とも互いの顔と名前を覚えて挨拶を交わした上にカウンター業務の女性がはやての借りたがっている本がまだ返却されてていない事をわざわざ本人に伝える光景。

それを見るだけでも、この車椅子の少女がどれだけの頻度でこの図書館を利用しているか察するのは難くない。

要はそれだけ学校を休学している少女にとっての時間は本が占める割合が大きいという事だ。

「ライくんは何借りるつもりなん？」

「そうだな、文字はこっちでも大差はないから読む分に問題ないだろうけど、僕の居た地球とこっちの地球でどれだけ歴史が違うのか調べてみたいな」

「うーん、それやったら確かあっちに在ったはずやで」

はやてが指さす方向へライは車椅子を押していく。

暖房が効いていて時間帯的にも昼過ぎなので図書館の利用者は多く、車椅子の人間が居てもそれほど目立つ事は無い。

「随分と詳しいんだね、歴史系の本は読むのかい？」

「いやいや、ただ単に昔のお伽噺とか童話が置いてある棚に近いから覚えてただけや」

「童話、というと桃太郎や浦島太郎あたりかな？」

「まあそんな感じやね。ていうかライくんの世界にもあったんや？その二つ」

「らしいな。ということはアーサー王伝説とかもこっちにはある

のかい？」

「うん、私はまだ読んだ事あらへんけど、あったと思うで」

よくよく考えると、違う道を歩んだパラレルワールドで同名の文学作品が存在するというのはかなり学術的に興味深い会話なわけだが、特に二人ともそれについて深く考えるようでもない。

第一考えた所でそういったものは現代科学的にも超弦理論だの相対性理論だのパラドックスだのとかかなり専門的な分野になるのだから仕方がないといえば仕方が無いわけだ。

そんな軽い雑談（と言えば世の学者は怒るかもしれないが）を続けていくうちに目当ての棚までたどり着いた。

「？すぐに分かるパラレルワールドとの違い”みたいな本があればええんやけどね」

「いくらなんでもそんな怪しい本は図書館に置かないだろう」

「はは、冗談や。まあ簡単な世界歴史の総まとめみたいな本は確かその辺に……」

丁度、車椅子からでも手が届く位置にあったそれなりの厚さがある本を取り出してはやてはライを見上げる。

しかし、ライの視線はその本へ、ではなく別の本へと注がれている。

「あれ、どしたんやライ君。それ、歴史の本やなさそうやけど」

「多分、元の棚に戻すのが億劫な人が置いて行ったんだろうな」

そう呟き、ライは持っていた本の表紙をはやてへ向ける。

『中級者用折り紙』と表紙に堅苦しい文体で書かれたそれはどちらかというと子供向けと言うよりは本格的に趣味で折り紙をする大人用の書物だと容易に想像できる。もちろんそんな本が歴史関係の

本棚に入るようなことは無いはずなので利用マナーの悪い人間が置いて行っただと考えるのが妥当だろう。

しかし、それだけではない——半年前まではかなりの頻度で図書館に入り浸っていたはやてにはなんとなく分かる。

（あれは読みたい本を見つけた人の目や）

人によってどんな本が読みたいかはまさに十人十色だ。

歴史書が読みたい人や、各地に伝わる神話や逸話の書物が読みたい人、童話などが読みたい人もいるし、宇宙や生き物に興味をもつてそれらの図鑑を探し求める人も居る。

古今東西、様々な分野の本がある図書館ならではの光景だが、それらの人すべてに等しく共通する瞬間。

「どんな本でも、”読みたい本”に出会った人というのは総じて瞳の奥に光の様なものが宿る。」

まさに現在のライもそんな雰囲気を感じていた。

「ライ君、もしかして折り紙とかやったりするん？」

「あ、ああ。昔ちよつと知り合いに折り紙を教えててね……」

はやての問いを聞いたライは懐古の念を込めて口を開く。

そう言って愛しげに、いや——少し寂しげに眼を細めてその本の表紙を撫でるライの姿はどこことなく小さく見えて……

（またや、また……やっぱ、ライ君は）

——昔の話をする時のライはいつも悲しそうな顔をする。

（私かて、家族のそんな顔は見たくない！）

だけど、ライの過去にははやてが介入する余地は無い。

過去に何があったかは分からないが、そこに踏み込むのは決して容易な事ではない——ならば

「ほんなら、私に折り紙の折り方教えてくれへん？」

「え?……」

完全に予想外の質問をされキョトンとした表情を浮かべるライ。折り紙を教えてほしいと頼むはやての姿がかつて同じように折り紙の折り方を教えてほしいと頼んできた少女の姿とダブってしまったのも原因の一つだっただろう。

——結局、アッシュブロンドの髪を揺らして微笑むその少女にも大嘘をついてしまった——

その事実がチクリとライの胸を突き刺す。

「いや……だけど、家に折り紙はあるのかい?」

「その辺は心配無しや、七夕の時に吊るす短冊作ったときの余りが沢山あるんやから」

過去の負い目からなんともヘタレな答えを返すライにはやての追撃。

これで逃げ道は無くなった。

「七夕には”みんな一緒に暮らせませすように”って書いたんよ」

「きっとそのお願いは叶うさ」

ライの答えに呆れたようにはやてはため息を吐く。

『まるで分かってない』とでも言うように……

「あのな、ライくん。七夕の時にはライくんおらんかったけど……その”みんな”の中には勿論ライ君も入ってるんやで? だからそういう風に他人事みたいな反応はせんといてや」

「あ、いや……すまない」

さらなる追撃——これで止め
はやては小指を立てて前へ出す。

それを見たライは何とも言えないような表情をして肩をすくめる
……そして苦笑しながら——

「まったく……君には敵わないな」

「ふっふっふ、私をなめたらアカンで」

車椅子のはやてと目線を合わせるように床へ膝を付けたライは、
はやてと同じように小指を立てる。

苦笑しながらもその表情はどこか晴れやかな色を宿していた。

「絶対に折り紙教えてな？これは”約束”やで。」

「何もそんなに念を押さないでも、時間があればいつだって教え
るさ」

ライのほっそりとした小指とはやての小さな小指が絡まる。

そして、契約のように二人で同じ決まり文句を吟唱する。

「ゆゝびきゝりげゝんまん——」

（僕は、今度こそ約束を守れるのかな？）

「うゝそつゝいたゝら——」

（……どうにも湿っぽくていけないな）

「はゝりせゝんぼんのゝます」

（過去を捨て切れる自身は全然ないけど……？今日”を生きる

のに？昨日”ばかり見ている始まらない)

指切った」

(ならば僕も明日を掴みたい……：はやてやヴォルケンリツタ
ー達の明日を、僕も居る明日を)

絡みついていた指が離れる。

少女と少年の小さな小さな約束。いや、言いかえれば契約の成立。

はやての前で膝を付き、誓いの文句を唱える少年の銀髪は窓から
降り注ぐ陽光を反射してキラキラと輝き

その姿はまるでお伽噺に出てくる騎士のようにも王子様のように
も見えた。

それに少し見惚れてしまったのは小さな少女の心の秘密。

その後、たまたま図書館に訪れていたはやての友人、月村すずか
と出会い三人でお茶会を開いたりしたのは別のお話。

次回予告

小さな休息はすぐに終わりを迎える――

その手に刃を構え、戦う少年の前に現れる魔導師小隊――

決して相容れぬ道を歩む者がぶつかったとき、取れる選択肢は
多くないのかもしれない――

——四・五話 後編 終了——

四・五話 後編 猫と折り紙と指きりげんまん（後書き）

『また見てギアス☆』

はやて「いやゝ、今回は私の出番が多かったなゝ♪」

ライ「良かったねはやて」

作者「おかげでシャマルさんの出番が消えたけどね」

ライ「そういえばシャマルさんがさつき向こうで怪しい菓を調合してたよ『これを作者に飲ませれば私の出番が増える』とか呟きながら」

作者「ひいっ！……三十六計逃げるが如かずー！！」

はやて「ああ、行ってもうたね」

ライ「誤情報なのにな、まあいいか。というわけでそろそろ――」
はやて&ライ「また見てギアス☆」

第五話 新たな邂逅（前書き）

前回からかなりの間を開けてしまいました。すいません。

今までの中で最も長く、最もグダグダな話ですorz

今回は密かに活動報告の方で募集していたキャラを登場させています。ムーギネーターさん、シルフさん、多少の設定改変などありますが、キャラ設定提供ありがとうございました。

ついでに、今回登場したムーギネーターさん提供のゼリガンですが、ムーギネーターさんの作品にも登場しております。もちろんのことながらそのゼリガンとこちらのゼリガンは似て非なる別人となっていますから比べようなんて思わないのが吉ですよ？

さて、前置きが長くなってしまいましたが。こんな駄文でも指摘や感想を頂けると嬉しいです。

第五話 新たな邂逅

闇の書の真の主としての覚醒。それがはやての生き残る唯一の道。だけど……たとえその悲願が成就しても、元通りの生活を営む事は二度と出来ないかもしれない。

あまりにも異質な力の存在というのは総じてそういうものだから……魔法少女リリカルなのはA・S 銀月の王と夜天の主始まります。

第五話 新たな邂逅

文化レベル0——不毛な砂漠しか広がらぬ小さな次元世界で、対峙する二つの人影があった。

騎士甲冑を身に纏い、その手に焰の魔剣レヴァンティンを構えた女性——騎士シグナムと

黒いバリアジャケットとマントを纏い、閃光の戦斧を構えた少女——魔導師フェイト。

「預けた決着は、出来れば今しばらく先にしたいが。

速度はおまえの方が上だ、逃げられぬというのなら……戦うしかないな」

「はい、私もそのつもりでした」

お互いに武器を構えた姿勢から交わす言葉は強い決意を秘めた言葉——既に幾度も刃を交えた好敵手ライバルのような覇気が両者の間に満ちているものの、この二人が出会ってからまだ一月と経っていない。吹き荒ぶ熱風が砂塵を巻き上げる。

そして両者の距離は一瞬で縮まり――

――同時刻・異なる次元世界にて――

暗雲の立ち込めた空域で二人の人影が拳を構えた姿勢で睨みあっている。

本来なら人間が単身で浮遊するなどあり得ない事だが、魔導を扱う者はそれらの物理法則を一時的に無視できる。

重力の網から逃れ、拳撃に乗せた魔力は人間の腕力が生み出すエネルギーを遥かに超える。

否、性格にはその二つの人影は”人”ではないのだ。

本来は獣の姿こそが真の姿である両者は人外の印である狼の耳をその頭部から生やしている。

筋骨隆々な大男の姿をした盾の守護獣――ザファイラと茜色の髪を生やした女性の姿をした使い魔――アルフ。

「あんたも使い魔……守護獣ならさ、御主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ!!」

「闇の書の蒐集は我らが意思。我らが主は……闇の書の蒐集について何もご存じない」

「なんだって!?! そりゃ一体……」

あまりにも予想外の答えが帰って来た事で困惑するアルフ。

しかしそれを尻目に、強く拳を握りしめたザファイラは言葉を吐き出す。

「主の為であれば、血に濡れる事も厭わず……」

我と同じ守護の獣よ。お前もまた、そうではないのか?」

「そうだよ、でも……だけどさ!」

ザフィーラの語る主への忠誠心。その決意はアルフにも痛いほど分かる。

かつて、自分もそれと全く同じ事を思い。決して契約で縛られているわけでないのに主であるフェイトの為に戦ったのだから……だからこそ、それでは駄目だとアルフは知っている。

——その決意は言葉だけでは変えられない——そう知っているからこそ、岩をも砕く二つの拳は数多ある次元世界の一角でぶつかり合う。

——さらに同時刻・別の次元世界にて——

『シグナム達が?』

『うん、砂漠で交戦してるの。テストロッサちゃんと、その守護獣の子。』

『長引くとマズいな、そっちに行かなかったただけマシだと思えてえけど。助けに向かうか……っ!』

『ヴィータちゃん?』

『くそ、こっちにも来やがった、例の白服』

「ヴィータちゃん? ヴィータちゃん! ……切れちゃった」

ヴィータとの精神通話で連絡を取っていたシャルは、突然精神通話の回線が切られて不安そうな表情になる。

長年の付き合いで、ヴィータは強敵や本腰を入れて戦わなければならぬ状況では集中力を乱さないために精神通話の回線を切る癖があるというのを熟知していたためそれほど混乱するわけではなか

ったが——

逆説的に、それだけ相手が手強いという事を示している。

「シグナムさんかヴィータ、もしくはザフィーラが戦ってるんですね？」

全体的に蒼く流線的な装甲の騎士甲冑とバイザーを身に纏った少年——ライ——がシャルに声を掛ける。

ライはその精神通話に参加していなかったため会話の内容までは分からないものの、シャルの雰囲気で大方の事情を把握していた。緑色のドレスの様な騎士甲冑の裾を軽く揺らしながらシャルは答える。

「うん、三人とも管理局の魔導師と鉢合わせしちゃったみたい。

それも互角に戦えるレベルの……」

それを聞いてライは一瞬背筋に寒気が走るような錯覚に襲われる。
(シグナムさんやヴィータと互角って……一体どんな猛者が来ればそうなるんだ?)

ザフィーラの実力は知らないが、かなりの巨体である砂竜を簡単に倒せるシグナムとヴィータ。

その二人と互角ともなればどこか現実離れた敵のようにも思える。

何の根拠もなく——そう、ブリタニアの猛将と名高い豪傑であるアンドレアス・ダールトン將軍のようにたくましい魔導師がシグナムやヴィータと現在戦っている姿を想像してしまうのは戦っている当の本人達の姿を知らない者からすれば仕方ない事だろう。

まあ、現実には戦っているのは先日ライが出会った二人の華奢な少女なわけだが——

〈管理局が本格的にこっちを捕縛しに来たのなら“ここ”も直に感付かれます、一時撤退を進言します〉

淡々とした声でライの騎士甲冑の核である月下は警告する。

今現在、ライとシャルが居るのはシグナムの戦っている次元世界とは殆ど離れていない次元世界。

周囲はほどよく茂った森で、木漏れ日が差し込み、木立が優しい葉擦れの音を奏でている光景はピクニックやキャンプに最適だ。

少し辺りを見回すだけでも地球には存在しないような動植物が山ほど存在しているわけだが、リンカーコアを持たない以上深く気に掛ける必要も無い。

リンカーコアの蒐集に手頃な魔法生物を探す為にシャルの広域探查魔法を展開してただけで他の二人ほど派手に蒐集を行っていないライとシャルの二人は恐らく管理局に見つかってはいない。

とはいえ、もしも管理局の魔導師に見つかれば、直接的な戦闘能力の低いシャルや未だに對魔導師戦経験のないライは少々不利な状況に追い込まれる可能性が高い――そう判断したがゆえに月下はそう言ったのだ。

「そうね、シグナムやヴィータちゃんならきつと逃げられ……えっ」

「！何か来たんですか！？」

「今そっちに情報を送るわ、見て頂戴」

シャルのデバイス――クラールヴィント――から幾つかの情報に乗せた帯状魔法陣が月下の核に接続される。

ただ単に顔を隠すという機能だけではなく、月下のレーダーが周囲から入手した情報を取捨選択して映し出すヘッドマウントディスプレイ

プレイの役目も果たすバイザーにこの次元世界の地形図が表示される。

ライとシャルの居る位置から同心円状に数十キロは鬱葱と生い茂る森に囲まれ、近くには小さな湖があるのがその地図を見れば分かる。

言うまでもなく言葉を話せるような一定以上の文化レベルを持つ生物の類が周囲に住んでいないのは明白だ。

しかし、問題はそこではない。

まだ何キロも離れているが、着々と地図の右端——シグナムが戦っている次元世界に隣接する点——に向けて真っ直ぐに進む“六つの光点”

空を飛んでいるであろうそれは特定の陣形を取っている。

「この場所、このタイミング、そしてこのルート……どう考えても季節外れの渡り鳥じゃあ無さそうですね」

「そうみたい。かといってもピクニックやキャンプ、なんて洒落込んだ雰囲気でもないわね」

ならばそれらの正体は一つ。

足止めをくらった狐シグナムを捕まえる狩人達魔導師

ほぼ同時にその考えに行きついた二人の表情は自然と曇る。

光点の数は六、すなわち六人もの魔導師がシグナムを捕縛する為にこの次元世界の空を飛行している事になる。

烈火の将の実力の一端でも拝めば、現在魔力も体力も完全な彼女がそう簡単に敗北するような腕の持ち主ではないと容易に想像出来るが、実力の伯仲した魔導師との戦闘中に後ろから挟撃などという展開になってしまえばそうも言っていられない。

シグナムとて神話に出てくるような最強の戦士ではないのだ。

「月下…少々荒っぽいハイキングになりそうだけど、行けるかい？」

〈肯定。サクラダイト魔力伝導率、残カートリッジ数、胸部収納予備ハーケンワイヤー、飛燕爪牙、スラッシュハーケン高機走駆動輪、ランドスレーパー他各種兵装とも全て正常起動値です〉

「ちよつと、ライ君、月下ちゃん。まさかあなた達…：駄目よ！管理局の武装魔導師を六人も相手にするのは荷が重すぎるわ！」

ライと月下の会話から二人が何をしようとしているか察したシャルは必至でそれを制止しようとする。

まだまだ大した魔法戦の経験もなく、月下に備え付けられた魔法を除けばライ個人で扱える魔法もせいぜい精神通話や肉体強化、そしてつい先日シグナムに頼み込んで習得していた”とある魔法”だけ。

敵を倒すにしてもあまりに切れるカードが少なすぎる。

いくら初戦で砂竜を倒したとはいえ対魔法生物戦と対魔導師戦はそもそも勝手が違う、そんな素人がプロの魔導師に対して突然戦いを挑むというのはかなり無茶な話なのは当然。しかも数は向こうが上なのだ。

「大丈夫です、何も正面切って戦いを挑むほど僕は正直じゃありません…：

だけど、狩人達を逆に罠にかけるには貴女の手助けが必要なんです、力を貸して下さい」

その時、湖の騎士はただ黙ることしかできなかった。

幾度もの転生時には一国の王の下で蒐集を行う事もあった…：そして目の前の少年の声には戦乱の時を生きた王の様なある種の完

成された威厳が感じられる。

そう、策を練り、兵を率い戦う古代の王の様な……

（もしかしたら出来るかもしれない）

大した根拠は何も無い……だがシャルはこの言葉に信じるに足るものがあると判断した。

「仕方ないわね……私もそのハイキング、協力するわ。

だけど危なくなったらすぐに止めてね？」

「ええ、引き際は心得てますよ……なんたって僕は？嘘つき」で
すからね」

リルカ・プリウス一等空尉は部下の魔導師六人を引き連れ、名も
なき次元世界の空を飛んでいた。

飛ぶ、とはいっても揚力の加護を得て飛翔する翼など誰も持ち
合わせていない。その身に宿る魔導こそが魔導師達が魔導師たる所
以で空を駆けるための”翼”。

——リルカ実験小隊——隊長である彼女の名を取った魔導
師小隊の名前はそう呼ばれている。

元来、魔法という物は絵本に出てくるような魔法使いが行うよう
に人の願いを何でも叶えるわけではない。

そこにはれっきとした法則ルールがあり、魔導を行使する者も魔導物理
学に沿い魔力という代償を払い、その魔力によって発動される魔法プログラム

も払われた代償以上の働きを行えない。つまり魔法と呼ばれていても実際には科学技術と同様で制限が多々あるのだ。

例えば魔法を構築する人間の脳にも限界はあり、それを補うために代理演算装置も兼ねてデバイスが存在する。

だからこそ、次元世界における魔法技術の歴史はより効率的に望んだ事象を起こすための様々な道具やプログラムプログラム デバイス 魔法構築式の発明史といってもよい。

たとえ世界が違ってても自分達の技術をより高みへ導こうとするのは人間の一種の本能とも呼べるのだろう。（まあ、その過程で様々な研究が結果を出せずに歴史の闇へ消えていったりもしたわけだが）そしてこのリルカ実験小隊というのは時空管理局技術部によって考案された様々な新デバイスや新魔法が実戦で使用するにあたって問題が無いかどうかの情報収集する試験運用をコンセプトに作られた実験部隊の一つである。

そんな小隊の長であるリルカは飛行しながらも薄く唇をつり上げている。

腰まで届く先端のみが緑色なワインレッドのロングヘアと切れ長な瞳が特徴的な彼女は、10人に聞けば8〜9人が『美女だ』と答えるような容姿をしているものの、どちらかというと近寄りがたい雰囲気醸し出すような女性だ。

「出向前の紹介任務でまさかお目当ての騎士さんを見つけられるなんて幸運だわ。

ふふ、この任務で闇の書の騎士を捕らえれば昇進間違いないしよ」

数ある搜索特定遺失物の中でも闇の書は時空管理局創立前後から管理局にとって目の上のたんこぶの様な存在だった。

”リンカーコアの蒐集”が覚醒の条件である闇の書の騎士達はそ

の代の主にもよるが、幾度も管理局と敵対してきた。

より確実に質の良いリンカーコアを狩るには魔導師の集まった管理局は格好の的なのだ。そしてそのたびに多数の被害を管理局は被り、時にはその過程で多くの人命が失われてきた。

つまり昇進を望む者からすれば闇の書確保の一端を担うという功績は輝かしい功績であり、管理局上層部に取り入るコネを作る機会なのだ。

〈指揮官殿、それは97管理外世界の言葉で『取らぬ狸の皮算用』
というものですよ〉

リルカの相棒でもあるインテリジェントデバイスである《ダグラス》が事務的な男性の声でマスターを戒める。

技術部の人間の趣味なのだろうか、ダグラスは97管理外世界製のベレッタM92と呼ばれる自動拳銃によく似たデザインのデバイスだ。

とはいってもこの青い銃身のデバイスは質量兵器のように火薬を爆発させ銃弾を打ち出す機構では無いのでそもそも銃口は必要なくそのバレルの先には実験段階の”とあるシステム”の中核を担うアイテムを嵌め込める為のパーツが追加されているせいで銃本来のシンプルなデザインから僅かに逸脱している。

「そんな事は言われなくても分かっているのよダグラス。私がどうという人間かお前は知っているはずよね」

〈失言でした〉

「まあ、お前の言いたい事も分からないでは無いわ。何しろ実験小隊ってのは”本局の最新技術で作られたデバイスや魔法が配備される”と言えば聞こえはいけど要するに”いつどんな不調や欠陥が見つかるか分からない不安定な装備の情報を集める”為のモルモットみたいなものなのだから。」

……いや、というよりはメンバーの方が問題かしらね」

そんな短い会話を主とデバイスの間で行っていたわけだが、ふと唐突に小さなため息をついてリルカは自分を中心に編隊を組んで飛んでいる五人の魔導師の一人を睨みつける。

黒曜石のような瞳で、茶色の短髪の上に黒い鉢巻を巻いた自分の後輩——ゼリガン・ヒューイット二等空尉。

どこかの学校でラグビーボールを抱えて青春でも謳歌していれば似合うような外見のこの部下は、ミッドチルダ式魔法を扱う魔導師の数が比較的多い管理局の中では比較的少ない部類に入るこの小隊唯一の”騎士”であり前衛^{フォワード}の役目を担っている。

彼が身に纏っているのは一般的な管理局員のバリアジャケットを黒地にしてその上に赤々と燃え盛る炎や昇る太陽を模したデザイン——正直ものすごく見た目が暑苦しい。

（暑苦しいのが外見だけだったらどんなに楽か……ああ、考えただけでもイライラする。

いや、もっと冷静になりなさいリルカ・プリウス）

「リルカせんぱーい！！自分は必ず闇の書の騎士を打ち取って手柄立てて見せますよー！！」

『とりあえずヒューイット二尉、お前は念話で会話を行う事を考えなさい、この愚図。そして私の事はプリウス一尉、もしくは隊長と呼べとこの隊が結成されて382回ほど忠告したはずだけど未だに覚えていないのですか？、凡骨』

やたらと響く大声で叫ぶ部下を一瞬、きっ！と睨んだかと思うと不自然に抑揚の無い口調でリルカは罵り言葉をゼリガンに浴びせる（もちろん念話で）

全くの無表情でその美しい外見に似合わない悪態を吐かれるのは慣れているわけだが、流石に傷付いた表情をしたゼリガンは会話を念話に切り替えて続ける。

『すいませんでした。ですけど自分は必ず隊長のご期待に答えて見せます』

『そうですか、なら敵にあっさりとやられないように気をつけなさい』

これまた不自然に抑揚の無い調子で紡がれたリルカの労いの言葉を聞いたゼリガンは何故か『あなたに一生付いていきます!!』とばかりに目をキラキラと輝かせて喜びを露わにする。

『自分、自分、そんなに隊長に心配されてたなんて……大感激です!!』

『はあ?何を誤解しているかは知りませんが私が言っているのは”くれぐれも実験段階のデバイスであるバイモンを壊さないように”という事ですからね?これが終わればリンディ提督の部隊に”出向”するというのがそのような失態を犯されたら指揮官の私はクロノに合わせる顔がありません』

『そ、そんなあ』

『へはっはっは、だとさゼリの旦那。くれぐれも俺様は壊さないように頼むぜ、なんたってリルカの姉さん直々の命令なんだからなあ』

無情にも己の身よりデバイスを心配された事で大分心に傷を負ったゼリガンに随分と碎けた口調で声をかける彼のデバイス《バイモン》。

持ち主のバリアジャケット装着された肩当てと細いパイプで繋が

ったバイモンは夕焼けのように紅い刀身の”双剣型アームドデバイス”である。

自分の主に対する敬意など微塵も持ち合わせていない男の声は豪快に笑い続ける。

『へはっはっはっは！まあそう落ち込みなさんな、俺様が付いていればゼリの旦那は戦場でも光り輝けるんだからよお』

『そうだな！！バイモン！！自分たちは何時だってリルカ小隊の先陣を切って戦いを勝利に導く一番星を目指しているんだから！！』

ブチっ！ 何かが切れるような音がした（ような気がする）

今までずっとこめかみを引き攣らせながらも、なんとか我慢し続けていた隊長はどうやらこの辺りで堪忍袋の緒が限界を迎えたらしい。

額に青筋を浮かべつつも表情は石造の如く1ミリも動かさず、真冬の氷山を思わせるように冷たい声で――

『お前達が：他の部隊の面々から：何と呼ばれているのか知っていますか？』

『へ？ああ、いや知りませんけど』 『へ俺様は知らねえなあ』

『迷彩知らずのコンビだの、戦場の花火だの、光る熱血バカだのなんだのお前達が呼ばれる事に対して：私は何の感慨も懷きませんがね：せめて私が指揮する隊でそのような汚名が着せられるのは腸ハラワタが煮え繰り返るんです：

それに、お前の性格なぞどうでもいいのですが、独断専行で敵に突っ込む事がこれ以上あれば：どうなるかは分かりますね？

せめて、私に迷惑を掛けたくないと思う人並みな心があれば：少しはファインズ三等空尉の寡黙さを見習いなさい：

今回の件に関しても、リンディ提督の部隊に出向できるように私が働きかけるのがどれだけ大変だったか：知らない筈はないでし

よう？』

『え？まさか無限書庫に転属ですか？それだけは勘弁して下さい、あんな沢山の本に囲まれていたら自分は死んでしまいます！！』

『へあ、ああ姉さん、俺さ……いや、あっしはスクラップにはされねえですよ？』

人の発する声にしては不自然極まりないほど冷たく、機械的な声なのに形容しがたいほど威圧感のある言葉の刃に対してガタガタガタガタ！！、とゼリガンとバイモンは古典的な怯え方をするしかない。

一方で少し話題に上がったファインズ中尉にリルカは目を向ける。

エリイ・ファインズ三等空尉――

墨を溶かしたように漆黒の長髪を純白のリボンで束ね、何を考えているのか窺い知れないエメラルド色の瞳は虚空を見つめている。

空戦魔導師ともなれば飛行時に気流で乱れてしまう長髪というのはご法度以外の何物でもないのだが。近年開発された形状記憶性のある特殊なヘアスプレーを使用しているのでリルカもエリイも必要以上に髪が乱れる事は無い。

小隊の平均年齢で言うとりルカとゼリガンが19と18、他の男性魔導師達は20代前半から後半までという中でエリイの年齢は15とぶつちぎりで最年少である。

（才能さえあれば尉官になれるというのはどうにも、受け入れがたいわね）

まあ、才能はあるのだ、才能は。それに上官の命令を無視して独断専行をする事も無い……

『……………97管理外世界はドネルケバブの原産地……………ふふっ』

『……………』

正直この娘はゼリガン以上に扱いが分からないと言ってもいい。どうか何を考えているのか対人交渉能力に自信のあるリルカも全く把握できない。これで管理局地上本部に彼氏が居るというのだから世の中は何かがおかしい。（と現在一人身のリルカは語る）

『あの、リルカせんば…隊長。彼女を見習うって…？』

『ごほん、言わないでください、私も考えたくはありません。それに彼女は少なくともゼリガン二等空尉よりは役に立っています』

『そんな…！自分は何時だってリルカ先輩の為に——』

『黙りなさいミドリムシ。というか隊長と呼ぶように注意するのはこれで383回目です』

『ミドリっ！？……』

『へああ、ついにゼリの旦那が人のカテゴリーから外されちゃったね』

一瞬気まずい空気が漂ったりもしたが。ついにはリルカからの人外（というか生態系の底辺）扱いのショックが大きすぎてゼリガンは完全にフリーズしてしまった。

もはや恒例となりつつあるその行事を面白い見世物のように眺めて楽しむ隊員と、何も起こっていないかのようにそれをスルーするエリィ——

これがこの小隊の日ごろの光景である。

＊

『リルカ一等空尉、もうすぐ目標ポイントに着きます。いつもの漫才はそろそろお開きにしてください』

『一体何時、私が漫才を行ったというのです？……まあいい、警戒レベルを二段階引き上げ……っ！？』

小隊員の一人である男性魔導師にそう告げられ、気を引き締めるリルカだったが丁度その瞬間、まるで”タイミングを狙っていたかのように”周囲警戒用の小範囲探查魔法が遮断されたのだ。

『（ジャミング？、待ち伏せか！）各員散開！』

元々この小隊では、戦闘時を除けば使用魔力の節約のために低空飛行を義務としている。

しかしそうになると、必然に地上からの待ち伏せや奇襲などに備えるために交代で隊員が探查魔法を展開し、そこから得られる情報は常に全員で共有するという方法を取っている。

だからこそ、突如奇襲に対する”目”が奪われた事による混乱で一瞬反応にタイムラグが生じた。

当然ながら探查魔法のジャミングを狙って起こすような存在がその一瞬を逃すはずが無い――

眼下の樹木の隙間から高速で飛来した”ワイヤーの付いたハーケン”が、先ほどリルカと会話していた魔導師の持っていたデバイスに絡みつく。

さらに、その後を追うように地上から飛び出して来る一つの”人影”

「天昇月影！！」
てんしょうつきかげ

〈弾丸装填〉
カートリッジロード

ガシャン！

メカニカルな音と共にその”人影”が手に持っていた刀の峰から銀色の光が吹きだし、”人影”は一気に上昇速度を増す。

獲物を捕らえる瞬間に加速する鷹の爪を思わせる鋭利な刃は防御魔法を展開しようとした魔導師のデバイスに接触し切り裂く。

魔導師の杖という響きからは裏腹に精密な電子部品で出来たはらわたを周囲へぶちまけ、真っ二つになったデバイスはただの”ガラクタ”へ変貌する。

——次は自分もああってしまう——

眼前ほんの数センチで己の愛機が破壊され、その刃が勢いを殺さず自分に迫って来るのが視界に入った瞬間、その魔導師はそんな恐怖を抱いた。

「殺しはしない！」

そんな声と共に魔導師の予想を裏切り、刃は魔導師のバリアジャケットのみを切り裂き、よく鍛え上げられた胸部を露わにする。

そして、その人影は右手に装備されている砲身のような物を、守るものが何一つ無くなった魔導師の皮膚に突き付け——

砲身から飛び出した何発もの魔力弾の魔力ダメージは魔導師の意識を一気に深遠へと引きずり込んだ。

『隊長！バルドがやられました！』

『全隊員に告ぐ、我らリルカ小隊は今襲撃を仕掛けてきたアンノウンを最優先捕縛対象と認定する。』

各員はコードαで対応しなさい。伏兵が潜んでいる可能性がある、周囲への警戒を怠るな』

『『『了解』』』』

あの直後に招待へ奇襲を仕掛けてきたアンノウンは空中での追撃を恐れてか銀色の魔力弾を周囲へ散発的にばら撒きながら生い茂る樹木の中へ落ちて行った。

（まったく、だからあれほど奇襲には注意するように事前のミーティングで報告したというのに）

内心で悪態をつきながらもリルカの脳は常時同様、いや、常時を遥かに上回る速度で回転している。

部下の失態をただ叱責するくらいなら誰にでも出来る、指揮官としてすべきことはその部下のミスまでもを作戦を遂行するための糧にすることだ。

（あの瞬間、私達は間違いなく硬直していた。ならなぜ”広範囲砲撃魔法か射撃魔法で私達を一気に戦闘不能へ持ち込まなかった？”もしくはその手段を持たなかったからこそああやって接近戦に持ち込んだのか。

しかもあのままの勢いで攻勢に持ち込んでいればもう一人ほど倒せたはずなのに、奴はそれをしなかった。飛行魔法を使えないからああやって自由落下に任せて落ちて行った……ならば相手は典型的な前衛型のベルカ式。

多分陸戦型としてならA AかA A A一くらいの戦闘技能を持っている。

しかし、そうなるとあの距離へ近付くまで探査魔法でも見つけれないような隠蔽技術とあれだけ強力なジャミング魔法が使えるのは不自然……となればもう一人共犯者が近くにいます？）

たった一瞬で手に入れた情報^{ピース}だけで敵の全体像を把握する。

そこから幾通りもの戦闘パターンを編み出して指揮を執る優れた頭脳、それこそがリルカ・プリウスがこの隊のトップたる資格――

『ファインズ三等空尉は中距離射撃によって奴の足止めを。ライド空曹は探査魔法展開の準備と並行して威嚇射撃。ラマール空曹は抜けたバルドの分も弾幕を維持しろ。くれぐれも騎士の間合いには入るな、お前達の耐久力なら一撃でノックダウンだ』

『『了解』』』

ミッド魔導師の必須スキル——マルチタスク分割思考ではじき出されるリルカの作戦にいつも間違いは無い。だからこそリルカ小隊の魔導師達はそこに一片の迷いもなく、統率された兵のように確実に包囲を締めて行く。

『あの、リルカ隊長、自分は指示もしかして指示なし？』

『当然でしょう、追い込む前にお前が出て行っても邪魔です、その程度の事も分からないのですかこの駄犬が。お前の出番は最後です』

お前は何を言っているのだ？とばかりに本気で迷惑そうな声色の念話にまたもやゼリガンの精神にはかなりのダメージが入った。

リルカとしてはゼリガンの白兵能力を考慮して、最後の締めを任せるつもりなのだが、その真意を汲み取れる人間はそうそういないだろう。

『なんだろう……最近リルカ先輩の自分に対する態度が冷たい気がする』

『へむしろまともに扱われたところを俺様は見た記憶が無いんだがね。』

まあ、精々頑張れや旦那、あの敵さんを捕まえれば褒めても

らえるかもしれねえぜ？』

＊

そうやってゼリガンとバイモンが無駄口を叩いている間にも確実にライは退路を断たれつつあった。

そもそも最初から空路なんてものは使えるはずもなく、その事に初撃で敵には感付かれた。

今のところ飛んでくる魔力弾は避ける事の出来るレベルの物だが、それもいつ限界が訪れてもおかしくない。

（予想以上に敵の指揮官が有能すぎる！）

恐らく先ほどから後方で動かないワインレッドの長髪の女性があの隊のトップだと考えて間違いないだろう。

指揮官を潰せば形成は一気に逆転するわけだが、相手もその事を熟知しているのかかなりの距離を置いてこちらに近づいてこようとはしない。

瞬時に幾つもの回避ルートを考えても、その回避ルートの先に先回りするように弾幕を張られる。

複数の人間が組んでグループを作る以上はそこに多少の認識の齟齬や躊躇など付け入る隙も出来るはずなのに、今日の前にしている魔導師小隊は全で一個の生命体なのではないかと錯覚するほどに動きが統率されている。

——しかし、統一されているからこそそれを突き崩した際に生じる隙は大きい——

最初の奇襲で編隊を一気に散開させそこから突き崩す算段だった

分、あまりの立て直しの速さには舌を巻いたものだが、こちらにも秘策の一つや二つは存在する。

数で勝っている代わりに何が何でもライを捕らえないといけない相手に比べ、とりあえずの足止めさえすれば後は隠蔽魔法で隠れているシヤマルと合流して離脱すればいい——そうすればこのゲームはライ達の勝ちだ。

『へライ様、完全に追い込まれました』

『ああ、そうだな。だけどまだ終わりじゃあない』

確かに、辺りを見回してみれば、こちらの刃の絶対に届かない範囲から四つのデバイスの切っ先がライを狙っている。

遮蔽物となる樹木は辺りに沢山あるのだが、見事なまでにどう動いても敵の射線から逃れる事が出来ないように魔導師達が配置されている。

（まるでナリタ連山のときみたいだな）

胸中でそう呟きながらライは苦笑する。

——救世主^{メシア}でさえも奇跡を起こさなければ認めて貰えなかった

——

そう言ったかつての上官の台詞が頭の中でリピートされる。

（メシアって柄じゃないけど、今度は僕がこの戦況をひっくり返す奇跡とやらを起こして見せよう）

＊

『……隊長、捕獲対象の動きが止まったよ』

捕獲対象を追い込むために手に持つ銃型——ダグラス同様に技術者の趣味なのか、97管理外世界で出回っているコルト・ガバメン

トというリボルバーによく似たデザイン——のインテリジェントデバイス《クロスベル》から散発的に魔力弾を放っていたエリイからの念話が入る。

『よし、全員撃ち方一時停止。これより降伏勧告を開始する、相手の出方によっては一斉射撃に出る』

『『了解』』』

突如、逃げ回っていた捕獲対象が手にした剣——これから出向する現地のサムライと呼ばれていた戦士たちが使っていたカタナという武器によく似ている——を腰部の鞘に納めた事で少なからず小隊のメンバーの間には疑念が生じた。

管理局の定めた法によって敵魔導師及び騎士が交戦の意思を持たないと判断した場合、管理局側の魔導師は降伏勧告を行うのが義務付けられているが、そもそも奇襲をしかけてくるような相手がここまであっさりと降参することは普通ならあり得ないのだ。

少なくともリルカ小隊に武器を納めて投降してくると素直に信じる正直者は一人も居ない。

「そんな！自分の活躍の場はどうなったんだ！」

「うわあ、さすがの俺様もゼリの旦那がここまでアレだとは思ってなかったぜ」

訂正。約一名その正直者^{バカ}が居ました。

（隊の人選ミスったかしらね、私）

いまだき空を指さして『あ、UFOだ』等といわれても信じる人間なんていないと思っただけ、ゼリガンならバカ正直に信じる、奴はそういう男だ。と、脳内で部下に対する評価を下方修正しながらもリルカは周囲の人間全てに聞こえるように念話を飛ばす。

『こちら、時空管理局所属リルカ実験小隊隊長、リルカ・プリウス一等空尉だ。』

局員に対する襲撃及び任務遂行妨害の現行犯で逮捕する。

今すぐバリアジャケットを解除、武器を捨てて投降しない場合、こちらには実力行使で身柄を拘束する権利も与えられている』

あえて、明確な対象の人数は告げない。

考えられる抵抗パターンを一通りシミュレートして解決策を練り続ける。

リルカは決して自分自信の魔導技能に自惚れる事はない

生まれつき何か特殊なスキルや変換資質があるわけでもなければ、最大魔力量が多いわけでもない。いや、むしろ単純な魔力量だけならせいぜいCランクだからこそ血反吐を吐くような努力をして少ない魔力を効率的に運用する術を身につけ、持ち前の頭脳を活かした指揮官としての道に進んだ。

部下の実力を把握し、それを引き出すための作戦も何百通り、何千通りも考案した。

だからこそ、自分と、自分の指揮する小隊が負ける事は無いと自信を持って言える。

（さあ、どう来るのかしら？ 犯罪者さん達）

「武器持たぬ者に戦う刃を」

捕縛すべき相手が唐突に口を開く、バイザーで顔を隠しているため素性は分からないが予想していたより若い男の声が漏れ出る。

しかし、口から発せられるのは降伏の意思を示す言葉でもなければ

ば管理局員に対する罵倒でもない。

「震える刃は鎧を断ち切る」

かなり初歩的な古代ベルカの戦闘補助魔法。

恐らく武器に対する魔力強化の一種で間違いない、とその呪文詠唱と捕獲対象の右手から展開された魔法陣のタイプから予測を付けながらもリルカはその意図が理解できないでいた。

武器を強化しようにも、肝心の武器が敵に届かなければ意味が無いのだ。しかも鞘に刃を納めた状況で発動するにしても不自然すぎる。

（追いつめられて狂いでもした？）

どちらにしろ投降の意味が無いのは明白。

『捕獲対象は抵抗の意思を示した。』

撃ち方用意。これ以上の損害を出す前に奴を捕らえろ』

『『了解！！』』

射撃魔法の不得意なゼリガンを除く部下達三人と自分のデバイス、計四つのデバイスから射撃用の魔法陣が展開される。

先ほどの威嚇や牽制ではなく確実に戦闘能力を奪うために――

「戦乙女ヴァルキュリアの祝福を！！」

『撃て！！』

先に捕獲対象が呪文の詠唱を終え、それに続く形で四つの射撃魔法が発射された。

術者の魔力光を反映した色とりどりの魔力弾は全て直撃コース、
今から回避行動を始めても遅い。

（失望ね、行動パターンからかなり頭のキレる相手だと思ってたけど、所詮ここまでね）

リルカは気付く事が出来なかった。この時点ですでに読み負けしていた事に――

……ぢゅい い い い いんっ……！

鼓膜を直接引っ搔かれるように耳触りな音。

「え？」

誰とも知れずにそんな間の抜けた声をあげてしまった。

威力だけならそこらの魔導師を一発で昏倒させられるような射撃魔法の数々はその一つとして対象に届く事は無かった。

魔力弾を防いだのは予想された伏兵でもなければ対象の発動する防御魔法でもない

突然傾き、重力に引かれ倒れ出した何十本もの？樹木”に非殺傷設定の魔法の数々が直撃し霧散する。

その光景を観たりルカ小隊は誰もが何故そうなったか理解できなかった。

ライの唱えていた魔法は遠距離の敵を討つための射撃魔法でも何でもない、ごくごく初歩的な戦闘補助魔法。

古代ベルカでアームドデバイスがまだ全盛で無かった時代に生み出された《祝聖刃》と呼ばれるこの魔法は、指定した剣や槍などの武器の表面に超高速振動する仮想魔力刃を展開させて敵の鎧や武器を切り裂くための簡単な魔法。

これが魔導物理学に疎いライが短い期間で覚えられる数少ない魔

法だった。

だが、この魔法は別に？剣や槍などの白兵用武器”を指定して発動する必要はない。例えば”長さ数十メートルの細いワイヤー”を指定して発動することだって出来る。

そしてライは、《祝聖刃》を腐葉土や落ち葉で事前に隠しておいた飛燕爪牙の予備ワイヤーにかけて一気に引っ張ったのだ。

円を書くように隠されていたワイヤーを引っ張れば当然のように樹木へ引っかかる。だが鎧だろうが剣だろうが壁だろうが容赦なく切断するような魔法を施されたワイヤーは樹木程度なら粘土のようにバラバラにする。

完全に魔導師達の虚を突いたこの戦法はリルカの作戦に大きな穴を開けることとなった。

『リ、リルカ隊長指示を…ちくしょう！こっちに来やがった、うわあああ！！』

『こちらラマール。ライド空曹が戦闘継続不能。陣形の立て直しを、このままだと奴を抑えられません。』

…くっ！なんて機動力だ、弾が当たらな…ぎやあああああ！』

倒れた樹木さえも足場として使う捕獲対象は胸部から射出されるハーケンも駆使することで想像以上の機動力を発揮して瞬く間に二人の魔導師を地に沈める。

己の装備の能力を100%活かす身体スペックと状況判断能力。飛行技能が無くても十分に脅威たりえる存在だとリルカが認識した時にはすでに隊の半数が失われた後だった。

（こちらの布陣さえも計算した上で誘い込まれた？………定石ならここで退却するのが正しい判断、だけど私の？夢”を叶える為に

はこんな所で退けないのよ!!)

「ダグラス、レンズシステム起動」

〈了解しました、指揮官〉

銃型デバイスであるダグラスに装着されていた機械的なパーツが組み立て式の自転車を組み上げるかのように広がり、ダグラスのバレルを延長させる。

手慣れた手つきで懷から取り出した青いルーペのレンズの様な物を取り付けながらリルカは念話で指示を飛ばす。

『ゼリガン、私の合図と同時に突撃。あれだけ大言壮語を吐いた以上はそれなりの働きを見せなさい』

『よっしやあああああ!!!! 自分は今猛烈に熱血しているぜええええ!!!!!!』

『へあらあら、こんなに煽っちゃって。一緒に戦う俺様の苦労も考えてほしいもんだねい』

こういう時にこれ以上命令しても熱血バカが話を聞かないのは士官学校時代の経験で熟知しているため放っておく。

(部下が稼いでくれた時間は無駄に出来ないわね。この小隊の主軸の何たるかをよく理解しているわ)

捕獲対象が周囲の樹木を切り倒すと同時に時間を稼ぐための高速戦闘に入ったのは実験小隊という側面を持つリルカ小隊に置いて、新型のデバイスを配備されているゼリガン、エリイ、リルカのデバイスが不意を突かれて破壊される可能性を減らすため――

そして、体勢を立て直す時間さえ稼げば隊長が戦況を覆してくれるという期待の表れ。

ならばその期待に答えるのが指揮官としての務め。

『……オーラレイで援護しとく？』

『あんな大規模混戦時にしか使わない魔法をこんな小規模戦闘で使うな……と普段なら言うところだけど、どこに隠れてるか分からない伏兵を炙り出すには丁度いいわ。ヒューイット二等空尉がやられるまでには発動しなさい』

『……了解、これよりオーラレイの発動準備に入ります』

淡々と感情のこもらない声で帰ってくるエリイの念話はいつも通りの事。それが一体どういう心情から来る物なのかリルカにも想像できないが、少なくともその時の感情で術式の制御にムラが出ない分、指揮官としては助かる人材だ、と心の中でリルカは評価する。

〈術式制御安定、対象はこちらヘルートを変更した模様、接敵までの予想時間約7秒〉

「それだけあれば十分だわ」

ダグラスの本来の銃口部分と、付属パーツによって延長されたバレルの先端部分に付いた青いレンズとのちょうど中間地点。

リルカの髪色と同じワインレッドの光球が浮遊している。

込める魔力は決して多くなくとも、非常に複雑な魔法陣はその小さな光球を芸術の域まで昇華する。

制御の困難な術式を組み立て、我が物にしたときにのみ得られる一種の優越感を瞳に宿しながらもリルカは引き金を引いた。

魔力透過率の高いレンズを通り抜けると同時にレンズと同じ淡い青色に変色した魔力球は高速でターゲット目がけて飛んでいく。

引き金を引くと同時に魔力球の後ろへ追従するように飛ぶ一人の

ゼリガン
騎士を引き連れて――――

＊

（軌道が甘い。あの程度、ルートを変えないでも避けられる）

トップさえ潰せば足止めという目的が達成される。そう判断したライは高機走ランドスปีナー駆動輪の出力を全開にして敵の指揮官目がけて疾走している。

自分目がけて飛んでくる青色の魔力球は放っておいても問題ない、問題なのはその後ろから迫ってくる騎士。

射撃魔法も右腕部に装着されたハンドガンしか使えず、飛行魔法が無い以上地の利は敵にある——ならば優先順位としては『こちらが手出し出来ない距離からの集中砲火』という一方的なリンチを避けるためにミッド式の魔導師の方が上になる。

管理局側も仲間を集中砲火の巻き添えにさせないために後衛で控えさせていただろうから実質的に危険度は低かった。

要である射線を維持できなくなると同時に戦法を変えてきた敵指揮官の状況判断能力には賞賛の言葉を贈るしかない。

騎士との交戦に備え、廻転刃刀を眼前に構え、腰を落とす。

そんなライの右側を魔力弾が通り過ぎる。誘導弾である可能性も考慮して魔力弾から意識を逸らす事は無かったが、弾の軌道が変わる様子もない。

そんな小さな油断に付け込まれた。

「ブラスト！！」

リルカが声高に叫ぶ。そのワードをトリガーに魔力弾に仕込まれた複雑な術式が真に発動する。

手榴弾の破裂するような音と共に魔力弾が内側から爆散——瞬間的に周囲の気温が絶対零度まで下がる。

局地的な温度変化は大気の温度差によって小さな気流を生み出した。

『っ！？月下、被害状況は』『へ装甲の損傷は軽微。敵の使用したと思われる氷結魔法の影響で右腕部ハンドガン及びチャフスモーク発生装機構使用不可』

右腕に視線を落とすと、先ほどの爆発の余波を間近で受けたハンドガンはコーティングされたかのように氷漬けになり、胸部装甲やバイザーからも氷柱が垂れ下がっている。確かめるまでもなく内部機構がやられたのは間違いないさそうだ。

唯一の射撃兵装と、退却用の煙幕であるチャフスモークを封じられたライは一気に追い込まれてしまった。

それを気にする間もなくもう一つの問題がライに迫る。

「どりゃああああ！！！！、ここは通さん！！！！」

リルカ小隊所属、ゼリガン・ヒューイット。いざ参る！！」

激しい裂帛の掛け声と共に、双剣を手にしたいかにも暑苦しいオーラを纏った青年が切りかかってくる。

バシユッ！バシユッ！

二振りの剣の柄から響く排莢音とともに、双剣が業炎に包まれる。

「おりゃあああああ!!!!!!」

瞬時に間合いを詰めたゼリガンはまさに火の如く、息を継ぐ暇も与えないほど激しい連撃を繰り出す。

濃密な闘気をそのまま体现したかのような焰が生み出す熱気は空気を焦がし、枯れ葉を焦がし、近くに居る者の肺さえも焦がしそうな勢いだ。

一本しかない廻転刃刀で二本の双剣バイモンが繰り出す攻撃を防ぐのは困難。

——とはいえライの主観としては烈火シグナムの将の太刀筋に比べれば単純で勢いに任せたような斬撃を避けるのは決して難しい事ではない。

ライが苦戦しているのは他に原因があるのだ。

（ちい！さっきから眩しいんだよ。一体何なんだこの騎士は？）

そう、？目の前の騎士ゼリガンが恒星のように光を発しながら”爆炎を纏った双剣バイモンを振り回しているのだ。

デバイスが吹きだす焰の光とは別の光源。バリアジャケットにデザインされた燃え盛る炎や昇る太陽が比喻抜きでフラッシュグレネードさながらの閃光を断続的に発していれば、たとえばバイザー越しとはいえ真正面から対峙できるものではないだろう。

強力な閃光が太刀筋を見辛くし、デバイスから吹きだす焰の熱気は確実にライの体力を削っていく。

（こんな秘策を隠していたなんて……あのリルカとかいう指揮官、ゼロにも並ぶ実力の持ち主だ。

これ以上の足止めは無理だ。撤退の機会を見つけないと僕も、隠れているシャマルさんも危ない)

＊

(まさかこんな形であのバカげた装備が役立つなんてね…今日はラッキーだわ)

何故、ゼリガン(のバリアジャケット)があのような形で発光したり、リルカの放った魔力弾が周囲の温度を急激に下げる氷結魔法に変貌したかについては全て時空管理局技術部が考案した次世代装備が関わっている。

——デバイスの熱処理の効率化による余剰エネルギーの有効活用——これを念頭に置いて設計されたゼリガンのバリアジャケットとデバイスのバイモンは細いチューブで繋がっており。それを介して炎熱魔法使用時の排出される熱エネルギーを光エネルギーとしてバリアジャケットから排出する事でデバイスの冷却に回すエネルギーを節約できるような仕組みになっている。

が、実際のところ、発する光が強すぎて隠密性は実質ゼロと言ってもよいし、何より射撃魔法がメインのミッド魔導師からすれば仲間が最前線で眼潰し同然の閃光を放っていたら魔法照準の妨げになると各所からクレームが来るようなポンコツ装備だったというのにこんな形で役立つとはリルカも全く思っていなかったのだ。

——魔力変換資質の無い魔導師でもより簡易に属性魔法を使えるように——というコンセプトの下作られたダグラスの”レンズシステム”

誤解されがちだが、炎や雷の魔法を使うのに変換資質は必要無い。

あくまで変換資質というのはそれらの魔法を発動するのに必要な特定の手順の幾つかを無視して通常より強力な属性魔法を発動させられるスキルに過ぎないのだ。

そしてリルカに特殊な資質なんてものは一切ない。それは他の大多数の局員も例外ではなく。レンズシステムに使われるレンズはそれぞれの属性魔法を使うのに必要な特定の術式をインプットしておいて、レンズを通過する魔力弾にレンズに対応した属性付加を行うのである。

しかし、現時点では？そのレンズシステムに対応した構成の魔力弾にしか属性付加が出来ない”という本末転倒な段階なのだ。

（まあ、だからこそ私達が集めた情報を研究に役立てるわけなんだけど）

ちなみに、グレアム提督が個人でレンズシステムの流れをくんだデバイスの開発に取り組んでいるという噂もあるが、噂の域を出ない以上リルカが気にする話題ではない。

『……オーラレイ術式、70%構築完了。あと少しで撃てるよ』

『了解したわ。効果範囲照準と周辺の策敵は私が引き受けるわ。』

ファインズ三尉は自分の作業だけに集中して』

『……分かった。クロスベルのレーダー機能とダグラスのレーダー機能を共有……』

そして、今エリイが発動しようとしている広範囲攻撃性魔法も開発段階の魔法であり、幾つかの重大な欠点を抱えている。オーラレイ

とはいえ、“敵と味方を自動判別して敵にはダメージ、味方にはサポート効果を与える魔力弾を無数に散布する”というのは広範囲攻撃魔法

にとって味方を巻き込む可能性がどれだけデメリットとなるかが分

かるなら規格外な魔法であるのは考えるまでもないだろう。

「これでチェックよ。もう逃がさないわ」

そう呟き、探査魔法を発動させるリルカは獲物を捕らえた蜘蛛のように狡猾なイメージを与える笑みを浮かべていた。

幾重にも張り巡らした糸からそう簡単に逃れることは叶わない。

（仮にもあの熱血バカは剣術^{ゼリガン}だけが取り柄なんだから、ここで取り逃したら承知しないわよ）

何よりリルカは部下の実力に絶対の信頼を置いている。

＊

「悪の栄えた試しなどなああい!!」

「くっ!（話の通じる相手じゃなさそうだな）」

ライとゼリガン——二人の刃が交差し、激しい火花が飛び散る。

ガシャン!——これは廻転刃刀から。

バシュ!バシュ!——こちらはバイモンから。

三本の剣がそれぞれに搭載されたカートリッジシステムの弾薬^{カートリッジ}に封入された圧縮魔力を開放する。

衰えていた焰の勢いを取り戻したバイモンと、銀色の魔力光噴射によって爆発的な推進力を得た廻転刃刀——

その三本の刃は丁度拮抗した状態で動きを止め……なかった。

「秘剣!轟・炎・破・斬!!」

「がああああっ!!」

魔力を燃料にして燃える業炎は剣が拮抗した状態で一気に燃え上がる。

バックファイアにも似た勢いで膨れ上がる爆発の勢いを至近距離で受けたライはノーバウンドで十数メートルほど後方に吹き飛ばされ。ガラスの様に波一つ立っていなかった湖面に大きな波紋を生み出し落下する。

幸い浅い部分に落ちて溺れるようなことは免れたが満身創痍といってもいいほどダメージを受けてしまった。

ゼリガンと至近距離で切り合っていたせいで熱を持っていた装甲部分からは蒸気が立ち上っている。処理し損ねていた熱を冷やす事が出来たとはいえ、湖底の泥が柔らかいせいで高機走駆動輪を使つての高機動戦闘も封じられてしまう。

（しまった、遮蔽物が無い！？何か敵の視界を遮るものは……そうか！？この手があった）

まさに絶体絶命の状況で手元に視線を落として視界に入るのは左腕部に装着された放射波動機構・甲冑腕型――

間違はなく今のライが使える魔法の中でも最強といってよい破壊力を生み出す異形の爪。

（これしかない）

『シャマルさん、シグナムさんはどうですか？』

『もう撤退したみたいよ、管理局の魔導師が大きな魔法……多分、広範囲型の攻性魔法の準備をしてるみたい。早く私達も逃げないとこのままじゃ袋の鼠よ』

精神通話を介して聞こえてくるシャマルの声は切羽詰まっている。隠蔽魔法で隠れているとはいえそろそろ見つかったもおかしくない以上、このあたりが引き際だとライは判断する。

（出来ればもう一人くらいからリンカーコアを奪っておきたいところだけど……欲を張って自滅するのは本望じゃない）

『分かりました。じゃあ事前の手筈通りにシャルさんは撤退の準備をしておいてください』

『ちよっと！そんなこと言ってもこの状況じゃ……』

『っと、すいません。ちよっと余裕が無いんで回線は切らせて貰いますね』

「これで終わりだああああ！！爆熱・電撃弾！！！」

〈ちょ！ゼリの旦那。俺様そろそろオーバーヒートだって、負荷がヤバいんだってメインサーキットが限界〉

「そんなものは熱血でどうとでもなるんだああああ」

〈いやあああああ！〉

視線を前方へ向けると炎の爆発を推進力に変えたかのように爆炎を纏い、湖面の数十センチ上を飛んで突進して来る一つの弾丸^{ゼリガン}、とデバイスの悲鳴。

突破力を活かした攻撃は、足元が柔らかい泥であるため踏ん張りが効かず、高機走駆動輪も使えない状態ではは簡単に避けることも出来ない。

カートリッジロード
〈弾丸装填〉

ガシャン！ガシャン！ガシャン！

そんな重低音を響かせ、左腕部に取り付けられたカートリッジシステムから葉莢が3発排莢される。

赤黒い光——破壊しかもたらさぬ輻射波動の光が異形の三本爪

から発せられる。

本来込める魔力を上回る負荷に、あくまでも本物の模造品に過ぎない左腕部からはミシミシッという歪な音が発せられ。処理しきれない熱は使用者の左腕を痛めつける。

そんな出力の破壊の光をライは目前に迫った？ゼリガンに対してではなく足元の湖面に向けて放った”

「何い！！」

互いの最強の技が正面からぶつかり合う様を想像していたゼリガンも一瞬それに気を取られる。

物質に向けて使えば岩や鉄の壁さえも用意に溶かすマイクロ波は水の分子を高速振動させ、瞬時に湖の水は沸騰して水蒸気に変化する。

大量の水の体積が千倍以上に膨れ上がる光景は、まさに白い爆発。水蒸気の密度があまりに濃いせいで、数十センチ先さえも見えなくなる。

ここでゼリガンはライの姿を探そうとしてしまったのがそもそもその間違いだった。

「下がガラ空きだよ」

「くっ！！」

水蒸気の中を爆炎を纏い突進するゼリガンは、本来ならライが居たはずの場所を通り過ぎる。

その際に真下から聞こえる声と同時に繰り出される一発の蹴り。

真正面からなら無視しても爆炎もろとも吹き飛ばせたはずの攻撃はゼリガンの脇腹に鋭角的に食い込む。

「がっ！」

さらに止め、とばかりに突進の勢いが削がれたゼリガンの顎に打ち込まれた掌底は騎士の脳を揺さぶり、意識を刈り取った。

＊

『へリルカの姉さん、ゼリガンの旦那がやられた。俺様からじゃあ敵の現在位置は分らん。壊されるのは御免だから援護を頼むぜ』

ゼリガンと捕獲対象の接敵寸前で発生した目くらましの水蒸気のせいで現在状況が掴めないでいたリルカに彼のゼリガンゼリガンのデバイスであるバイモンから通信が入る。

（剣の腕でそう開きがあるようじゃ無かったし、さては前も見えない中突撃したわね、あの単細胞。あとで営倉入りにでもしようかしら）

まあうすうす予想はしてたけどね、と嘆息しながらリルカは指示を飛ばす。

『ファイインズ三尉、オーラレイを放て。どうせ犯罪者共は逃げた後だろうけど、発動した魔法の中断処理がデバイスクロスベルに変な負担をかけても困るわ、データ収集用のチップの機動は忘れずに』

『……了解』

すぐに水蒸気は風に流され霧散したが、来たるべき追撃が無いのと。バイモンの連絡の直後に次元転移の反応があった以上逃げられたと考えるのが妥当だろう。

見事なまでに苦汁をなめさせられる側になったリルカはブラック
コーヒーを一気に飲み干したかのように顔をしかめる。

部下への指示を終えたリルカに彼女のデバイス《ダグラス》が無
感情な声で疑問を告げた。

〈コマンド〉
指揮官、自暴自棄ですか？

「違うわよ。あれだけ状況判断に優れた敵が、あんなにデカイ花
火に気付かないはず無いだろうし。部隊の半数を失っておいて収穫
が何も無しじゃあ色々顔向けできないだけ。」

あとで技術部のお偉いさんにはあの魔法の問題点をねちねちま
めたレポートでも提出して憂さ晴らししてやるわ」

〈花火を目で見て愛でるのも人の特権ですよ、今はそれで我慢し
ましょう〉

「あら、ただの堅物かと思っていたけど、案外お前もやるじゃな
いの」

〈お褒めに預かり光栄です〉

慰めともなんともつかぬ会話を主とデバイスの間で続けながらも、
部下の打ち上げた巨大な光球が夜空で弾ける花火のように撒き散ら
す無数の魔力弾を眺めていた。

何百という数の綺麗な薄紫色の光が地面に吸い込まれるように
消えて行く様はまさに絶景。エンターテイメントで使うように改良
を施せばきっと沢山の人の心に残るであろう魔法が戦闘の為に開発
されたというのは少々皮肉な話だとリルカは思う。

今のでエリイの魔力は底を尽いたのだろう、リルカの居る位置か
らでも長い黒髪を揺らして肩で息をしているのが見える。

一応、時空管理局の今後の魔法開発の礎になるのだから決して無
駄ではない。

「今度こそは叩き潰してあげるわ、犯罪者さん」

彼女をよく知るものでないと気付けないほど僅かに怒気を孕んだ
声を発するリルカは、そう遠くないうちにあの蒼い騎士が自分達の
目の前に現れて立ち塞がる気がしてならなかった。

———第五話 完了———

第五話 新たな邂逅（後書き）

『リリカルギアス☆』

作者「ああ、疲れた。なんかもう色々と限界値に達しそうです」

ライ「受験生が無茶するからだ、僕は擁護しないよ」

はやて「今回も私の出番少なかったしな、それ相応の報いは受けて貰うで？」

作者「ほんともう勘弁して下さい、精神的に限界なんで、ぎゃああああー！！」

はやて「うん、我ながら凄い破壊力の魔法やね」

ライ「作者が毎回どうやって復活するのか気になるところだけど……まあいいか

今回はとんでもない駄作になってしまったけど、読んでくれたみなさん——」

はやて&ライ「また見てギアス☆」

第六話 急変（前書き）

大変長らくお待たせしました。第六話です。

後半の方は割と急ピッチで仕上げたのでちょっと出来が悪いかもしれません。

こんな駄文でも読んで頂けたら嬉しいです。

感想やご指摘も待っています。

第六話 急変

時間は決して無限ではない。そう、幸せな時間だってそれは例外ではない。

アダムとイブが楽園^{エデン}を追い出された時からずっとそう……というのは無神論者の僕が語れる内容じゃないな。

幸せという名の果実は少しずつ内側から病魔に犯されて行って……みんながそれに気付いた時にはもう手のつけられない段階の直前まで進行している。

もう残された時間はほとんどない……時間も巻き戻りはしない……それが人一倍分かってしまうからこそ、焦燥感が胸を締め付けるんだ。

魔法少女リリカルなのはA', S 銀月の王と夜天の主始まります。

第六話 急変

——時空管理局次元航行船アースラ・会議室にて——

時空管理局にて先日まで整備を受けていたアースラの一室にて複数の人間が一つのテーブルに付いている。

無機質な印象を与える長方形のテーブルと、部屋全体に一切の調

度品が無い事や室内の広さも相まって、その一室には僅かに張り詰めた雰囲気漂っていた。

「フェイトさんと、リルカさんの部下の方々はリンカーコアに酷い傷を負っているけど命に別状は無いそうよ。

それと、ヒューイット二等空尉も軽い脳震盪だけだから直ぐに復帰出来るみたい」

長テーブルの端に座る緑色の長髪を後ろで束ねた女性——リンディ・ハラウン提督がつい先ほどの戦闘で負傷して医務室に運びこまれた魔導師達の容体を報告する。

それを聞いた者の反応は大まかに分けると二分される。

まず前者は栗色の髪をツインテールにした少女——今回の件には民間協力者として参加している高町なのはを始めとする安堵で胸をなで下ろす者。

「私の時と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね」

「アースラの稼働中で良かった、なのはの時以上に救援が早かったから」

先ほどの戦闘で負傷したフェイト・テストロッサにおいてはここ半年近くの期間をアースラ艦内で生活していたため、黒衣を纏った黒髪の少年——クロノ・ハラウン執務官やエイミィ・リミエッタ執務官補佐を始めとしたアースラクルーはこちらに分類される。

そして後者は、先端のみが緑色に染められたワインレッドのロン

グヘアーの女性——時空管理局の制服に身を包むリルカ・プリウス一等空尉である。

リルカ小隊の代表として会議に参加している彼女だけは終始、苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「クロノ君、あのお姉さん誰なの？」

「ああ、リルカの事か。まあ本局からの増援だと思ってくれればいい。一応僕の士官学校時代の先輩だ」

小声で話し合うのはとクロノを尻目にリルカはリンディに向けて頭を下げる。

「もうしわけありません。みすみすと捕獲対象を取り逃した上に三人もの武装魔導師を使い物にならなくしてしまいました。」

どんな処分でも言い渡して下さい。今回のミスは私の責任です」

なのはやフェイトのようにリンカーコアが成長過程にある子供ならリンカーコアにダメージを負っても一定期日で復帰出来る。しかし先の戦闘でリンカーコアを奪われたリルカ小隊の隊員はほとんどが二十代半ば——つまりリンカーコアが成長しきった成人だったのだ。

リンカーコアの成長過程を過ぎた人間の場合、下手をすれば魔導師人生に多大な支障が出る可能性も否めず、どう早く見積もっても大人達のリンカーコアが完全に回復するまで最低でも一カ月以上かかる。

それらを踏まえるとリルカの犯したミスというのは予想以上に大きい。

「いいんですよ、リルカさん。簡易報告を聞く限りでもあなたの隊が迅速に行動してくれたのがよく分かったわ。」

あなたみたいな指揮官がうちに来てくれたのは光栄だわ、ミスの分は現場の働きで取り返して頂戴」

「了解しました」

そこで部下を罰するのではなくより奮起を促すために優しく声をかけるあたり、リンディ提督が管理局内でもやり手の総督として名を轟かす所以なのかもしれない。

少なくとも、リルカの居心地の悪さはこれで解決された事になる。そして、ここにも居心地が悪そうに椅子の上で縮こまる人影が一人。

「悪いのはリルカ一尉じゃないですよ。私です。」

二人が出動してしばらくして、駐屯地の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって、それで指揮や連絡が取れなくて……ごめんね、あたしの責任だ」

リンディ、クロノ、アースラのNO1、NO2が不在の際に駐屯地の指揮を任されたいたはずのエイミーからすれば今回の件はリルカ同様に申し訳なさで胸が一杯なのだろう。

なまじ情報管理などが専門である以上、どこの誰とも知らぬ者に自分の土俵で敗北するというのはかなり辛いはずだ。

駐屯地のシステムが復旧するまで、士官学校の先輩に当たるリルカが現地に居た事にさえ気付けなかったのだ。心なしかエイミーのトレードマークである跳ねた髪の毛も元気をなくして垂れているように見える。

「ああもう、これ以上辛気臭いのは無し！尻尾が湿気そうだよ。」

エイミーが直ぐにシステムを復帰させたからアースラにも連絡が

取れたんだし、仮面の男の映像だってちゃんと残せた」

ここで場の雰囲気明るくしようと、軽い冗談も交えてエイミィに助け船を出すのはリーゼ・アリア。

頭から猫の耳を生やしているリーゼ・ロッテと、彼女によく似た容姿で、同じく猫耳を頭から生やしているリーゼ・アリア———現在この場に居ないギル・グレアム提督の使い魔姉妹である。

管理局本局で教官としての職にもついているリーゼ姉妹は、この場にいる魔導師の中でもリンディ提督に次いで現場での活動年数が多い。こういった際に若者のメンタルケアをするのはもはや慣れっこなのだろう。

アリアが手元のコンソールパネルに指を走らせると、長テーブルの中心の空間に二つの映像が投影される。

一つは先ほどアリアが口にした『仮面の男』を映し出した空間モニター。

もう一つはそのタイミングを見計らっていたのか、リルカが一目のモニターに続く形で出現させた空間モニターの映像。

これこそが今現在、この場における最重要議題の一つである。

「それにしても、おかしいわね駐屯地ちゆうとんちの機材は管理局で使っている者と同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる出る人間なんて居るものなのかしら？」

「そうなんですよ」

今度こそ情報担当としての責務をこなそうとエイミィが席を立つ。

「防壁も警告も、全部素通りでいきなりシステムをダウンさせるなんて……」

「ちょっと、あり得ないですよね」

「ユニットの組み替えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ」

絶対にあり得ない、そう言いたげな表情のエイミィにアースラクルーの一人であるランディが同意する

時空管理局で使われている機材、というのは部署ごとに多少の差異はあれども性能は基本的に次元世界における最先端の物を使っている。

そのレベルの機材に一般で入手出来る機材でクラッキングを試みる、というのはまさに人間の頭脳でコンピューターの計算能力を上回ろうとするのと同義であり、そんな事をやらかそうするのはよほどのバカだ。

「それだけすごい技術者が居るって事ですか？」

その場にいただれしもが思った事を代弁するかのように管理局の事情を詳しく知らないのはが口に出す。

確かに、技術力で上回る機材を用意できればクラッキングも可能だろう。

しかし、施設面でも人材面でも他部署よりはるかに優遇される傾向にある『海』に所属しているアースラチームに配備される機材さえも欺くというのはそれこそ数十年単位で先に行く技術力が必要になる。

どの案も現実的とは言えない———そう心中で思うに至ったりルカは他に出てきた可能性の幾つかも同様に現実的ではないと判断して、消極法で導き出された一つの可能性を提案する。

「組織だった犯行……場合によっては管理局内にその協力者が居る

「かもしれませんね」

「っ!？」

「リルカ、ちょっとその発言はマズイんじゃないかい？」

ある意味、可能性としては前に出てきた二つの案よりは現実味のあるその言葉に一瞬、場の空気が張り詰めた。

ある者は息を飲み、ある者はその意味するところを脳内で反芻し――

リーゼ・アリアは眉をしかめてその発言を取り消すように示唆する――いささか不自然とも取れかねな早さで――

「上級キャリア狙いのアナタがそれを公式の場で言っちゃうと昇進に響くかもよ」

「おっと、失言でした。今の発言はプライベートな発言として処理して下さい」

「リルカ一尉の発言はどうあれ、現時点では駐屯地のシステムダウンについては詳しい情報が無い以上、憶測の域を出ない。

それより例のアンノウンについてはどうなんだ？」

何か思うところがあるのか腕を組み、思案顔のクロノが話題を転換する。

「フェイトとなのはの接触した仮面の男と、リルカ小隊を奇襲したバイザーの男、両者に繋がりはあると思うか？」

「どう、なんだろうね。あたしがアイツ――シグナムのところへ駆けつけた時にはフェイトを抱きかかえて『言い訳は出来ないがすまない、と伝えてくれ』って」

「でもやっぱりシグナムさん達に協力してるんだし、仮面の人もバ

イザーの人も仲間じゃないんですか？」

「ああ、確かにそう考えるのが妥当なんだが、少し引かかる事があるんだ。リルカ一尉」

「言われなくとも分かってるわよ」

クロノが目配せすると、不機嫌な表情になりながらもリルカが手元のパネルを操作する。

仮面の男を映し出すモニターが小さくなり、それに反比例するように大きくなるもう一つのモニターと、それに付随する形で映し出される補足映像。

全体的に丸みを帯びたフォルムの騎士甲冑と、そのバランスを崩すかのように無骨なフォルムをした左腕の三本爪、右手に構えた刀。顔を覆うバイザーから僅かにはみ出した特徴的な銀色の頭髮――映像によって解像度に差があるところを見ると、リルカが会議が行われる直前まで、破壊されたデバイスの中に在ったデータの復元に務めていたことがよく分かる。

（情報官として職に就いた方が安定した生活を送れただろうに）
要点を纏めて分かりやすく用意された各種の映像を見てそんな考えがクロノの脳裏に一瞬浮かんだわけだが、それを口にすればリルカの機嫌を損ねるであろうことは過去の付き合いで十分に承知していたため口に出さない。

士官学校時代、今クロノが思ったことと同じような内容でリルカの事をからかった先輩が三日間ほど行方不明になったりしたことをクロノは鮮明に覚えている。

「我が隊がこのバイザーを装着した騎士と接触、戦闘の結果、隊の半数を失った事は既にここにいる皆さんならご存知でしょう。

これは推定なのですが、仮面の男とバイザーの男、一見繋がりが

あるこの両者には大きな相違点が幾つかあるのです」

「一つ目は使用する魔法のタイプや熟練度、かしらね？」

既にその時点でリルカの言わんとすることに気付いたリンディが口をはさむ。

それに対して、ええ、と相槌を打ちながらリルカは言葉を続ける。

「仮面の男は高町民間協力者を遠距離から拘束出来るほどの遠隔バインド操作能力や、その後にたった十分ほどのスパンでテストタロツサ囑託魔導師が交戦している区域に出現、奇襲をしかけていることから見てもかなり熟練のミッド式魔導師だと考えられます。」

淡々と分かりやすい、秘書を思わせる事務的な報告をしていたリルカの顔にここで僅かに影が宿る。

しかし、それも一瞬で消え去り、ピアノを弾くように細い指がコンソールを叩く。

すると、空間に浮かんでいたモニターの映像はバイザーの騎士と黒い鉢巻を巻いた茶髪の青年——リルカ小隊所属の騎士、ゼリガン・ヒューイットの交戦映像に移り変わる。

「バイザーの騎士に関しては、映像で分かる通り近接において最も実力を発揮するベルカ式の騎士そのものの戦い方をしています。

そして、その場の状況に合わせ、自らの能力を活かすための策を展開する能力に至っては：悔しながら、かなりのレベルだと思われます」

しかし、と一度ここで口を閉じ、別の映像に切り替える。

その映像では刀を構えたバイザーの男が空を飛行していた魔導師に斬りかかる瞬間が映し出されていた。

「良くも悪くも陸戦に特化し過ぎているのです、ちなみにこれは我が隊が最初に奇襲を受けた際の映像なのですが、襲撃まで我が隊の探査に一切の魔力反応は検知されていませんでした。

そこに突然の広域探査妨害で隊の陣形が乱れた一瞬を狙って襲われました。

ここで、仮面の男に対する高町民間協力者やアルフさんの証言と僅かな相違点があるのです」

「え？なんかおかしいのかい？不意打ちでなのはやフェイトを襲ったのとよく似てるじゃん」

「わたしもよく分かりません」

「要するにだな――」

いまいちりルカの言いたい事に納得を示していないアルフやなのはの疑問に答えるようにクロノが説明を受け継ぐ。

執務官という職務柄、こういった情報から自分なりの推論を語る事に慣れているのか、言葉はすらすらと紡がれる。

「アルフやなのはの証言だと仮面の男の出現そのものに関しては闇の書の騎士達も予測していない様子だったろ？」

「うん」

「それに、元々ベルカ式の魔法というのは近接戦に特化している分、ジャミングの様な細かい作業は苦手といってもいいんだ。

だけど、このバイザーの男はミッド式の探査魔法の目を誤魔化して奇襲の瞬間まで潜伏していた――」

そして、今までの現場状況や交戦情報から判断すると闇の書の騎士には一人サポート魔法に特化しているであろう騎士が一人いるんだ」

説明に合わせて、緑色のドレスの様な騎士甲冑を纏った闇の書の守護騎士の姿が映し出される。

クロノがここまで説明するとなのはとアルフも何かに気付いたような表情になる。

「あっ！ということはこのバイザーの人は一人じゃなくて、闇の書の騎士さんと協力していたって事なんじゃないかな」

「確かに、あたしだって、戦いながら一度に攻撃魔歩とサポート魔法を使うのは大変だし、どっちか一方に専念した方が戦いやすいよ」
「つまりそういうことになるだろうな。だからといってあのバイザーの男が探査妨害系魔法が使えないと決まったわけじゃあないが――」

ふとここで、ごほん、と軽く咳払いが聞こえてクロノはそちらへ視線を向ける。

案の定、咳払いの主はリルカ・プリウス一等空尉。クロノを睨みつける瞳からは『私の説明の場を奪わないで頂けませんか？執務官殿』とでも言いたげな雰囲気如実に漂ってくる。

「すまなかったな、後はリルカ一尉に説明を任せる」

「ええ、そしてバイザーの騎士が守護騎士と結託している可能性を示すもう一つの証拠として――」

クロノが引き下がると、すぐに事務的な口調での説明を始めるリルカ。

今度は隊のリンカーコア蒐集被害者と、今までの被害者の共通点――つまり、リンカーコア摘出方法の違いなどのデータを引き合いに出して説明を始める。

（はあ、なんでこう、僕の周りの女性は厄介なのが多いんだろう）
この先にリルカが話すであろう内容は大方想像が付いているため、

クロノは胸中で軽い愚痴を吐く。

リルカに目の敵にされてる事はクロノも気付いているし、リルカ本人も『これはただの僻みの様なものですからお気になさらずに』とクロノの目の前で宣言している。

別に、決して憎み合ったり嫌いあったりしているわけではない。あくまで仕事上での話だ——プライベートではある程度の本音を話し合えるくらいには仲が良い（と少なくともクロノは思っている）。

プライベートと仕事を使い分ける事に関しては年頃の女性だからなのか、リルカの方がクロノに対して何枚も上手なので、仕事上での関係が垣根を超える事は無い。

———僕が執務官だからなんだろうな———

クロノの目から見ても、リルカは少々昇進願望が強く見える。

恐らくそんなリルカにとって、自分より年下のクロノが自分より昇進の機会に恵まれた執務官の立場に居るのは少々思うところがあるのだろう。

リルカは執務官試験に何度も落ちている。そしてクロノは執務官試験に受かった。ただそれだけの事——それが自分の力の足りなさである事も全部理解しているからこそリルカは堂々と“ただの僻みです”と発言したのだろう。

（ライバル心だとか、他にも綺麗な言い方はいくらでもあるだろうに）

むしろ余計な言葉で着飾ろうとしないあたりが潔いとも言えるわけだが……

彼女が何を望んで、過去に何があったのかについては詮索しようとは思わない。

（というか、女性の考える事は僕には分からない、いや分かりたくないな）

どうにも自分の周りの女性は一癖も二癖もある人間の方が多かったりするのがクロノの最近の悩みになりつつある。

少なくとも、ある日突然、『私があなたに近づこうと思ったのはリンディ提督へのコネを作るためだったのよ、勿論今もそれは変わらないけど』などと抜け抜けと発言するような女性の考えなど出来れば知らずに過ごしたい――そうクロノは思うのであった。

「アースラは当分は通常航行を継続。現時点において仮面の男とバィザーの男に直接的な繋がりは薄いものとして対応します。

各員は所定の位置に着くように」

ふとクロノが思考の海から現実視界を切り替えるともう大方の方針は決まった後のようで他のアーススタッフは各々の持ち場を担当するために席を立ち始めたところだった。

こういったときに分割思考マルチタスクというのは中々役に立つもので、考え事をしながらも会議の内容を聞いていても上の空になって会話を聞き逃す事はない。

「あら、上の空だったようですけど随分と偉い御身分なのですねクロノ？執務官”殿」

訂正、気付く人間は気付くらしい。

声のする方向にクロノが嘆息しながら顔を向けると案の定、リルカの姿。

わざわざ執務官という役職だけ強調して皮肉るあたり念が入っている。

「はあ…君の説明を取った事は謝るから止めてくれ。ただでさえ懸

案事項が山積みなのに余計な敵は作りたくない」

「それについては私も同感だわ。ただの冗談よ冗・談。仕事に支障が出るレベルでの嫌がらせはしない主義なの」

「出来れば私生活プライベートでも止めてくれ。君の場合ブラックユーモアとそうでない場合の区別が付け辛い」

「この程度の事で弱音を吐いてたらそのうちハニートラップか何かに引っかかるわよ、クロノ——」

ここまでは私生活で顔を合わせる度に交わす軽い冗談の表の顔——

——そしてここからは仕事と私生活オフィシャルプライベートの両方が混ざった裏の顔——限りなく黒に近いグレーとでも表現すればいいのだろうか。

リルカは公私の顔を使い分け、時にはそのどちらをも織り交ぜて使う事に長けている。

恐らく士官学校時代からリルカの築き上げてきた情報網は既に他人を強請るだけで暫く食べていけるレベルに達しているだろう。

そしてリルカが裏の顔を見せるときは大抵、良い話は聞けないのもクロノは経験則として知っている、悲しい事に。

「私の言った、局内に裏切り者が居るっての……あなたは どう思う？」

「それを僕に聞くか？ 普通……僕も管理局が一枚岩の組織だなんて思っていないけど、それでも闇の書は関わった人間の人生を狂わせるだけだ。そんな代物に手を出す理由が思いつかない」

「あら、その言い方だとまるで心当たりがあるみたいじゃない」

情報屋の顔になったリルカはめざとく言質を嗅ぎつける——
そんなことは分かり切っているながらもクロノは無然とした表情になる。

「まだ何か証拠や根拠がある状態じゃない。君は余計な事に首を突

っ込まない方が良い。

……何にしろ11年前の悲劇は繰り返させないさ、絶対に」

「ふうん、それは次元世界の法と秩序を守る管理局員として？ それとも闇の書に家族を奪われた一人の人間として？」

「っ!？」

いつの間にかクロノの瞳を覗き込む姿勢になっていたリルカは少々不躰とも取れる質問を投げかける。

少なくとも、ロストログアが原因で家族を失った人間の姿を見た事のある局員としてはするべき質問では無い。

それでも金色の瞳は黒い瞳から一寸たりとも逸らされない。

「……はあ、ハラOWN家の事情を話した記憶は無いんだが…君なら知っていて当然だろうな。

それに人はそう簡単に割り切れる生き物じゃない、僕はそのどちらの一面も持っている。

これで満足か？」

数秒間の沈黙が部屋に静寂を訪れさせる。

一秒、二秒……五秒に達するかというときに、リルカは数歩後ろに下がって慇懃に頭を下げた。

「さすがにあなたを見くびり過ぎたかもしれないわね、ごめんなさい」

「人の過去を勝手に調べて掘り返した事に関しての謝罪は無いんだな」

「あら、メソメソしている所を慰めてほしいの？ 私はそんなに優しくないわよ」

「止めてくれ、君に慰められるなんてそれはそれで薄気味悪い。エイミィあたりにからかわれるのがオチだしこっちから願い下げだ」

あなたってからかい甲斐があるものね、と半ば本気な顔で呟いたりルカだったがもう何も聞く事は無いとでも言いたげに背を向けて自動ドアに向けて歩きだす。

二人しかない部屋の中では靴音も響く。

後ろ手にひらひらと掌を振っているのも既に完全に私生活モードプライベートなのだろう——今は勤務時間だが。

「ま、何にしろ色々と参考になったわ。じゃあね」

自動ドアの開閉と共に、先端のみが緑色に染まったワインレッドのロングヘアーは視界から消えさる。

相変わらず内心の読めない人間だな、と一人として聞く者の居なくなった部屋でクロノは苦笑する。

どこの世界でも女性の心は神秘の象徴として扱われるものだ。

やり手の母親や、学生時代からの付き合いである補佐官の顔を思い浮かべるとあながち否定できないのが少々悔しい——

＊

太陽が東の地平線に顔をのぞかせてまだ間もない時刻。

ヴォルケンリッターのメンバーとライは八神家のリビングに集合していた。

はやてが起きて来るまでの僅かな時間しか確保できなかったのは、事後の混乱やはやてに感付かれる可能性を考慮した結果だ。

先日 of 蒐集行為では新しく仲間に加わったライの活躍や、強敵である魔導師の一人からリンカーコアの蒐集に成功などによって、闇の書のページは一気に数十ページほど埋まった。

しかし一同の間に勝利の凱旋と呼べるような明るいムードなど漂ってはいない。

その原因は――――

「助けて貰ったってことで、いいのよね……」

「少なくとも奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「問題は、”何故”僕達に手を貸すか……ですよね。何かメリットがあるのでしょうか？その仮面の男は」

シグナムとヴィータ、それぞれが宿敵から逃れる際に割入ってきた謎の男。

二人の証言からしてほぼ同一人物と思われるその魔導師は目的も、素性も、所属も、何もかもが謎。まるで心当たりが無いシグナム達は首を傾げるしかない。

「完成した闇の書の力を利用しようとしているのかもしれない。あれはそれだけの価値があるものだ」

「そんなのありえねー、だって完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん」

蒼い狼の姿をしたザフィーラの呟きにヴィータが反駁する。

（確かに、どんなに力が強くても自分の思い通りに使えなければ何の価値もない）

口元に手を当てて考えるライの表情も自然と暗いものになる。

明確な目的が分からない以上、それは幽霊とさして変わらない。

幽霊とただ違うのは、魔導を操り、おそらくかなりの戦闘能力を有しているということ――――

「完成した時点で主は絶対的な力を得る、脅迫や洗脳に効果があるはずも無いしな」

「もしかしたら、管理局に恨みを持つ者が僕達に肩入れしているのかもしれないね。話を聞く限りだとかかなりの規模の組織でしょうから、敵も多いんでしようし」

「どちらにしても家の周りには嚴重なセキュリティを張り巡らしてるから、万が一にでもはやてちゃんに危害が及ぶ事は無いと思うけど……」

それに、さっき調べてみて分かったんだけど。近くの次元世界に管理局の魔導艦船：しかもアルカンシエルを装備したのが見つかったの」

「なん……だど？」

それを話すシャマルの声も震え、シグナムやヴィータ、ザフィーラも少なからず驚いた表情を見せている。

唯一人、アルカンシエルという単語に馴染みの無いライが、数日間の間にレクチャーされた魔法の知識の中からその単語を引っ張り出す。

「確か、艦船に装備される主砲の一種でしたっけ？」

「ああそうだ。しかしあれは使ってしまったえば半径100キロなど余裕で吹き飛ばす代物だぞ。」

いくら我々の尻尾が掴めないからといってそんな大物を持ち出してくるとは……」

「な…100キロ！？そんな滅茶苦茶な！」

あまりにもスケールの大きい威力にライは絶句しかける。

余談ではあるが原子爆弾の様なもの、と言えばこの世界の地球の人間は大方のスケールは理解出来る。

しかしライの居た地球では原子力方面の技術は未だに未発達で、原子爆弾なんてものは開発されていないのだ。

「だが、あのクラスの破壊力にもなればそう簡単に奴らも撃てない筈だ。

仲間を巻き込む状況や無関係な人間を巻き込む可能性のある状況、大気圏内での使用は滅多に無い。

やはり目下のところ問題なのは仮面の男の動向だと思う」

「まあ、管理世界の法と秩序を守る正義の管理局。という建前がある以上そんな大量破壊兵器みたいなものはそうそう使わないでしょうけど……」

未だに納得が出来ないという表情を浮かべながらも、問題としての優先順位は確かに仮面の男の方が高いと言える。

少なくとも今だけは……

目的と正体が分からない上に情報も殆どない以上、どうやっても受け身にならざるを得ない。

その事実にはライは歯噛みをする。

掌の上で踊らされているかのような感覚は決して気分の良いものではない。なまじ絶好のタイミングで助けが入った事も助長してその感覚が強くなる。

（なんとかして仮面の男と接触出来ればいいんだ……けど……っ!?!?）

突然、正体不明の存在に対する懐疑とは別の————胸の奥で何かが疼くような不快感がライを襲う。

（何だ、今のは?、ギアスの暴走……いや違う、もっと別の）

鎖が心臓を強く締め上げるような――
冷たい手が心臓を鷲掴みにするような――
大切な物が少しずつ壊れていくような――
とにかく、本能的に不安を感じる悪寒――――

ガタン！！！！

そんな悪寒と何の因果関係があるのか、天井のあたりから響く、
何かが倒れて床にぶつかるような音。

誰もが気付く、その音のした方向はまさにはやての部屋だと――
――はやての身に何かが起こったのだと――――
その音が、偽りとはいえ平和で幸せな日常の終わりを知らせる鐘
になった。

一同がドアを蹴破るように開けてはやての寝室に入ってすぐに目
に入ったのは、倒れた車椅子と胸を押さえて苦しげに呻く小さな少
女――――

どう見ても尋常ではない苦しみ方と脂汗――――どれだけの激痛が
小さな体を襲っているのかは想像もつかない。

「はやて！！はやて！！病院、救急車！！」

「落ち着けヴィータ。揺らしちゃ駄目だ」

「動かすな、そうっとしておけ」

早朝の八神家に暗雲がたちこめる。

＊

アースラに出向となったりリルカ小隊。

隊長のリルカはドリンクの入ったボトルを両手に掴み、せかせかとアースラの通路を歩いていた。

目指しているのは、待機時などに魔導師が己の腕を磨く部屋——
——要するに訓練室。

だからといってリルカが訓練室を使用するつもりはない、リルカ小隊所属のデバイスはアースラに着艦した際にメンテナンスを目的として技術官に預けている。

ならば、何故訓練室など目指しているのか——

（ったく、あの馬鹿が。絶対安静という単語を知らないのかしら？）

探し人であり己の部下のゼリガン・ヒューイット二等空尉。

先の戦闘で蒼い甲冑に身を包み、バイザーを装着して素性が分からない謎の騎士——その騎士との戦闘で敗北し、リンカーコアこそ奪われなかったものの、成人でもしくは動けなくなるほどの脳震盪を起こしていたのだ。

そして見舞いに行こうとした矢先にアースラ所属の医務官からゼリガンの姿がベッドから消えた、という報告を聞いた結果として訓練室を目指しているのだ。

アースラ艦内に居るのは間違いないとして、そうすると必然的にゼリガンの向かいそうな場所など限られてくる。

（大方、己の負けを恥じて時代錯誤な訓練に力を入れてるんでしょうね）

さすがに、腰にロープを縛り付けてタイヤを引っ張るだの、滝に打たれるだの、ウサギ飛びで階段を往復だのは艦の設備や備品的に無理があるわけだが、放っておけば一昼夜ぶっ続けて訓練に励む姿は想像に難くない。

（できれば、割り当てられた自室で静かに待機しているエリィ三尉を見習ってほしいものだわ……いや、あの馬鹿から行動力を取ったら何も残らないか……）

割と辛辣な感想を胸中で述べながら歩いていたら、目的地に着く。防音性の高い自動ドアがリルカに反応して開いた先には、ほぼリルカの予想通りの結果が広がっていた。

「だあっ！」 「はあっ！」 「とおっ！」

ONE for all ALL for one （一人はみんなの為に、みんなは一人の為に）

というどこぞのドラマ内で使われていそうなロゴの入ったスポーツシャツの隙間から良く鍛え上げられた肉体が垣間見える茶髪の青年が訓練用のアームドデバイスを振り回す光景。

武に関してはそれなりの技術と才能を持っているゼリガンの武器の構えというのはその道の者からすれば目を瞠るものがあるのだが、生憎とそういった白兵技能は訓練校時代に最低限習うレベルの格闘術しか心得の無いリルカからしたら興味を抱けるようなものではない。

額に黒い帯を巻いているのは気持ちの切り替えの為だろうか？

どのみちこのまま放っておけば訪問者^{リルカ}の存在に気付くことなく訓練を続けていそうな勢いである。

「三百年以上前から続くベルカ騎士の家系だったかしら？ お前の家系は病室を抜け出して体を酷使する趣味でもあるの？」

広い訓練室に響くような掛け声をあげている部下の耳に入れるため、必然的にリルカの呼び声も大きくなる。

そして上官の声を聞きつけて訓練を中断するゼリガン。タオルで汗を拭きながらリルカに近付いてくる姿は、まさにスポーツ選手さながらのさわやかさ。

「ええ、我が家の家訓は『倒れるまで全力を尽くせ！』ですから。姉や親父からは小さい頃からそれを叩きこまれました」

「ああ、皮肉にさえないからね、お前の場合」

それに対して、リルカは残業が山ほどあるサラリーマンさんながらに疲労が浮かぶ顔で嘆息する。

一体どんな家庭だよ！ そうツツコミたくもあつたが、本能的に厄介事に巻き込まれる事を悟って口には出さない。

（無駄な事に労力を避けるほど私はタフじゃないもの）

「それでも飲んで栄養を補充していなさい」

苛立ちをぶつける代わりに、両手に持っていたドリンクボトルの一本をゼリガン目がけて投擲する。

とはいっても相手は戦闘職種男子、頭脳戦メインで非力な女性が投げたボトルなど余裕でキャッチする。

「先輩がこんなにも自分を心配してくれていたなんて、感激です！」
何を勘違いしたのか、リルカが自分の為に飲み物を持って来てく

れたという事実だけを拡大解釈して男泣きでもしそうな勢いで頭を下げる。

（今時、飲み物一本で喜色満面な笑みを浮かべられるって……どれだけ酷い環境で育ったのよ？）

そしてリルカはリルカで微妙な勘違いをしながらも話は進む。

「はあ？何故私がお前の体の心配などしなければならぬのか理解できないわ？」

どうせマグマの中に突き落としたってお前は死なないでしょう」

「いやいや、いくらなんでも人間的にそれはない……いや、心頭滅却すればマグマもまた涼し！」

「試すのは勝手だけど、この任務が終わってからにしないさ」

いい加減、部下の高いテンションに合わせるのも諦めたとばかりに、ボトルに口を付けて中に入っているブラックコーヒーを一気に飲み干す。

ごくろり、ごくろりと喉の鳴る飲み方は女性としてあまり褒められる飲み方ではなく、コーヒーの正しい飲み方にも見えない。

そもそもリルカは、甘党である。（とはいっても緑茶に砂糖を入れようとは思わないが）

「先輩、まだ任務に失敗したわけでもないのに、そんなに弱気にならないで下さい」

「そんな事はお前に言われなくても分かっているのよ」

甘党であり、むしろ苦い物を苦手とするリルカが砂糖の入っていないコーヒーを飲むのは、何か仕事で失敗したり落ち込んでいるとき――

士官学校時代からずっとそんなリルカの背中を追ってきたからこそ、そんな些細な上官の癖をゼリガンは知っている。

『これは、ミスをした自分への戒めよ』——任務が終了した後
に苦い顔をして罰を飲み干す彼女の顔は今でも鮮明に思いだせる。

「任務を完遂できなかったらこれの十倍は飲み干してるわよ。私が
今飲んでいるのは“自分の部下がデバイスに滅茶苦茶な負荷をかけて
データ収集用のチップをショートさせるくらいの事を想定できて
いなかった”事に対する戒めよ」

「そうか、ならよかつ、いでででで!!」

なにふるんですはへんはい!?(何するんですか先輩!?)」

ずっと苦い顔をしながら淡々と語っていたリルカだったが、ゼリ
ガンの返答を聞いて一気に手元のボトルを握りつぶす。

額に青筋を浮かべながら不出来な部下の頬を全力で抓りながらも、
表情をほとんど変える事は無く。その瞳には見る者の背筋を凍らせる
ような威圧感が宿っている。

「ほほう…そんな、実験小隊の存在意義を忘れているかの様な戯言
を吐くのはこの口ですか？」

一応：AIは無傷で機能自体に…何の故障も見れなかったから…
弁解の機会を与えるつもりではいましたが…

これは…本格的に…調教をし直す必要が…ありそうね」

「ひふはへんはい? (リルカ先輩?)」

ほのへに…ひぎっへひふふひはんへほうは? (その手に握って
いるムチは何でしょうか?)」

「そんなことはこれからよく分かんと思うわ。」

……安心なさい、任務に支障が出るほど傷付けたりはしない
から♪」

体力面などにおいては全てリルカに勝っているゼリガンは、逃げ
ようと思えば逃げられただろう——現になんとか振り切って逃げ

ようにしたわけだが、訓練室から外部に繋がっている自動ドアは全てロックされていた。もちろん、目の前でムチを振り回す鬼の手によって。

「せ、先輩。何かおかし——」

ヒュン！

ゼリガンの頬を掠める形でムチが振られる。直接当てるより相手に最も心理ダメージを与える方法をわざわざ選ぶあたり、中途半端な形で怜悯な性格が生き残っている事を第六感でゼリガンは確信する。

（一体なんで？ どうして？）

「ただでさえ厄介事が多いのに、いつもいつも余計な問題ばかり持ってきて：あれですか？ お前は私に何か個人的な恨みでもあるというのですか？」

訓練室に響く一つの悲鳴は。その後、たまたま訓練室の前を通りかかったクロノが止めるまで続いたという——

＊ 海鳴大学病院の一室にて

白いベッドに白いカーテン、清潔感の漂う部屋——というのも、病室なら当たり前の事ではあるが——

ベッドが一つしか並んでいないのでそこが一人用の個室である事を容易に把握できる。

「ああ、大丈夫みたいね、よかったわ」

「はい、ありがとうございます」

そしてここが病院である以上、当然のように医者が居る。

僅かに薬品独特の匂いが染みついた白衣を纏った女性——石田医師——

石田は、つい数十分ほど前にこの病院に運び込まれたはやてを前に、温和な表情を浮かべて簡易診察結果の報告をする。

これははやて本人に聞かせるというよりは、顔面を蒼白にしてはやてを運び込んできたはやての同居人達に向けての言葉なわけだが。

「はあ、ほっとしました」

「何かあっては大変ですから」

「はやてが無事でよかった」

当然ながらに全員が安堵と心配の入り混じった表情で胸をなで下ろす。

「良かった、本当に良かった……」

そして、ここにもはやての身を心配していた人間が一人。

さらさらと揺れる銀髪と、深い海を思わせる蒼い瞳が特徴の少年——ライ。

普段のポーカーフェイスなど家の玄関にでも忘れてきましたとも言わんばかりに他の3人同様（ザフィーラは家で留守番をしている）、いやもしかしたらそれ以上に心配そうな表情を浮かべたライはベッド脇に膝をついて小さなはやての手を握る。

——まるで、目の前のはやてが夢でも幻でもないと確認するかのように、小さな温もりにすがりつくかのように——

「あ、ええと。ライくん？わたしは大丈夫やから心配せんでもええよ？

胸と手がつっただけなんやからそんなに大事にせんといてや」

この程度の事で大騒ぎされた事に対する恥ずかしさと、それだけ心配されていた事の嬉しさの入り混じった、照れ隠しのような笑みを浮かべてはやてはライの肩に手を置く。

「あ、ああ。すまない、みつともないところを見せてしまったな」

少し気まずそうに頬をかくライ。

石田はその光景に頬を緩めながらもさりげなく、といった体^{てい}で話題を切り出す。

「あ、そうそう。シグナムさん、シャマルさん……と一応ライさんもちよつと」

石田医師は三人を手招きして病室をあとにする。

ライの名前を呼ぶときに間が空いてしまったのは、今日が初対面だからだろう。

一応はやてがライの事を親戚だと説明していたのと、先ほどのはやてに対する心配具合から信用に値する人物だ、とは評価したらしいが。

予防注射でも受けたのか、声を大にして泣きながら母に手をひかれていく少女。

健康診断を受けて食生活を改善するようにきつく叱られて落ち込み気味の中年男性。

手のかかる我がままな患者の対応に頭を悩ませる若い男性医師。病院の廊下には割と色々な事情を抱えた人間が居るものである。

「今回の検査では何の反応も出てはいませんが、つつただけ、というのはいないと思います」

病室の前でライ、シグナム、シャルルに向け、

先ほどの温和な表情から打って変わった冷静に状況を報告する医者顔に切り替えた石田は淡々と告げる。

個人的な感情が医者としての判断に影響を与える事があるからこそだろう、余計な私情で事を樂觀視しないためにも。

だからこそシグナム達は、はやての足の麻痺が現代医学で直せないと知りつつも彼女の事を一目おいているのだ。

「はい、かなりの痛がりようでしたから」

「麻痺が、広がり始めているのかもしれませんが、今までこういう兆候は無かったんですよね？」

「無い、と思うんですけど。はやてちゃん、痛いのか辛いのか隠しちゃいますから」

「僕もそういうのを：見かけた記憶はありません」

そう、シャルルとライが見かけるうちでははやては今まで苦しがる素振りなんてまったく見せていない。

とはいっても、それが何の問題もない、というわけにはならない。

シャルルが述べたとおり、はやては他人に迷惑をかけることを極力避ける――本来なら大人に甘えて過ごすような年齢であるにも、

関わらずだ——しかも、感情の機微に敏感で聡いはやてなら年不相応にそういった兆候を隠す事も不可能ではない。

その事を長年はやての診察をしている石田も知っていたのだろう、わずかに黙考する。

「今後も、このような事がまた起きないとも限りません用心のためにも、少し入院してもらった方がいいですね。

大丈夫でしょうか？」

もしもはやての身に何かあったとき、病院なら直ぐに対応してくれる。そう考えれば三人に選択肢は無いと言ってもいいだろう。

闇の書の呪いを医学でどうにか出来れば……そう願わずにはいられないのが守護騎士とライに共通する正直な心情だ。

「はい、お願いします」

「にゅういん？」

「とはいっても念のためだよ、何かが起こってからじゃあ遅いからね」

ライにその事実を告げられて、先ほどの会話に参加していなかったはやてとヴィータは不安そうな表情で顔を見合わせる。

病室に飾るための花を花瓶にいれて運んできたシグナムも、心配をさせないように表情を作る事に務める。元々この手の嘘は苦手なシグナムはシャルとライに一任したらしい。

「検査とかもする必要があるみたいですから退屈でしょうけど、何

の心配も要りませんよ」

それでもなお心配なのか。はやては引き下がらない。

「せやけど、わたしが入院しとる間は誰がごはん作るんや？ 家事は？ 炊事は？」

「「う」」

ヴィータはそもそも料理が出来ず、シグナムもそういった事が得意とはいえない、シャルは……やる気だけなら人一倍ある、やる気だけは。

だが、最後の切り札とばかりにシグナムがライを指さして――

「ランペルージが居るではありませんか。彼なら家事炊事、雨洩れからリフォームまで、なんでもこなせるはずですよ」

「え？ さすがにリフォームまでは自信ないんですけど……」

だけど、シグナムさんの言った通り、家の事まで心配しなくてもいいんだよ？

退院出来たらこの前約束した折り紙の折り方も教えてあげるから、今はゆっくり休むといい」

主婦気質のはやてから不安を取り除こうとライも務めて明るい笑顔を見せる。

とっさに出てきたシグナムの要求は滅茶苦茶だったが、一応脳内にそういった知識が入っている。

「最初から私はアテにされてないの？ うう…ヒドイわ」

しくしくと泣き出すシャルの姿をたら余計な心配をするのが馬鹿らしくなったのか、はやては遂に首を縦に振る。

「ほんなら、まあ。短い休暇をわたしは満喫させてもらうわ。心配させたらアカンから後ですずちゃんに連絡入れといてな？」

「分かった、任せてくれ」

「着替えと本も後で持ってきますので、何かご要望があったら言って下さい」

「はやて、毎日会いに来るから」

「何で私が料理しようとするのとみんな邪魔するのよ?……」

「お前はまだそれを引きずるか?」

面会時間終了ギリギリまでいつも通りの八神家の雰囲気では病室は賑やかだった。

そして見舞いを終え、病院の玄関ホールまで来たときにライはふと、足りない物に気付く。

「すいません、ちょっと病室に忘れ物をしたので取りに行ってきます」

「む、そうか。ここで待っていいようか？」

「いえ、先に帰っててください。後で追いつきますので」

はやてに買ってもらったコートとマフラーがあるのはいいものの、自分の手袋が無いのだ——さすがにこの時期に手袋無しというのは少々辛いものがある。

シグナム、シャマル、ヴィータを一足先に帰らせて、ライは元来た道を再び踵をかえして歩いていく。

(ええと、はやての病室番号は……あ、ここだ)

ドアにも患者の名前を書いた――おそらく石田医師が書いたのだろう、女性らしいまるっこい文体で八神はやて、と書いたネームプレートが付けられている。

そしてドアに手をかけたとき、小さな異変にライは気付いてしまう。

「うう……くう……っ！」

大声を上げないように、極力声を抑えた呻き声。

体中を走る激痛に耐えるようなその声は、戦場で怪我をした兵士のそれにも似ていた。

ドア越しのくぐもった声でもそれがはやての声だと確信する。

（このドアの向こうではやてが……）

恐らく、誰にも心配をかけさせないようにと、その小さな体で必死に痛みをこらえているのだろう。その姿は用意に想像できる。

闇の書の呪縛が最近になって力を増してきたということだろう。

（はやてが一人で苦しんでる……なのに、なのに僕はっ！？）

はやての痛みを止める術は分からない。だが今このドアを開けてはやてに駆け寄って、痛みが引くまで手を握り続けることぐらいは出来るのだ。

しかし、ドアに伸ばしていた手をライはそれ以上進めようとはしない……いや出来ない。

（今は出来ない、今僕がこのドアを開けたらはやての決意を無駄にしてしまう。）

……いや、それはただの言い訳に過ぎない。

僕はこのドアを開けるのが怖い……そう怖いんだ)

この一線を越えて

大切な人が苦しむ姿を見るのが——

額に脂汗を滲ませ、激痛のあまりベッドのシーツを力いっぱい引っ張り、体をくの字に折り曲げた少女の姿を目にするのが——

かつてこの手で命を奪ったも同然の、愛しい家族の最後の姿が脳に焼き付けるようにフラッシュバックする——

もう二度と瞼が開かない——

自分が好きだった笑顔を見せる事も永遠に無い——
血をこびり付かせて、動かなくなった、冷たい亡骸を見るのが——

——
そんな姿になった家族の姿が脳裏を過ぎるのが——

——どうしようもなく怖い、恐ろしい——

“アレ”をもう一度見たときに冷静でいる自信はどこにもない。
むしろ狂ってしまうかもしれない。

大切な人を守る——そんな事をぬかしても、結局は全てを失うのがどうしようもなく怖い。

こんな時に何も出来ない自分が憎たらしい。

命を差し出して解決するのなら喜んで差し出すし、利用できるものは何だって利用する。

気が付けば、近くを通りかかっていた子供が泣きながら逃げて行くところだった。

(なるほど、あの子が逃げても仕方ないな)

かつてミレイ会長に言われた事だが、何か真剣に考え事をするときの自分はどうにも顔が怖いらしい。

そして、無意識のうちに思いつき握りしめていた手からは血が流れている。

日が暮れた薄暗闇の中、そんな状態で突っ立っていれば幽霊やお化けの類にでも見えたのだろう。

———どのみち決心は着いた———

結局、病室に置き忘れた手袋を回収する事は無く、病院を後にする。

そして適当に歩いていて行き着いたのは、小さな公園。

道の脇に生えている、葉が全て落ちた樹木はどこか寒々しい印象を与える。

氷の様に冷たい風が肌を切るこんな場所に、日も暮れた時間帯までとどまり続ける酔狂な人間はいない。

そんな道を、どこまでも感情を押し殺して：幽鬼の類と見間違われても文句は言えないような雰囲気を纏った足取りでライは進んでいく。

脇道に逸れて、樹木の密集する地帯にたどり着き、歩みを止める。

数秒間の沈黙が周囲を支配する。

耳を凝らしても聞こえるのはカラスの鳴き声と、風が落ち葉を巻き上げる小さな音だけ。

生命のサイクルが一時的に止まってしまった時期なのだから、虫の鳴き声など聞こえるはずもない。

そして、ライは肺いっぱいに冷たい空気を吸い込んで。

「出てこい！」

叫ぶ、周囲にそれを聞く者などいない筈なのに……
一度目の叫びは空しく虚空に響いて消える。

「その辺にこそそと隠れて僕の姿を見ているんだろう？　話があらんだ！」

周囲からの反応は一切感じられない。

そして三度声を上げる。先ほどよりはるかに音量を抑えて――

「昨日の戦闘はどう考えてもおかしいんだ。

まるで正義のヒーローの真似ごとみたいなタイミングで出て来て。最初からずっと見張っていたんじゃないのか？」

またもや反応は無い。真冬の空気を静寂が包む。

それでも諦めることなく、ライが四度目の声を上げようと息を吸った瞬間。

『お前は…何者だ？』

感情を感じられない……いや、僅かに動揺の混じった男の声。いや、念話が聞こえて来る。

（予想通り。姿を見せないのは罠だと警戒しているからか）

だが、無反応では無い。反応があるという事はこちら側の話を聞く意思が少なからずあるということ。

『さあな、八神家の居候に過ぎないよ。それより話……いや、提案

がある。聞いてくれないか？」

『素性の分からない者に助けを請うしかないとは、哀れだな。』

それに素直に味方してくれるとでも思っているか？」

『否定はしないさ。それだけ切羽詰まっているのは確かなんだから。無理にそちらの素性や目的を探ろうとは思わない。多分そちらとも利害が一致しているだろう……これは取引だ』

……

再び長い沈黙が場を支配する。

そしてその沈黙が二分に達しようとしたとき、再び声が聞こえて来た。

『まず、話だけは聞いてやろう』

『ああ、まずは――――――』

――数十分後・八神家リビングにて――

「全く、ランペルージの奴め。夕食前に全員集まれとはどういうことだ？」

「さあ？　なんかアイスでもかってきたんじゃないか？」

「この時期にアイスをわざわざ買ってくるとは思えぬのだが」

「何か大切な話でもあるのかしらね？」

つい先ほど、ライから一方的な精神通話がヴォルケンリッターに届いた。

『リビングで待っていてください』

ただそれだけの簡潔な内容だとはいえ、何かそこに強い意志の様なものを感じたため、全員がこうして集まっているわけである。

家主の居ないリビングはいつもより広く感じる。

いつも笑顔で話題を提供してくれるはやてが居ないと、どうしても沈黙が生まれてしまう――

そんな事を守護騎士の誰もが考え始めた頃、リビングの戸を開けて入ってくるライ。

そして彼が第一声で言い放ったのは――

一度選べばもう戻れない選択肢、非常にレートの大きい賭け。

単純で。だからこそ誰も選ぼうとしなかったジョーカー

「管理局の魔導艦船、アースラを襲撃しましょう」

第六話 急変（後書き）

『また見てギアス☆』

リルカ「皆さんこんにちは。もしくはこんばんわ。

才色兼備にしてリルカ小隊隊長のリルカ・プリウスです
今回のあとがきの司会進行役はこの私と」

ゼリガン「好きなドラマはスクールウォーズ。

熱血は世界を超えて、ゼリガンヒューイットだ！」

エリイ「……エリイ・ファインズ。

……ケバブにはヨーグルトソースとチリソース」

作者「むごー！むごむごおー！！」

リルカ「エリイ、あなたはその謎設定を何時まで引っ張るつもりなの？

というか、駄作者。猿ぐつわをしたまま何か言おうとしても分からないわよ」

ゼリガン「無理やり後ろから襲って猿ぐつわして、本来のあとがき登場キャラから出番奪ったのは先輩でしょう？」

リルカ「あら、一話登場で消えかねない募集キャラである私達が生き残るためにはこれくらいして顔を売っておいた方が良いと思わない？

それに、駄作者襲撃の実行犯はおまえでしょう」

ゼリガン「そんなんっ！？先輩がどうしてもって言うから自分は実行を引き受けたのに！？」

リルカ「大丈夫、駄作者に人権は無いから法的に問題ないわ」

エリイ「……私は空気扱い？」

リルカ「ああ、ファインズ三尉は元ネタキャラが居るにもかかわら

ず、駄作者が元キャラを一切知らないせいで設定を練る過程において改変を受けてそんな謎キャラが出来上がったんだったかしらね」
ゼリガン「いやゝ、大変ですね」

エリィ「……その点、他作品に出演しているゼリガンは恵まれてる」
リルカ「ふむ、そう考えると突然部下に殺意が湧き上がってきたわ

私達より安定した地位を得てるなんて妬ましい」

ゼリガン「あれ？いつの間にか自分は孤立？」

リルカ「さあ、オチ要員はオチ要員らしくさっさと殺られなさい」

ゼリガン「ちょっと待って下さい先輩、『やる』の字がおかし、ぎやあああああ！」

エリィ「……また見てギアス（ボソツ）」

リル&ゼリ「オチ持って行かれた!？」

第七話 前編 アースラ 侵入（前書き）

相変わらずの駄文です。

後半は誤字脱字の量が凄いと思います。

よろしければ誤字脱字の報告か感想を頂けると作者は喜びます。

第七話 前編 アースラ 侵入

僕が選んだ道は決して他人からすれば褒められるものではない

僕の命だけの問題じゃない、僕一人の力では成し得ない計画にシグナムさん達を巻き込んで……

ただ、笑いながら僕を信じてくれる人達に僕は全てを語っていない。

その重い目が重石のように降りかかる、せめて信頼には結果で答えなければ。

もう一度、あの優しく温かい色を取り戻すためにも……魔法少女リリカルなのはA・S 銀月の王と夜天の主始まります。

第7話 前編 アースラ 侵入

97管理外世界に近い無人世界の一角で、断続的に閃光と爆音が響き渡る。

閃光とともに空中を幾多の魔法弾が飛び、爆音と共に荒野に砂塵が舞う。

分かる者には分かる、そこは”戦場”なのだ。

「紫電一閃!!」

「ぐうつ!!」

愛用の魔剣^{レヴァンティン}が焰を噴き出し、相対する魔導師を斬り伏せる。

しかし、これだけで終わるわけではない。カートリッジを再び装填しながら辺りを見回すと、視認できる魔導師の数はざっと20余人。

「他愛もない!!この私とともに渡り合える者も満足に居ないのか管理局には?この程度では私に膝をつかせる事さえも叶わんぞ!!」

テストロツサが出て来ない事に一抹の寂しさの様なものを覚えながらも、私は声を張り上げる。

この程度の逆境に屈するのは烈火の将としての矜持に反する。

そして何より、一人でも多く管理局の魔導師を惹きつける事こそが今回の戦闘の目的だ。

同じように別世界で戦っているはずのヴィータとザフィーラも同様に、”わざと管理局に発見されるように”リンカーコアの蒐集を行っている予定だ、今頃は管理局の武装魔導師に囲まれているだろう。

アースラから可能な限り魔導師達を離れさせ、そして戦力が手薄になったアースラに対して今頃はランペルジが襲撃を仕掛ける手筈。私達が役目をちゃんと果たしさえすれば、ランペルジに降りかかる危険は遥かに減る。

どうにも奴は自分の命を軽視する傾向にあるらしい。

ランペルジから今回のアースラ襲撃の旨を聞いたときの事を思い出し、私は苦笑する。

今回の襲撃に至っても、自分自身が最も危険であるにも関わらず、出撃前の瞬間まで私達の身の心配ばかりしていた。そんなランペル―ジの心中は計り知れない。

だが、これを無事に終えて帰って来た暁には一発、鉄拳制裁をお見舞いしてやろう。

誰か一人でも欠けてしまえば私達の悲願は絶対に成就しない。主はやてのたった一つの願いを壊す事だけは絶対に許さん。

ただ、今は共に戦う仲間かぞくのために。

それがこの場に居ない守護騎士一同、共通の想い。

「一度は捨てた騎士の誇り、再びそのために私は剣を振ろう」

闇の書を完成させて全てが終われば、再びあの幸せな時間が帰ってくるのだ。

数多の転生を繰り返し、何百、何千という時を生きてきた中で最も優しく温かい時間。

私達ヴォルケンリッターに心を与えてくれた我らの主。

それらを守るためなら、どんな強敵にも逆境にも打ち勝てる。

「さあ、かかってこい！！」

ヴォルケンリッターが将、シグナムはここに居るぞ！！！！」

＊

「魔導艦船……アースラを襲撃だと？」

「ああ、そうだ。正確にはその艦船のエネルギー源の奪取、もしくは破壊だけだね。」

本格的に管理局が守護騎士捕縛の為に戦力を割り振るなら、あの艦船は存在そのものが厄介なんだ。

万が一“アルカンシェル”とかいう戦略兵器を使われたら僕達に勝ち目はない。だけど動力炉を潰せばそんなもの撃てないだろ？」

木立の陰から現れた仮面の男はさすがにそんな滅茶苦茶な事をライが言い出すとは予測していなかったのか、ほんの僅かにその声色には驚きが入り混じっている。

素性も、年齢も、名前も、正体も全てを仮面の下に覆い隠していても感情まではそう簡単に隠しきれぬわけではないらしい。

いや、むしろ仮面の男は目の前の少年に形容しがたい威圧感やオーラにも似たものを感じ取っていた。

内に何を秘めているのか全く予測できない、ここ数日の観察ではただの穏和な少年であったというのに。先日の戦闘では管理局の魔導師四人を、誰一人として殺すことなく地に沈め。今はこうして自分取引を持ちかけている。

———もしかしたら仮面の下に隠した己の正体さえも暴かれてしまうのではないか？———

現実的に考えてそれはあり得ない。

魔導の技能そのものには長けているとは言えない少年に、プロである自分の正体が暴かれるはずなどない。

（そんな簡単に尻尾を掴まれるはずがない）

だが、この少年は自分達の手の届く場所に置いておかなければ危険だ。

そんな思いが仮面の男を取引のテーブルに引きずりおろす。

「自分が一騎当千の活躍をして、敵地の奥深くから狙いの物を奪

「い取る事が出来ると本気で思っているのか」

少しでもライの内側を探るべき、仮面の男は探りの手を入れる。それに対してライはくっくっ、と軽い笑みを浮かべる。

「はは、まさか。十人や二十人のプロの魔導師を真正面から相手にして無事に帰れるなんて微塵も思っていないよ。」

だから、そちらの力を貸してほしいんだ」

ライの主な提案はたった三つ

- ・アースラに対する襲撃のタイミングに合わせてアースラのメインシステムをダウンさせる事。

- ・アースラの艦内マップの入手。

- ・囷となった守護騎士の撤退に力を貸してほしいということ。

たった三つ、とはいってもそのどれもが本来ならばかなりの難易度を伴うもの。軽々しくそんな強情な提案をするライに対して仮面の男は内心舌打ちをする。

（涼しい顔をしておいてなんて無茶な要求をするんだ、こいつは）

「アースラのシステムにクラッキングをかけても成功する保証など無いぞ」

「管理局の駐屯地もしくはそれに類する拠点がこの辺りの次元世界にあるのは確実。それに先日の管理局の動きから予測しても君たちがその駐屯地のリーダーか何かに干渉したと考えれば辻褄が合うんだ。」

「だったらそれくらい出来るだろう？」

「確かに、出来ない事わけでは無い。だが、こちら側の背負うリスクが大きすぎる」

「だろうな。だけど、万が一僕が捕まってもそちらに殆どリスク

は無い。

それに。少なくとも闇の書の完成を望んでいるのなら、この作戦は成功すれば大きなメリットを得られる筈だ」

デメリットの提示の後にメリットを提示する。

間違いなく、ライはこういった交渉事になれている。そのことがさらに仮面の男の中で不安の念を強くする。

それに、仮面の男と対峙するにあたって、ライは二人称を使わず『そちら』という曖昧な数的表現を使っている。

暗に、『お前が一人でこんな大それたことをしているとは思っていない』と示すその態度は目の前の少年がやり手であるという事実をさらに補強しているように思えて仮面の男の内心を揺さぶる。

まだ、リスクとメリットを天秤にかけても割に合わない。

しかし、これを機に目の前の少年の力を測り、手綱を握れなければ闇の書に対して自分達が行っている計画が大きく狂わされる可能性がある。

11年も待ったのだ、今を逃せば次は何時になるか分からない。少なくとも、この取引は自分の方が有利なのだ、と仮面の男は自身に言い聞かせる。

「ならば、こちらからも条件を出そう」

端的に、感情を内に押しとどめながらも仮面の男は懷から一本の注射器の様なものを取り出す。複合素材で出来た、見た目以上の硬度を誇る円柱形のソレは先端に鈍く光る針が付いている。

ソレを見てライは少なからず眉間にしわを寄せる。

「一体何の薬だ？僕は生憎、持病なんて持ち合わせてはいないぞ」
「いいや、これは“薬”などではない。“ナノマシン”だ」

ナノマシン——数十億分の一メートル、つまり分子サイズレベルの大きさの超微小ロボット。

使い方によってはDNA構造や分子にまで干渉することが可能であり。バイオサイバネティクス方面での活躍が期待されている技術。今ライの目の前にある注射器の大きさなら中には数十億個単位のナノマシンが入っているだろう。

（これもバトレーに埋め込まれた知識か）

知らない筈の知識が脳の中に埋め込まれている事に一抹の不快感と嫌悪感を覚えながらもライは平静な表情を装う。

「それを僕の体の中にも注入する気か」

「ご名答だな」

掌の中でナノマシンを封入した“器”を弄びながら仮面の男は答える。

「多少手は加えてあるが元々はとある次元世界で、バイオウエポン生体兵器や医療方面など様々な分野に応用されていた科学技術らしい。

これを打ち込めば、お前がどこに居て何をしようが全て俺に筒抜けになる」

「わざわざそんな物を用意しているくらいだ。

どうせ、機能はそれだけじゃあ無いんだろう？」

「勘が鋭いな。その通りだ。

俺の指示一つで体内のナノマシンはどうとでも動く。

例えば、“お前を心臓麻痺に見せかけて殺す”ことや“痛覚のみを刺激して想像を絶する激痛を与える”ことだって出来る」

「つまり、僕の命は文字通りそちらの掌の上になる。というわけか」

「お前が万が一このやり取りや俺に関する情報。闇の書の主につ

いて漏らすような事が無いかぎりには殺しはしない……」

ここで仮面の男が出すのもまた滅茶苦茶な要求だと言える。生殺与奪権を持たれるということはライに自由など無くなるということである。

そして、この提案に乗れば仮面の男からすれば一つのイレギュラー要素が消えるということに他ならない――

「まだ契約は成立していない。引き返すなら今のうちだぞ」

冷徹な声を仮面の奥から響かせる男は、手の内に会った容器をライの目の前の地面に放り投げる。

要するに“選ぶのはお前だ”ということなのだろう。

乾燥した落ち葉の上思ったより重量感を感じさせる音を立てて落下したナノマシンの容器は、まさに悪魔との契約書と言ってもいいだろう。

己の人生がいつ狂わされるか分からないという恐怖は想像以上にキツイものがある。

『食事をしながら談笑しているときに突然心臓が止められるかもしれない』、『眠りに着こうとしたら脳が内側から挟られるような激痛が襲うかもしれない』、『自分の話した事や聞いたことが全て他人に知られるかもしれない』

そうやって被害妄想をしていけば、どこまでも際限が無い。

それこそ、その恐怖に打ち勝つには戦で死ぬ覚悟とは別の覚悟を必要とするのだ。

（この程度の事で怯むような覚悟では放っておいてもいずれ自壊する。

私達の計画の支障とはなり得ない）

この条件を呑めば、目の前の少年は自分達の完全な監視下に置く事ができ――

かといって、己の命欲しさに断るなら、そこまでの人間だった事の証明となる――

どちらに転んでも、仮面の男に有利に転ぶようにこの条件は出来ているのだ。

（さあ、どうする）

目の前の少年は先ほどから俯いたまま顔を上げない。心なしか肩も震えているようにみえる。

長い前髪が瞳を隠しているせいで見えないが、ライの瞳には迷いと恐怖と恐れの入り混じった影が差している……ハズだった

「……つくつく……ふははははは！」

いいだろう、その条件を呑もうじゃないか！

はははははは！！」

恐怖のあまり肩を震わせていたのではなく、ただ笑いだすのを堪えていたから。

本来そこにあるハズの影など一片もなく、あるのはまるでまた買った宝くじにでも当たったかのような愉快感のみ。

そして、ライは地面に落ちていたナノマシンの容器を手に取り――

“何の躊躇いや躊躇も見せず自分の首に押し当ててスイッチを押した。”

パシュッ！という小さな空気の破裂するような音が、日の傾き始めた林の中で響く。

今ので、何百億何千億という数の殺人機ナノマシンが体中に注入された事になる。

「っ！……………」

今度こそ、仮面の男は絶句せざるを得なかった。

たとえ、要求を呑むにしても少なからずの躊躇いがあったてもおかしくない、いやあるはずなのだ。

もう誰かの為だとかいうレベルを大きく逸脱している。もはや、自ら死を望む者の持つ狂気のそれに近いと言ってもよい。

これが演技だというのなら空恐ろしいものだし、演技でないというのならそれはそれで大きな不安因子となりえる。

「さあ、約束通りアースラの襲撃に協力して貰おうか？」

「あ、ああ。約束は守ろう、まずはアースラの艦内マップをお前のデバイスに送信する……………」

このとき、仮面の男は内側から湧き上がる不安を押し殺すので精一杯だった。——大丈夫、手綱は付けた——そう何度も自分に言い聞かせても、湧き上がる不安を。

そして、この場で交わされた密約の通り。

翌日にアースラ襲撃が行われる事になったのだ

■ 12月13日 午前11時55分 ■

（僕が自分の命を駆け引きに使った事を知ったら、きっとみんな怒るだろうな）

その程度の事も一昔前の自分なら気付く事は無かっただろうが、
今ならなんとなく分かる。

シグナムは烈火のごとく怒るだろうし、ヴィータも機嫌を損ねる
とどうなるか分からない。

温厚そうに見えるシャマルやザフィーラだって例外ではないだろ
うし、はやてが知れば最悪泣かしてしまうかもしれない。

先日の取引の詳細について、ライは誰にも他言していなかった。

それが仮面の男の出した条件だというのもあるが、協力者の名前
を出す事でヴォルケンリッターに反対される可能性も考慮したから
だ。

なんとか上手い言い訳を考えて、誤魔化そうとしたものの。守護
騎士達は何も聞かずに二つ返事で了解してくれた。

それが信用の証なのだと考えると嬉しさのあまり胸が熱くなる――
しかし、それだけ期待されているのだから結果を出さなければ
ならないというプレッシャーも付きまとう。

「もう一度聞くけど、本当に後悔しない？」

「今更それを聞いても遅いですよ。シグナムさん達はもう囚とし
て活動しているんですから」

不安そうなシャマルの声色に、騎士甲冑を展開したライは整然と
答える。

はやての入院から一日。

八神家のリビングにはライとシャルの二人しかない。

今のライに何を言っても無駄、そう感じ取ったシャルは手元に持った闇の書を掲げて本来の役割に専念する。

「そうね、じゃあこれ以上はもう言わないわ。

これから闇の書の備蓄魔力を使って、ライ君を管理局の艦船内に転移させるわ、ここまでは分かってる？」

「ええ、外部からの転移魔法に対して管理局は対抗策を持っているはずだから、闇の書を使うんでしよう」

「その通り。だけど、注意してね。

艦船内に転移させても、時空座標の固定が難しいから、脱出の際にはライ君がどこに居ても転移させられるわけじゃないの。

だから最初転移した場所までライ君は自力で戻って来てくれないと私はあなたを転移させられないわ」

要するに、入口と出口が同じ迷路の様なものだ。

入口から侵入して、目的の場所で宝を手に入れ入口に戻る。

唯一迷路と違う点があるとすれば、その迷路には敵となる魔導師が配置されていて、あまり時間をかけ過ぎると入口も塞がれ、四方八方を囲まれて四面楚歌な状態に陥ってしまう迷路。

少々心配症な湖の騎士にライは安心して下さい、と微笑みかける。

「ええ、了解しました。それでも速度には自信があるんです、任せてください」

「そう？出来れば誰かが付いていければ良かったんだけど……」

心配症もここまで来ると立派なものだ、とライは思う。

今度は微笑みが嘆息に変わる。

「闇の書の騎士であるシグナムさんやヴィータが万が一捕まろうものなら、闇の書との魔法的繋がりから闇の書の位置とマスターが逆探知されるから今までその作戦を選ばなかったんでしょう？」

「そ、それはそうなんだけど……」

「結果はすべてに優先する、僕は必ず帰ってきますよ」

そこで、二人を急かすように月下が明滅する。

〈お二人とも、12時まで残り2分30秒です〉

「あら、ごめんなさいね月下ちゃん。」

ライ君が無茶しそうになったら止めてね？」

〈承知しました〉

「って、僕より月下の方が信用あるんですか!？」

12時まで残り2分。

* 同時刻・アースラブリッジ

「まったく、こんな時に限ってダグラスがメンテ中とは運が無いわ」

闇の書の騎士達の対応に追われるオペレーター達の声が近代的な設備やモニターが配置されているブリッジに響き渡る。

そんな中、先端のみが緑色に染まったワインレッドのロングヘアの女性——リルカ・プリウスはその切れ長な金色の瞳に僅かな苛立ちの色を見せながらも、戦闘の光景が映し出されるモニターを

凝視している。

「確か、ゼリガン二尉とファインズ三尉が先行してるんですね、大丈夫ですか？先輩」

凄いい勢いでコンソールパネルに指を走らせているエイミーは今、現地で戦闘を行っているリルカの部下二人の名を話題に出す。

目を合わせることなく会話するのはマナーがなっていないと思うかもしれないが、今の状況を鑑みればそうも言っではいけない。

「まあ、熱血バカの手綱をファインズ三尉が握れるとは思わないけど、三尉のサポートは的確かつ確実よ。そう簡単にやられはしないわ」

部下の能力は正確に把握しているリルカはさほど慌てることなくエイミーの質問に答える。

「人の心配をするなら自分の心配をしろエイミー。」

昨日の夜からずっと徹夜で艦のメインシステムにファイアーウォールを構築してたんだろう？いい加減倒れるぞ」

二人の会話に入ってくる声が一つ。

おなじみの黒いバリアジャケットを展開した黒髪の少年——クロノ・ハラOWN執務官だ。

学生時代からの友人にして補佐官を気遣うクロノに対してエイミーは気丈に答える。

「まっかせなさい！リーゼ達やリルカ先輩の力を借りたからかなり早く作業が終わったのだよクロノ君。

それに、現場ではなのはちゃん達が頑張っているのに私が休ん

でられますか」

「そうか、だけど根の詰め過ぎは良くない。後でちゃんと眠れよ」

（しかし、フェイトが戦えないこのタイミングでこれだけ大規模な蒐集活動……何か引つかかるな

強敵の居ぬ間に、というのとはちよつと違うみたいだし）

違和感——そう表現するにふさわしい何かを闇の書の騎士達の行動から感じる。

だが、その正体を突き止めるためにクロノが思索に耽る間もなく、アースラのブリッジにオペレーターの悲鳴のような声上がる。時刻は地球の現地時間にしてちょうど12時。

「何者かがメインシステムに侵入——！！」

ファイアウォール、第一から第三百二十まで突破されました！
！艦のメインシステムダウン」

「そんなんっ！あれだけ強力なプログラムなんだよ、それがこうも易々と」

エイミィ達が徹夜で作り上げたプログラムも今なのでほぼ突破、モニターに映し出されていた映像のことごとくがフリーズ。
現地で戦っている魔導師との通信も途絶。

「落ち着きなさい——！！」

アレックス、ランディは運航機能の回復に努めて、エイミィ執務官補はメインシステムの復帰を。

艦内に残っている魔導師には私が念話を繋ぎます」

「りよ、了解しました」

しかし、てんやわんやの大騒ぎになる寸前のところでリンディ提督の飛ばす指令でなんとか持ち直す事に成功する。

たった一声で若いオペレーター達をまとめ上げるのはさすが、と言ったところだろうか。

だが、依然として危機的状況にアースラが置かれている事に変わらない。

レーダーを始めとした各種モニターの死んだアースラは「目」を潰されたと言っても過言ではない状況なのだ。

そんな状況でクロノは執務官としての頭脳をフル回転させる。

（しかし、何故このタイミングでアースラを狙う？……今までの守護騎士達とは明らかに違う動き、仮面の男が関わっていると考えるのが妥当だけど……まさか！？）

幾つもの不審な点と点、違和感を繋げていくうちに一つの輪郭が浮かび上がる。

最悪の場合、もっとも回避すべき結果の一つが――――

「艦長！アースラ艦内に侵入者の可能性あり。

これより艦内搜索活動に移ります！」

「分かったわ。クロノ執務官、くれぐれも気を付けて」

母親と子、という関係にあれど、任務中はお互いに階級を付けて呼ぶ。

しかし、今のクロノからしたらそんなやりとりさえも時間が惜しい。

（守護騎士という目立つ囃を使って外へ目を向けさせ、艦の一時

的なシステムダウンの隙を狙って侵入したとなれば全て納得がいく)

クロノの脳裏に浮かんだのは、次元航行船エスティア——父クライド・ハラオウンの乗る船が次元の海に散る姿。

むろん、当時のクロノはまだ年端のいかない幼子だったのでその記憶は無い。

しかし、自分が執務官になる折に母に内緒でギル・グレアム提督に頼んでその映像を見せて貰ったのだ。

本来あるべき形の船が歪な形に歪んで煙を上げ——アルカンシエルの光の中に消えさるその姿。

原因は違えど、アースラも現在、沈められる危険があるのだ。

(絶対にアースラは墜とさせない、僕が)

「あらあら、行っちゃったわね」

「ですね、あんなに必死なクロノ君の姿はそうそう見られない……いや、本当は見ない方が良いんだけど」

ブリッジの自動開閉ドアを開けて走り去る執務官の姿を眺めながら飄々とリルカは呟く。

(さて、私は私でちょっと調べ物をしようかしら)

だけど、その前に——目の前で必死にコンソールパネルを操作してシステムを復帰させようとしている可愛い後輩にリルカは声をかける。

「エイミィ、私が作っておいたプログラム。確か、ファイル73に入れておいたはずだから起動しておいて。そうすれば少しはシステムの復帰が早まるはずよ」

「はい分かりました!………本当だ、システム復帰の目処が立つ

た。……でも、あれ？

って！？リルカ先輩、何時の間にそんな物を用意してたんですか？」

まるで、肉料理の隠し味でワインを入れるのを教えるのと大差ないともいうように指示を出したリルカに大してエイミイは驚きを隠せない。

あくまでリルカは戦闘職種の人間なのだ、いくら情報方面に強くてもプロであるエイミイでさえ苦戦している状況に解決の糸口を示すのは簡単な事ではない。

「単純なファイアウォールプログラム構築なら私はあなたの足元にも及ばないわよ。」

ただ単に、私は『システムへの侵入者を撃退するための罠』ではなく『システムが落とされることを前提とした保険』用のプログラムを幾つも用意しておいただけよ。それに、ここから巻き返せるかどうかはあなたの腕にかかっているのよ、エイミイ？」

「はいなっ！私の底力見せてやりますよ」

「そう、それじゃ精々頑張るなさい、私はメンテ中のダグラスを取りに行ってくるから」

＊アースラ艦内通路

〈次の十字路を右です〉

「分かった」

近代的な材質で出来た通路の中をライは月下の高機走駆動輪を駆

ランドスベナー

使して疾走していた。

こうした閉鎖的な空間では下手な飛行魔法より、旋回性能に優れた高機走駆動輪のほうがよほど重宝する。

いくらシグナム達が囹を引き受けたとはいっても、最低限の戦力は艦内に残しているはずだ。

そして、運の良い事にアースラ艦内に侵入してから未だに魔導師とは接触していない。

素人目にも近代的、いや地球の平均的な技術レベルを上回る技術が使われているはずの通路はかなり薄暗い。

いくらなんでも省エネ、というはずもなく、

未だにライが侵入した事に気付かれていない事を鑑みると、仮面の男達が取引通りにセキュリティシステムをダウンさせてくれたのだろう。

（このまま上手く行けば、アースラの最深部——動力炉——まで直行出来るかもしれない）

しかし、そんなライの淡い期待は一瞬で崩されることになった。

「ブレイズカノン!!」

轟っ!!

薄暗い通路の空間を光で染め上げるような青い光条がライ目に向けて前方から直進して来る。

ライが先日戦った魔導師たちの放つ魔力弾とは弾速が比べ物にならないくらい速い一撃。

「月下!」

カイトリッジロード
〈弾丸装填〉

ガシャン！ 左腕部の輻射波動機構からメカニカルな音と共に葉が排出される。

これは避けきれない、そう判断したライは盾の様に左腕を突き出す。

否、その左腕は彼にとっての最強の矛であると同時に盾なのだ。輻射波動機構――甲冑腕型。本来は攻撃に使うための兵装だが、輻射波動を障壁の様に展開する事で盾にも成りえるのだ。

異形の三本爪から吹きだした赤黒い輻射波動と、前方から飛来した青い直射砲が正面からぶつかり、相殺し合い、周囲に魔力の残滓を撒き散らす。

（くっ！遂に見つかったか）

防御には成功したが、それを止めた左腕部には痺れにも似た痛みが走る。

相殺しきれなかった衝撃の余波だろう。

そして、ライ目がけて直射砲を撃った本人が廊下の薄暗がりから姿を現す。

周囲の闇に溶け込む黒いバリアジャケットと黒い髪、黒い瞳の少年。

「こちら時空管理局所属、クロノ・ハラOWN執務官だ。

管理局員襲撃の容疑及び艦船への侵入の実行犯で君の身柄を拘束する！」

デバイスを握るその魔導師は、門を守るガーディアンのように騎士の前に立ち塞がった。

——第七話 前編 終了——

第七話 前編 アースラ 侵入（後書き）

「また見てギアス☆」

リルカ「さて、みなさんこんにちは。

このコーナーの進行は前回に引き続き、ちゃっかり居すわったこの私、リルカ・プリウス一等空尉と」

クロノ「クロノ・ハラオウン執務官だ。

って、君はこんな所で何をやってるんだ？」

リルカ「読者に顔売ってるに決まってるじゃない？

原作キャラには分からない悩みでしょうけど、こうやって存在を知らしめておかないと募集のオリキャラなんてすぐに存在を忘れられるのよ」

クロノ「それは、まあ。大変なんだな」

リルカ「ええと、次回予告は……次話ではクロノVSライの激闘？

ふむふむ、つまり、両者が互いに体力をすり減らしてボロボロになったときに私が乱入して手柄を一人占めすればいいのね」
クロノ「待て待て待て！！キミなら本当にやりかねないから洒落にならない」

リルカ「さて、そろそろ執務官殿がうるさくなって来たのでお開きにしましょう。ではみなさん

また見てギアス☆」

第七話後編 アースラ侵入 激闘！ライVSクロノ（前書き）

や、やっと投降出来た。

前回の投降からかなり間が開いてしまいました、お待ちしてくれていた方々（まあ、居ないでしょうが）ごめんなさい。

待たせた割に低クオリティなのは相変わらずですが、感想やご指摘、誤字脱字の報告があると嬉しいです。

そろそろなのはやフエイトをちゃんと描写したいなあ。

第七話後編 アースラ侵入 激闘！ライVSクロノ

7話 後編 アースラ侵入 激闘！ライVSクロノ

壁一面は様々なコンピュータを始めとした大小無数の機械類に覆われ、冷却ファンの音が低く唸っている。

床には血管のように縦横無尽にケーブル類が這っており、さらに機械類に付いた総数は数百を下らないであろうLEDが時折点滅する光景はその部屋に入り込んだ者にまるで生物の体内に迷い込んだのでは？と錯覚させるほどである。

ここは次元航行船アースラのメインコンピュータルーム。動力炉を心臓と例えるならばこの部屋はアースラの頭脳部分だと言えるだろう。

アースラに搭載されている殆どの機器やコンピュータの中心であるこの部屋は平常時ならば余程の事でも無いかぎり人の立ち入りは禁止されている……が、今は約一名、室内に人影が見える。

先端の身が緑色に染まったワインレッドのロングヘア、切れ長な金色の双眸が特徴的な女性――リルカ・プリウス一等空尉だ。
「良いのですか？ 指揮官殿が現在行っている行為は管理局法に抵触する危険性がありますが」

「ん？ まあいざとなれば『緊急事態の士気網混乱を回避するため
の現場指揮官の柔軟な対応』だとか、『敵にメインコンピュータ
ームを落とされる可能性を考慮して守備に回っていました』とか報
告書に書き込んでおけばわりと何とかなるものなのよ」

主の行いに対して言外に『こんな所でこんな事をしていて良いのか？』と説諭したデバイスの言葉をリルカは一蹴する。

AIを所持した銃型インテリジェントデバイスのダグラスは今現在、レンズシステム魔力変換補助装置のパーツを取り外し（メンテ途中のところを

リルカがそのまま拝借して来たのだ）、その代わりにグリップ部分から何十本という数のケーブル類を伸ばしている。

その姿はもはや銃と言うよりも、地面から生えてきた前衛的なオブリジェに見えなくもない。

しかし問題はそんな事ではない。

そう、彼女は現在？アースラのメインコンピュータにハッキングをしかけている”最中なのだから。

「さてと、準備はこれで終了。とりあえずはここ数週間のシステム利用履歴を洗い出して改竄の痕跡や不自然な点を洗い出すところから始めるかしらね。エイミィ達がシステムを完全復帰させる前に終わらせないと」

〈………了解しました〉

ダグラスから延びている何十本ものケーブルは、周囲のコンピュータに接続されている。これは、メインシステムがダウンした隙に『本来の権限を超えた情報を閲覧する』為の処置。

これらの作業は次元世界でも名門科学者の家系である『プリウス家』に生まれたリルカにとっては朝飯前なのである。

とはいえ、リルカの隠し玉はこれ一つではない。

ダグラスの銃口からワインレッドの帯状魔法陣が伸びる——通常の攻撃魔法などとは比べ物にならないほど精密で緻密な、職人の作る織物のように繊細で強い一条の光。

それがリルカのこめかみ部分に接触し、入り込む——

《演算共有率15パーセント、現状でこれ以上は不可能です》

「ふん、そんな事は言われなくても”私が一番”よく分かっているわよ。さっさとデータを寄越しなさい」

念話とは別の、脳の内側から響く愛機の声に僅かながらリルカは不愉快な表情になる。

次世代運用魔導師部隊計画——そのために開発されたシステムの一つである《演算共有システム》。そのプロトタイプによる思考共有。

魔導師達が互いに脳の演算能力を補助し合う事で、より高い能力を得るために記憶転写技術の応用で作られたこのシステムは未だに実戦で利用できる段階に達してはいない。

まずは、強い自我を持った人間同士の思考共有は精神崩壊を引き起こす恐れがあるなどの倫理問題。そのシステムを利用する魔導師に高い演算能力が求められるという点。単純な技術的問題など、様々な欠陥を備えているからこそ、このシステムは魔法運用能力を磨きあげる事でAAランクにまで上ったリルカに配備されたのだから。

数多の情報の羅列——0と1の集合体——コンピュータに繋がれたダグラスから流れ込む情報をリルカは次々と処理していく。

（下手に気を抜けば自我と情報の区別がつかなくなる・・・コストパフォーマンス的に考えても、やっぱりこんなものは欠陥品ね、人間の使う物じゃないわ）

作業効率が一気に上がっても、やはりアースラのメインコンピュータに内包されている情報量はデバイス一機と人間一人の脳には入りきらない。怪しい情報を選び分けて処理していくしかない。

全ては今回の件を裏で操っているかもしれない黒幕の尻尾を掴むため。

《・・・ハラOWN執務官が一人で戦っているというのに指揮官殿からは一切の心配を感じません。信頼しているのですね》

『：ダグラス、デバイスの分際で人様の頭の中を覗き見るつもりなら私は一度お前のAIをバラす事も可能なのよ？』

《ッ！！失礼しました》

選り分け作業の最中に余計な口をはさむ（とはいってもデバイスに口は無いが）ダグラスをリルカは叱責する。

主の体調を把握して自己判断を行うというインテリジェントデバイスの標準機能ではあるが、リルカは不機嫌そうに顔をしかめる。

「第一、私がクロノの身をわざわざ案じなければならない理由が分からないわ。

この程度の事態を、私の手助けなしで解決できないようじゃあ、時空管理局執務官になんてなれないわよ」

そこで一度口を閉じ、天を仰ぐように上を向いてリルカはちいさく笑う。

「彼は、クロノはこの船に所属する魔導師の中では間違いなく最強よ」

*アースラ通路

（マズイな、一番出会いたくない類の敵だよ。これは）

メインシステムがダウンし、大分薄暗くなった通路で歯噛みする。青を基調とした曲線的な騎士甲冑に身を包み、バイザーで顔を隠したライは暗澹たる表情で抜き身の廻転刃刀を構えている。

その原因は、黒いバリアジャケットに身を包んだ目の前の黒髪の少年クロノ・ハラオウン——おそらくライよりはずっと齢は低いだろう。

事前にシャルマルやシグナムに聞いた話と照らし合わせれば先ほど彼の名乗った『執務官』という役職はそれ相応の実力を有した魔導師であることの証明になる。

いや、階級など関係ない。ライの体中を巡る高揚感がそれを確固たる事実だち伝えていた。

（地団太を踏んで喚いても事態は好転しない……ならば僕がする事は一つ）

「名さえ名乗らぬ非礼、お許しください。

しかし、僕にはやらねばならぬ事があります。出来ればここを通して下さいませんか。子供に刃は向けたくない」

「僕が……執務官がそれを許すと思うか？」

「失言でした」

そう、お互いの立場からしても話し合いで解決など出来るはずもなく。退く事も許されない。

結果として互いに交わす短い言葉が戦いの火蓋を切って落とす。

「ステインガーレイ！」

クロノのデバイス——S2U——から幾つもの青い光弾が出現。軌跡が残るほどの速度でライに向かって直進して来る。

それをライは右腕部に装着されたハンドガンのカートリッジをロードし、銀色の魔力弾を放つ事で応戦する。

薄暗い通路を青と銀——二色の光が断続的に染め上げ、魔力弾同志が正面からぶつかり合う小規模な爆発音が空気を震わせた。

しかし、弾数でも弾速でも勝るのはミッド魔導師……撃墜し損ねた魔力弾が飛来。そのうちでも避け損ねた何発かがライの脇腹に直撃する。

「がふっッ!!」

〈損傷軽微・・・戦闘継続に支障無し〉

精神をナイフで削られるように鋭い衝撃が走るも、月下の報告通りに装甲に大したダメージは無い。弾速が速いだけで先ほどのクロノの攻撃は威力そのものは決して高く無かったのだとライは推測する。

（ミドルレンジ以上の距離に引き離されたら勝ち目は薄い・・・クロスレンジ接近戦でカタをつける!）

抜き身の廻転刃刀を下段に構え、体勢をギリギリまで低くしたライは高機走駆動輪の出力を全開にしてクロノに接近する。しかし敵も然る者、騎士であるライがその手を選ぶ事は予想していたのかクロノはS2Uを振るって魔法を発動した。

「ステインガーブレイド!!」

十数本もの青色の光刃が空中に出現。そして数十の刃が、今度こそライを捕らえるべく牙をむいた虎のように迫る。

精密に練られ、配置された蒼の刃。一つ一つが放つ光量が少なくとも、これだけの数が集まれば自然と通路全体を蒼に染めるほどの光量にはなるだろう。

普通ならば避けようなどと思えること自体が愚なのだろう、だがそれらの刃はあまりにも正確過ぎた。

そう、ライは己に向かい直進するステインガーブレイドの奔流を、光刃一つ一つを縫うように避けたのだ。

「くっ!?!」

ここで例えば、の話をしよう。

もし、もしもこの場に生徒会時代のライの親友である紅月カレン

や枢木スザクが居て、同じように戦う事になっていればきつと持ち前の化け物じみた反射神経で難なく危機を回避していただろう。

例え人体改造によって高い身体能力を得たといってもライはそこまでの領域に達する事は出来ていない。あくまで偽りの力……造られた力に過ぎないのだ。天性の才を鍛え上げた力には及ばない。

しかし、ライには知将ゼロさえもが手駒として欲しがる頭脳と、そこから派生するずば抜けた『行動予測能力』がある。

そう、彼は自分に迫ってくる光刃の切っ先が向いた角度からどの刃がどこへ向かうのかを全て『予測』して避けたのだ。

ミリ単位、いやもしかしたらもっと小さい単位で筋肉を僅かに動かし、一秒にも満たない時間に何度も進路を変えてやり過ごす。

まあ、どちらにしても人間技ではないのだが。

「月影！！《つきかげ》」

〈了解。カートリッジ・ロード弾丸装填〉

クロノに肉薄したライは月下に指示を出す。

本来ならばそのような言葉のやりとりで大した意味は無い、なぜなら月下は彼の愛馬なのだ、真の名馬とは主の意図を知って行動する。まさに主の体の一部。それ故に指示からのタイムラグは実質ゼロ。

ガシャン！というメカニカルな駆動音と共に葉莢が廻転刃刀の柄から排莢され——刃の峰部分から銀色の光が吹きだし、莫大な推進力を得た刃がクロノに迫る。しかし——

ガッギイン！！という鋭い音で廻転刃刀は止められる。

「なるほど、魔導師の杖なんて言っても魔導を扱うだけが脳じゃないんですね」

「ああ……室内で暴れる犯罪者を鎮圧するには白兵術も欠かせないから……な」

クロノは、S2Uの先端部分に先ほど放たずに滞空させておいたスティンガーブレイドを連結させて近接戦用の槍のようにすることで刃を防いだのだ。青い光刃は主からの魔力供給を受ける事で出力を上げ、廻転刃刀とぶつかり合う事で火花を散らしている。

「しかし、それでも接近戦ならこちらの間合いです！」

事実、何度かライと打ちあう内にクロノの顔からは表情が無くなっていく。

魔力刃と白刃が何度も煌き、薄暗い通路では主の意思の強さを反映したかのように強く輝く青と銀の二色が何度も、何度も吸い込まれるようにぶつかって発光したかと思えば離れる。勢いでも技のキレでも銀の方が優勢——数合ほど切り合った後に青色がバランスを崩して揺らめく。

刃を交えるのは騎士と魔導師。魔導という一点における行使する魔法単体の精密さ、速度、有効性、範囲、どれをとっても本職に騎士は及ばない。

だが、旧暦の時代。確かに騎士は魔導師とこの広い次元世界の海を二分したのだ。

そう、魔導で魔導師が本職ならば。剣では騎士が本職。剣の間合いならば騎士に分がある。

「これで終わりです。すこしだけ眠ってもらいますよ」

ライは、廻転刃刀の切っ先をクロノのデバイス《S2U》目掛けて突き出し、S2Uをバラバラに分断して内側に秘められた精密部品をばら撒く……ハズだった。

突如、虚空より現れた青色の鎖にガツチリと脚部を拘束され、ライの攻撃はむなしくも空を切る。

「まさか！？、設置型のバインド。いつの間に」

「・・・最初の攻撃が直撃した直後だよ。保険を取っておいて助かった。これで逆転だ！君の装甲の固有振動数は割り出した」

「ちいっ！」

必死に鎖から逃れようともがくも、もともと人を捕らえるための魔法だ、そう簡単に抜けられるはずもなく。魔力刃の消えたS2Uの先端部分がライの鳩尾に迫る。

「ブレイクインパルス！！」

声変わりを終えていない少年の声が死刑宣告のように鼓膜を震わせる。

防御に移る隙もなく、ライは左腕を割り込ませることしか出来なかった。

目の前、せいぜい30センチほどの距離で青い光が収束し、一気に解き放たれ————ベリガリゴキゴリ！！と耳障りな音と共に砕けた空き缶のように左腕部の輻射波動機構が歪な形に捻じれて破壊される。

それでもなお、ゼロ距離で放たれたその攻撃の威力を殺す事など出来ず、自身を捉えていた鎖さえも引きちぎってほぼノーバウンドでライは3〜4mほど弾き飛ばされた。

「がああああっ！！！」

〈ライ様っ！、しっかりして下さい〉

床に頭部を打ち付け、吹き飛びそうになる意識を必死に繋ぎとめた。しかし、今の余波で右腕部に装着されたハンドガンも損傷し本格的に射撃兵装を失った上に、顔を覆っていたバイザーは砕け。鼻腔を鉄の匂いが刺激する。

（もともと：勝ち目の薄い戦いだとは思っていたけど：やはり正攻法では勝ち目は：無いか）

あれほどの衝撃で廻転刃刀を手放さなかった事は運が良かったとも言えるが、これだけダメージの蓄積した状況では接近戦でも辛いな、とライは思う。

「今ならまだ君の投降を受け入れられる。これ以上戦っても君は僕に勝てない、だからデバイスを解除して降伏しろ」

事実上の最後通牒が言い渡された。

未だに声変わりを終えていないクロノの声からは、生来から気まじめな性格なのだと言ひ想像できる。

（出会う場所さえ違えば：歩む道さえ同じならばきっと仲良くやれたん……だろうな）

「確かに、今の僕では君に遠く及ばない：だけど…」

意思に反して、立ち上がる事を拒む体に鞭打ってライは立ち上がる。

砕けたバイザーの奥から覗く青い瞳には一片の諦めの色も浮かんではいなかった。

「ここで：僕が倒れたら：きっと、後悔する。」

例え犯罪者の汚名を着せられても、非難の声を浴びせられても……僕には、僕たちにはやらなきゃいけない事があるんだ！！」

「だからと言って、執務官として：法を破り、人を傷つける君たちを僕は放っておくことができない！」

——強い意志が、道を違えてぶつかれば。きっとそこは決闘の場になる——

ライは、まだ動く右腕の筋肉に力を込め——体を捻り、回転さ

せて生み出した遠心力を乗せて廻転刃刀をクロノ目がけて投擲する。

風を切り、主の手を離れた刃は直進する。しかし、ナイフならともかく刃自体が大きすぎた事もあってクロノの振るうS2Uに弾かれ、的外れな方向に飛んで行った。

最後の希望を乗せた一撃は防がれた。

「残念だったな、やはり君では僕には勝てない。・・・これで、終わりにさせて貰おう」

黒い瞳の奥に僅かな揺らぎを見せながらも、黒髪の少年は魔導端^{デバイ}末を振るい、ライの意識を刈り取るための魔法を発動する準備に入る。例え全ての武器が失われていてもバインドで拘束する程度ではどんな抵抗を見せるか分からない、そう判断されたのだろう。どのみちこの距離でライにそれを避ける術は残されていなかった。

青い光が杖の先端に収束し――――

クロノの後方から飛来した？何か”によって杖の角度をずらされ『的外れな方向に魔法砲撃を放った』

「しまったッ！！？」

「：本来、僕は君に打ち勝つ必要なんてなかった。一か八かだったけど上手くいったみたいだ」

クロノの攻撃を逸らした原因――それは、先ほどライが投げた『廻転刃刀をくくり付けたワイヤー』だったのだ。

元々、4tのKMFの自重にも耐えられるワイヤー。そして魔力を通す事で何倍にも強度を強化されたソレはクロノの体を幾重にも巻いており、力づくでそれを解くには時間がかかるだろう。

「廻転刃刀もデバイスの一部なんだ……使い方を工夫すればこん

なこともできる」

タネを明かすならば、日本の忍者が使っていた鎖鎌という武器に近いものがある。胸部装甲から射出される飛燕爪スラッシュハーケンのワイヤーに廻転刃刀をくくり付け、投擲。

そして、遠隔操作でカートリッジをロードし、後はそこから得られる推進力を応用してクロノの死角から『クロノを軸とした形でワイヤーを巻きつける』―――勿論、通路の電気が落ちていなければすぐにでも気付かれただろうし、クロノが発動する魔法の方が速ければ全て無駄になっていたであろう危険な策である。

「ここは…通らせて貰いますよ」

「待て！」

（この場に、一分一秒でも長く留まれば…すぐにでも別の魔導師がやってくる。そうなれば僕に勝ち目は無い）

廻転刃刀のみを回収し。高機走駆動輪の出力を上げる。

実を言うと、もうほとんどライは腕に力が入っていない。あと数太刀振るえるかどうかだ。

ふらつく足に無理を強いて、その場を後にする。

「くっ！行かせるものか！。闇の書の最後の犠牲者は…父さんだけで良いんだ！」

なんとかワイヤーから抜け出そうとするもがく執務官クロノを残して・

・
・
・

———それから少し時間を経て———

分厚い核シエルターのような扉に阻まれた部屋の内側にライは立っていた。

中心部分には円球状の巨大な機械のような物が座しており。そこから延びる幾本もの太いパイプが周囲の壁につながっている。

見ようによっては、人間の体の心臓から動脈が伸びているようにも見える。

「……ここか？」 〈間違いありません。ここが艦船アースラのメイン動力炉です〉

（どうやら仮面の男が用意した地図はどこまでも正確だったみたいだ）

すでにライは満身創痍となり息も荒い、体を覆っている装甲も一部が無残に破壊されている。

しかし、運が良かったのか。結局他の魔導師と鉢合わせとなるような事にはならなかった。

「さっきの執務官が抜け出してきたも面倒だ・・・さっさと動力炉を潰すぞ」

〈しかし、もはやライ様に残された装備だけでは動力炉の破壊は困難と思われますが？〉

そう、システムダウンの恩恵なのか、手動レバーらしきものを発見して動力炉のある部屋に忍び込めたものの。いくらなんでも、動力炉自体を丸裸にして置いているはずもなく、分厚い装甲に覆われ

ている。これだけ巨大な船を動かすエネルギーを作り出す心臓を守るには実に正当な事だ。

現時点で月下に残されている兵装でその障壁を突破しようとするのはまさに無謀にも見える。

「まあ、壁一枚を超えただけで直接的に動力炉を潰せるように配置されていても困るだろう？一応、この分厚い装甲は内側の動力炉を『守るため』意外にも用途がある。というか、そもそもそう頻繁に動力炉が襲撃する事を前提にしている事自体がおかしいんだ。こんなところまで侵入を許す時点で大抵の場合は手遅れだ。

多分本来の用途は、万が一暴走した際に『外側へ広がる被害を可能な限り広げないようにするため』にあるんだろう。どちらにしても廻転刃刀ぐらいじゃどうにもならないだろうね」

へでは、主砲に繋がるパイプだけでも破壊しますか？

「それも難しいだろうね。エネルギー供給用のパイプの一本や二本、予備があるだろうから壊しても無駄だと思う、精々時間稼ぎくらいにしかないよ」

元々は、輻射波動の最大出力で破壊する予定だったんだけどね、とライは軽く微笑んで周囲を見回す。

「時間は少々かかるだろうけど、直接動力炉をハッキングする事は月下にも出来るだろう？」

〈当然です、私を何だと思っているのですか？〉

「じゃあ、頼んだよ」

胸部装甲の中心に埋め込まれた月下のコアが誇らしげな女性のよな声を上げる。

ライはそれに期待するようにまだ動く右手を動力炉を覆う装甲の脇に設置された機械（恐らくメンテ用の制御装置か何かだろう）に

軽く乗せた。

その端末からメインシステムがダウンし、ファイアウォール防壁の薄くなったシステムにハッキングを仕掛ける傍ら、ライはほんの僅かな焦りを覚え―――それに苦笑する。

（やっぱ無事に帰還したいって願いがあるんだな、僕にも）
元々、動力炉を潰す事は計算に入れていても。自分自身が無事に帰還する事はそれほど考慮していなかった。

いや、帰りたくなかったというわけではない、一緒にはやての傍に居たいとも思っている。しかし、自分は存在そのものが言うなれば『異物』のような物で、最初から居るはずのない人間が居なくなっても大した問題では無いと考えていた。

もちろん、それを守護騎士達に悟られないようにするのは大変だった。それでも第一目的さえ達せられれば、例えば自分が居なくても、いや捕まる事が前提としても、闇の書の完成はそう難しくないだろうと推測している。だからこそ、この作戦を立案したのだから。

ハッキングと言う策自体は成功率も高く、上手くいけば家電製品に過電流を流してショートさせるように、動力炉の生み出すエネルギーを逆流させて船の主砲やレーダー系の機材を破壊できる。

しかし、その分必要とする時間も長く、自分が無事に脱出できる可能性も減ってくる―――そんな策の優先順位を自然と下げていた自分自身に対してライは苦笑していたのだ。

（この調子なら、案外無事に帰られるかもしれないな。そうすれば、病院で寝ているはやての為に千羽鶴でも折ろうかな？）
そんな光景に想いをはせると、自然に頬が緩む。

（十分自覚はしていたけど、やはり僕にはシスコンの気があるのかもしれない。まあ、はやてと血の繋がりは無いのだけれど）
血のつながりは無いといえど、年下の女の子に自分がまるで兄のように接している節がある事は自覚している。

それは一種の傲慢であるのかもしれないが。どちらにしろ、副会^ル長の事をこれじゃあシスコンと呼べないな、と苦笑する。

「素直に僕を気絶させなかったのが…君の失策だな」

「ッ!？」

一気に表情が険しくなる。

肩の、肩甲骨辺りに杖を突き付けられるような感触に振り向けば、そこには先ほどの執務官——クロノ——の姿が。

「なんでだ!…あのワイヤーは工業用の機械でも牽引出来るほどの強度があるんだぞ」

「それを…君が知る必要は無い」

よく見れば、先ほどもクロノが着用していたバリアジャケットはボロボロになり、額から少ないとは言えない量の流血が見られる。もちろん、それだけの手傷を負わせられるような状況では無かった。

（まさか!？、自分で、自分の体に攻撃魔法を打ち込んでワイヤーを千切ったっていうのか？）

ならば、これだけ目の前の執務官が傷だらけなのも納得がいく。

「少し悔っていた…な」

「…君に譲れない信念があるように、僕にも譲れない信念があったただだよ」

これで終わりだ、そうクロノが告げる。

そして、全身を揺さぶるような衝撃がライを襲う。

「がふっツツツ!!!」

それがゼロ距離で放たれた攻撃魔法だと気付くころには、まとも

に視界も安定せず…上下感覚も狂った後だった。

（すまない、はやて。折り紙を教えるって約束……果たせるのは大分先に…なりそうだ…よ）

最後の力を絞り出すようにライは軽く笑う。

「はは、…だけど…当初の目的はこれで達成された」

「なに？・・・しまった!？」

バランスさえ保てないほどのダメージを受けても、ライはアースの動力炉に対するハッキングを止めていなかった。でなければ回避行動を取っている。

ゼロ距離での攻撃魔法——ブレイクインパルス——が発動されるほんの数瞬前にハッキングは完了していた。

これで、動力炉は軽度の暴走を起こし、生み出されたエネルギーの一部を艦内に逆流させる事で、死者を出さずにアースに多大なダメージを与えられる。なんとか動力炉の制御権を取り戻そうと執務官は必死にアクセスしているようだがもう遅い。

このゲームの勝利の条件は、ライという駒が無事に帰還する事ではない、それはボーナステージの話だ。

「チェック…メイト…だ」

そこでライの意識は途切れた——

第七話後編 アースラ侵入 激闘！ライVSクロノ（後書き）

あとがき （珍しく通常バージョン）

どうも、駄作者にしてヘタレなライラです。

ここまで読んで下さった方々ありがとうございます。普通なあとがきをする事に大した意味はありません。単純に精神力の問題です（笑）

相変わらずテンポの悪いくせにボリュームだけはある駄作ですが楽しんでいただけたなら光栄です。

読んでいて「ライはこんなに弱くねーよ」とか「クロノはここまで強くねーよ」みたいな感想を抱かせてしまったかもしれませんねww

ライの敗因はやはり「慣れない魔法戦闘」にあるわけです。

作中で設定されていたように、「行動予測」を活かした戦いが得意なライからすれば『直進するタイプの魔法』は今までの自分の経験の延長線上としてある程度処理できるけども、「不可視な設置型バインド」や「誘導弾」のような搦め手な魔法はやはり感覚的に対処が不完全になってしまいうわけです。

まあ、あとがきでする話では無かったですね。それではみなさんまた見てギアス☆

エリィ「…最近、出番ない」

ゼリガン「リルカ先輩に出番とられてばかりだからなあ」

コラボ番外編 ふもっふの降る夜に（前書き）

これは拙作と、ボン太郎先生の作品「魔法少女リリカルなのは？ふもっふ」とのコラボ作品です。大体フルメタルパニックのボン太くんさえ分かれば読めると思います。まあ、ボン太郎さんのところのボン太くんは中に入っているのが某軍曹ではありませんがww

注意

- 1…完全にギャグ話？本編の時間軸なんてまったく関係ありません。強いて言うなら4話の後くらいです。
- 2…描写方法が根本的に違います、ライラの書くシリアス（笑）ないつもの文を期待するのは止めた方が良いでしょう
- 3…作者には決定的にギャグセンスが欠落しております
- 4…ライのキャラが原型をとどめていません。それなんて次元震？ってレベルで崩壊しております。
- 5…クリスマスに更新しておきながらクリスマスなんて関係ありません（オイ

以上でよろしければ読んで頂けると嬉しいです。

コラボ番外編 ふもっふの降る夜に

コラボ番外編 ふもっふの降る夜に

sideライ

「ヴィータ。あんま遠く行ったらあかんでー」

「うん、分かってるよ、はやて」

はやての呼びかけに見た目通りの子供のように元気に答えるヴィータ、三つ綱みにした赤毛がそれに呼応したようにぴよこんと揺れる。

今僕たちが歩いているのは海鳴市の住宅街。町内会のご老人達とゲートボールに参加していたヴィータを僕とはやては迎えに来た形になる。

まあ、ヴィータ曰く「迎えなんて無くても一人で帰れる」との事なのだが、いかんせん容姿はかなり幼いので『日が暮れるのも早い時期に一人で歩かせるんは心配や』というはやての提案で迎えに行く事になった。

本当ならもっと早く帰る予定だったのだけれど、おじいさんやおばあさん達が色々とお菓子や飲み物をくれるから迎えに行った僕とはやても大分足止めを食らうことになったのだ。

あの、『甘酒』とかいう飲み物は体も温まるし美味しかった。カレンから色々と聞いてはいたけど日本の食文化は面白いものが多いな、と実感した。

おじいさんやおばあさんに貰った飴玉を頬張っているヴィータは上機嫌で車椅子のはやてより先へ先へと進んでいく……というかポケットに収まりきらない分のお菓子は僕のコートのポケットに

突っ込んで行ったわけだが、ただでさえギチギチなのにミカンも押し込むのはどうかと思う。潰れてないかな？

「あ、ミカンはわたしが貰うでー」

「助かるよ、ポケットの中身が柑橘臭くなるのは勘弁願いたかったんだ」

車椅子を押す僕のポケットからミカンをはやてが取り出して、器用に皮をむいてミカンを頬張る。

こういうさり気ない気遣いが身に染みる。時々この子が9歳だというのを忘れそうになる、少なくとも将来は良いお嫁さんになりそうだ。

出来る限りポケットの中身を減らそうと思い、僕も適当に引っ張り出したチョコレートを頬張る。：甘いな

「はやてはやて！なんかよく分かんないけど向こうの曲がり角に凄えのが居たよ！」

「なんやー凄いのって？口裂け女でもおったんかー？」

「いやいやいや！そんなホラーじみた怪談をあんなワクワクした顔で報告するのならヴィータの将来が心配なんだが……」

変質者という線も考えたが、春先はともかく手袋無しでは指もかじかむような真冬にそれは無いだろうと切り捨てる。

あれこれ推測するよりは目視で確認した方が早い、というのもあったわけだが――――

―――なんなら何も見ずに別の道を進んだ方が良かったと後悔するのはまた後日の話――――

「ふもっふ！」

「……………ん？」

「な、スゲーだろ？」

「ほんまやー、なんかようわからんけど可愛ええなー」

犬なんだかネズミなんだかクマなんだかよく分からない頭と、ずんぐりむっくりな二頭身ボディ。どう考えても進化の過程で他の動物に淘汰されそうな短い手足。何故か防弾ジャケットのような物を装着しており頭の上には軍用ヘルメットをのせている……………少なくとも人間には見えない。

「ふもっふ！」

目の前の生物？に関する条件と合致する生き物を頭の中の知識と照らし合わせてみるもなんら思い当たらない。ということはやはり通常の生物ではないということか……………いや、待てよ？なんだろう、ずっと昔小さい頃の記憶に何か引かかるものがあるような…

「ふもっふる！ふもっふ！」

「なんだろう、あたし。こいつに会った事なんてないのになんか懐かしい気持ちになる。なんだこの気持ち？」

「あれ？ヴィータのお知り合いさんやないん？」

「ううん。もっとでっかくてゴツイ怪物とかなら戦ったことあるけどこんなを見るのは初めてだ」

……………そういえば、ずっと昔母上が聞かせてくれた話に……………ということとはまさか！

間違いない、あきらかに自然の摂理から外れた非現実的なボディ。日も暮れてきた十字路に出現して、謎の言葉を話す生き物、それは――

「おまえ、妖怪かつ！」

「ふもっ!? ふもふも、ふもっふう〜！」

side はやて

「お前、妖怪かつ！」

「ふもっ!? ふもふも、ふもっふう〜！（えっ、私は妖怪じゃないよ、ボン太くんだよ〜!）」

天国のお父さん、お母さん、わたしは今とても不思議な状況に直面してます。

なんでふもふも言うだけの生き物（ボン太くんというらしい）の言葉が理解出来るんかよう分からんけどそこはとりあえず置いとこ、となりでヴィータが『ボン太くんっていうのか、すげー』って言ってるからふもふも語（命名自分）をヴィータも理解出来るんやろうけど……

なんかライくんの様子がおかしいです。なんか悪いもんでも食べたんやろうか？ いや、でも朝ごはんもお昼ごはんも同じもん食べたしなあ、てことはさっきのおじいさんたちに貰った食べ物が悪かったんやろうか？

そう思いながらも皮をむいだミカンを食べる。うん、おいしい。

ライくんが近付いてきて着ていたコートを脱いで差しだしてくる。

「はやて、少しコートを預かっていてくれると助かる。

それと、ヴィータははやてを守ってくれ」

「ああ、うん、ええよ〜」

「おう、了解だ。……って、ライ、おまえはどうすんだよ？」

おお、ヴィータと言った！

まさにわたしの疑問をそのまま代弁してくれた、それでこそ守護騎士や！

そして、ライくんはまるで大魔王に挑む勇者のようにやたら気合の入った顔で――

「僕は、あの妖怪と戦わなくっちゃいけない。あれがはやてを傷付ける危険性がある以上は・・退治する必要がある。

安心して？はやては僕が守るから」

なんとなく頬が熱くなった気がした。

ライくん……さ、さすがに面と向かってそんな台詞言われると恥ずかしいな――

「って、そうやないやろー！！」

なんかもうツツコミどころがあまりに多すぎてさすがのはやてさんでも対処できへんわ！」

「……はやて、ライの奴、全然聞かずに行っちゃったよ？」

「ぐわあああ！もう本当に何がどうなっとなや？」

ボン太くんが妖怪に見えるはずないやろ。妖怪がみんなあんなんやったら妖怪図鑑はもつと可愛らしい妖怪だらけになるって！

「さあ来い妖怪め！例え僕の身が朽ちようとも僕の大切な人には指一本触れさせないぞ！」

「ふも！ふもふも、ふもっふ！ふも……ふもふもふもっふ！！（いいよ！あくまであなたが私を妖怪と呼ぶのなら……私がその幻想をぶち殺してあげるよ！！）」

やたら恥ずかしい台詞を叫ぶライくと、短い手を構えて臨戦態勢に入るボン太くん。どうもええけどその台詞はアウトやと思う。

「なんだかよく分かんねえけど、やっぱすげーよ！面白そうだ」

ああ！ついにはヴィータも観戦モードに入ってしまった。この場でまともなのはわたしだけかあ！

いや、待てよ？みんながみんなおかしい状況の中で正常なのはむしろ正常な側が異常なのかもしれない。というのを昔読んだ難しい本に書いてあったけど、まさに今のがそれやないか！てことはわたしがおかしいのかな？……ちよっと泣きたい。

へああ、ライ様。あれは完全に酔っぱらっていらっしゃる。私がここに居るといふ事も忘れている辺り、かなり酔いが回っているようです

「やったよ！なんかまともな上に事態をちゃんと把握しとる人？がおったよ。月下さんマジ天使や！」

へえ？あの、なんで泣いていらっしゃるんですかはやて様？

突然聞こえてきたちよっと低めの女の人の声。

ライくんに預けられたコートの胸ポケットを探ってみたら出てきたのは青い菱型のUSBメモリみたいなライくんのデバイスの月下さんやった。

「まあ、ちよっと心が折れそうになってたんやけどもう大丈夫だよ。

とゆーか。ライくんが酔ってるってなに？うちにはお酒なんて置いてないし、今日はずっとライくんと一緒やったけどそんなモンは……」

へおや、飲んでいたではありませんか。先ほどのご老人達に頂い

た甘酒を」

「ああ、そういうえばライくん飲んでたなー。まあわたしはあの喉ごしがちょっと苦手なんやけど……冗談やろ？」

「冗談ではありません。甘酒であろうとも中には多少のアルコール分が含まれているのをご存じありませんか？」

「いやいや、それくらいは知っとるけど。いくらなんでもあの程度、子供でも酔っぱらわんやろ」

「そこで酔ってしまうのが私のマスターであるライ様なんですよ。昔は四聖剣：酒豪の方々が飲むお酒の酒気に当てられて倒れてましたし」

「なんとなく疲れた感じの声を発する月下さん。なんというか、ライくんにはまだわたしの知らない秘密がいっぱいありそうです。」

でも、原因が発覚しても解決法はまったく分からんままやな。

そこでわたしが手元の月下さんから二人？に視線を戻して見ると

「食らえ！！ 月昇流誠零式旋風脚（げっしょうりゅうまことぜろしきせんぷうきやく）！！」

「ふもっ！」

ライくんが、なんかようわからん技名（ムーンサルトとかでええやろ）を叫んでボン太くんに回転キックを打ち込む。

せやけど、ボン太くんはあのおまんじゅうみたいなの平べったい足を器用に使って避ける……ハリ○ツド映画とかのスタントマンさんがコレ見たら自信無くすんやろうなあ。

「なに！？スザクの陽昇流の亜流とはいえ今の一撃を避けただけ？」

「ふもっふ！（どうだ、見たか！）」

「よし、やれー！ボン太くん！！！」

「おーい！ヴィータはライくんやのうてボン太くんの応援なんかーい！」

何故かヴィータはボン太くんに何か共感する物があるようです。

凄い勢いで蹴り技やパンチを放つライくと、それらを全てよけながらも応戦するボン太くん……凄いシュールな光景やなあ。

と、そこで対処が間に合わなくなってきたのか、ボン太くんはどこから取りだした鎖（なんか闇の書を縛ってた鎖に似てる気がするんやけど、気のせいかな？）を腕に巻き付け…その腕でパンチを繰り出す。

「つて、卑怯やろう！」

「いや、いつの間にかライも武器取り出してるからいいんじゃないの？」

横で呟くヴィータの言うとおりに視線をライくんに向けてみると、どこから取り出したんかようわからんけど巨大なピコピコハンマーを構えている。……何故にピコハン？

「ここで負けたら僕の矜持に反するんだよ！」

「ふも！ふもふも、ふもっふ！」

「あかん、もうそろそろツツコミするの疲れてきた」

「はやて！あきらめちゃ駄目だよ」

「へそうですよ、『クリスマスは二次元で楽しむもの』と危ない発言をする駄作者が書いた作品なんです。気にしたらそこで負けです」

ヴィータと月下さんが慰めてくれる。せやけどわたしの中に眠る関西人の血が、『ここでツツコミを止めたら負けだ！』って囁くん

や。

：誰や？今『色々謎が多い同居人達をすんなり受け入れてるじゃないか』って言うたんは。それとこれとは話が別やからええの。

「うわー、すごい！カナちゃんに見せるために写真撮ったのかなくちゃ」

「わー、姉ちゃん。ボン太くん、ふもふもランドでも無いのにボン太くんがいるぜー」

「おい、危ないから近付いちゃ駄目だぞヨシキ。でもこんなところでショーをやるなんて聞いてないぞ」

「ねえ、ママー。あれなーに？」

「しっ！見ちゃ駄目よ」

「いつの間にかギャラリーがこんなに！？」

「はやてが一人でブツブツ言いだしたあたりからだよ？」

「そりゃあ、同居人が甘酒で酔っぱらって暴走してボン太くんと戦い出したら現実逃避もしたくなるやろ？……うん、というかこんな経験をしたのは世界でわたし一人やって断言できるのは悲しいな」
〈安心して下さい。もうそろそろ終わりそうな雰囲気ですから〉

「ホンマかっ？」

こんな混沌の極みに達した戦いが終わるんなら大歓迎や。これが終わったら酔いがさめたライくんを引っ張ってさっさと家に帰って温かいシチューでも作ってみんなで食べて温かい布団でヴィータと一緒に寝よう、いや、今日は久々にみんな一緒に寝るんもええかもしれないな。

そんな、淡い期待を懷いたんがそもその間違いやった――――

「ゴ○ディオ・ニコニコハンマアアア」

「ふも！ふもふも！ふもふもっふう！！（私のこの手が真赤に燃える、敵を倒せと轟き叫ぶ！！）」

ああ、うん。もう直ぐ終わるって、ライくんの酔いが醒めるって意味やなくて決着が付くって意味やったんやね。

八神はやて。若干9歳にして世界の歪みが見えて来ました。もうどうでもよくなってきたで。

「光になあれええええ！！」

「ふもっふう！ふもふもふもっふうう！！（ばあくねっ、ふもっふるフィンガー！）」

どういう仕組みなんかよう分からんけど（というかどこから取り出したんかも分からん）、光輝くピコピコハンマーを振り上げるライくんと、これまたどういう仕組みなんか全く分からんけど、右手が光り輝くボン太くん。

「これって、ギャグで済まされる領域越えてない？」

へというか著作権とか世界観的には完全に粉碎されていますが

とにかく、そんな二人の最後にして全力の一撃がぶつかる。その場に居たわたしやギャラリーのみなさんがそう思った時。

どこからかパトカーのサイレン音みたいなのが聞こえて来て、それに遅れる形で大きな声（多分拡声器でも使ったんやろう）が聞こえてきた。

しまった、おまわりさんが来てもうた！

『その怪しい少年とボン太くん。止まりなさい！！、住宅街で暴れているのってあんた達ね！』

私の出世の為に星になりなさい！独房にブチ込んでやるから』

「それって警察の人が言って良い台詞やないんやけど!」

まだ遠くの方に見えるけど、拡声器から聞こえてくる女の人の声はそこはかとなく危ない雰囲気を纏っている。

というか『クリスマスを一人で過ごす孤独さをお前らにも味あわせてやる!』とか聞こえてくるんやけど、公私混同すぎるやろ! あれでええんか、国家権力があれでええんか!?

「……日本の将来が心配になってきたで、わたしまだ9歳なのに」
〈未来は暗いですね、特に某都条例とか某都知事とか。ブリタニアに侵略されるくらいに未来は暗いです〉
「いや、あの、月下さん?……というか、このままやとライくんが捕まってしまうで」

そういえば、ライくんって日本の戸籍なかったような……って、かなりやばいやん!

「ふも! ふもふも、ふもっふ!」

「ん、なになに、『私がこの人を担いで運んであげるから一緒に逃げよう』やって? ありがたいなボン太くん。」

「……………ん?」

ぽふっ、とわたしの肩に手を置きながらも、糸の切れた操り人形みたいに気絶したライくんを抱えているボン太くん。

もう間近に暴走婦警さんの操るパトカーが近付いているのに、わたしはその疑問に突っ込まざるを得なかった。

「なんでライくんが倒れとんねん! さっきまでバトル漫画顔負けのバトルを繰り広げてたやろ」

「ふも？ふもふもふも」

「『技をぶつけ合ってたらず突然倒れたんだよ』やって？いや、そんな馬鹿な」

〈どうやら完全に酔いが回ったようですね。先ほどライ様が食べていたチョコレート、あれが実はチョコレートボンボンだったようです〉

「どんだけお酒に弱いねん！！」

必死に車椅子を動かして逃げ回りながらわたしは叫ぶ。なんか今日はツツコミばかりやってんな、わたし。

まあ結果として暴走が収まったわけやけど、今後一切ライくんにお酒類は与えないと心に誓う事になりました。

『ふはははははは！！さっさと私に捕まりなさい！尋問してあげるからー！！』

「ふもっ！」

「やっぱあの人、実は警察とかやないやろ！」

〈安心して下さい、音声は録音しておきますのでいざ危ない尋問があるものなら裁判で勝てますよ〉

「そういう問題やない！」

かくして、少年を抱えたボン太くんと。必死に車椅子を動かして逃げ回る茶髪の少女と赤毛の少女をパトカーで追いかける危険な婦警という、いかにもシュールな光景が海鳴市の住宅街で繰り広げられることとなったのでした。

ううん、頭が痛い。リビングのソファで軽く唸る。

心なしか体中の筋肉が悲鳴を上げているんだが、そんな激しい運動をした記憶は無いのになあ。

というか、はやてと一緒にヴィータを迎えに行った後の記憶がうつすらとしか残っていないんだが、どうしたのだろうか？

「また、記憶喪失か？」

どちらにしてもあまりよい事ではない。

戦場でもっとも忌むべき事は強敵に出会ったりする事ではなく『自分が置かれている状況を把握できない事』、昔の僕ならそんな失態を犯す自分を憎々しげに卑下した筈だが……なんだろう、思いつかない方が良いと心のどこかでささやく自分が居る。

まあ、どちらにしても過去の経験として記憶喪失になるような状況にロクなものは無いわけだが、そうなると尚更その原因を突き止める必要が出てくる。万が一はやてやヴォルケンリッターにとってマイナスになるような要因なら対処を練る必要があるからだ。

そんな事を考えていた僕の近くをはやてが通りがかる。

「ねえ、はやて。昨日の記憶が曖昧なんだが、何かあったのかい？」

「んなっ!?!……ま、まさかあれだけ滅茶苦茶しておいて記憶がない、やと?というかあの後どれだけ走り回るんが大変やったかもライくんは分かってないんやね」

「え、まさか敵か何かなのかい?だとしたら僕が何とか……」

スッパーン!そんな小気味の良い音を立ててハリセンが僕の頭に振り下ろされる。

勿論ハリセンを持っているのははやて。ついでに言うところからハリセンを出したのか全く見えなかったんだが……

「痛いよ、はやて」

「ええい、原因の片方が何言っとるんや！」

結局はやては何があつたのか教えてくれなかったし、ヴィータに聞いても「まあ、覚えてない方が良い事も世の中にはあるんだよ。あたし達ヴォルケンリッターは長い時間をかけてそれを知ったんだ」という、なんだかやたら謎めいた言葉を呟くだけで何も教えてくれない。

「一体僕の記憶の無い間に何があつたんだ？……」

僕の問いに答える者はその場におらず、点けっぱなしになっているリビングのテレビから開園数周年記念だとか何だかでテーマパークのマスコットの「ふもっふ！」という間の抜けた声が響くだけだった。

—————コラボ番外編

ふもっふの降る夜に 完???

———

コラボ番外編 ふもっふの降る夜に（後書き）

『また見てギアス☆』

作者…どうも、クリスマスのノリと勢いで一気に完成させてしまった事をちよつと後悔中の作者です。

ライ…どうも、なんだか最近扱いが不遇すぎるライです。本当にどうなってるんだ？

作者…まあまあ、ボン太くんフルボッコにされなかつただけマシだと思いなよ。

ライ…そんなことを計画していたのか！？

作者…まあ、なんというかこのノリは色々失う物が大きかつたなあ、と反省はしているのですよ？

ライ…そうだと思うんならちゃんと本編を更新しなよ。

作者…いや、多分もう年内には更新出来ないんじゃないかな、つてちよつとまって輻射波動はぎやああああ！！

ライ「うちの駄作者がいつにもまして見苦しい駄文を後悔してしまいました、出来れば見放さないでくれると僕としてはうれしいです、それではみなさん

また見てギアス☆……ああ、恥ずかしい」

断章 翡翠の魔女（前書き）

年内にもう一度更新出来るかどうかものすごく怪しいわけですが、とりあえずちよつとした小話を投下！『現時点』ではこれといって本編に絡んでくるお話ではありませんが、ライラのグダグダ長い駄文の中では比較的短めの部類に入ります。

夜中に小一時間ぐらいで仕上げた話なのでクオリティは期待しないで下さいね？

断章 翡翠の魔女

寂れた遺跡の中心。空気の流れは死に、時の止まったように数百年前より依然としてそこにある？扉”に私は軽く手を乗せる。誰にも見つからず殆ど人の出入りが無かったはずのこの遺跡にはここ数年で多くの傷が増えた。

銃弾らしきものが跳弾した痕や爆発物によって作られた割れ目や倒れた柱。ここを作った者達がこの惨状を見れば泣くかもしれない、まあそんな事はどうでもいいが足場が不安定で正直凄く歩きづらい。

「ちっ、こんな所にわざわざ足を運ぶなどと面倒極まりないな」

手近な石の塊に腰を下ろし。ピザを頬張りながら私は愚痴る――やはり少し冷めている、ピザは焼き立てが最も美味しいというのに――しかし、この思考エレベータにアクセスしても目当ての人間の存在を感じられない。

「ラグナレクの接続の時にもアイツは出てこなかったし、もしかするとそれ以前にCの世界から消えたのか？」

まあ、自分自身の事さえも完全に理解しているとは言いが、時の流れさえも曖昧なあの世界絡みならば何があっても不思議ではないと思う。万物に等しく時が流れるとしてもあの世界は“物”というには少し語弊があるのだから――

そういえばアイツが学園を去った日、騎士団の格納庫からアイツの愛馬が姿を消していたし……よもやあの日にはもう？

可能性の問題を示唆していけば限りがないが、無事ではあると信じていたい。

「ふっ、ルルーシュに似てアイツもしぶとい性格だ。心配なんぞ要らないか」

未練はある——だから未練は無い。

あれだけ強くて悲しい台詞を吐けるようなやつなんだ、案外私の知らないところで——例えばことは違う世界で——生きているかもしれない。

もう、この世界でアイツの事を覚えているのは文字通り私一人になっちゃった。

アイツとかかわりのあった人間の中からはアイツに関する？記憶”だけがスッポリと抜け落ちた。それがとても愚かな事で、彼の愛した人達が記憶を消された事実を知れば怒るのは間違いないだろうが、私はアイツの決断を非難出来なかった。

自分がどんな色だったかも忘れてしまった私にはアイツがとても眩しく見えたんだ。

あの日、世界中に降り注いだギアスにはオレンジのギアスキャンセラーも効かない。あの少年が残した最後の願いはそんな簡単に消えるものではない。

「まったく、まだアイツが起きる時ではないのに私は何をやってるんだ」

ここ数年で、世界は本当に色々と変わった。その変化で失われたものの中にはアイツが守りたかったものも含まれている。

ルルーシュとスザクの決断を、ゼロレクイエムを知れば、きっとアイツは悲しむだろう、怒るだろう、泣くだろう。

それでも、世界が対談という平和的なテーブルに着くような下地が出来上がった。まだまだ火種は残されているが、人類は確かに平和に向けて動き出している。

（もしかしたら、ルルーシュ達の作ったこの世界を……ルルーシュを知っているアイツに見せたいのかもしれないな、私は）

そこまで思索してついに吹きだす。なんてジョークだ、実に人間

らしいじゃないか？

「とうの昔に無くしていたと思っていた人間らしさがここまで私に残っているとは驚きだな……まったく、全部あいつ等のせいだ。なあ、チーズ君？」

数百年の時を生き、何度も何度も迫害され、研究者には実験動物として扱われ、時には教主として崇められ、正体を明かせば大抵の場合畏怖の念を向けられる。

そんな私に、『私自身』に向き合ってきた者達の顔を思い浮かべながら、胸に抱いたチーズ君人形に囁きかける。

ゼロレクイエムの完遂から数年、世界を放浪して来た友は何も答えない。

嗚呼、つくづく私らしくない。やはり最近はずをあまり食べていないせいだろうか？だとしたら大問題だ。

そもそも、こんなまともにピザ○ットもないところまで足を延ばす羽目になったのは誰のせいだ？

何時になるかは見当もつかないが、来たるべき時が来ればアイツとはきつとまた出会える。そんな根拠の無い確信が胸中を占める。

「そのときには破産するまでピザを奢らせてやるからな“ライ”」

数百年ほど昔世界から色を失い、世界に絶望して眠りに就いた王で——そして何年か前には色を得て望まぬ眠りに就いた少年。

世界中で私だけが覚えているその少年の名を呼んで、私は神根島の遺跡を去った。

断章 翡翠の魔女（後書き）

あとがき「通常バージョン」

ギアスを知っている方ならもうこれが誰だか分かりますよねwwピザの魔女です（笑）

みなさん、今年も一年ありがとうございました。

クロスオーバーを名乗っておきながらギアスキャラの比率が異常に低いような駄作者の駄作でよろしければ来年も読んで下さると大変うれしいです。

まあ、作者は何気に受験生なので春までは不定期行為新になります
がorz

第八話 願いは一つ（前書き）

新年最初の投降です。

相変わらずの一万字越えorz

話を短くまとめる技能か速筆の技能が欲しいです（笑）

こんな駄作でよろしければ今年もよろしくお願いします。

第八話 願いは一つ

第八話 願いは一つ

アースラ襲撃から数日後

次元航行船アースラ内でリルカ実験小隊に貸し与えられた個室から、防音性の自動ドアを破らんばかりの大声が轟く。

「もうしわけありませんでしたああああ。敵将を取り逃した失態、このゼリガン・ヒューイットが腹を切ってでもげぼあっ！」

「……拘束完了」

「よくやったわファインズ三等空尉」

そこで不必要なほどに大声を上げて物騒な事を叫んでいた、黒い鉢巻を巻いた短い茶髪の青年は、光る熱血バカことゼリガンヒューイット二等空尉。

今にも奇行に走ろうとしたゼリガンをバインドで拘束した長い黒髪の少女は、同隊所属のエリィ・ファインズ三等空尉。エメラルド色の瞳は虚空を見つめており小声で「…ケバブ食べたい」などと呟く辺り、同僚が切腹しようとした事に大した感慨を抱いていないように見える。

「サムライの真似事なんてされても書く始末書に困るのは私なのだから止めなさい。一応お前はAランクの騎士なのだから、まあどうしようもなくバカだけど。……第一お前はサムライではなくて騎士でしょくに」

そして心底面倒くさそうに部下を見下すのは、先端のみが緑色に染まったワインレッドのロングヘアーと切れ長な金色の瞳が特徴的なリルカ・プリウス一等空尉。リルカ小隊のトップである彼女は呆

れたようにため息を吐きながら――

「元々お前が烈火の将を倒せるなんて期待してないわよ。それに敵を取り逃しただけで切腹なら、メイン動力炉を潰されたクロノはどうすればいいの？」

「いや、それでも自分を打ち負かした例の騎士を捉えたじゃないですか！……うむ、そういえば船の心臓を潰されたのになんでこの船は動いているんだ？」

「……摩訶不思議、幽霊船？」

バインドで蓑虫のように縛りあげられたゼリガンと、微妙に的外れな事を呟くエリイの疑問にリルカは頭を抱える。

なんで実験部所属のお前らがそれを知らない？と若干疲れのこもった視線で一瞥しながらも、律義に答えるあたりが情報の価値を重んじるという彼女の信条なのかもしれない。

「いい？大抵この手の次元航行船には何らかの事情で動力炉に支障が発生した場合に備えてサブの動力炉が2基積まれているのよ。まあ、出力は二つ合わせてもメイン動力炉の数十分の1程度しか出ないし、今回の場合は暴走ついでにエネルギーが逆流したせいで艦の至る所で機器の調子が悪くなっているようだから事はそう簡単ではないのだけど…」

この際だから他に何か質問は？と聞き返すリルカ。いつにもまして声色が高圧的に聞こえるのは彼女なりに色々と思うところがあるからなのだろう。

それまでこれといって焦点の定まらない瞳でぼうっと虚空を見つめていたエリイが手を上げる。

「……そういえば、メインコンピュータは壊れてない？」

「なんだ聞いてなかったのかエリイ。リルカ先輩の活躍のおかげで

メインコンピュータが守られたんだぞ。」

「ま、まあそういうことになるわね。メインコンピュータ室側から物理的にエネルギー回線を遮断したのが功を奏したという事になるわ」

ここで、僅かにリルカの額に冷や汗が滲む。

（ううむ、あの時回線を遮断するのが一瞬でも遅かったら廃人になっていたなんて考えたくないわね……危ない橋は渡らないに限るわ）

数日前、愛用のデバイス《ダグラス》に搭載された《演算共有システム》を使用する事で間接的にコンピュータと脳の一部を接続していたリルカは、下手をするとエネルギーの逆流による集積回路のショートに巻き込まれて脳の回路も一緒に焼き切られる危険にさらされていたのだ

まあ、そうなったとしてもメインコンピュータにハッキングを仕掛けていたリルカの自業自得ということになるわけだが、今回はそれがプラスに働いた事になる。

が、当然ながら『艦のコンピュータにハッキングするためにその場に居たんです、えへっ♪』などと言えるわけもないので表向きには『艦内警備の一環として偶然居合わせた為に対処出来た』ということにしている。

「あれ？先輩、なんだか顔色悪いですよ。医務室に行きますか？」

「いいや、問題ないわ。とりあえずこれでミーティングは終了。各自は自室にて待機しておきなさい」

動物的な勘で感情の揺らぎを嗅ぎつけたゼリガンから顔を逸らすようにリルカは話を切り上げた。

（こういう時だけ勘が働くから厄介なのよね、まあさっさと先日入手した情報の山から目当ての情報を探り当てなきゃいけない、つてのが本音なのだけど）

個室に残っている部下二人には目もくれずにリルカはその場を後にする。

「……私も、ケバブ食べる」

それに続くようにその個室を去るエリィ。基本的に食欲には忠実なようだ。

そして個室に取り残されたのは――――

「よし、じゃあ自分も一から体を鍛え直すか……って、あれ？動けない」

へゼリの旦那なら気合いでなんとかなるんじゃないか？

エリィが解き忘れたバインドで蓑虫のようにグルグル巻きにされた熱血バカと待機状態の彼のデバイスへバイモン＜＞だった。

所変わって同艦内――ブリッジ。

「艦の運航率はどうか？」

「正直、あんまりかんばしくありませんなあ。リルカ先輩のおかげでメインコンピュータの頭脳が破壊される事だけは防げたけど。レーダー系の精密機器は6割がショート。アルカンシエルに関してもそれは似たようなものかな。万が一撃とうものなら多分アースラも巻き込んで半径数百キロ巻き込んで消滅だよ」

まあ、肝心のエネルギーが供給出来ないから関係ないんだけどね、と陰鬱な表情で呟きながらコンソールパネルを叩くのはエイミー・リミエッタ執務官補佐。ここ数日でアースラが航行可能になったのは一重に彼女の情報処理と、現場で機器の整備をする技術士官の努力の成果だといってもいい。ピヨコンと跳ねた茶髪が特徴的なエイミーの目にはうつすらと隈が浮かんでいる。

そんな彼女の事をねぎらうようにぼん、とエイミィの頭に優しく手を置くのは、黒髪の少年執務官クロノ・ハラオウン。

頭や腕に包帯を巻いている姿が痛々しい。

艦に侵入した騎士を制圧する際に受けた傷なので名誉の負傷といえはそうなるのだが、本人はそんな逃げ道を嫌う性格なのか表情は自然と暗くなっている。

「すまないな、この事態は僕のミスだ。詰めが甘かった」

「いやいや、クロノ君はよくやったよ。まあ、そこまでボロボロになったのは感心しないけど。この事件が無事終わったら何か美味しいものを奢るだけで許してあげよう」

「……がつつく女性嫌われるぞ」

「失礼なっ！、遠まわしに『一緒に事件を解決して全部まるく納めよう』ってお姉さんの優しい気遣いだという捉え方は出来ないのかね、クロノ君は」

「なんだかんだ言っつて、最終的には高い店の食事を奢らせるんだろう」

「バレたか♪」

ちよろつと舌を出して悪戯っぽく笑うエイミィに対してクロノは儼然とした表情で嘆息する。

学生時代からメンタル面でも支えてくれるこの執務官補佐の事は心の底から感謝している。とはいってもそんな事をちらりとでも口に出そうものならいつまでもからかいのタネにされることは分かり切っているので意地でも言うつもりは無いのだが…

（まあ、多少値の張る店でも我慢してやるか）

幸い財布の中身に余裕はあるし、と内心で苦笑しながらクロノは本題に入るために表情を引き締めた。

「それで、彼の様子はどうなんだ？」

「あ、ちょっと待ってね。ついさっき医療部から検査結果が届いたから」

本当なら数時間もあればデータは出るんだけどねえ、と呟きながらもエイミィはコンソールパネルに指を走らせ画面を切り替える。

そしてモニターに映ったのは――数日前、ヴォルケンリッターや仮面の男と結託してアースラ襲撃を行った張本人。

サラサラと揺れそうな銀髪と白い肌が特徴的な長身の男。端正な顔立ちには僅かながらに幼さが残っており、年齢は少年と青年の境目の曖昧なラインに見える。

そして現在はデバイスを取り上げ、病人の着るようなゆったりとした服を着せられている。これはつい先ほどまで身体を検査されていた名残だろう。

しかし、医療用の真っ白なベッドに寝かされている彼に現在意識は無い。

「いくらなんでも、ここまで起きないのはおかしくないか？僕はちやんと非殺傷設定で攻撃をしたはずだが」

「それなんだけどねえ。多分だけど、意識を失う直前になんらかの形で情報漏洩を防ごうとしたんじゃないか、って報告が来てるんだよ。なんだか彼のデバイスの方も肝心なメモリ領域には嚴重にロックがされてて、下手に手を出すとドカン！って感じになってるみたい」

「となると、目を覚ますのはもう少し先になるというわけか」

「うん、そうなりそう」

「これじゃあ、仮面の男とどういう関係なのかさえも聞き出せそうにないな……厄介だ」

数日前のアースラ襲撃の際には、囷として行動していたであろう守護騎士を逃がすために行動した仮面の男。今までのそれに比べて事前に計画されていたようにも見えたその行動の理由を確かめたか

ったクロノとしてはあまり良い知らせでは無い。

苦々しげに唇をかみしめたクロノを横目に、幾つかの検査結果をエイミィは淡々と読み上げる。

「けどね、彼の体。色々とおかしなところがあるみたいなんだ」

「：？どういう意味だ。何か持病でもあるとか」

「いやいや、一応”現時点”ではそういう病気みたいなのはなさそう。むしろ理想的な健康体だね。まあ、これを見れば分かると思うよ」

意味ありげな雰囲気を含んだエイミィの口調にクロノは疑問符を浮かべた。

そして拡大された映像に映し出された検査結果の数々を読み上げて眉をひそめる、何故なら――

「これは……強化人間じゃないか。しかもかなり徹底的にいじられている……」

「そう、筋組織や骨格を何度も破壊と再生を繰り返す事で理想的な形に強化していったみたいだね。神経系もかなり薬物で強化された形跡があるんだよ。脳の方も大分弄られてる」

古今東西、技術の進歩に伴ってこういった『人間が本来以上の実力を持つため』の実験の類は例を上げて行くと限りがない。人造魔導師の生成に比べて人体の改造だけなら成功率が高いとはいえ、それ相応のリスクは伴う。

職業柄、こういった違法な手段で本来以上の力を引き出せるように肉体を改造された人間を見てきたクロノからすれば納得のいくところでもあったのか、僅かに口元に手を置いて黙考する。

その間、エイミィが何も口を挟まないのは長年の付き合いから得た経験なのだろう。

「ならば、色々と納得がいく。彼の戦い方は少々異質というか、根

本的に何か違和感があつたんだ」

「というと？」

「そうだな……例えるなら、超高性能の傀儡兵に人間の意識が宿った感じ、とでもいえば良いのかな？」

。人間である以上絶対に動きには小さな誤差が出るはずなのに、彼はまるで機械の様に正確で緻密な動きだったんだ。機械的とはいっても動きがパターン化されているわけでは無く、常に實力差を計算して有効な手立てを使用して来る」

「あはは、クロノくんもリルカ先輩と似たような事言うんだね。まあ、先輩は『高い学習能力と自立進化を有したコンピュータウィルスみたいで薄気味悪い』とか愚痴ってたけど」

「いくらなんでもその評価はどうかと思うぞ……」

（しかし、闇の書の騎士達が人体を改造するような施設を持っているとは思えないし、するとも思えない。となると、彼の出自は一体どこなんだ？）

だが、いくら考えても元手となる情報が少ない以上は全体像も見えてこない。推測をいったん中断したクロノは他に何か情報は無いのか？とエイミィの代わりにコンソールパネルに指を走らせた。そして映し出される映像は肉体のハーモニクスからリンカーコアに関する情報へ移り変わる。

「ん？なんだリンカーコアにリミッターがかかっている………というか、後天性の魔導師の可能性あり、だと？」

「そうなんだよね、現場にある機材だけだと詳しくは調べられないけど、先天性の魔導師特有のDNAパターンとはちょっと違うって報告が上がってきてる」

「ああ、確か『先天性の魔導師は生まれたときからリンカーコアが体内にあるから、細胞もそれに合わせて変異する』ってどこかの学会で発表されていたな。確かに、人間の細胞や体のつくりは育つ環境によって僅かに働きが変わるって例はあるけど。そもそもモデルケースとなる『後天性のリンカーコアを持った人間』が殆ど見つか

らないからお蔵入りになったんじゃないか？あの学説は」

「らしいね。だから確かめようがないので可能性の段階として示唆されてるんだよ。まあ、事実問題としてはリミッターの方が色々謎だらけなわけ」

そう呟きながらエイミィは一つの立体映像を表示させる。どうやら、細かい数値やグラフそのものを読み取るよりは、検査機器が読みとった情報から推測されるホログラムも使用した方が分かりやすいと判断したのだ。

それは例えるならば鎖を幾重にも巻き付けて球体にした形、とても表現するべきだろう。中心部にリンカーコアが隠されているのだとしたらかなり嚴重なリミッターだ。

そして、鎖のような物で作られた球体の周りを光の帯のような物が巻き付いている。光の帯に関しては捕獲後に付けられた管理局製のリミッターだと知っているクロノはそちらについては言及しない。なにしろリミッターが付いた状態で戦闘を行える騎士なのだからさらに嚴重にリミッターをかけるのは当然の判断だからだ。

「なんというか……これは、凄いな。もうこれは鎖《リミッター》というよりは、暴れる獣を捕らえる籠や檻みたいだ」

そう、連想するならば檻という言葉がピッタリだとクロノは思う。外と中を完全に遮断する事で内に閉じ込めた獣が誰も傷付けないように――

「こんな例は見た事ないから判断はお任せします。って現場の医務官が丸投げするレベルだからねえ。一応、魔法を使用する際には少しだけこのリミッターが緩んで、そこから漏れ出した魔力を使っているんだろう、って推測は立っているみたいだけど。

さすがにこれ以上は私にとっても専門外だよ。何かクロノ君は思い当たる所とか不自然な所見当たらない？」

生まれつき魔導師としての資質を持たないエイミィや、アースラの医務官としてはやはりこれは土俵の外らしい。ただでさえリンカ

ーコアに関しては解明されていない不明瞭な部分が多いだけに、魔導師としての資質を持つクロノなら何か分かるのでは？と期待を持たれたようだ。

「そうだな。とはいっても、これだけ嚴重なリミッターがある以上は内側のリンカーコアも調べられないだろう。内と外を殆ど遮断していて、隙間といったらこの魔力が漏れ出るスリットくらいなものだし……ん？待てよ、そんな馬鹿な！？」

ただ、何気なく絵画を見ていたらそこにもう一つ別の絵が隠されていたのに気付いた。そんな雰囲気の驚き方。

最初からそこにあるのに、それがあまりにも異質すぎると認識が曖昧になるような……

何度も、何度も、データに間違いは無いか？見間違いではないか？とクロノは穴が開くほど立体映像と、そこに付随したデータを見つめる。

「ど、どうしたの？クロノ君」

「いや、こんなリンカーコアはそもそも理論的にあり得ないんだ。これを見てくれ」

「ええと、魔力放出量に対する魔力素の吸収率？……あ、ホントだ、こんなのって」

クロノの指し示す一つのグラフを見てエイミィも絶句する。

「これはもう、ただ最大保有魔力量が大きいとかいうのとは全然違うんだ、どんなに最大魔力量が大きい人間でもこれはあり得ない。なぜなら『一切魔力素を取り込めない筈なのに魔力だけは漏れ出している』んだから」

要するに、クロノが言いたい事を要約するところなる。

本来リンカーコアとは大気中に存在する魔力素を取りこんで魔力を生成する一種の器官なのだから。これに関しては魔力量がSSSあろうと例外では無い。

例えるならばリンカーコアの働きは、人間の肺が酸素を取り込んでエネルギーを体内で作り出すのと良く似ている。

その働きを逆手にとってリミッターは『リンカーコアが取りこむ魔力素の量』を意図的に調整する事でリンカーコアの働きを弱めている。

しかし、クロノが捕獲した少年――ライーのリンカーコアは嚴重なりミッターのせいで外部から魔力素を取り込むことができない筈なのに、依然として魔力を作り出している事になる。

これは言うなれば、一切呼吸をせずに日常生活を送るのと同じで普通ならば絶対にあり得ない事なのだ。

「そもそも、この鎖の内側に隠されているのは本当にリンカーコアなのか？」

「え？クロノ君、それってどういう……あ、なるほど。じゃあ無限書庫のユーノ君に通信繋ぐね」

「任せた、エイミィ」

何気ないクロノの呟きから意図を察したエイミィは外部連絡用の通信回線を開く。

本来ならばリアルタイムでの映像のやり取りも可能はずなのだが、全体的に出力低下の否めないアースラの現状では、雑音が僅かに混じる音声回線が限度なのだろう、ザザッ、というノイズと共に通信が繋がった。

『いやちよつと待って下さいロツテさん、僕は食べても美味しくないですって!!』『ごろにゃーん!!』：誰か助けてええええ!!』

聞こえてきたのはユーノ・スクライアの悲痛な叫びと、クロノにとっては聞き覚えのある師匠の嬉しそうな声。

「……楽しそうだな、後で連絡する」

『待て待て待て!!助けてくれクロノオ!』

「今から送る情報に関して、過去に事例があったかどうかを調べてくれると助かる。候補としてはへ魔力素以外の何かを魔力に変換するへ外部からなんらかの形で魔力の供給を受けるへ莫大な魔力

を貯蓄する」いずれかの働きのあるロストログアを重点的に検索してくれ。じゃあな」

『待てええ！！せめて何かおかしい点には気付こうよ！突っ込もうよ！君の師匠だろ』『うまそうなネズミっ子だねい♪』いやああああ！！』

そこで通信回線はプツリと途切れた（というかクロノが回線を切った）。

とりあえず黙祷をささげるあたり、クロノにも見捨てた事で僅かな良心の呵責は覚えているらしい。

「はは、ユーノ君も大変そうだね」

「ああ見えてロットはクロスレンジなら僕でも苦戦するんだ、フェレットもどきが逃げられればいいんだが……」

苦笑いしているエイミイとこめかみを軽く押さえるクロノに、モニターを睨んでいたアレックスが報告する。

「フェイト・テストロッサ、高町なのは両名、哨戒任務より帰還しました」

ブリッジに併設されている転送ポートの内側に二人の少女が転移してきた。

「「ただいま戻りました」」

転送ポートから姿を現したのは、栗色の髪をツインテールにしている少女――高町なのはと金色の髪をツインテールにしている少女――フェイト・テストロッサ。小学校に通っている年齢の二人が並んで管理局式の敬礼をしている姿は、子供が背伸びをしているようにで微妙に微笑ましい。

その二人こそがクロノ・ハラOWN執務官に次ぐアースラの主力魔導師などと外見からは誰も予想できないだろう。

「すまないな、フェイト、なのは。まだ色々とゴタゴタしていて君

たちにレーダーの代わりみたいな真似をさせてしまった。レーダー機器が本調子ならこんなことにはならなかったんだが……」

僅かに自責の念を含んだクロノの謝辞になのはとフェイトは困ったように顔を見合わせた。

「気にしないで、クロノ。私がやりたいて言い出した事なんだから、それにおかげで大分本調子になってきたんだし」

「そうだよクロノくん、わたし達はアースラを直せないからこうやって出来る事をしたまでなの。あんまり気に病んじゃ駄目だよ？」

「ちっちゃ、二人とも甘いよ翠屋のケーキよりも甘い！。そうやって直接的に励ますと余計に頑張ったり思いつめて無茶をするのがクロノ君の生態なんだから」

「おいエイミィ、人を何だと思って「あれ、ライくん？」……は？」

エイミィに食ってかかろうとしたクロノの声をなのはが遮った。

しかし、アースラのスタッフに『ライ』などという人物はおらず、心当たりのない人物名にクロノは疑問符を浮かべる。

よく見ると、なのはとフェイト両名の視線の先には先ほどエイミィが表示した個室の映像がある。もちろんその個室の中で意識の無いままベッドで横になっているのはクロノが捕まえた例の騎士だけであり、そこからはじき出される答えは――――

「もしかして、二人とも彼を知っているのか？」

「うん、どこに住んでるかまでは分からないけど最近海鳴市に引越して来たらしいの」

「それに国語の宿題を手伝ってもらったよ。でもなんでライさんがアースラの艦内に居るの？」

ここ数日アースラ内のゴタゴタは主に情報整理と精密機器の点検など、戦闘魔導師であるなのはとフェイトは力になれない案件なので基本的に海鳴市での待機を命じていた。つまり、アースラが襲わ

れた事は知っていてもその犯人の素顔まで拝む機会には恵まれていなかったのである。

「二人とも、もう少し詳しくその話を聞かせてくれないか？」

海鳴市 大学病院

日が暮れるのも速くなって来た12月某日。

基本的な調度品は白系統で統一されたその個室には寂寥感あふれる夕陽の光が差しこみ、二人の影を病室の壁脇まで伸ばしていた。

「そっか、今日もライくんは来られへんの？」

「あの、ごめんなさいはやてちゃん。なんだか彼にも用事ができたみたいで」

「別にシャルが謝る必要はないで。やる事があるんは別に悪いことやあらへんよ」

そう言って気丈に笑うはやて。それでもここ数日、ライが全く自分の病室を訪れない事に多少の寂しさは感じているのだろう。病院のベッド脇に置かれた折り紙をそつと手に取る。

「ほんならライくんに伝えてや。『折り紙教えるって約束忘れてないか？』って」

「あ、はい。伝えておきます」

曖昧に頷いたシャルは病室の壁に掛けられた時計に視線を向け、席を立つ。

「あら、もうこんな時間。そろそろ帰らないと夕飯の準備が間に合わないわ」

「ん？夕飯の準備はライくんがやってくれるんじゃないか？」

「あつ、いえ、その……。食材の買い出しを頼まれていたんです、今日はカレーにするからジャガイモと肉を買って来てください、つて」

「ああ、そんなら早く帰ったがええな。じゃあなーシャル」

「さよなら、はやてちゃん。」

それだけ言ってシャルは病室を後にする。

はやてを安心させるために微笑んではいたが、内心は罪悪感と不安で一杯だった。半年間嘘をつき続けてきたが、ここでさらに嘘が増えたのだから仕方ない。

ライに用事が出来たから来れないなんて嘘だ。そもそも彼は今八神家に居ない。

料理の支度をライがするなんて嘘だ。調理役が居なくなってしまうた八神家の食卓は今となってはレトルト食品や冷凍食品がメインになってきている。

管理局の人間がそう簡単に捕虜を拷問にかけるとは思えないが、それでも身を案じるのは“家族”として当然の事だとシャルは思っている。

（それに、テストロッサちゃん達がすずかちゃんの友達だったなんて……管理局に素性の知られていないライ君さえいればこんな形で悩む事もなかったんだけど……）

海よりも深く胸中で幾度目かもしれないため息を吐く。

そしてさらなる心労の種がここ数日で追加された。

リンカーコアの蒐集の折に幾度となく立ち塞がった二人の魔導師―――実力的には決して侮る事の出来ない管理局の尖兵たる少女たちを騙し続ける事はかなりのリスクを伴う。

これらの要因全てを一人で捌かなければならないプレッシャーは

確実に精神的な部分に重石として蓄積している。

異世界でリンカーコアの蒐集を行っているシグナムやヴィータ、ザフィーラの事がシャルは内心羨ましい。

（私にもっと騎士として前線で戦う力があれば、なんてとんだエゴよ）

羨望と諦めのため息を吐きながらも、そんな事を考えてしまった自分を叱咤する。

（はやてちゃんに嘘を吐きたくないから、前線で戦いたい……なんてシグナムが聞いたら怒るでしょうね。

いや、私の戦場は”ここ”なんだからそんなに弱気になっちゃ駄目）

仲間が安心して帰ってこられるように、物理的な意味でも精神的な意味でも八神家を守るのが湖の騎士としての自分の使命なのだ。

そう思うと自然に力が湧き上がってくるような不思議な感覚に胸が満たされる。

「よし、そうと決まったらシグナムやヴィータちゃんが帰って来る前にお夕飯を作らなきゃ。なんでみんな私に料理させてくれないか分からないけど。冷凍物ばかりじゃ体に悪いから今日は私が頑張るわよ。ファイトッ私！」

瞳に強い決意の色を浮かべてグッと拳を握るシャルの横を怪訝そうな顔をしたナースが通り過ぎて行ったのであった。

「な、なんだ？一瞬寒気が」

岩塊の上で一時の休息を取っていたシグナムは敵襲か？と辺りを見回すが、周囲は見渡す限りの荒野。所々にポツポツと岩肌が顔を覗かせているが魔導師の隠れている気配など無い。

「どうしたんだシグナム」

「あ、いやなんでもない。多分気のせいだ」

「おいおい、あたし達ヴォルケンリッターの将がここまで来てついにボケた、なんてのは勘弁だぞ」

「失礼な、私はまだまだ戦える」

そんなシグナムの横で同じく休息を取っていたヴィータは呆れたような視線をシグナムに向けながらボソリと呟いた。

「冗談だよ、相変わらずの戦闘^{バトルマニア}狂だと思ったのは本当だけだよ」

「うっ、周囲に気を配るのは一将として当然の行為ではないか。：ランペルージが切り開いた勝機を詰まらない油断で潰すのは実に愚かだからな」

今現在彼女達が居るのは小さな次元世界の一角。

リンカーコアの蒐集を隠し続けなければならない対象である八神はやての入院は皮肉なことに、彼女達が蒐集行為に費やす事の出来る時間を増大させるための引き金となった。

一刻も早く闇の書を完成させて主を助ける――この、実に単純でそして強くまっすぐな思いを胸に秘めた騎士達の勢いは凄まじいものがある。

「ライの奴ははやてを悲しませるバカ野郎だけだよ、アイツのおかげで管理局はあたし達を見つけづらくなってるんだからそんなに気を張り詰めなくてもいいんじゃないのか？」

例の作戦を決行後、管理局の艦船の動きが決定的に鈍くなり、策敵範囲が極端に狭まった事実を述べながらヴィータが言う。自然と

ライに対する評価が酷評なのは訳がある。

「ふっ、お前も全部終わったらランペルージに鉄拳制裁を加える心算か？」

「冗談、あたしはシグナムと違ってそこまでしねーよ……でも、まあザフィーラまで鉄拳制裁加える側に回るとは思わなかったぜ。いつにもまして喋らねーからかなり怒ってるぜ、アレ」

「あれでも主を思う気持ちは強いからな……さすがの私でもランペルージの奴を哀れに思うぞ」

今は違う次元世界で蒐集に励んでいる盾の守護獣の事を思い出してシグナムとヴィータは軽く笑い合う。

腕力という点においては性別や体格的な部分で守護騎士随一の寡黙な彼が静かに怒る姿はそれほどまでにレアなのだ。

『必ず無事に作戦を終わらせて帰ってくる』という約束を破ったライに対する守護騎士達の見解は一致している。

つまり——『誰か一人欠けただけでも八神家は成り立たない——それを理解していない新参者にはそれを痛いほどに思い知らせてやる』——という一種のお仕置きである。

それが戦場で兵が士気を維持するためのジョークのようなものであるならばよいのだが、真偽を知るのはヴォルケンリッターのみだ。

まあ、『音沙汰がないのはライが自分達を裏切って管理局に売り渡したからだ』などという疑念が少しも浮上しないあたり守護騎士達は彼を信頼しているのであろう……それが彼の身の安全を保証するわけではないのだが。

「とにかく、さっさとリンカーコア集めて全部終わらせて……そしてらまた『みんな』ではやての作った温かいご飯を食べるんだ。」

幼いその外見に似合わず、遙か遠い空を見つめて呟くヴィータ。その瞳が願うべき幸せな光景を見つめているのか、もう思い出す事も困難な数百年前の記憶に向けられているのか——知るのは本人のみなのだろう。砂塵の舞うひゅうひゅうという音だけが数秒間の沈黙を強調していた。

「そうだな、それが我らヴォルケンリッターの最初にして最大の望みだ。

それくらいを叶えてくれないほど神も狭量では無いと信じよう」ほんのわずかに口元をつり上げてシグナムはヴィータの頭をわしやわしとかき撫でる。

子供扱いされたことに不満の色をありありと浮かべながらヴィータは言う。

「願いは神様に叶えて貰うもんじゃねえ、自分達で叶えるもんだろ？　そうベルカの古いことわざにもあるじゃねえか」

「それは英雄譚の締めに使われた台詞では無かったか？」

先ほどとは種類の違う静寂が二人の間に漂った。

「ええい、そんな細かい事はどうでもいいんだよ。もう休憩も済んだんだし家に帰る前にもっとリンカーコア集めるぞ！」

間違いを指摘されたことでふいと顔を逸らしてヴィータは飛翔用の魔法陣を展開し。苦笑しながらシグナムもその後を追う。

恒星が遙か地平線のかなたに消えた次元世界の空を二つの赤は舞う——己の夢をかなえるために——家族の温もりを守るために——

——『人』である事の条件が『心』ならば——

——『心』持たない人間は『人』なのか？——
——主に『心』をもらった人形は『人』になれるのだろうか？——

遙か昔、顔も覚えていない何処かの誰かが書いた物語の一節がそんな二人の『人形』達の心の間で少しだけ思い返された。

クリスマスまで残り僅か

——第八話 完了

第八話 願いは一つ（後書き）

あとがき

新年明けましておめでとうございます、年が明けても相変わらず低クオリティかつ微妙にボリウムだけはある駄作しか書けない駄作者ことライラです。

アニメ版のA・S時系列的にはもうそろそろ佳境なのであれこれとキャラの立ち回りを描写するのが大変です。リンディさんとかグレム提督サイドの心理描写も入れたかったのですが文才的にも尺的にもとんでもないことになりそうなのでカットせざるを得ないという……

微妙にライのリンカーコアに関する設定を公開とかしちゃいましたが、序盤の方で這っていた伏線の回収です、誰かが覚えているのかどうかは別としてww

まあ、中二臭いといわれればそれまでなんですがあれこれと未公開の設定のみはあるのでこれから少しずつ明かされていく……のでしょうか？↑問題発言

とにかく、自己満足かつ中二病臭プンプンの拙作でよろしければ今年も読んで頂けると嬉しいです。

第九話 目覚め（前書き）

大分待たせてしまいました。本当にすいませんorz

スランプやら受験やら風邪やらで、最悪なコンディションが続いたので全く筆が進まなかったんです。

それでもこれ以上更新停止が続くのはマズイと思った次第でして、急遽予定を変更して投稿しました。なので普段に比べて字数は少なめです。

こんなのでよければ感想や誤字脱字の指摘を下さると嬉しいです。

第九話 目覚め

遠いようで近い過去。懐かしくて愛おしいあの頃——色を失っていた頃の僕の表情を差してあの人は言った。

まるで能面のようなだった、と。今思えば当然なんだ、感情が無かったわけじゃなくて他人に興味を持てなかったんだから他者とのコミュニケーションに介する表情なんて必要がなかったんだ。

今の僕はどうですか？——そう聞きたくても、もう聞く事が出来ないのはとても悲しい事で……

第九話 目覚め

一定以上の階級の魔導師に割り当てられたアースラの個室で影がうごめく。

必要最低限の調度品しか置かれていないのは本人の趣味嗜好が無機質なわけではなく、そもそも長期の滞在を想定していないせいである。

本来なら明々と証明の光によって照らされるはずのその部屋が心なしか薄暗いのは、先のアースラ襲撃によるメイン動力炉の破損が原因だろうか。

「うふふふ」

そして、薄暗い個室のデスクで妖しい笑みを浮かべる一人の女性の姿はやけにマッチしているといえる。

先端のみが緑色に染まり、切れ長な金色が特徴的な女性。普段の彼女との相違点といえば、黒縁の伊達眼鏡をかけている点。視力が悪くもないのにメガネをかけるのはその女性——リルカ・プリウスがデスクワークに集中する際のスイッチの切り替え的な意味も果た

しているのだろう。

「好奇心は猫をも殺すって言う通りに、こうして裏を探る事にリスクは感じていたけれど……まさか本当に猫さん達に行き当たるとは思わなかったわ」

「エネルギー逆流の際、手当たりしだいにメモリを圧縮して保存していたのが功をそうしたということですね」

ここ数日間、他のアーススタッフに気付かれないようにシフトの合間をほぼ情報の解析に回していたリルカは己のデバイスのダグラスの言葉に、より一層妖しく微笑む。表向きにはクールビューティで通している常の彼女を知る人間なら数歩後ずさる迫力があるといってもいい。

否、妖しいというよりはただ単に徹夜に近い生活が続いた結果として脳内分泌物がおかしなことになっているだけかもしれない。

アースラのメインシステムにハッキングをかけた犯人が巧妙に履歴を改竄していたため秘密裏に解析作業を行っていたのだから無理もない。例えるならば藁の山の中から一本の針を探し出すようなものだ。それを寝ずに続けていたというのだからとんでもない執念だ。

「この情報を奇貨にすれば……私の昇進も一歩近づくというものだから……うふふふ」

「へとりあえず仮眠を取る事を優先して下さい。常のコマンダーらしくないと私は判断します」

どう見ても健常者がしないであろう危険な笑みを浮かべるリルカにダグラスも不安を抱いたのだろう。

「む……確かに、そろそろ眠らないと……まずいわね。私が眠っている間に呼び出しがあったら適当に取り次いでおいてね、ダグラス」

「了解しました。コマンダー」

ふらつく足取りでなんとかベッドにたどり着き。リルカは重力への抵抗を諦めたかのように倒れ込んだ。

ごくごく単純な『管理局の制服を脱ぐ』という行為もせずに倒れ込むあたり、かなりの無茶をしていたのが窺える。

「だけど、なんでリーゼ達がこんなことを？……それだけが、気がかりだわ。」

リルカの記憶にある限り、リーゼ・アリア、リーゼ・ロッテは教え子に慕われる良い教官だった。

彼女らの教え子の某執務官の言うとおり、性格に難があるが能力については問題無し。主のギル・グレアム提督と共に管理局に多大な貢献をしている。

リルカにはそれだけが気がかりで仕方がない。

〈それらは全て、仮眠を取った後に考慮すべき問題です〉

「それも……そうね……」

〈おやすみなさい、コマンダー〉

数秒後には規則正しい寝息の聞こえてくるベッドに向けて、音量を抑えた声でダグラスはそう言った。

*アースラ通路

「そういえばリルカはどうしたんだ？」

「先輩は今自室で待機。さっき通信を入れたけど睡眠中みたいだよ、クロノ君」

「意外だな、情報に目ざとい彼女なら跳ね起きてでも飛んでくると思ったが」

まあ出て来られても話が拗れそうなんだが、とクロノは呟く。

”数週間前”に捕縛し、今の今まで意識の回復する事の無かった次元犯罪者。偶然か必然か、なのはとフェイト両名のおかげで『ライ』という名前のみが発覚した青年の意識が回復したという報告を聞いたのだ。

そして、今までの行動から判断しても闇の書事件に深くかかわっているその青年の審問にはアースラの事実上のトップスリーであるリンディ・ハラオウン提督。クロノ・ハラオウン執務官とエイミ・リミエッタ執務官補佐の三名が出席することとなっている。

「あ、艦長、そういえばなのはちゃんとフェイトちゃんは呼ばなくて良いんですか？一応“彼”との第一接触者で直接的な面識が彼女達がありますけど」

「なのはさんとフェイトさんは確か月村ずかさんのお友達のお見舞いに行っているはずよ。細かい話は後で出来るでしょうし、今は呼び戻す必要もないわ」

クロノとエイミの前に行く形で進んでいたリンディ提督が振り返って答える。

長い若草色の髪を束ねて揺らす彼女はどう見ても一児の母には見えないほど若々しい。

「ああ、確か現地の宗教行事……“クリスマス”でしたっけ？フェイトちゃんに友達が増えたみたいで安心ですね」

「そうだな、転校前日の慌てっぷりからすれば大進歩だ。食べ物や喉も通らないほど緊張して、見ている方が心配になるほど縮こまっていたのからまだ一月も経っていないなんて信じられない」

まあ、今でも知らない人間の前では借りてきた猫みたいに大人しいわけだが。と内心で付け足すのをクロノは忘れない。

半年前までは殆ど他者との交流が無かったフェイトの対人関係についてはまだまだアースラスタッフ一同気苦労が欠かせないのだ。目的地到達までの少ない時間で交わす会話など大体がそんなものだろう。しかし、ここで艦のトップたるリンディ艦長はさり気なく爆弾を投下した。

「養子縁組の話が成立したらフェイトさんは義妹いもつとになるのだからあまり意地悪はしないでねクロノ執務官？」

「ええ、分かってますよ艦長よ……げほっげほっ!? 母さん、今のはどういう……」

口元に手を添えて、のほほんと発言する実の母にクロノは目を丸くする。普段は冷静沈着といえどかなり突然、しかも次元犯罪者の審問前にする話ではない。

（とういかなんでエイミーはさも当然のように知っていましたという顔をしてるんだ!?!）

自分の隣で「フェイトちゃんがまだ答えかねてるからね、やっぱテストロッサからハラオウンに名前が変わるんじゃないや違和感あるのかな?」と呟く執務官補佐にクロノは割と本気で疑問を抱く。実質家族のようなものとはいえ、せめてそういう家族構成に関わる重要な話は最初にしてもらいたかったのだ。

「フェイトさんの心中ではまだプレシアの件について色々と決着が付いていないみたいだから。話すのが遅れてしまったわ、ごめんなさいね」

「いや、まあ確かにデリケートな話ではあるけれど」

そう言われてしまうと色々追求しづらくなるのが事実。

半年前のジュエルシード事件でフェイト・テストロッサの母プレシア・テストロッサは虚数空間の内に、人工生命であるフェイトの

オリジナルと共に姿を消した。事実上の死と言い換えてもいい。細々とした話をしていけばキリがないのだが、その事件でフェイトは天涯孤独の身になった。

プレシアの手によって執拗な虐待を受けていたとはいえフェイトにとって今でもプレシアはまぎれもない『母』であり。本人の心境が固まらない状況で新たな『家族』が突然増えると後々精神的な部分に影響が出るかもしれないとリンディは危惧しているのだ。

となれば、そういったアフターケアは異性のクロノよりも同性であり人生経験も豊富なリンディやエイミィの方が適切というのも当然たる事実。

次元犯罪者との交渉や駆け引きに長けた執務官といえど、9歳児の繊細な心の扱いが得手では無い事くらいクロノも自覚している。

「で、結局クロノ君はどう思ってるのさ？」

「どう？……とは？」

横を歩くエイミィの問いかけにクロノは疑問符を浮かべる。

「フェイトちゃんが妹になることについて個人的にはどういう見解を抱いているのか、だよ。もしフェイトちゃんがハラオウン家の養子になるんだったら自動的にクロノ君はお兄ちゃんだよ」

「ああ、なるほど……」

今更『仕事中に関係の無い話をするな』と言える状況で無い事くらいクロノも把握しているのか、口元に手を置いてふと黙考する。

仕事に直接的な関係がないとはいえ、今後の家族構成に関わる重大な話だ、事務仕事をするとき同様、年齢に似合わず難しい顔になるのは仕方がないといえるだろう。

しかし、彼の内心では正直な話『兄』という単語にいまいち現実味が湧いてこない。幼いうちに父を亡くし、母も多忙な身であり、かくいうクロノ自身も一人っ子な上にかなり幼少のうちよりリーゼ姉妹の下で魔導の修行に励んでいたため同世代の友など居らず。そ

のため『兄妹』のモデルケースを殆ど見た事がない。

が、根は真面目なのでたつぷりと十秒間ほどの間をおいて彼なりの考えがまとまったのか、口元にやっていた手を離して正直に発言する。

「兄：というものの責務についてまだ何かと漠然とはしているけど、僕個人としては一応賛成だ。フェイトは魔導の才能も長けていて、努力家でもある、きつとどんな環境で育ったとしても管理局に入局して日々の糧を稼ぐ分には苦勞しない。」

それに芯も通っていてとても強い子だ、将来的に器量も良くなるだろうし気遣いも出来る良い子だ。だけど：『家庭』という安心して過ごせる空間を用意してやらないと人見知りで人一倍責任感の強いフェイトはきつと何もかも一人で抱え込んで無茶ををすると思う」

不器用なりに、半年間の間魔導師の先輩として時には助力をし。嘱託魔導師の試験の際には力量を確かめるための試験官もしたクロノはそう言う。

渡り鳥でも時には止り木で休まなければいつか失速して墜ちるのと同じで、いかに才気に恵まれていても精神的に支えがなければきつとどこかで歪んでしまう———そんな彼なりの思いの表れだったのだろう。

それを聞いたエイミィとリンディは目を見合わせ数秒間押し黙り

……

「クロノ君で意外に———」

「シスコンの気があるんじゃないかしら？」

「なっ！？ なななな、何を言ってるんだ！？」

真面目な空気を見事にブレイクし、思春期の少年の心をあっさり

と決る一言が飛び出す。なまじ本人が真面目に考えて出した結果だけにダメージは大きい。

しかし、あまりに強すぎる否定はそれで誤解を招きかねないため、クロノは無理やり話を本来の道筋に戻す事を選択する。

「ほら：無駄話は辞めです艦長、エイミー。もうすぐ拘留室だ」

結果、いつにもまして無然とした表情でツカツカと歩を進める執務官の少年が出来上がったのだった。

まあ、恥辱の余り耳が真赤に染まっている辺り本来の役職通りの威厳など微塵も感じさせられないわけだが……

（うん♪これだからクロノ君はからかい甲斐がありますね艦長）

（そうね、まあ息子の正直な意見が聞けたわけだし結果オーライだわ）

クロノがこのやり手の女性二人に勝てるのはまだまだ先になりそうである。

「うう……ここは？」

未だに朧気な意識を繋ぎとめたライは、よろよと上半身を起こし。首を振る。

頭上には真っ白で無機質な天井が、意識が途絶える直前には眼前に金属の床が迫っていた事を思い出し、ぼんやりと顔をまさぐってみる。幸いな事に鼻骨に以上は無い。

しかし、どういうわけか長い間体を全く動かさなかったかのように体中の筋肉がどうもぎこちない動きをするのだ。

とりあえず現状を把握するために周囲を見渡しても清潔感のある

白い壁があるだけでこれといって特徴のある調度品の類が見当たらない。

部屋に窓らしきものは無く、薄い液晶型ディスプレイのようなものが壁に埋まっている。

見ようによつては精神を病んだ犯罪者を収容する施設の一室にも見えないこともない。

そして現在、自分自身は病人の着るようなゆったりとした衣服を着せられており、腕や足には点滴用のチューブラしき物が刺さっている。

衣服をまさぐってもデバイスの月下が出てこないあたりで徐々に意識を失う前の状況との整合性が出て来た。

（そうか、僕は負けたのか？）

あの黒髪の執務官——クロノ・ハラオウン——に惨敗を結した事を思い出して自然と表情が曇る。

完全な惨敗だった。手数でも魔導の技能でも足元にも及ばなかったと言つてもいい、悔しさの為か僅かにライは唇をかむ。

（もとより安全に帰還できる可能性の方が少なかったわけだし仕方ないか：当初の予定通りアースラのエネルギー炉とアルカンシエルの無効化には成功した筈だし）

問題は、自分がどれくらい眠っていたのかだ。腕に刺さっているチューブは元をたどると何やら液体の入ったパックのような物に繋がっており。栄養失調の患者や、なんらかの理由で食物を摂取できない人間に栄養を与えるための物によく似ている。

それはつまり、ライ自身が長期間意識を失っていた事を意味するのだろう。肝心な容疑者が栄養を摂取できずに餓死したとあれば様々な問題が発生するので、管理局がこの処置を施したのは想像に難くない。

とりあえずライは腕に刺さっていたチューブを慎重に引き抜いて束ねて置く。もしもの時に動きを阻害させないためだ。

（一日二日意識を失っていたってだけじゃ無さそうだな。眠って

いた期間は少なく見積もって5日以上——殺傷性のレベルを極限まで下げられた非殺傷設定の魔法を受けて意識を奪われたのならいくらなんでも長すぎる)

そして何より自分がこうして無事に思考をして生きている事にいくらかの驚きをライは覚えた。

これだけ長期に渡って意識を失った事は……全く無いわけではないが。原因の一つに心当たりがある。

体内に打ち込まれた数十億ものナノマシン——こうしてアースラの襲撃を決行する折に、協力を得るための仮面の男との交渉条件の一つ。

どこまで本人の言った事が嘘か、真偽のほどは定かではないが。完全に不確定要素と言ってもいいライの動向を探り、裏切ったり情報漏洩の可能性が出るならば抹殺するための、まさに悪魔との契り

——
(別に好き好んで死のうってわけではないけど。捕まった以上わざわざ僕を生かしておく理由があるのか?)

可能性の話をするならば今の今まで意識が無かったのはそのナノマシンが原因だろう。しかしそこまで出来るのなら管理局にライが捕まった時点でナノマシンの遠隔操作によってライの命を奪っておくのが最も後腐れがないはずだ……

(それに、意図的に意識を奪われた居たのなら、なんで僕は目覚める?)

……まさか、口を封じておく必要が無くなったのか)

仮面の男が何を企んでいたかは知らないが、今更ライが口を割ったところで計画に支障は出ない。という段階に入った可能性がある。

と、そこで部屋の自動ドアが開き、数人分の足音が室内に入ってきたので思考は中断された。

「どうやら話は聞ける状態の様ですね。エイミィお茶の準備を」

「了解です、艦長」

反射的に身構えて臨戦態勢に入ったライの姿を見て、部屋に入ってきた女性は若草色の髪を揺らして微笑む。

後ろにはピヨコンと跳ねた所謂アホ毛が特徴の茶髪の女性と、仏頂面の黒髪の少年が一人。

女性二人が管理局の制服に身を包み、少年――まさにライを捕縛した張本人であるクロノ・ハラウンは黒衣を展開バリアジャケットしている。

ならば考えられる可能性はかなり絞られて来る。管理局からすればライは次元犯罪者、重要な事件に関する犯罪者にすべきことはそう多くない。

「尋問……ですか」

「せめて審問とか事情聴取と言ってくれた方がこちらとしては助かります」

少し、お話を聞きたいの。次元航行船アースラ艦長リンディ・ハラウン提督と名乗ったその人はそう言って微笑した。

第九話 目覚め 完了

第九話 目覚め（後書き）

『また見てギアス☆』

ライ…なんだろう、ここに出るのもかなり久しぶりな気がする。

作者…そりゃあ本編の都合とか、この形式より普通のあとがきの方が自分には向いてるんじゃない？と作者が悟ったり色々ありましたからねえ。

ライ…本当に責任感の無い人間だな…：まあ、それは別として今回はやっと僕が目覚めたわけだが？

作者…本当を言うとアース組との対談もしたかったんですが、読者の皆様も知っての通りA・Sはここから展開が次々と変動しだすので、今話と次話で展開のテンポを削ぎ落しかねないけれども作者的に必要だと思った描写を詰めて行く予定？です。

ライ…その前に作者は受験が無かったっけ？

作者…うぐうっ！まさにその通り。というわけで一段落つくまで更新は月一ペースか酷ければもっと間隔が開く可能性があります。本当にごめんなさい。

ライ…こんな作者でよければ見捨てないでくれるとありがたいです。

第十話 覚醒 THE BOOK OF DARKNESS (前書き)

いつも通り誤字脱字が凄まじいと思いますが、見つけた場合は報告して下さると嬉しいです。

バレンタイン？何ソレ美味しいの？

第十話 覚醒 THE BOOK OF DARKNESS

嘘、偽り、虚言、ホラ、デマ

大体どの人類文化においても道徳的に悪しき事だと教えられてきた『人を欺く』という行為。

昔読んだ童謡にも、人間になりたい人形が嘘を吐くと鼻が伸びてしまうというお話があった。つまり人間になりたくても嘘をつけば吐くほど人間の形から離れてしまうというわけだ。

まったくおかしい事だと思う、人は嘘を吐く生き物なのに嘘をつけば人から遠ざかってしまうなんて

——世の中には嘘であってほしい現実が山ほどある——そう考えてしまうのは、僕が生粋の嘘つきだからか。

それにしても、あの物語の結末はどうなるのだろうか？あの人形は人間になれたのだろうか？。最後まで彼女に読み聞かせる事ができずに、僕は居場所を失った——今はその事だけが悔しくて……

魔法少女リリカルなのはA・S銀月の王と夜天の主、始まります。

第十話 覚醒 THE BOOK OF DARKNESS

「僕を、拘束しなくて良いんですか？」

「厳密には拘束するのが規則なんだけど、それじゃあ落ち着いて話も出来ないし、何よりお茶も飲めないでしょう？」

それに、後ろで控えているクロノ執務官の実力はあなた自身、よく分かっている筈ですよ」

「はあ」

視界の端で黒髪の少年が構えた黒光りする魔導師の杖に注意を向

けながらライは曖昧に頷いた。その後、しばし続く静寂の時間と。日本茶独特のほのかな芳香がその場に居る人間の鼻腔を刺激する。

端的に状況を表すならば、リンディ・ハラウン提督と名乗ったその女性が用意していた緑茶を沸かしていて、付き従っていたクロノ・ハラウン執務官と、その補佐役であるエイミィ・リミエッタがリンディの後ろに控えて沈黙を保っている。これがライに現認出来る光景。

しかし、だからこそ彼は困惑を禁じ得ない。

(何を考えているんだこの女は？^{おんな})

目の前の女性は時空管理局の提督。ライ自身、管理局について熟知していると言い難いが、リンディの着ている制服の質と「提督」という役職から考えても現地レベルではかなり高い階級の人間なのだと推量する。そして、それだけの階級の人間が部下を引き連れて「犯罪者」と面会するならば何かしらの情報を得るため以外に現時点では考える事が出来ない。

(捕虜にどんな尋問が行われるかなんて、表向きの法やルールに必ずしも準拠しているわけじゃないだろう)

最悪、ライから引き出せる情報に価値がないと判断された場合、指示一つで「射殺」なんて事態にもなり得る。法やルール上で不可能でだとしても、書類上での出来事ならばいくらかの改竄は出来る筈だ。

もつとも、リンディに犯罪者とお茶会を開きたい——という奇特な願望があるならば話は別だが。

意を決して口を開こうと試みても——

「あの……」

「なにかしら？…あつ、もしかして猫舌だったりする？だったらお湯の温度は下げるけど」

「……いえ、問題無いです」

そう、ライは全くと言って良いほどこのリンディと名乗る女性の意図が把握できていないのだ。

（これは：試されているのか）

疑念に眉をひそめてみる。

（そう、もしかして既に尋問は始まっているのか？）

リンディ曰く“事情聴取”———この際にそんな言葉の違いは関係ない。

尋問と聞くと、ついつい力づくで情報を聞き出す拷問のようなものを思い浮かべるかもしれないが、実際にその方法は多岐にも渡る。例えば、人の体と言うのは意外に素直なもので、視線、手、脈拍、指先、口元、呼吸、動悸、筋肉の微細な振動……それら全てを総合的に心理学や生物学的観点から調査することで本人が嘘を吐いているか、だとかおおまかな心理状態を把握する事もある程度は可能なのだ。

そう考えてしまえば、手錠がされていないこともこうしてお茶会まがいの事をしているのも、尋問する側とされる側の心理的な壁を薄くすることで、『より自然な状態での行動』を促しているのかもしれない。

（そう：考えられる可能性の中ではそれが確かに候補に挙がっている、そのはずなんだが……）

ライ自身、過去には王として政治を行い、時には交渉のテーブルに自ら赴いた身である。そういった手段に関しては知識的にも経験的にもある程度は熟知しているつもりだ。

欲望と憎悪と裏切りと嫉妬、そういったドロドロとした負の感情が裏で渦巻く王宮で暮らしたことがあり、嘘の矛先を向けられた事のある彼自身にとっての処世術だと言ってもいい。

（だからこそ……何故この人の意図が読めないッ!？）

目の前の女性からはそういった《計算的な接し方》独特の無機質的な空気を感じ取れない。

となるとその行動を素で行っているのか、もしくは素で行っているように”見せかけている”のか……。

（まるで、本当にお茶を楽しんでいるみたいじゃないか。全く腹のう치가読めない）

覚えるのは恐怖か、疑心暗鬼か、厄介な事に敵方には「規格外」が多いらしい。

どちらにしてもリンディは大物だ、と内心でライは評価を付け加える。同時に自分を打ち負かしたクロノ執務官からは想像も出来ない母親だが……というレッテルも追加されたわけだが。

このままではいけない、ライがそう思って気を引き締めようとしたところで”それ”は起こった。

（……そんな馬鹿な！？何故緑茶に“そんなもの”を入れる！？）

何の前触れもなく緑茶の中に砂糖が投入される、それに次いでクリームが投入され、薄く澄んだ緑色をしていた緑茶は完全に白濁し僅か数秒で“緑”茶という一つの概念さえもリンディによって完全に破壊されてしまった。

甘ったるい匂いが鼻腔を刺激し、あまりのショックに眩暈を覚える。

その甘ったるい”元は緑茶だったナニカ”をさじでかき混ぜ、砂糖の溶け具合を確認していたリンディはライの視線に気付いたのか

「あら、待たせてしまったかしら？」

「い、いえ、おかまいなく」

「そう、ごめんなさいね。これがあつた方が私個人としては話がしやすく……」

もつとも、貴方みたいに聞きわけの良さそうな人が相手じゃないとこんなことは出来ないのだけど」

そう言つて僅かに悪戯っぽく微笑む。その笑みを見る限り自身が行なつた行動の異常性に関して含む所は何も無さそうだ。

（これが、これが？異世界”なのか？実は異世界人にとってこれが正しい緑茶の飲み方？

いや、まさかこれも”試されている？”

冷静に考えるならばそんな飲み方はしない、わざとそういった奇抜な行動を行つて僕の反応を伺っている……だとしたらこの人は……手強いぞ）

仮にも提督の地位に就いている人間なのだから侮る事は許されない。階級Ⅱ戦闘力などという単純な話ではない。提督という単語から連想するならばむしろこういったテーブルの上での戦闘の方に長けていると考えるのが自明の理。

そうやって一人で戦々恐々とするライを尻目に、「また艦長の悪い癖か」とでも嘆息したげな表情で執務官（クロノ）が呆れていたのは誰も知る由が無かつた。

結局のところ、リンディ提督がこうして空気をまるで読まないかのように話し合いの場でお茶を淹れるのは場の空気を掌握するための交渉術なのか、本人の趣味なのか……事の真相はリンディのみぞ知る、と言つたところだろう。

湯気の立つ湯呑が軽い音を立ててライの眼前のテーブルに置かれる。

実に幸いな事に”緑茶だったナニカ”はリンディの手元にしか置かれていない。

自白薬の類であることも考慮したが、そんなものを使うならそもそも最初から拘束したまま無理やり投薬すれば良い筈だ。

結果、目の前の緑茶は“シロ”だと判断して喉を潤すために一口だけ含む、仄かな苦みが口の中に広がる。

「さて、ではお話を聞かせてくれないかしら？　ライ・ランペルー
ジさん”」

「ッ！　どうして、名前を？……」

過去の記憶を探っても、管理局員の目の前で名乗った事はない。海鳴市に漂流してからもあまり多くの人間に自ら名乗った訳ではないし、そもそもこちらの地球は“管理外”だというのに管理局に所属する人間の数が多いとは到底思えない。

目の前のリンディはただ曖昧に微笑んでいるだけだ。どうしてライの名を知ったかなど明かす気は無いらしい

——タネを明かすならば、過去に一度、ライが海鳴市で接触した少女二名がたまたま管理局に協力している魔導師であったというだけの話。

しかしそれを知らない身からすれば、そうだとは思えない。相手の手札の内が全く読めないゲームほど恐ろしいものは無い。

ただの偶然でさえも交渉の場を己が有利に立つ為の切り札として扱えるのが提督たるリンディなのだ。

既に戦いは始まっている。こうした腹の探り合いの場において武力そのものに意味は無い。

剣を振るう臂力でもなければ、魔導を扱うための魔力でも無い、この戦場においてそんな物は一枚のカードに過ぎない、いかに力が強くとも使いどころを誤れば本来通りの効果は得られない。必要な

のは機転と、交渉を有利に運ぶためのカード。

そして切れるカードの枚数も立場も圧倒的に管理局が優勢。内心ライは歯噛みするしかない。

（使うか、ギアスの力を……いや、“使えるか？”）

——いかなる命令でも一度だけ強制できる王の力——

聴覚を媒体として相手に働きかけるライのギアスは、たった一言でこの場の主導権を握る一枚だけの切り札。そもそも対等なルールの産物ではないその力。

なぜか海鳴に来て以来ギアスは片鱗さえも見せていない。しかし“消えた”訳ではなく、依然としてその力をライは胸の内に感じている。唯一何か変化があるとすれば、まるで鎖か何かで封じられているかのように力を扱えない事だけ——

（だが、万が一ギアスを使えたとして、使ってしまったて大丈夫：というわけでもない）

そう、使えたとして完全に暴走してしまえば何の意味もない、それをライは痛いほどよく知っている——それこそ過去に最愛の家族と自分の居場所を代償に知り得た教訓なのだから忘れようはずもない。

となれば憶測や推論でしか動けない現状で使って良い手段では無い、そうライは判断する。

（様子見……しかないか）

後手に回るという愚策しか選べないなら、その分打開策を見出さしかない。

「僕が答えられる事なら何でも答えますよ」

まずは、先ほどのリンディの問いに対する答え。好感触に聞こえてもその実「答えたくない事には答えるつもりは無い」というささやかな皮肉。まあ、アースラ襲撃の折に仮面の男と交わした取引では、下手に核心に迫る情報を流せば命の保証は無いと脅されている

ので仕方がないと言えなくもない。

その言葉の意味を汲み取ったかどうかは別として、ずっと黙っていたクロノがリンディに代わりライに問いかける。その隣でエイミイ執務官補佐が空中に浮いたパネルに指を走らせているのはこの事情聴取の内容を録音する為だろう。

「君は何者なんだ？ いや問いかけ方が悪いな……正確には”何故闇の書の蒐集に協力している？”君自身は闇の書のプログラムでは無い、協力する義務なんて無いはずだろう」

「家族を守るため、恩を返すため、としか答えられませんね」

なんとも戯けた返答だとライ自身も思うが、事実その通りなのだから仕方がないのだ。

ヴォルケンリッターや、八神はやてという少女が完成した闇の書の力を使って次元世界の転覆を企むような分かりやすい極悪非道な人格の持ち主だったらこんなな悩む事も、命をかける事も無いのにと苦笑せざるを得ない。

「その結果として数多くの人間が傷つく事になるとしてもか？」

「……」

淡々と口を開くクロノ。意外だ——ライはそう思う。

（今更そんな質問に意味は無いだろうに）

一度刃を交えただけでも、聡明な執務官だというのは何となくだに分かる。だからこそ、そんな良心の呵責を誘うような安っぽい手を使う事に疑問を抱く。

（そんなことも分からないで自分達が蒐集を行っているとでも思っていたのか？ 分かっているにしても他に手段がないからこうして管理局を敵に回しているんだ）

「答えはイエスです。僕も、ヴォルケンリッターもそれに関しては

理解もしていますし、時が来れば全て償うつもりです」

「償う？つまり自首するという意味に捉えても構わないか」

「ええ、それが守護騎士達の総意です。とは言っても闇の書が完成した後……ですが」

それを聞いた瞬間、場の空気が変わった。

いつライが逃亡の意思を示しても捉えられるように構えていたクロノは眉を潜め、事情聴取の記録を取っていたエイミーは複雑な表情を浮かべ、白濁した緑茶に舌鼓を打っていたリンディ提督は「やはり」とでも言いたげに残りの二人とアイコンタクトを交わす。

（どういう事だ？……管理局は何か知っているのか？）

敏感に空気の変動を感じ取る。

世間の情報から切り離されたような錯覚。この場に居る自分以外は全員知っているのに自分だけはそれを知らないという疎外感——まるでこれから悲劇的な出来事が起こるという周知の事実を知らない哀れな道化でも見ているかのような……

そこでライの内心を見透かしたかのように唐突にリンディが口を開く。

「もしかしくなくても貴方は知らないのかしら？」

「カマなんてかけなくてもいいですよ、おそらく僕はあなた達の言わんとする情報を知りません。誤情報で理想誘導するなら今の内ですよ」

「随分と私達は信用されていないようね。そこまで頭の回る相手にハッターが通用するとは私も思っていないません」
「すいません、これが性分なもので」

もしも自分が商人ならとっくの昔に破産しているだろうな、とライは胸中で苦々しげに独白する。

重要な情報から取り残されるということはこういった場において

最も忌むべき事だ。銃弾と剣の活躍する戦場では一瞬の油断が、情報が行き交う場では肝心な情報の有無が生死を分けるのだ。この場合気をつけなくてはならないのは、何も知らないという事実を好機と見て都合のよい情報をリンディが吹きこんでくる事。

もしそうなれば、?どんな情報が管理局にとって最も都合よく働きかけるか”にさえ気をつければある程度は嘘を見破ることができる。

「では単刀直入に言いましょう。闇の書は度重なる転生を繰り返していく過程で壊れています。

このまま闇の書を完成させたら“闇の書の主は死にます”闇の書の闇に吞まれて、それこそ跡形もなく…」

「なっ!そんな……だって——」

ライは絶句する。リンディの口から出たのはあまりにも残酷で予想外な言葉。

(もしもそれが本当ならば、僕たちは、僕たち自身の手ではやての首を絞めていた事になるじゃないか!)

「嘘だと思うなら、過去の資料映像でも見れば良い。ついでにユーノへ回線をつないでくれ、エイミィ。」

「はいよ」

恐らく信用されていない事は理解しているのだろう。クロノがてきぱきとエイミィに指示を出す。

十秒も待たないうちに何も無い空間にモニターが現れる。現時点の地球の技術では到底到達不可能なその技術に驚愕する暇も余裕もライには無かった。

まず映し出されるのは、様々な怪物。その内のどれも巨大で醜悪という点を除けば外見に全く共通点が見受けられない。

古代に滅んだ恐竜を思わせる頭部を持ったものもあれば、B級ホ

ラー映画にでも出て来そうな怪物を混合したような異形フリークも居る。

背景に関してもバラバラだ。ライの知りうるかぎり地球の文明では再現不可能な建造物が映っている物もあれば、純粹に文化体型が違うのだと理解出来るような奇怪な構造物も――――

そして、そのどれもが倒壊し、炎に炙られ、黒煙が空を汚していた。それらが、過去に見たゲッターの廃墟をライに自然と連想させた。

否。過去に自身が作り上げてしまった光景を彼にフラッシュバックさせる。

あまりにも凄惨な光景を映し出す幾つもの光景をバッグにクロノは淡々と誰かの名を呼ぶ。

「ユーノ」

彼の目の前に映し出されたのは過去の映像ではなく、一人の少年を映し出していた。年齢はおそらく二桁に達していない、見ようによつては少女にも見える金髪の少年はどこか小動物的な印象を見る者に与える。

ユーノ―――そう呼ばれた少年は若干不機嫌そうにクロノの呼びかけに答えた。

『ああ、言われなくても分かってるよ。ええと……ライさん？でしっけ。管理局に保存されているのはここ百年程度の映像です。』

無限書庫にはそれ以前の古い記録もたくさん残っています。自動転生型大容量ストレージな上に歴代の主の一部は書の内容を秘匿していた節もありますから様々な資料に点々としか名前を残していませんけど、それこそ古代ベルカの……俗に言う聖王時代前後から――――

そこでふとユーノが言葉をとぎらせて空間モニター越しにライの表情を伺う。

無理もない、この少年からすればライは全くの初対面な上に世間的な立場は「犯罪者」なのだ。リアクションがなければ不安にもな

る。

実際のところ、先ほどからずっとライが無言だったのは、突如明かされた膨大な情報を脳内で吟味していたという事もあるが、すらすらと少年の口から出てくる単語の幾つかに馴染みが無かったためである。

「あ、いや、続けてください」

『ええと、それでですね複数回の転生の際にシステムの根幹に支障が出たのか、もしくは過去の権力者たちによるシステムの改変が原因なのかはハッキリとしないんですけど、闇の書は完成すると主の魔力と生命力を際限なく消費してしまうんです』

そこでもう一度ユーノは口をつぐんだ、先ほどの不安からくる静寂では無い。どことなく、酷な運命を患者に告げる医者のような重苦しい雰囲気モニター越しからでも伝わってくる

『闇の書……いや、夜天の魔導書は壊れているんです。』

元々は魔導を記録し、次元世界を旅して数多くの人に魔導の知識を分け与える……最初はきつとそんな役目を持っていたんでしょ。う。だけど今となっては破壊をもたらす事しかできない。そのことをヴォルケンリッター達はきつと知らないんです』

そこまで言い終えて、ユーノが映っていた通信回線用のモニターは閉じられる。数秒、いや数十秒の沈黙が再び狭い個室を覆った。

嘘だ——そう叫んでしまいたくても、ライにはそれができなかった。

何よりも、数多くの証拠と歴史が事実を裏付けしている……いや、そもそもそれらの情報が本物であるという証拠は無い、全てが自作自演だとしてもライにはそれを確かめる事が出来ない。しかし、ヴォルケンリッター達が使えてきた過去の主の事を——闇の書が完成した後の事をほとんどライに対して明かしていないのはある意味ユーノと言う少年が最後に残した言葉の信頼度を上げてしまう。

だが、認めたくないという気持ちも彼の中には確固としてある。

辛くても、悲しくても、それでもいつかきつと『優しい色』が戻ってくる。そう信じて彼は刃を握ったのだ。守護騎士達も戦いの先に希望が待っていると信じることが出来るから心身をすり減らして闘って来たのだ。

（こんなの……同じことの繰り返しじゃないか!!）

戦いの先に真の幸せがあると信じて戦った結果、暴走した大きなギアが民を殺し、国を滅ぼし、家族さえも奪った。

彼女達の話が本当ならまさに同じ悲劇の再演になる。

気が付けば、ライの手の内にあった湯呑の中の緑茶はすっかりと冷め、波立つ水面には蒼白な彼自身の顔が投影されている。

ほとんど喋らなかったライはその重たい口を開く、かすれた様な声が出そうになるのを必死に自身で抑制し、平常心であることを装う。

「助ける方法は……闇の書の呪いを解く方法はあるんですか？」

あくまでもこの場合は犯罪者への事情聴取の場。懐柔の可能性を考慮した警戒心が四割、藁にもすがる思いが六割ほど込められた疑問をライはリンディ達に投げかける。

最初に口を開くのはリンディ。

「今でも仲間が無限書庫のデータを調べているけど、まだ確実な方法は見つかっていないわ」

次に口を開くのはクロノ。

「可能性がゼロというわけではない。だが、方法を発見する前に闇の書が完成してしまえば全てが水の泡だ。そのためには君に全てを話してもらう必要がある」

これは、あまりにも危険な賭けだ。

リンディ達を信用しても、助かるという保証は無い。それどころか騙されている可能性もある。

もしそうだとすれば、ライが全てを明かした数十分後にははやての入院している病院へ局員が大挙して押し寄せ、闇の書の主として拘束して行ってしまう。それは要するに八神家を売り渡す事を意味している。

ライの頭脳は——過去に数多くの政治家や王を騙してきた合理的で非情な部分は、管理局を信用するなど警告を発している。

ライの心は——優しい人達との触れ合いで本来の人間らしさと『色』を取り戻した部分は、目の前のリンディ達に全てを委ねようと告げている。

この選択肢は、一歩間違えば再び彼の居場所を『破壊』する爆弾に繋がった導火線のようなもの——ドラマなどでよくある赤と青の導火線を選ぶなどと言う虫の良い話と一つ違うのは、どちらを選んでも全てが破滅する可能性がある事。

彼の内に仕込まれたナノマシンが仮面の男の指示一つで命を喰らうために牙をむくかもしれない事も忘れてはならない。

やがて、一つの決心が付き。ライは声を発する。

「僕は……ッ!？」

「おい!どうした!？」

しかし、その声は最後まで言い終える事は出来なかった。

———また、全てが終わってしまった———

精神通話と似ているようで何か違う——悲痛な女性の声が脳内に響き渡る。

(この声は…前にも、神根島で眠りに就く時に聞いた?)

朧気だった記憶が突然クリアになる。そう、ライをこの世界に導いた、助けを求める声によく似ている——

思考する間もなく、激しい圧迫感が彼の胸の内を締め付ける。

「ぐっ!」

まるで頑丈な鎖で直接心臓を締め付けられるような感覚——八

神家のベッドで目を覚まして以来ずっと共にあった不思議な感覚の突如の変貌。息をする事さえも困難なその感覚にライは吐き気を覚える。

数十秒ほどでその圧迫感は弱まったが、それでも胸の内の違和感が消えたわけではない。

「一体どうしたんだ？何があった？」

「いえ、分かりません」

その場で事態を把握していないクロノの問いにそう答えるも、心のどこかでは確信に近い物をライは覚えていた。

（そう……これは）

『艦長、大変です！海鳴市内で巨大な魔力反応出現！』

突如艦内に響き渡るアラートと、リンディの目の前に開かれた通信回線から聞こえる狼狽した男性の声がその確信を答えに変える。

「そう、ランディ。映像をこっちに回せる？」

『結果展開前の僅かな映像なら……海鳴市内の二名と通信が取れなかったのでレーダーの感度を上げた甲斐がありました』

冷静に回線の向こう側の男性オペレータにリンディが指示を飛ばすと、数秒後にはライ達の目の前に一つのモニターが現れる。

映っていたのは――――

墨を溶かしたような黒翼を背から生やした一人の女性。

肌は白磁のように白く、銀色の髪も曇天を背景に揺れ、その細腕にはタトゥーのように赤い線が幾筋も這い。漆黒の騎士甲冑を纏ったその腕の先に在るのは見間違えう筈の無い闇の書。

その女性の真紅の双眸の奥に宿るのはどこまでも深く、見る者を不安にさせるほど純粹な絶望の『色』

周囲にあふれ出す濃密な魔力は、映像越しにでもその女性に宿る魔力の総量が桁外れである事を暗に示している。

その映像を見た瞬間、誰もが悟った。

ああ、手遅れだったのだ。と――
闇の書が完成してしまったのだ、と――

クリスマス・イヴの夜に、闇は目覚めてしまった

――第十話 完了――

第十話 覚醒 THE BOOK OF DARKNESS (後書き)

『あとがき』

はい、どうも、毎度おなじみヘタレ作者のライラです。

もうここまで来るとA・S編もクライマックスな訳ですが、まあ受験勉強も忙しくなってきたのでこんどこそしばらく活動停止の可能性があります。待っていて下さる方がいたらスイマセン

相変わらずまとまりの無い文で心理描写と心理戦なんて凄く駄クオリティな訳ですが、ライの葛藤を皆様に伝えられたらなあと思っています。

ライにとつては『嘘』というのは切っても切り離せない存在だとライラは考えています。

そもそもライという名前は英語のライアーを語源にしているのと、ギアスという作品はたびたび『嘘』を題材にしている（と私は思いこんでいる）ので当然と言えば当然な訳ですが（笑）

それでは皆さん、次回もよろしく願います。

第十一話 前編 罪の重さ（前書き）

非常にお待たせしました。第十一話です。

書きたい事をうまく描写出来ずに悩みまくった結果、予定した文章量を上回りそうな雰囲気なので前後編に分ける事になりました。感想やご指摘待っています。

第十一話 前編 罪の重さ

まただ、また……これで何回目だろうか？もう数えるのも疲れてしまった。真の名前を失ってからずっと続いてきたサイクルの繰り返し。

幾度もの転生、長い戦争、散っていく命、そして守護騎士を道具として扱う主……今回の主もそうであれば、それも長い記録の1ページとして、摩耗した私の心は処理していたのだろう。

だが、此度の主はあまりにも優し過ぎた。守護騎士達にとって主と過ごす時間は未だかつてないほど平穏に満ち、それこそ守護騎士達が心から忠誠を誓うほどに……長い記憶の中でもこれほど異質な主はそうそう居ない。

しかし、必要な事や忘れてたくない事はいつも記録から抜け落ちて行く、沈殿するのは陰鬱な過去だけだ。

僅かに残されたシステムの抜け道に託したたった一度の反逆も——ランダムに選ばれた並行世界の少年にもこの呪いは解けなかった。

世界に『色』など必要無い。親愛の情など深ければ深いほど失った時の絶望が大きいだけだ。期待なんてするだけ無駄なのだ、何もかも最終的には私の手で碎いてしまう——いつそのこと、この運命に心を委ねてしまえば楽になるのだろうか？

完全に壊れてしまえば楽になる——全部壊してしまえば楽になる……せめて最愛の主には幸せな夢を見て貰おう

「海鳴市を中心に広域結界展開！……過去に確認されたものとは出力が桁外れです」

「高町なのは民間協力者及びフェイト・テスタロッサ囑託魔導師は結界内に閉じ込められた模様、闇の書の管制プログラムと戦闘に入った可能性大！」

「封鎖結界発生直前にユーノ・スクライア民間協力者とアルフ両名の結界区域への侵入を確認、合流した模様！」

「格納庫より伝令！アルカンシエル修復率五割、未だに使用可能ラインに到達せずとのこと」

「本局に魔導艦船の増援を申請、受理されましたが現地への到着は半日ほどかかるそうです！」

アースラ艦内に鳴り響く第一種警戒アラームの中オペレーター達が数々の情報の中から優先順位の高い物を次々と読み上げる。

状況は間違いなく最悪。オペレーター達もそれを理解しているのだろう、自然と声に狼狽や焦燥が混じっている。

「エイミィは至急結界突入班を結成して、小さな穴でも良いから外部と内部を繋げられれば増援は送れるわ。」

アレックスとランディは現地との通信網回復に尽力して頂戴！
「「了解しました！！」」

誰もが内心動揺と困憊しているのを抑えつけている状況で、決して良いとはいえないそれらの情報を全て冷静に処理していく若草色の長髪の女性はリンディ・ハラOWN提督。

手元に握られているのは白濁した”元”緑茶が入った湯呑が握られているのはつい先ほどまで犯罪者に対して行っていた事情聴取の名残――すっかり冷めてしまっただけ湯呑の底では砂糖の結晶が沈殿していることだろう。

『管制プログラムとの戦闘はなのはさんとフェイトさんに任せて。』

これよりアースラ所属の魔導師は二人の援護を主としたA班、位相結界から海鳴市に及ぶ可能性のある影響を最小限に抑えるB班に班分けして作戦行動に移ります』

艦長の声は機械を通じて、アラートの鳴り響く艦内に整然と響き渡る。

待機している魔導師達への班分け、そしてその班の構成を再三告げる。これだけで時空管理局所属の魔導師達は己の役目と今起きている事態を把握し、奮起し、行動に移ることができる。それは有能な指揮官への信頼の表れ――

海鳴の異常警報から約数分、実戦を知り、功績の積み重ねで提督の位置まで上り詰めたリンディのなめらかな声には焦りと言う感情など余分だとも言わん限りに場馴れした者特有の空気を孕んでいた。

それが、部下達の間で混乱や恐怖が伝染する事を抑制しているのだ。

それは、管理局の方針に影響力を持てるほどの立場を虎視眈眈と狙っている彼女――リルカ・プリウスにも痛いほどよく理解できる。「ああ、考えられるうちでは最悪じゃないの、実験小隊もA班配属だし、指揮権は私に回ってくるし……一生の不覚だわ」

長い長い溜息について、リルカは寝癖の取れない髪を触る。

睡眠中に叩き起こされて飛んできたのだろう、隠しきれない疲労感から妙な哀愁が背中から漂っている。

心底忌々しげに毒づく彼女は、部外者に対して常にクールビューティを気取った仮面も剥がれかけている。

幸いにも彼女が吐いた毒は転送待機ルームに整列している他の出撃待機中の魔導師には聞こえなかったようだ。

彼女が、毒を吐きたくなるのも無理は無い。

（ええい、このままだと数日分の睡眠時間と左遷の危険を冒してまで手に入れた情報が全部パーじゃない！闇の書は完成前に抑えなきゃ何の意味も無いってのに）

情報、とは数週間前にアースラの混乱に乗じてリルカが入手した某大なデータの山の中から見つけ出された『仮面の男』の正体に関する情報を指す。かつての恩師、リーゼ・アリアとリーゼ・ロッテ：そして必然的にバックボーンとして存在しているであろうギル・グレアム提督。高官を目指すための功績という点ではこの三人を独力で捉捕らえる事が出来れば、それは表向きにも裏向きにも大きな意味を持つ。

否。それだけならば先に誰かにリーゼ達の身柄を押さえられないかぎり挽回の機会はまだあるだろう。

しかし、彼女の狙う本当の真意は他に在る。彼女のみに非公式な形で『技術部上層部』から与えられた任務。書類上は形に残る『昇進への一步』にしかならない功績ではなく、書類には乗らないがその任務をこなせば『昇進を約束される』という実においしい功績が手に入る。

——すなわち、完全起動前の闇の書から可能な限りの情報を『秘密裏に』引き出す事——

既に廃れた古代の技術。誰の記憶からも忘れ去られた古代ベルカの文化。それ単体がリンカーコアを有し、単独行動を可能にし、使用者に莫大な力を与える次元世界最高峰のデバイス——ユニゾンデバイスに関する情報が闇の書には記されているのだ。

（ユニゾンデバイスの量産化へのノウハウなんかが見つかれば万々歳なんだけど、それももはや取らぬ狸の皮算用ってやつね）

その危険な任務をこなし、それらの価値ある情報を持ちかえることができればリルカは時空管理局技術部内での圧倒的な速度での昇進が各役される筈だった。

何故彼女がそうまでして権力を欲しがるか——それはまた別の話である。

（ああ、クソったれ。正攻法かつ独力でリーゼ達を無力化するなんて到底無理だし、そもそも配置的に考えて無理があるでしょうが。やっぱ、無難にキャリア積んでいくしかないのかなあ？）

現在進行形で迫っている97管理外世界の危機とは別に、最短の昇進ルートが閉ざされかけている危機に内心泣きたい気分でぼやく……というよりは既にちよつと涙目だ。

単純に魔法戦の経験においては管理局の精鋭クラスが集まった武装隊の面々など足元にも及ばず、教官官として教鞭を振るっていた彼女達はこの場に居る魔導師達の使用魔法の特性や癖までもを熟知している。そうやすやすと捕まえられる筈がない。

「うおおおお！！蘇る闇の書、次元世界の危機、何が何でも守らなければ。燃えるぞおおおお」

「うっさい！！とりあえずお前は黙ってなさい！」

——場違いにもほどがある奮起でテンションをマックスにまで跳ね上げた（頭の方が）不出来な部下に魔力弾を撃ち込みながら

———少しだけ時間は戻り、場所は海鳴市へ———

空一面は鉛色の雲に覆われた曇天。日も沈み、世界は重く冷たい夜の時間を迎えた。

しかし、人の営みは——街の明かりは闇を切り取り、人工の理想

郷を作り上げた。そして、宗教観の薄い日本でも盛大に祝われる行事——クリスマス——に向けて盛り上がる活気の恩恵もあり海鳴市も例外なく派手な電飾や飾り付けが商店街には見られる。それは、夜の闇さえも人々の娯楽ムードを加速するためのアイテムとなっている事を意味する。

そんな街の賑やかさから少しだけ離れた閑静なビル群——そこで人知れずに一つの闇が広がっていた。

「デアボリック……エミツション
闇に……染まれ」

肌を切りつけるような寒風が吹き付ける中、長い銀髪を揺らし、紅の双眸に絶望の色を湛えたその女性——闇の書の意味、名もなき管制プログラムはぽつりと呟く。

風にかき消されてしまうほど小さく、か細くとも透き通ったその声は、その実凶悪な魔導を発動するためのトリガー。

彼女の声に呼応して、付きあげた手の中で収束していた漆黒の球は、それこそ爆発的と言っていい速度でその濃密な闇の直径を広げて行く。その効果範囲では莫大な魔力の奔流が内に存在する者に対して吹き荒れているだろう。

いかなる光もその闇を照らす事は出来ず、逆に吞まれて儚く消える。

並みの魔導師ならば、荒波に飲まれた玩具の小舟の如く抵抗さえできずに散っていく。それはもはや局地的な天災。

広域空間型攻性魔法——デアボリック・エミツション
しかし、天災と違う点があるとすればその事象が闇の書の管制プログラムの手によって意図的に引き起こされている事だ。

それこそ、巨大な飛竜種や軍の殲滅に用いられるような危険な魔

法が、” たった二人の少女” に向けて放たれたものだと事情を知らない者からすれば到底考えられない。そんな異常事態――

そして、ある意味ではその事態を引き起こす最後の一押しをした二人の人影が、そこから数百メートルほど離れたビルの上で静観の姿勢で立っていた。

顔を覆う白いマスクに、全く同じ衣装。そして客観的に見た体格も同じ型に入れて精製された人形のようにウリ二つな二人組。

その二人組が、高町なのは、フェイト・テスタロッサの姿に魔法で”化けて” 今回の闇の書の主――八神はやて――の目の前から全ての大切な物を奪い去った結果があの光景。

少女の大切な家族は目の前で友だと思っていた者達の手によって消され、絶望の底に叩き落とした。

「持つか、あの二人」

「暴走開始の瞬間までは持ってほしいな」

それだけの行爲を行った後だというのに男の声はどこまでも空虚だった。いや、空虚を装っていた。まるで：そうでもしなければ良心の呵責に心が押しつぶされてしまうかのように。機械的に全てを終わらせてしまおうとした結果がそれだったのだろう。

――だからこそ、二人は魔導師の接近に直前まで気付く事ができなかった――

「「!？」」

夜の闇の中ぼうっと光る薄水色の色をした粒子が二人を包みこむ。それが、魔導の遠隔発動の前兆だと気付いた瞬間には手遅れ。

光の粒子と同じ色をした幾重ものバインドが仮面の男達の身動きを封じる――――

なんとか拘束を解こうとあがいても、バインドは地面に展開された魔法陣ごと二人の身体をその場に縫い付ける。仮面の男の視界に映るのは

薄い水色のミッドチルダ式魔法陣——複雑な構成式の下に組み上げられたその魔法陣に何か付与効果がある所までは分かっていてもバインドを解除することができない。

この時点で男達は悟った、自分達の警戒をすり抜けて接敵し、即座に拘束・戦闘力を削ぐ事の出来る魔導師などそう多くは無い。そして、艦船アースラに所属している一人の少年はそれができる数少ない例だと——

「ストラグルバインド：相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する」
見上げた先に浮遊するのは予想通りの少年、黒い髪に黒い防護服バリアジャケットを展開し、その昔母から授かったストレージデバイス—S2U—を構えた執務官。クロノ・ハラオウン

「あまり使いどころの無い魔法だけど。こういう時には役に立つ」

感情を押し殺したように言い放つクロノは、手の内でS2Uを回転させ遊行僧が振るう錫杖の如き勢いで足元に打ちつける。ただし、響くのは堅いコンクリートと魔力を流し込まれた杖がぶつかり合う鈍い音だったわけだが——そのアクションをトリガーとして、ストラグルバインド本来の効力が発動される。

「変身魔法を強制的に解除するからね」

「「うわああああ！」」

徐々にバインドが放つ光が強くなり、それに対応したように仮面の男達は苦悶の呻き声を上げた。

いや、”男”ではない。一瞬、仮面の男達の輪郭がブレる。そして、それを皮切りにまるで脱皮でもするかのように男達の姿は変貌する。

精悍な体つきは、少女のような丸みを帯び、纏っていた衣服はクロノがよく知る女性たちが着用していた管理局の制服へと……

唯一残ったのは二人おそろいの白い仮面。それだけが変身魔法の生み出す幻影ではなく実態を持った現実だったのだろう。だが、正体を隠す最後の砦であった仮面さえも着用者達の顔を離れ、落下。

正体を暴かれた事から、身動きを封じられた身体で――猫耳を生やした、ギル・グレアム提督の優秀な双子の使い魔達は憎々しげにクロノを睨みつける。

「クロノ…このお」

「こんな魔法：教えて無かったんだけどなあ」

二人の喉から響くのはもはや青年の声ではなく、少女のそれ。

「一人でも精進しろと教えたのは君たちだろう。アリア：ロッテ」

リーゼ・アリア・・・リーゼ・ロッテ

クロノの魔導と接近戦の師にして、ある意味では家族のような存在だった二人。

「リルカが君たちの事を探っていたみたいだが、僕の手で捕まえる事が出来て良かった。師の不始末は弟子として片づけたい」

そう静かに言い放つクロノの声に含まれていたのは、その現実が嘘であってほしい、何かの冗談であってほしい、という一種の期待だが、執務官として彼は現実には立ち向かわなければならぬ。法を守り、ルールを守り、人を守る身は時として己の私情を斟酌から外さねばならない事もある。大衆に好かれる情にあふれた英雄は所詮偶像に過ぎないのだから――

時空管理局の一室にて――

捕獲されたリーゼ姉妹が主であるギル・グレアムの元へ連行されるのはある意味当然。

部屋の外は武装した局員が固めているものの、一刻を争う緊急事態でありクロノ自身もあまり時間に余裕がないのでこまかい手続きを一切すっ飛ばしている。

つまり現時点でかろうじてグレアムは提督の地位にある。いざ彼らが逃走を図れば多くの局員は躊躇するだろうな、と一瞬考えながらもクロノは目の前のソファに座る初老の男を見つめる。

ギル・グレアム提督——偶然にも高町なのはと同じ97管理外世界——地球——出身の、いわば『突然変異』の魔導師であり。その技能も臨時で教導官を務める事の出来る使い魔二人を従えていることから折り紙つきである。

白い髭を湛え、穏和な老人そのものの外見と、その目に浮かべる隠居人のような達観した色。

クロノは今でも彼が闇の書の復活に手を貸した理由が理解できない。それを確認するために、口を開く。

「リーゼ達の行動は、あなたの指示ですね。彼女達がアースラ襲撃の手引きをした件についてもおそらくあなたの支援があつてのことでしょう……グレアム提督」

「違う！クロノ」

「あたし達の独断だ、父様には関係ない」

リーゼ達が父には罪がない、自分達の意味で行った犯行だと告げる。もうこの時点ではば“黒”

主を思い、慕い、同調する使い魔だからこそその宣言。いつの間にか彼女達の本質がどうしようもなく歪んでしまったのでは？というクロノの危惧も杞憂に終わる。どこまでも彼のよく知るリーゼ達の行動だった——

だからこそ、主の失脚に繋がりがねないような犯罪にリーゼ達が自ら手を染める筈がない。

「ロツテ、アリアもういいんだよ。クロノはもう、あらかたの事は掴んでる。

違ukai?」

そして彼の知るグラムも長年連れ添ってくれた使い魔に罪をなすりつけるような人間ではなかった。

クロノは一度、湧き上がる雑多な感情を抑えながらも、静かに口を開く。

「十一年前の、闇の書事件以降。提督は、独自に闇の書の転生先を探して居ましたね？」

そして、発見した。闇の書の在処と、現在の主、八神はやてを」

それがどれだけ大変な作業だったか、クロノには想像も出来ない。闇の書が強大な魔力を保有するリンカーコアの主の元へと転生する事は過去の事例からも明らかだ。だからといって、ランダムに転生する闇の書を、起動まで見た目はただの風変わりな本に過ぎないそれをこの広い次元世界から探し当てるなどあまりにも非効率的すぎる。

「しかし、完成前の闇の書と主を抑えてもあまり意味が無い。主を捕らえようと、闇の書を破壊しようと直ぐに転生してしまうから」
そんなクロノの言葉を聞く最中、グラムはただ瞳を瞑って俯くだけ——刑の宣告を受け入れる罪人のように粛々と黙っている。

「だから闇の書の監視をしながら闇の書の完成を待った

見つけたんですね？闇の書の永久封印の方法を」

「両親に死なれ身体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが。運命だとも思った……それだけ、悲しむ人も少なくなる」

「あの子の父の友人を騙って生活の援助をしていたのも……提督ですね」

「永遠の眠りに就く前くらいせめて幸せにしてやりたかった……偽善だな」

真っ直ぐに瞳を向けて来るクロノの視線から、逃れるようにグレアムは俯く。あるいは——人として最低な行為を行おうとしていたグレアムにとってクロノが眩し過ぎたのかもしれない。

グレアムとて罪の意識に苛まなかったわけではない。彼は管理局員として何回も、家族を亡くして悲しむ人間を見てきたはずだ。

しかし、だからといって闇の書の主である以上はどんな事情があるうとも計画を決行しなければならない。そんな良心の呵責が生み出した結果が……はやてに偽りでもいいから幸せな時間を与えようという『逃げ』

それが——十一年間、罪と義務感の重さに耐え続け、必死に膝を折るまいと奮闘して来た老人の姿。

クロノの心の奥で渦巻くのは、ずっと慕っていた提督に対する失望か、怒りか——それとも『こんなはずじゃ無いこと』だらけの世界の摂理に対するやるせない気持ちか……それは彼自身にも判断できない。

ただ一つ分かるのは、予想外な事に口を開いた時に出てくる声が怒りに震えることもなく——不自然なまでに事務的で平坦だった事。

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて次元の狭間か……氷結世界に閉じ込める。そんなところですね？」

「そう、それならば闇の書の転生機能は働かない」

静かに黙って頷くグレアム。瞑った瞳の内で何かが思い返されているのか、それともただ無心なのか……

そんな中、リーゼ達だけは必死に反駁する。

「これまで闇の書の主だってアルカンシエルで蒸発させたりしてんだそれとなんにも変わらない！」

「クロノ、今からでも遅くない。あたし達を解放して。凍結がかけられるのは暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ！」

リーゼ達の主張に頑としてクロノは首を縦には振らない。

「その時点ではまだ、闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない……違法だ」

誰が聞いても法の上では全くの正論で……ある意味では全くの愚論。放っておけば結果的に闇の書の主は本人の意思に関係なく大犯罪者になってしまう。それが歪んでしまった闇の書の呪いが行き着く先。

それがロッテを逆上させてしまったのだろう。

「そのせいで！！そんな決まりのせいで悲劇は繰り返されるんだ……そのせいで……クライド君だって……あんたの父さんだってそれで！！」

「ロッテ……」

すぐにグレアムに自制を促されて表面上は大人しくなる。

しかし、今の感情の昂ぶりこそが彼女達の行動理由を暗に示してしまった。それに気付かないクロノではない。

（やっぱり……父さんか）

闇の書の最後の犠牲者。そして最後の瞬間まで管理局員でありつづけたクロノの父。クライド・ハラOWN

クライドの最後を看取る、という表現方法は正しいとはいえないが。彼と最後に会話を交えたのはグレアム達だと聞く。

当事者にしか分からない葛藤と責任感と悲しみと……一抹の恨み。もしくはクライドの最後の表情や言葉から別の何かをグレアムは感じ取ったのかもしれない。

（それが十一年という期間をかけてこんな形に……ここにも闇の書の被害者が居たんだ）

残された家族だけでは無い。いや、残された家族であるクロノやリンディが居るからこそ、責任感は多大な重圧としてグレアムの肩に蓄積し続けた。

「法以外にも提督のプランには問題があります。まず、凍結の解除はそう難しい筈です。」

どこに隠そうと、どんなに守ろうといつかは誰かが手にして使おうとする。

怒りや悲しみ、欲望や切望……そんな願いが導いてしまう。人の気持ちは時として大きな力と結び付く、良いか悪いかは別として一番あなたが分かっていた筈でしょう」

これ以上提督の哀れな姿を見たくない、そんな意識からかクロノは背を向けて喋るしかなかった。

ただ俯いて罪を受け入れる、かつてクロノが憧れて目指した提督の姿はすでにそこにはなく、あるのは時の流れと罪の重さで擦り切れて衰弱してしまった老人の姿だけ――

「現場が心配なので、すいません。一端失礼します」

「クロノ――」。

「はい？」

会釈をして、部屋を出ようとするクロノに、そのとき初めてグラムムの側から立ち上がり声をかける。

ずっと視線を逸らし続けた提督は、その時初めてクロノと視線が合う。

「アリア。デュランダルを彼に……ついでに例のデータも」

「父様……でもあれは」

「わたし達にもうチャンスは無いよ。持っていたって役に立たん。それに、あの少年は解き放たなくてはならない」

幾ばくかの逡巡があったようだが諦めたようにアリアが、特殊な魔法銀をベースに蒼の装飾が施されたカードと一つの携帯端末を差し出す。

カードは、おそらく凍結用の術式特化型高性能ストレージデバイスの待機状態。

しかし、携帯端末の方は？

「提督：これは？」

「氷結の杖、デュランダルと。」

例のライ・ランペルージと名乗る身元不明の少年、いや青年かな？に注入したナノマシンの制御装置だ。元々は重病患者のバイオハイモニクスを把握するためと、安楽死させるための医療用ナノマシン。白血球に擬態するからアースラの機器でも観測出来なかっただろう。

これを使ってわたしはあの少年を”無理やり”従わせていた。封印前にアルカンシエルを撃たれると厄介なのでね、命令してアースラを？襲わせた”」

「父様！！だってそれはあたし達の独断で！？」

「いいんだ、彼もある意味では今回の件に巻き込まれた被害者。これで罪が消える筈がないが、裁判の時には少しでも有利に働く」

「僕がそれを信じなかったらどうします？それに彼もそんな甘い逃げ道を拒絶するかもしれない」

「わたしが黒幕を主張し続ける以上は明確な証拠でも無いかぎりそれを覆す事は出来ないよ」

どう見ても『無理やり従わせた』のくだりは嘘。しかし、クロノはそこにそれ以上口を挟まなかった。グレアムの瞳がもっと重要な事を話そうとしている時の瞳だったからだ。

「もしかして提督は彼の出自を突きとめて？」

しかし、グレアムは期待にこたえられなくてすまないと呟いて静かに首を横に振る。

「いや、どんな手を使っても一月前八神家に現れた以前の経歴を確かめる事ができなかった、何処かの機関でずっと培養されていた人

造魔導師にしては人間味があり過ぎる……もしかしたら次元漂流者なのかもしれないな。

だが、問題はそこじゃない。彼のリンカーコアが……いや、魔力の源が堅牢なりミッターのせいで機器でも調べられないのは君も知っているだろう」

「ええ、アースラの医療機器では手も足も。魔力素を取りこまずに魔力を放出している事と、あのリミッターが闇の書と同じプログラムで構成されているであろうことしか……あれは異常です」

「そう、異常なんだ」

そこでグレアムは一つのモニターを映し出す。だが、あまり極端な専門分野に疎いクロノには理解ができずに疑問符を軽く浮かべる。精々あのナノマシンを通して得たハーモニクス情報とアースラの機器が調べ上げた情報から何か導き出した、程度の事しか分からない。

「彼は、自分で“魔力を生み出してなどいない”」

そして、年老いた提督は一つの事実を打ち明ける。その事実の裏付けになるものはおそらく実に専門的で十一年間闇の書を追い続けて研究して来た結果の副産物だがね、と苦笑しながら。

「闇の書と主の繋がりと、使い魔と主の魔力供給リンクとも違う

エネルギー

“繋がり”を通して”もっと大きな何か”から魔力の供給を受けているんだ。要するに魔力の精製機関というより彼は備蓄機関のようなものなのだろう。

どうしようもなく異質……いや、わたしは恐れているのかもしれないな。」

「恐れている？」

理解不能な力に対する根源的な恐怖というものは付き物だが、長年管理局でロストログアに関わってきた提督がそう簡単に臆するとも思えない。

「いや、忘れてくれ。個人的な感想だよ……彼のような人間ほど何をやらかすか分からない。だから、気をつけろという話に過ぎない

んだ。

とにかく、デュランダルは君に託す。賢い判断を行う事を願っているよ」

クロノの手の内に待機状態のデュランダルと携帯端末を握らせてグレアムは静かに言う。

最後の最後、どうしようもなくなったらクロノが闇の書の永久凍結を行えという示唆。クライド・ハラオウンの遺族としての闇の書に対する負の感情を刺激するような言葉。

——手の内にて鈍く輝くカード、全てを凍結し、ゲームを終わらせる最後の切り札——それをぎゅっと握りしめてクロノははつきりと発言する。

「期待しても無駄ですよ提督。僕はこれを闇の書の封印には決して使わない」

「時には撃つ覚悟も必要だ………というのは君に罪を背負わせようとするわたしに言えるセリフでは無いな、すまない忘れて——」

「違います」

「どうということだい？」

自身の発言があまりにも虫が良すぎると、自己嫌悪の念を僅かに含んだ声で謝罪するグレアムをクロノは手で制す。

そして、ゆっくりと首を振って——

「時には“撃たない覚悟”も必要です。罪の無い子供を犠牲にする覚悟なんて僕は絶対にしない！」

最大公約数的に多数の人間の命を救う義務のある執務官の立場としてはある意味失格なその決意の言葉。

「そう…か。成長したな、クロノ」

「………」

孫の成長を見て喜ぶように、突飛も無い夢を聞いて苦笑するよう

に、辛い現実で擦り切れてしまった老人は微笑む。

彼は、もう一度正義にあふれた夢を見ようとしているのかもしれない。過去にそうだったように。

その姿を網膜に焼き付けて、若い執務官は無言のまま部屋を後にした――

一方そのころ、リンディ提督の計らいなのか手錠で手首を拘束されたライは指示の飛び交うブリッジの隅、局員たちによって転送ポートと呼ばれている円柱状の物体の脇に直立していた。

半刻ほど前、クロノ執務官がその『転送ポート』なるものに飛び込み、次の瞬間には淡い光に包まれて消え去った所を見るとそれは名の示す通りにライの知る転送魔法と同じ役割を果たしているというのは想像に難くない。

そして、最新の情報を求めているライにとっては幸いにも、この場なら現状で起きている情報を得る事に苦労はしなかった。

管理局の制服に身を包んだオペレーター達が次々と読み上げる情報の数々を繋げていけば現状を把握する事は容易――それこそ最悪の事態だという事も把握した。

ついでに、高町なのはとフェイト・テストロッサという聞き覚えのある名と、見覚えのある少女らがバリアジャケットを纏い空を舞っている映像にかなり本気で驚愕したわけだが、それはひとまず置いておく。

もうここまで徹底的に証拠を見せられるとリンディ達が嘘を吐いていなかった事を認めるしかない。何より、オペレーター達の上げる必死な声や、戦場特有の張り詰めた空気がそれを裏付けている。

たかがライ一人の為にこれだけの人数のプロの役者を用意しているというわけでもなければ闇の書の覚醒は疑いようの無い厳然たる事実。

そして、現時点でライに出来ることなど本当に限られてくる。

こうなった今ではもはや管理局を敵視する事には何の意味もなく。拘束され、武器も無い犯罪者の身では逃亡さえままならない。

眼前のモニターに映るのは闇の書の管制プログラム。はやてを内に取り込み、放っておけば死なせてしまうであろう存在。

（だからといって何もしないまま、全てに絶望してただ傍観している事が最善じゃない！

考えろ、何故僕はブリッジなんて場所に居る？何故リンディ提督は利があるわけでもないのに僕をここに置いている？理由もなくこんなことを————

……………なるほど、そういうことか。まったく、人を使うのがここまで上手いと逆に空恐ろしいものだな）

パズルのピースがはまって絵が現れるように、たどり着くのは一つの推測————。

こんな非常事態にわざわざ犯罪者をブリッジに招く理由がない。だが、それは自発的にライが“どう動くのか”を試しているとも取れる。

内心何を考えているのか測りかねているのは双方とも同じだったのだ。口約束で協力を申し出てもライは子供では無い、管理局側からしてみればアースラを襲撃したライはいつ裏切るか分からない不穏因子に過ぎない。だからこそリンディはあえて、包み隠さない本当の情報が飛び交うブリッジに彼を招いた。

今、この事態を正しく認識し『協力する』と言えば、必然的に危険な戦場に志願して行く事とほぼ同義だ。保身や身の安全や裏切り

を第一に考える人間ならば協力なんてまずはない。

そして『守護騎士達や闇の書の主と言う“家族”の為に闇の書を蒐集していた』という建前が本当ならライが間違いなく自ら協力を申し出るとリンディは踏んでいたのだろう。すなわち、決して裏切らない協力者となり得るかどうか見極めるために――

（言動ではなく、行動で示せ……か。

とっさに起きたイレギュラーをここまで上手く策の内に構築するとは……なんて厄介な人だ。）

もちろん、これはただの推測な上に、ライが一人協力したからと言って事態が好転する保障などどこにも存在しない。だが、リンディが協力を待つ姿勢ならばライには最初から用意ができている。

「リンディ提督、あれだけの事をしておいて今更虫の良い話かとは思いますが。僕にも協力させて下さ――」

「ちょっと待って」

「は？」

「元”緑茶に厚いお湯を注ぎこみながら、リンディ提督は出かけたライの言葉を途中で遮る。

そして、若草色の髪をそつと揺らしながら――

「あなたから協力を申し出て来て、それをすんなりと管理局員として受け入れると思っっているんですか？」

一犯罪者の提案にそうやすやすと乗ってしまったとしても何かあったら。それを考えないほど私達も無能ではありません」

「いや…それは――」

全くの正論だった。

結局、推測は所詮推測に過ぎなかったのか、と己の無力さに歯噛みするライを可笑しそうに見つめて。リンディ提督は管理局のポケットからそつと何かを取り出す。

「だからこれはこちら側からの一方的な通達。もしくは取引と捉えて貰っても構いません。

今だけでもいい、この事件を解決するためにあなたに力を貸してほしい。

もしもあなたの助力で何か解決できれば、あなたの罪を少しだけ軽くできるかもしれないわよ」

「なるほど……司法取引と言うわけですか」

示された言葉の意図を掴んだライは、にやりと笑い。リンディ提督も悪戯っぽく微笑む。

その手を開いた先には、ライの見慣れた菱型のUSBメモリのような物——待機状態の月下先行試作機——が中心に埋め込まれた桜色の石を淡く点滅させ始める。

〈網膜検査……クリア。指紋検査……クリア。身体的特徴の一致を確認。完全再起動完了——〉

お久しぶりです、ライ様。どうやら腹の探り合いは完膚なきまでに貴方の負けの様ですね、ここは素直に負けを認めた方がよろしいかと」

「ああ、完全にしてやられたよ。自信はあったんだけど、こういうのを百戦錬磨とでも言うのかな」

数週間ぶりに出会った愛機の手厳しい判断に苦々しげに呟きながら、頭痛でもするかのようにこめかみを押さえる。

リンディはライの事を試してなどいなかった、最初からライが協力を申し出るとどこかで確信していたのだろうか。でなければ修復された月下がここにある筈がない。

（最初から僕はこの人の掌の上で踊っていたって事なのか。

テーブルの上での戦いは圧倒的に向こうが上手だし……ああまったく。バカらしくなってきた。

普段なら皮肉の一つでも言いたい所だけど、今はその余裕も無さそうだな）

結局、最初から選ぶべき選択肢は一つしか無かったのだ。半ば自

棄になりながらもライは最大限の敬意を払うつもりで黒の騎士団式の礼をして声を張り上げる

「これより僕は時空管理局に協力させて頂きます！」

第十一話 前編 罪の重さ（後書き）

『あとがき』

なんでこんなにクロノ君が出しゃばってるのか自分でも時々不思議です。

まあ、ちょっとだけ伏線？の回収をしようとした結果の成れの果てがこれですね。グレアム提督の独白みたいなのも入れたかったのですがこれまた尺の都合でカット（泣）さりげなくスザクの台詞（うる覚え）をクロノの台詞に織り交ぜましたが気付いて頂けたでしょうか？

さて、次回こそは初代リインフォースこと闇の書の意味戦に突入の予定です。

あまりにもなのは&フェイトが描写出来ずに行き詰る今日この頃…
…誰か助けて。

第十一話 中編 剣の重さ（前書き）

世間は今、地震のせいで大変な事になってますが、はたして自分はこんなことしていても良いのか？

そう思ってしまうですが、出来ない事をするより出来る事をする方が良い。と、とあるお方に教わったのでこうして投降する所存です。

募金でも何でもいいので出来る範囲で日本の為に頑張らしましょう。

第十一話 中編 剣の重さ

海鳴市——市街地

漆黒の夜空を金色と桜色の閃光が切り裂き、鮮やかに色取っていた。

断続的に溢れる二色の光の奔流は、時折その中間地点で分散、はらはらと火の粉のような光の粒子が真冬の夜空を雪の代わりに舞い散り、大気に溶けて染みわたるように消えてなくなる。

それだけ切り取ってしまえばこの世のものとは思えない幻想的な光景——

何も知らない第三者が見れば花火と誤認しても仕方ないようなその光景も展開された結界の内部では地上から見上げる者は殆ど居ない——

そう、断続的な閃光を撒き散らす光華は、並みの魔導師などとは比べ物にならない魔力量と技量を兼ね備えた者達の激闘の果てに生まれる副産物に過ぎない。

そして、市街地から数百メートルほど離れた商用ビルの屋上に事の次第を見守るように立つ女性は、『知っている側』の人間。

「バリアジャケットの一部再構築……は無理か。どうせマトモに直撃したら着ているのがバリアジャケットだろうと寝巻だろうと一撃昏倒だから関係ないけど」

大胆にも左肩部の白い肌やうなじがバツサリと露出したバリアジャケットを気にしながらも、管理局所属実験小隊隊長ことリルカ・プリウスはため息をつく。

闇の書の完全覚醒に伴って出現した管制プログラム——それと

の戦闘を行っている二人の魔導師の援護の為に数十余人の武装魔導師の指揮の一端を任された彼女の表情はどことなく暗い。

原因の第一は、『それだけの大戦力を任されながらも直接的な戦闘には介入していない』事。そう、それだけの戦力があってもただの『援護』しかできないというこの異常な状況と異常な敵。

蒐集した魔導師のリンカーコアの魔力と情報を蓄積する闇の書の管制プログラム——蒐集した魔導を自由に行使し、ただの人間やデバイスには到底不可能な大規模演算も瞬時に行えるというその異常性ゆえにどう低く見積もっても戦闘技能は魔導師ランクに換算するとオーバースからSS。

そんな相手に苦戦しながらもなんとか拮抗している二人のAAAランク魔導師。

その拮抗した状況に活路を見出すための策としてリンディ提督はこの戦力を投入した。

リルカ率いる魔導師部隊の平均ランクはAやBが大半。最初から勝てるなどと内心思っていないが、自分達の援護が何かの役に立つ……最初はみなそう思っていたのだ。

「広域殲滅魔法による一掃を避けるために、数十人の魔導師は二、三人の少数部隊に分割。配置の距離も十分に取った、完璧な遊撃包囲陣形の完成だったのに……」

被害を最小限に抑える為の陣形。完璧というのは、慢心ではなく客観的な事実として本当であった。

だが、それでも全然？足りなかった”。それを思い出してリルカは憂鬱を加速させる。

たった一度、管制プログラムはその紅の双眸で長距離より狙撃魔法で援護を図った魔導師達を一瞥しただけだった。まるで五月蠅い羽虫でも睨みつけるように——そこには何の悪感情も優越感も

無かった。ただ無機質に事実として捉える、そんな目。

そして激戦の中、片手間程度に魔力スフィアを複数精製。後は、そこから放たれた幾条もの閃光——長距離速射砲型攻性魔法が海鳴市に分散展開していた魔導師部隊の大半を直撃。

『……こちらファインズ三等空尉：分割部隊の大半は戦闘不能。：私もかなり危ない状況』

『そう、こちらリルカ。部隊の再編と負傷者の救出を最優先しておいて』

指揮官としてのリルカに入ってくる連絡の念話は大体どれも似たり寄ったり。リルカ自身、先の攻性魔法が『かすった』だけでもバリアジャケットの一部が強制的に『持って行かれた』。直撃ならば間違いなく昏倒していた。

（最悪どころかもうここまで来ると悔しいって感覚さえも湧かないわ）

露出した左肩を身も凍るような寒風が撫で、身震いする。いや、先ほど眼前に飛来した漆黒の攻撃魔法を思い出して恐怖した結果かもしれない。

どんな強敵でも、弱点や特性を把握して策を練り、的確に指示さえだせばある程度は善戦出来ると彼女は思っていた。しかし、今回の相手に関してはそんな定石など全く通用しなかった。

数だけ集まった魔導師の群れなど、闇の書の意思からすれば高速戦闘中に“ついで”程度で処理できる雑事に過ぎないのだ。それほどまでに一方的で、己の無力さを魔導師達に噛みしめさせるには十分な力量の差。

これが全次元世界でも5%ほどしか居ないと言われているAAAランク以上の戦技者達の戦闘——そこに余人が介入出来る余地など一片たりとも存在しなかった。

幸いにも、第二射は無い——ただ単に、労力を費やすほどの優先順位にリルカ達が居ないだけかもしれない。現時点でこれ以上の追撃は全くの無意味。いや、無価値だと判断されたのだろう。

（戦略的撤退もやむを得ない……か。そんな甘い逃げ口上に乗っても誰も責められない。何よりも命あつての物種なわけだし）

無駄に交戦して悪戯に戦力を消耗するなど愚の骨頂。

（だけど、年端もいかない子供に全てを任せてコソコソ敗走することを望むような賢い魔導師ヘタレなが居ないってのはなんとも……本局のエリートが所属するもんだと思ってたけど、意外に武装隊の連中つてのも莫迦の集まりね。）

胸中で呟いて自分に寄せられる念話の数々に意識を傾けてみる。

『指揮官！！俺たちに何か指示を！』

『こんなんじやあ家族に示しが付かねえんですよ』

『げほっ、娘と同じくらいの女の子が戦ってるのにこんな所で寝てられるかよ！』

『先陣こそ武人の誉れ！先輩！どうか自分に活躍の機会をオオオオ！！！』

『放っておいたら何も知らない人達が犠牲になるんですよ！』

『元々武装隊に所属した以上平和に死ねるなんて思ってたねえです、みんなそれは同じなんすよ』

そのどれもが熱く、若い声だった。仮にもエリートの集い……戦況を把握出来ない筈もないだろう。事実、誰もが声に死地に赴く戦士のそれに酷似した決意が滲んでいた。

勝てるかどうか、などではない。彼らはみなごく普通の家庭や家族……そんな何気ない幸せを守るために入局した人間だ。

——たとえば管理局の人間でも、平和の為に死ななければならぬという義務は無い。彼らにも権利はある。その上で導き出された答え——

それらの声を聞いて、リルカは――――

『お前達……』

指揮下の魔導師達に飛ばす念話の声も自然と震える……だが、直ぐにそれを仕切り直して続ける。

『一山いくらの雑魚やモブの集まりが何、大口叩いてんのよッ！
適材適所、能力に対して見合った仕事をこなすのが賢いやり方っ
てもものでしょう？』

『『『なっ！？……』』』』

バッサリと切り捨てた。賢くはあっても人として色々と問題のある発言で場の空気を完膚なきまでに一刀両断する。

だが、実際に言っている事は正し過ぎた。いくら管理局が次元世界の正義の象徴であっても末端の局員がそれぞれ掲げる正義の下に行動してしまえば組織として管理局は成り立たなくなってしまう。
第一、今彼らが強靱な意思を携えて特攻しても、高町なのはやフェイト・テストロッサの足手まといにはなっても、助けにはなれない。
少なくとも今の流れで時機は訪れない。

『だけど、その莫迦に免じて戦略的撤退は取りやめてあげるわ。』

全隊、動けない人員は後方に下がれ！動ける人員は各自分散して海鳴市外周部に展開しなさい！

各自観測した地形情報や気候を逐次最適化、チビツ子達のデバイスに送信して照準補助装置程度の役割は果たせ、お前達の実力と闇の書の実力の差を考えればこれが最低限の譲歩よ。間違っても援護射撃をしようなんて言う莫迦な正義感は振りかざさように。

以上！分かったらさっさと行動に移せ、時間はあまり残ってないわよ』

返事など聞かなくても分かっているので念話の回線を遮断して大

きくため息を吐くいた。

（はあ、男は莫迦な位が丁度良いって聞くけど。限度ってものがあるでしょうに。必要な事を必要な時に必要なだけこなす

——身の程をわきまえない莫迦が身を滅ぼすだけってのは定石なのに。

……ま、嫌いじゃあ無いわね………ん？）

臨時的な現場指揮官を任されたリルカの周囲には、戦況を知らせる為の空間モニターが常時展開されている。

そして、海鳴市市街地のマップ上で不自然な動きをする光点が一つ。不自然な動きとは、具体的にいえば闇の書の完成プログラム目がけて一直線に疾走していること。

守護騎士達は皆、取り込まれた現状で思い当たるケースはあまり多くは無い。

「ちっ、命令違反の大莫迦が一人。どこの誰よ、縄付けてでも連れ戻し———」

現場に最も近い魔導師に連絡を入れようとした矢先に。秘匿回線アースラが突然開く。回線番号から推測するに本拠地からだろう。

『もしもし、こちらリンディ。プリウス一等空尉、聞こえますか？』

「はい、聞こえます」

『今そちらに、協力者。あなたの小隊を襲撃した例の子が到着した筈だけど、敵じゃないわ。だから好きにやらせちゃって』

「はあッ！？、唐突に何なんですか！

あ……切られた。何なのよ、もう少し説明くらいあったっていいでしょう。はあ」

展開された結界のせいで通信が困難な状況でわざわざ回線を繋いでくるのだからそれだけ重要な事なのだ。そう思い表情を引き締めていたリルカは、もはや呼吸と大差なく行えるようになってきたため息をもらした———

＊

「デイバイン、バスタアア！」

高町なのは自慢の砲撃が、力の奔流が射線上を桜色に塗り潰す。

愛機にして想いを力に変える魔導師の杖から排出されるのは用済レイジングハートみになったカートリッジと余剰エネルギーを逃がすための魔力煙。

少女の不屈の心を体現した砲撃の威力は、それこそ広い次元世界の中でも上位に入る。それはもはや、一少女の……いや、一人間の有すべき破壊力ではない。

しかし、それでも尚“届かない”

「盾よ、阻め」

砲撃の向く先、最終到着点に悠然と浮遊していた闇の書の管制プログラムは緩慢な動作で女性的な細腕を射線上にかざすだけ。

それだけで、展開された防御魔法陣は力の本流とぶつかり合い、打ち勝つ。途方もなく緻密で強固、そして莫大な魔力の供給を受けたその盾は砲撃魔法を防いでも一切の揺らぎも無ければ、構成に綻びも存在しなかった。そして、防御の次に回ってくるのは攻撃——

「墜ちろ」

管制プログラムの紡ぐ短い言葉をトリガーにしたように、防御魔法陣に回していた魔力が突如指向性を持つ幾百もの鋭い碎片に変貌し、広範囲にばら撒かれた——なのはには名前も分からない無名の魔法。もしかしたら即席で構成を作り上げられた可能性さえある攻撃魔法が殺到する。

「きゃっ」

「なのは、危ない！」

回避行動に移り損ねたなのはの手を掴み、加速する人影。そして、一瞬前までなのはが浮遊していた位置を管制プログラムの掃射が通

過する。

白い杖に白いバリアジャケットを身に纏うのはと対照的な黒いバリアジャケットと黒いマント。閃光の戦斧を握りしめるのは高町なのはの大親友にして嘱託魔導師として管理局に籍を置いている少女――フェイト・テスタロッサ。

「ありがとう、フェイトちゃん。おかげで助かったよ」

「どういたしまして、なのは。でもやっぱり…すこし辛いね」

「うん。少し…ね」

次元世界中の魔導師の中でも上位五パーセントに含まれるAAAランク魔導師である二人の少女は一瞬だけ視線を交わして戦況を確認する。

実際のところ、先ほどからこれと似たような一進一退の繰り返しで、全くと言って良いほど進展がない。いや、むしろ状況は不利になりつつある。

なのはは己の有する高い空間把握能力を活かした全方位誘導弾と高威力砲撃魔法で中・遠距離のレンジを担い。フェイトは高機動を活かした一撃離脱戦法と攻撃魔法の射速を活かした近・中距離を担う。

団体戦の正規訓練を受けていない二人だが、不思議と息が合うのは単純な相性の問題でも無い。それこそ背中を預けるに足る絶対の信頼から生まれる固い結束力。

だが、それも恐らく、長くは持たない。

いかに内に秘める意思が強くても、二人の少女は人間。某執務官に『バカ魔力』と称されるほど大きい魔力量を持っていたても、それは所詮人間の範疇のそれに過ぎない。魔力が大きくても無限ではない以上いつか限界が訪れる。

そして、魔力と体力の消耗を前提とした戦況の拮抗では、あまりにも条件が悪すぎた。

「わたし達が闇の書さんを止める！はやてちゃんを助けるんだ！
泣いて、苦しんで、それで全部終わっちゃうなんて……そんなの
哀しすぎるよ」

「うん、でもあの子は速くて強い。それに……」

「……」

フェイトは続けなかった。続きはきっとなのはも分かっているからだろう。

この短期間の戦闘で、既に闇の書はなのはとフェイトとの戦闘方法を『構築』しつつある。悠久の時に蓄積された知識と魔導は選択肢の幅を増やし、桁外れの演算能力は確実な攻略法をシュミレートし始めている。ただでさえ、一度リンカーコアを蒐集されて使用魔法のデータも把握されてしまったのだ。一つの戦闘法に対して十も二十も有効手段を組み立てるような相手にそう長持ちほしくない。

そんな時、不意に意識外から二人に精神通話系の魔法を介した声が届く――

『そちらの魔導師両名、なのはとフェイト。聞こえるか？聞こえたら返事をしてくれるとありがたい。』

僕は、臨時協力者のライだ！』

「えっ!？」

「ライ…さん？確か拘束されてる筈じゃあ？」

同空域で援護を行ってくれているユーノやアルフとも違う、完全に予想外な人物の声に二人は念話で返答する事を一瞬忘れて声を上げてしまった。

sideライ

『あの、協力者ってどういう？』

『君達の上司、リンディ提督に許可は：貰っている。

だけど、なにも犯罪者に背中を預けろなんて言う無茶は言わない、信用できないかもしれないが今の僕に君達と敵対する理由は無いだ』

（これで少なくとも、同士討ちの危険性は減ったはず：）

障害物の多い都市戦においてそれがどれだけ大事な事かは今更考えるまでもない。

二人の少女が放つ魔法の数々は威力があり過ぎる。直撃すれば誤射であろうとも僕の身が危ないのだ。

特になのはが放ったあの桜色の砲撃は一個人が放ったものだとはい正直実感しづらいものがある。それこそ、かつて見たガウエインのハドロン砲のそれに匹敵すると言ってもいいだろうか――ブリティニア軍の最新兵器に搭載されていた武装と、一度だけ喫茶店で出会ったごく普通の少女の顔を結び付ける事にはどうにも違和感が拭えない。

そして、あえて『信用してくれ』とは言わない。いや、『言えない』

形だけの共同戦線を張る事は出来ても、つい先ほどまで『犯罪者』と認識していた人間をそう簡単に信用することは普通出来ないだろう。そして一瞬の気の迷いが最悪の結果に繋がる場でそんな危険な協力関係を少女達と築くわけにはいかない。

かといって、完全に独力で“彼女”を止める事が出来ると自惚れるほどの力を僕は持ち得ていない。

ならば、築くのは『信頼』ではなく『利害の一致』による共闘関係。

『いえ、わたしは：わたしとフェイトちゃんはライくんを信じる』

だが、少女――高町なのはからの念話は実に見事に僕の予想を裏切るものだった。

『…なぜだ？ たった一度、喫茶店で軽く話した程度の相手を信じるなんて。あまりにも判断要素が少なすぎると思わないか？』

つつい信頼を拒む姿勢になってしまう。

（信頼の重さが恐いのか…僕は？）

この言葉の返答には一瞬の間が開いた、もしかしたらなのはとフエイトの間でやりとりがあったのかもしれない。

『たぶん…ライさんの言う事は正しいんだと思います。国語の宿題を手伝ってくれただけの関係を信用するのもおかしい話かもしれない。』

だったらわたし達は。シグナムやザフィーラが信じたライさんを―――』

『ヴィータちゃんやシャルさんやはやてちゃんが信じたライくんを信じるの！』

『……………』

実時間にしてかなり短いやりとり―――守護騎士達とはやての名を出されてしまえば僕はもう絶句するしかない。

（こちらの世界の小学生は一体どうなっているんだ？）

はやてといい、あまりにもブレの無い強い信念。他者を寛容する心の広さ。子供とは思えない判断力。

あまりにも年不相応に思えるその成熟した精神。だが同時に、触れ合う人間の心を氷解させる不思議な感覚。

どこことなく、そう、かつて記憶喪失だった僕を受け入れてくれた生徒会のみんなと似たあたたかい雰囲気。

こうなってしまうと不思議と彼女達を信じたくなくなってしまった。のは昔の僕からは考えられない変化なのだと苦笑したくなる。しかしそんな余韻に浸る事を時間は許してくれない。

選択はより迅速に―――

『分かった、ならば僕も君達に背中を預けようと思う。協力してくれるかな？』

『『もちろん!』』

＊

身体を覆う——流麗な曲線を描いた蒼い騎士甲冑。左腕部に取
り付けられた異形の三本爪。右腕に握られた日本刀。

純日本製KMF《月下先行試作機》——デバイスに姿を変えて
まで僕と共に戦ってくれた、世界にたった一騎の愛馬は、いつにも
まして身体にフィットする。

だが、今の装備でまともやりあっても管制プログラムに——あの
哀しい瞳をした駄天使——に僕の刃は届かない。

そして、月下の装備以外に僕が単身で使える魔法といえば、初歩
の初歩である精神通話と身体強化、時代の流れの中でより高度で使
い勝手の良い魔法に取って代わられた欠陥だらけの武器強化魔法。

（僕は、最善を尽くすだけだ。いつだって……）
顔を隠すように覆うバイザーを取り払い、投げ捨てた。これで視
界には僕の肉眼が捉える情報しか入ってこない。

「月下……レーダーの類も、ダメージ計算も、相互距離補正も、衝
撃吸収も……必要最低限を残して全てのサポートを停止。

余った演算領域をこれから僕の使う魔法の補助演算に割り当てて
くれ」

「ッ!?!、肯定しかねます。それではあなたの身体が……」

僕の意図に月下は薄々感付いてしまったのだろう。電子音声にし
ては妙に人間らしいうろたえ方をして、胸部装甲に埋め込まれた月
下の核が反駁する。

「こうでもない僕はあるの高みにたどりつけないんだ。」

「貴方は……下手をすればチョウフ基地の二の舞になるのですよ!
壊れるのはKMFである私の駆動回路ではなく——」

「それを言われると辛いな」

“藤堂中佐奪還作戦”——ブリタニア軍の基地を襲撃し、厳島の奇跡と呼ばれる戦時の日本における唯一の勝ち星を得た軍人を救出するその作戦で……僕はかつてKMFだった月下を一度だけ壊してしまった。

情けない事に、原因は敵の攻撃の被弾ではなく過度の機体酷使による回路のショート。そして、技術の流出を防ぐための自爆処置。

あの時の喪失感は……爆炎に包まれて四散する愛馬の姿は忘れたくても忘れられない。

へもしも、ここにカレン様がいらっしゃれば必ず『そんな無茶して死んだらどうするの!』そう言って激怒するでしょう!』

「はは、カレンならそう言うだろうね——」

へそして機械である私もその気持ちは分かります。貴方は無茶をし過ぎです……大馬鹿です!』

「だから僕の作戦を否定するかい?」

ここでもしも月下の演算補助が得られなければ僕はただの足手まといになり下がる。そして、主の意向に従わない兵器——使いたい時に本来の性能を発揮しない兵器なんてのは欠陥品のレッテルを貼られてしまう

へ否定。だからこそ私は『愛馬』として貴方を全力で支える為にラクシャータ女史に作られたのです。何度言えば理解して頂けるのですか?』

「善処しよう」

怒ったように短いスパンでチカチカと点滅する月下の核に対して僕は苦笑するしかなかった。

見た目はごくごく普通の平和な街。そこに響き渡る轟音と破碎音——それらをあえて意識の中から削除。

体重の分配をミリ単位で調整。自然と姿勢は獲物に跳びかかる寸前の獣を連想させるほど低くなる。瞳は、未だなお空で激戦を繰り返

広げる管制プログラムへ——彼我の距離は大体五十メートル以上。警戒ラインのギリギリ外側。何かアクションを起こせばすぐにでも見つかる位置。近いようで遠い距離。

そして、練り上げるのはごくごく普通の『身体強化』の術式。白兵技能を重視する以上は必須なその魔導を完成させるために『全演算領域』を回す。

かつて、シグナムさんに身体強化の魔法について教わったとき。一つの問題を僕は提起した。

『何故、戦闘時には魔力を全身に配分して強化するのか？必要な部位を重点的に強化する方が効率的ではないのか？』と。

答えは実に簡単で、『その方が余計な演算をしなくて済む』という返答。高速戦闘時にいちいち特定の部位の強化を演算し直す行為を高速で行うのはそれだけ様々な問題点や欠陥が付き纏う、いちいち列挙しては暇が無いとのことだった。

唐突に話を変えるが人体という物は、見方によっては超精密な数多の部品によって形作られた機械とそう大差は無い。

足を一步踏み出すだけでも、アキレス腱・大腿四頭筋・膝関節・大腿屈筋を始めとした幾十もの筋肉や骨格を複雑に連動させている。それらをいちいち指定演算する行為がどれだけ途方もないかなど考えるまでも無い。かかる労力が違いすぎる。

そもそも、これは生まれてからずっと付き合ってきた己の身体を無機質的かつ客観的に細分。部品として捉える事の出来る『狂った感性』と、人体の構造に関する専門的な『知識』の両方を備えていなければ——そして僕は幸か不幸か、その両方を備えてしまっている。

『狂った感性』は、自己嫌悪と自責の念、自己否定、もしかしたら僕の特異な出生ゆえに——

『知識』は、僕を培養カプセルに閉じ込めたバトレーや、名前も

顔も知らない研究者の施した改造の副産物として――

とにかく、今はそれらの要素全てを最大限利用する。それが僕に出来る唯一の戦い方にして、思いつく限りの最善の策。

意識を瞬時に先鋭化――筋肉によって骨を引き絞り、全身全てを凶刃と化し、どこまでも細く鋭い刃をイメージ。

無駄な呼吸を――捨てて。

無駄な雑念や思考を――捨てて。

無駄な力の配分を――捨てて。

無駄な諦観や恐れを――捨てて。

どこことなくその過程は日本刀の製造過程にも似ている。不純物を取り除き、鉄を鍛え上げるその過程に。

無駄の一切を省き、どこまでも合理的でどこまでもシステマチックな理想の戦闘形態を思い描く。

昔からずっとこうしてきた、大切な物を守り抜く為に心を捨て。敗走する敵兵さえも後ろから串刺しにしてきた。

もっと強く、もっと速く、もっと軽く、もっと効果的に、自制の上に自制を課す事で最善を目指す。

その上で最も邪魔であろう『心』は……………『捨てない』心を殺す事の出来た昔に比べて僕は弱くなったと常々思う。

だが、今ここで心を捨ててしまえばきっとだれも守れない――そんな根拠の無い確信を覚える。

だから『捨てない』

構成の完成は間近。意識的に体中の筋肉から余計な力を抜いた。仮死状態に近い極限の脱力状態。

足を動かすのに必要な筋肉繊維の一本一本に、骨格に、筋肉に、神経に――魔力を流し込む準備をする。

（無駄な力はいらない。効かせる事だけを考えろ、そのための構成

だ。

目指すのは最善にして完璧。威力の極大ではなく細緻の極限。何の捻りも無い基礎の発展に過ぎない。今の僕ならば出来る！）そして………完成した。

———静と動———

足を曲げ、跳躍の姿勢へ———跳躍の瞬間。完成した構成に流しこめる限界の魔力を流し込む。

筋肉が爆発するのではないかと思うほどの衝撃と空気が破裂する音。同時に僕は空を『跳んだ』

己の足がコンクリートを踏みぬいた音さえも追い越したのではないかと錯覚するほどの瞬間加速。

跳躍の次の瞬間には、足に魔力を流すのを中止し、クリアになった脳内で次の構成に移る。

なのは達と戦闘を繰り広げる管制プログラムとの距離差がどんどん縮まっていく。

超高速への加速。景色は移り変わり、街を彩る光は点から線へ———

腕と肩だけに全ての魔力を流し込み、緩慢な動作で刃を振り———そして、真紅の双眸が僕の姿を捉えた次の瞬間———

一閃。持ち得る全ての力を流しこんだ斬撃———大気さえも切断する超精緻な一撃が空間を切り裂く。

「頼んだ！」

残るのは自由落下。僕が無防備な瞬間を追撃させないために、なのはとフェイトの放つ桜色と金色の射撃が着地を援護。

網膜を焼く閃光が直撃。管制プログラムが浮遊していた空間を煙が包み込み、視界を遮る。

上空十数メートルからの落下はあまり小さな衝撃ではなかったが、なんとか耐え忍ぶ。

「当てた…の？」

「あの子の防御を破ったようには見えただけど？」

「確かにシールドを破壊した感触はあった…」

実感なさげに空中で小首をかしげるのはとフェイトに向けて僕は答える。

「多分、有効では無かったと思う——ッ！」

ギリギリで構えた廻転刃刀に『剣戟による』デタラメな圧力が掛かり、最後まで声を上げる事なく後方に吹き飛ばされる。

「ぐっ！」

「ライくん!？」

「ライさん!？」

上空から聞こえてくる二人の少女の悲鳴に答える事は出来なかった。

なぜなら——

「私に…剣を抜かせるとは…何時以来だろう。思い出せない」

「おいおい…いくらなんでもそれは反則だ。と僕は言いたいね、これでも全力だったんだよ」

背中から顕現する漆黒の翼。銀の光沢を纏った長髪。雪を溶かしたような白い肌に、ルビーを思わせる真紅の双眸。間違いなく管制プログラム本人。

そして、右手に握られているのは“剣の形をした漆黒の閃光”。おそらく純粋な魔力を練り固めて作られたであろうその光は、どこに触れようと切り裂く凶刃。

撒き上がった粉塵はその刃に触れると蒸発し、周囲の光は吞まれ

て消える。

「お前も…」

哀しい色を湛えたその瞳を、こちらに向けて静かに呟く。澄んだ声が鼓膜を震わせる。

（そんな悲しい瞳をしないでくれ）

素直にそう思う。そんな瞳は見たくない。だが、視線を外す事は許されない。

「お前も……私の邪魔をしようというのか、異界の少年よ」

「いや、僕は君と交わした約束を果たしに来ただけだよ。本の妖精さん」

後編へ続く

第十一話 中編 剣の重さ（後書き）

『あとがき』

本当は十一話は今話で終わらせるつもりだったんですが、自分の書く文章はあまりにもテンポが悪すぎて、文字数が増えまくった結果。読んで下さる皆様の時間を取り過ぎるのも悪いと考え、中編として投稿するに至りました。

さて、あとがきらしい事を書くのでしょうか。

今回は等身大の魔導師から見た管制プログラムやなのは達の戦闘能力の高さを描く事に力を入れるつもり……だったんですが、微妙に失敗した感が否めませんね（汗）

毎度おなじみ文章を纏める力が自分に無いせいです。はい。

さり気なく管制プログラムが剣使っちゃってますが、まあ彼女ならこれくらい出来るかな、と思った結果こんな事に……要するに次回剣と剣がぶつかり合う激戦に——なるんでしょうか？

第十一話 後編 想いの重さ（前書き）

ライラにあるまじき投稿速度に自分でもびっくり。

また時間が出来たら戦闘描写に手を加えていきたいと思っていますが、とりあえず読んで頂けると嬉しいです。

…あれ？ユーノとアルフが完全空気どころか台詞さえ無い？

第十一話 後編 想いの重さ

——海鳴市商店街——

吐息は白く染まり、水は分子の動きを鈍らせ、大半の生物は生命活動を停止する。

冷気の支配する世界。人の技術が進歩して、限定的な空間はその冷気の支配下から逃れられるようになって、それは刹那。何百年と続く世界の移り変わりの下でそれはまだほんの一点に過ぎないのだろうか。

見る者の息継ぎも許さないほどの、流麗で鋭い剣戟が曇天の下繰り広げられる。

青を基調とした曲線的な装甲を纏い、左腕部には異形の三本爪、海を彷彿とさせる蒼い瞳に強い意志を湛えた銀髪の少年と、

淡い銀の光沢を放つ長髪に、黒を基調とした騎士甲冑。駄天使を彷彿とさせる黒翼を背から生やした真紅の瞳の女性。

僅かに月光を反射する日本刀の鋭く冷たい煌きと、全ての光をただひたすら飲み込む漆黒の刃。

二者の握る刃の衝突が大気を震わせ、時折視線が絡み合い、離れる。

それはもはや決闘にして演舞。

sideライ

「墜ちろ…異界の少年よ」

「そういうわけにはいかない！」

魔導の力によって揚力を得た黒翼を翻し、目の前の駄天使——管

制プログラム——は黒刃を構えて滑空して来る——自然のままではないその翼がもたらす推進力を得たその動きは、もはや滑空というよりジェット戦闘機の暴力的な速度に近い。

だが、その動作は天女が舞いを踊るように美しく、歴戦の武人のように隙が無い。見惚れる時間など与えられる筈も無かった。

十数メートルあった距離は一瞬でゼロへ——

刃と刃の交差、一瞬の接触——同時に鋭く重い、剣を握る細腕からは想像も出来ない強力な衝撃が僕の廻転刃刀を通して腕に響いた。

腰を起点に脚部の筋繊維一本一本に全力で魔力を流し込み——耐える。

（あまり長くは持たない……か）

動作を行うその都度その都度、魔力を流し込んで強化する部位を変更する。瞬発的に莫大な力を得るその方法は正直な話、付け焼刃のそれに過ぎない。

無駄を一切捨て、デバ^{月下}イスの演算能力を身体強化に回しているものの、それもいつまで続くか……瞬間瞬間に、戦闘に必要な部位だけに最大の魔力を限界まで無理やり流すこの行為は、ミスを許されない精密な細工を流れ作業で作り続けるようなもの。月下の方で全てを処理できるわけもなく、メインの演算は自分で行っている。脳を内側から圧迫されるような軽い鈍痛が徐々に強くなる。

何より、『僕自身の筋肉や骨格、神経がその負担にいつまで耐えられるか分からない』

導線に過電流を流し続けるとやがて熱で焼き切れてしまうのと同じで、この戦闘方法でいつまで身体が持つか……五分後には筋肉が断裂するかもしれないし、十分後には神経が焼き切れるかもしれない。さらに、体重の分配や重心の移動を怠ればもれなく自分の生み出した力で身体が自壊する——そんな危険性を孕んだ戦闘方法。だが、こうでもしないと同じ土俵で戦えない——それほどま

でに彼我の実力差は開いている。

歴史や伝説、寓話や英雄譚に出て来る騎士や戦士。まさにそういったレベルの空想上に存在するような強敵、いや、例えるなら駄天使か……冷たい空気さえも切り裂くような絶望の色を湛えた瞳と墨を溶かしたように黒い翼を見て訂正。

だから、流し込む魔力量を無理やりに引き上げる。

（もっと強く。もっと速く。もっと……もっと！）

跳躍——足元のコンクリートの碎ける音と共に一瞬で超高速まで加速。

脚部の身体強化を解除、すかさず腕部の身体強化を発動。

大気を切り裂き、可視速度を越えた剣戟が管制プログラムの構えた黒刃と絡み合い、ビリビリと周囲の空気を震わせた。

多分、ちょっとした科学複合素材や超合金の類でも今ならば紙のように切り裂ける。それこそKMFの装甲でも。

だが、有効打にはなり得ない。管制プログラムはその、絶望を湛えた真紅の双眸をこちらに向けて問いかける。それだけの余裕が彼女にはあった。

「なぜ……立ち塞がる」

「なぜ？……そんなの決まってるじゃないか。

君が望んだからだろう。主を助けてほしいと、守護騎士を助けてほしいと！

だから僕をこの世界に呼び寄せた。あの時の声は君の物だ、忘れたとは言わせない」

「—————」

一閃。漆黒の刃が空間を薙ぎ一直線に僕に向かってくる。

沈み込むように姿勢を低くし、刃を避ける。同時に、互いの吐息がかかるほどの超至近距離へ接近し、左肘で打撃を試みる———

鋭角的な軌跡が女性的な鳩尾を狙う。

「望んでなど…無い！」

「がっ！」

目の前で舞った銀糸のような髪に残す軌跡に、一瞬だけ目を奪われる。それが、沈み込むように姿勢を変えた結果だと気付いた時にはもう遅い。

寸打——管制プログラムの放った右拳は、そう呼ばれる打撃法によく似ていた。

己の動きを最低限に、相手のスピードと勢いを最大限に活かしたカウンター。

攻撃の軌道を読んでいなければ不可能な突き刺さるような一撃が胴体にヒット。一瞬だけ視界が真っ白に染まった。

胃の中身を吐き出しそうになるが、そもそも吐き出すようなものは入っていない。

きりもみするように空中へ吹き飛ばされる。空と地面が反転し、境界線が曖昧になる。

そして、視界の端には黒刃の切っ先をこちらに向け、黒翼の飛翔による加速で直進して来る管制プログラム。

いかに身体を強化しても、足場の無い空中では受け止めようがない。

（マズ…い！）

とっさの判断で、近くの建物の壁面に飛燕爪牙スラッシュユハーケンを打ち込み、空中での移動を試みる。

高出力のモーターがワイヤーを巻き上げる音——だが、間に合わない。体勢を整える前に黒刃が僕を貫くイメージが脳裏をよぎる——

「プラズマ、ランサアア！」

「ディバイン、バスタアアア！」

網膜を焼くほどの強い桜色と金色の閃光が管制プログラムの進行を阻み。最悪の未来予想を打ち消した。

高レベル魔導師による射撃魔法。今まで敵にして来た魔導師達は比べ物にならない程強く、速い。

もちろん、それを放ったのは味方であるのはとフェイト。未来を切り開く強く、真っ直ぐな想いを秘めた少女達だ。

『助かった、二人とも』

精神通話で礼を言う。返答を聞く余裕は無い。

ハーケンを巻き戻した勢いでビル of 壁面へ着地。再び、魔力を足の筋繊維の一本一本に流し込み——跳躍。空中で動きを止めていた管制プログラムに一撃を叩きこむ。

「望んでない？ そんな嘘が通じるものか！」

君は誰よりもはやての事を想った。だからこそはやてを殺してしまふ己の運命を呪った。だからその運命に反逆したんだろう」

「だが、結果として何も変わらなかった……お前は何も変えられなかった。

運命に逆らうなど最初から不可能だったのだ。奇跡など起きない。私はただの道具だ。道具は主の願いを叶えるために在る」

空中でぶつかり合う僅かな時間の間に、立て続けに剣戟が交差する。

再度、なのはとフェイトの頼もしい援護射撃を受けながら着地。援護といっても、加減なんてものは微塵も感じない、だが、それだけ相手が手強いという事。

（少しだが……届いた）

最初から勝てるかどうかは考えていない。倒しても意味がないからだ。狙うのは解決への糸口を見つける事——心を閉ざしてし

まった彼女の心の壁をこじ開ける事。

そして、先ほどの僕の言葉を聞いた直後。あれほど精密で鋭かった剣が僅かに鈍った。瞳が揺らいだ。

「くっ！」

だが同時に、身体の内でもついに崩壊が始まる。生物としての本能在、限界を知らせる悲鳴を上げた。

持ち得る魔力の大半を度々流し込まれた右腕と、その周囲の筋肉に電流を流されたような激しい痛みが走る。今は月下のモニタリングも停止しているが、恐らく筋繊維の何本かは千切れただろう。骨が損傷していないのは幸いか。

それは必然的な結果。昨日今日の短い期間で魔法の扱い方を学び、単純な剣技においては烈火の将に遠く及ばないような人間が、人間の枠を超えた魔導師と騎士の完成形のような相手と切り結ぶにはこの程度のリスクで済んでいられるだけでも奇跡のようなものだ、

（だが、まだ持つ）

血が出るほど強く廻転刃刀を握り締める。千切れた筋繊維を補うためにより一層魔力を流し込んで強化する。その場しのぎにしかないお粗末な構成も、体中のほころびが大きくなれば意味をなさなくなるだろう。だがそれで十分――

喉も、さきほどの一撃でダメージを負った。声を絞り出すだけでも痛みが走る。もしかしたら臓器のいくつかにもダメージが蓄積しているかもしれない。

「だけど、待つだけでは奇跡なんて起きない。奇跡は起こすものなんだ！それを君は知っている筈だ。

はやての幸せを望むなら願え！渴望しろ！」

「我が主は：愛する者達が傷ついたこの世界が夢である事を望んでいる。

私は願う者ではない：我は魔導書、願いを叶えるための道具だ」

聞くだけでも痛ましい、平坦で無感情な声。それに覚える妙な既視感に胸を締め付けられる。

猛然と速度を増し、莫大な魔力の供給を受けてより巨大に膨れ上がった黒刃を構えた管制プログラムが流麗な剣戟を放つ。

ぞわり―――どんなに鍛え上げてもどうしようもない、生物として本質的な恐怖を呼び起こすような圧迫感が空間を支配する。

剣閃が最初より速くなった。

軌道を予想しづらく、避けづらくなった。

一撃一撃が鋭く、重くなった。

剣に宿った想いが―――強くなった

既に数太刀ほど防ぎ損ねた刃が肌を、頬を切り裂く。身体の一部を削がれる痛みに意識が遠くなる。

（だが、それだけ感情的になってきたという証拠だ。彼女は心のどこかで望んでいる、全てが幸せに終わるハッピーエンドを）

最初は、きっと僕が存在なんて軽く薙ぎ払える程度に考えていたのだろう。冷静に判断すれば事実としてそれは変えられない。

でも、必要なまでに彼女は心を揺さぶられた。その結果としてその揺れが剣に反映された。

「あんたが望んだのは……本当にそんな未来なのかッ！」

「私に……壊れた魔導書に未来など無い……在るのは同じ悲劇の繰り返し、絶望の螺旋と欲望の連鎖だけだ」

剣の軌道から逃れる為に腰を低くし、強化した脚力による跳躍と、高機走駆動輪を組み合わせた不規則な動きで距離を縮める。

下段に構えた廻転刃刀の切り上げ、加速と遠心力を乗せた蹴り、返す刀の斬撃と、高機走駆動輪の高機動から得られる推進力を乗せた肘打ち。

思いつく限りの攻撃方法を、脳裏で構築された何十通りもの攻撃

パターンと移動方法を組み合わせて放つ。

そこから分岐して生まれるのは何百、何千、何万という行動の可能性。

彼女が——情報蓄積型ロストログアの行動が超高性能のコンピュータの高速演算のような恩恵を受けているというのなら、それで少しでも計算を遅らせる事が出来れば……そう考えての行動。だが、それも淡い期待に終わる。

（くっ、行動の幅も、取れる選択肢も向こうが上か！）

余裕さえ感じられう流麗な動きで、全てが防がれる。

刀には刃を、拳には拳を——豪に対する柔のように、プラスに対するマイナスのように、攻撃を防ぐのに最も効率的な方法で対処される。

「私に傷一つつける事の出来ない分際で……何が出来る。今にも倒れる寸前のくせに……」

「だけど、僕はまだ倒れていない。いや、『倒されていない』」

「……？」

「君が本当に本気ならば、僕は一分も持たない。空も飛べない騎士一人、倒す気になれば上空からの広範囲殲滅魔法で十分だろう」

「それは……」

「君は迷っているんだ……己の呼びだした奇跡の可能性に賭けるべきかどうかをっ！」

「奇跡など……起きない。誰も……救えない」

「君たちを救う！奇跡なら僕が、僕達が起こしてやる！それが契約だろう。」

君は神に願った。悪魔に祈った。どこの誰とも知れない僕に縋った。ならばもう一度それを望むんだ！」

————絶望の輪廻を断ち切ってほしい————

それが、僕がこの世界に導かれるきっかけとなった契約の文言。

なりふり構わずに発せられた悲痛の叫び。

「お前に何が分かる！己の存在が愛する者を侵す事を、何も出来ずに見届けるしかできない苦しみをッ！」

ついに心の堤防が決壊した、胸中を吐露する優しい妖精。行き先の分からない感情と魔力の放出が空気をピリピリと震わせた。

管制プログラムは外部からの声を振り払うように、心の揺らぎを無理やり断ち切るかのように黒刃を真横に薙ぐ。

第六感———そんな曖昧で不確かな物に助けられるのは癪だったが、今回はそれに助けられた。

とっさに姿勢を低くしたその上を———漆黒が通り過ぎる。

瞬間———音も、光も、大気も、空間も、熱も：何もかもが静寂に包まれて死んだかのような圧倒的で静謐な一撃が、後方のビルを、街路樹を、ワゴン車を一刀両断して本来の形から逸脱させる。マトモに廻転刃刀で受け止めれば全てが志半ばで終わっていたかもしれない。

背に顕現した黒翼で一瞬の間に距離を離れた管制プログラム。真正面から戦えば、絶対に屈せず、揺るがないほどの技能の差があるハズなのに距離を取ったのは最後の一撃に移る為の前段階なのか、僕の声を拒絶したいがためか———後者であることを望むしかない。

なのはとフェイトの斉射を掻い潜りながらも地上からの距離を離す管制プログラム。

（誘っているのか？）

どの道、これ以上飛翔されると僕はなにも出来なくなる。

だから、ボロボロになって今にも筋肉と骨格が別離しそうなほどに酷使してきた脚に魔力を流す構成を練り上げる。

（もっと緻密で、もっと強靱な構成を……そしてもっと魔力を！）

ガシャン！ガシャン！ガシャン！ガシャン！

リズミカルに響く四重奏が、自分の中で渦巻く魔力を更に強化し、方向性を与え加速する。

排莢される莢莢のうち、二発は出番の無かった右腕部のハンドガンと、胸部装甲に内装されたチャフスモークのカートリッジシステムから出された物。しかし、本来はその武装に割り当てられるはずの魔力は、身体強化を底上げするためだけに使用される。

跳躍の衝撃で小さなクレーター状に陥没する地面には視線を向けず、ただ、上を目指す。もちろん、その先には夜天の魔導書の管制プログラムが――

そして残りの二発は右手に構えた廻転刃刀から排出された物。それらは本来の用途で使われた。

峰部分から吹きだす銀色の光粒子^{ブースト}、羽ばたく不死鳥の方翼にも似たそれを振りかぶり、勢いを殺さず一直線に振り下ろす。

「月華、旋風斬！」

四聖剣を率いる軍人の剣技の一つ。一瞬で亜音速を超越した刃は一寸の狂いも無く漆黒の刃と衝突。

ミシミシと腕の方が悲鳴を上げるも、それを無視して何度も何度も剣戟は夜空に閃光を残す。

「一つ覚えの剣劇が、私に通ると思ってか」

斬―――ついに、限界が訪れたのかもしれない。いや、元より限界をとっくに越えて酷使していた。

右腕を走る激痛がより一層増し、鋭い音を残して握った廻転刃刀は刀身の半ばから先が消失。折れたのだ。

そして残るのは管制プログラムの構える黒刃。魔力と集中力の続く限り刃こぼれなどおこさないその凶刃は、どこまでも深い絶望の顕現した姿―――同時にかつての希望の強さを証明する一撃が振り下ろされようとしている。

「別に、剣だけが僕の取り得じゃないんでね」

この距離では、ハンドガンも使えない。胸部の飛燕爪牙も射出する前に無効化される。

だが、まだ『最後の切り札』が残っていた。

輻射波動機構甲冑腕型——別名を簡易型輻射波動とも言う。リーチは短く、使用魔力も桁外れ、おまけに連射も出来ない。だが同時に、今の僕の持ち得る最大の威力を持つ武装でもあった。

カシャン！カシャン！カシャン！

異形の三本爪から三度の排莢音が響く。同時に発生するのは、破壊を象徴する赤黒い光。

そして、絶望を乗せた剣閃を————輻射波動を帯びた左腕部で無理やり掴んだ——

ギチギチギチ！

歪な音と共に、輻射波動機構を装着した左腕部に尋常ではない圧力が掛かる。決壊してダムからあふれ出す水を無理やり押さえつけるようなものだ。彼女の発する莫大な魔力と拮抗出来るのも長くても十秒。

たったそれだけの時間で戦闘力を削ぐ事なんて僕には出来ない。だが、最初から狙いはそこに無い。心の奥に言葉が届きさえすれば良い。

そう、これは心を閉ざした妖精を他者と繋げる楔のようなもの。

筋繊維の何本かが駄目になり、度重なる衝撃でまともに感覚の残っていない右腕で——武器を持つ力も無ければ、拳を握る力も残っていない右腕で——赤いラインの入った雪色の頬にそっと手を伸ばし、がっしりと掴む。

冷たい表情に流れるあたたかい涙が指を伝う。

「っ！」

言葉から逃れる時間も、距離も与えない。耳をふさぐこともさせない。瞳も逸らさせない。

そして、出来る限り落ち着いた声で、駄々っ子をあやすように優しく囁く。

「夜天の魔導書よ。そうまでして君が道具である事を貫こうとするのならそれでも構わない。

もしそうなら、一度その内で眠るはやてに、君の優しい主に話を聞けばいい。彼女の本当の願いが何なのかを……君の願う幸せの形が何なのかを」

「…うる…さい！」

感情を殺せずに、わなわなと震える唇、いろんな感情が混ざり合って歪む表情。それが視界に入った次の瞬間には全身を洒落にならない衝撃が襲い、急転直下。眼下の地面に叩き付けられていた。上空十数メートルからの落下———衝撃は脳を揺さぶり、三半規管がやられたのか、バランス感覚が喪失して立つこともままならない。騎士甲冑が無ければもっと酷い大怪我を負っていた可能性もある。

（だがそれで良い）

口の中に広がる鉄の味を堪能しながら唇をつり上げる。これから自分がどうなるのかも考えられないし、考える気も無い。

元より僕はこの世界にいなかった人間だし、居場所があったとしても、いてもよい人間かどうか自分で判断がつかない。

「お前にも…永久の眠りを…」

何時現れたのか、眼前で浮遊する魔導書の光が、僕の身体を分解するかのように光の粒子に変えてゆく。

何が起るのか分からない。だが同時に、死ではない事は感覚的に理解できた。かつて遺跡で眠りに就こうとした時の感覚に似てい

たせいかもしれない。

ひどく心地の良い睡魔が襲い、瞼を開けている事も億劫になる。

「僕を遠ざけても…何も変わらないよ」

その言葉が、喉から出たかどうか、届いたかどうかは分からなかった。

そこで僕の意識は暗転した。

———第十一話 完了———

第十一話 後編 想いの重さ（後書き）

『あとがき』

真っ白に燃えつきました。本当に真っ白です。戦闘描写と台詞の言い回しとか工夫するのってかなり難しいですね。

というか、ライがキャラ崩壊してないか素直に心配です。少しでも原作の台詞とかも入っていますが、それでも違和感が拭えない……うむ。

とりあえず、管制プログラムとマトモにやりあっていることに違和感があるかもしれませんが。ライの今回の戦闘法は文字通りの諸刃の剣であったのと、彼女自身が無意識のうちに悩んでいたことが上手く作用した結果だと思って頂ければ幸いです。

次回は闇の書の夢編。テンプレなのは覚悟していますが（汗）

第十二話 夢の味（前書き）

お待たせしました、闇の書の夢編です。

主人公は悩んで成長する者と作者は勝手に思っていますが、ちよつとやり過ぎた気がしないでも無かったり……

誤字脱字の報告、感想待ってます。

第十二話 夢の味

それはとても幸せて残酷な夢

少年の心の闇と苦悩と後悔が大きければ大きいほど理想はより儚く、より優しく、より美しく――幻に過ぎないそれは、夢の中で形を得る。

無垢で幸福な福音は、強靱な意思と決意を穴だらけにし……永久の眠りに誘う

朝露に濡れる木の葉。小鳥の囀る鳴き声。まさに平和な時間。

うたたかな斜光が窓に掛けられた薄い布越しに部屋を照らす。しかし、その優しい光も寝起きの瞳には強く厳しく映った。

睡魔との戦闘は実に厳しく過酷――結果、光を遮る為に毛布をかぶって第二の眠りに移行しても仕方がないと思う。

すぐに意識は夢の中へ――

「に……さま……兄さま。起きてください」

突入しなかった。僕を呼ぶ幼い声……どこか懐かしく幸せに響き渡るのは気のせいだろうか？

半覚醒な頭脳では答えが導き出せないが、とても愛おしく、そして何故か心をチクリと刺激する声。

「むう……あと半世紀だけ寝かせて下さい」

何百年も遺跡で眠っていたんだ。それくらい許されるだろう。……自分でも思考が半覚醒なのは自覚している。

「兄さま？ それでは還暦を迎えてしまいますよ」

「サクラちゃん……ツツコミ所がちょっとズレてると思うんだけど」

「そうですか？？」

「その浮世離れしてるところが実に平安の日本貴族らしいんだけどね…ハア」

最初の声に続いて響くもつと活力に満ちた瑞々しい声。これにも懐古の念を抱く。

「とりあえず日本の下町式寝坊助の起こし方を見てなさい」

騒がれては満足にも眠れない。肉体的には疲労など欠片も無いのに精神はまるで死に体のように疲れきっている、このアンバランスさが眠気を増幅したのかもしれない。同時に、安眠を邪魔する者に対する反抗心も大きくなる。

うるさい、静かに眠らせてくれ——そう口にしようとした矢先、息を大きく吸い込むような、すう、という静かな音が聞こえた——それはまるでこれから大号令でも上げるかのような——

「ん…さっきから人が寝てる横で一体なんなん——」

「起きなさいっ！！！！ライツ！！！！」

「おわっ！！」

鼓膜をビリビリ振るわせる大きな声。短い落下感、それが毛布を剥ぎ取られた結果だと気付いた時にはもう——

フローリング張りの床に思いつきり額や腕をぶつける衝撃。打ち所によつては割と危なかったと思う。とにかく今ので意識が覚醒に近付いたの言うまでも無い。

「さすがお義姉さまです。兄さまの扱い方を心得ていらっしやいます」

「げほっツツ！げほっ！お義姉さまって！

な、ななな何を訳の分からない事を言ってるのよ。というかその

キラキラとした汚れの無い期待の目はやめて、本当に将来の進路が狭まりそうで怖いから！」

ズキズキと痛む頭を押さえ——緩慢な動作で立ち上がる。心地の良い眠りにピリオドを打った犯人たちに文句の一つでも言おうと瞼を開けて睨みつける——否、文句など言える筈も無かった。不満の感情も、眠気も、鈍痛も、その全てが吹き飛んだのだから。

二人の少女の姿を見た瞬間に……

一人は、健康的な肌に健康的な肢体。僅かにサイドが跳ねた赤の髪と空色の瞳。身に纏うのはアッシュフォードの女子学生服。腰に付けたポーチが実は無骨な軍用ナイフの隠し場所になっている事も僕はよく覚えている。

そしてもう一人は——日本人特有の艶やかな黒髪と黒い瞳のまだどことなくあどけなさを残した少女。身に纏うのは動きを阻害しない程度に和のテイストが入ったワンピース。おっとり喋るこの少女の笑みがどれだけ素晴らしいか、記憶の残滓が胸の中で色鮮やかに蘇る。

そう、その二人は——

「カ…レン？それと…サクラ…なのか？」

予想以上に自分の声に現実味が無く、かすれていたのは仕方がない。

「ん？当然じゃない。それとも私以外に紅月カレンが居るの？てか、まだ寝ぼけてるならもう一回叩き起こしてもいいのよ」

「妹の顔を忘れてしまったのですか兄さま？」

ほんの僅かに怒気を孕んだ空色の瞳を向けて来る女子生徒と、悲しみを表現するかのように俯く少女。

見間違う筈がない。黒の騎士団で共に戦った戦友である紅月カレンと、僕が殺したと同然な最愛の妹ことサクラ。

「なんで……二人がここに」

願っても出会う事は出来ない。カレンの記憶の中から僕は消えた筈だ。

望んでも妹は蘇らない。それは変えようの無い事実だ、死者が死なないようでは生態系が滅茶苦茶になる。

そもそもこんな形で二人が同席することなどそもそも時代的に考えてあり得ない。

アッシュフォードの制服に身を包むカレンは現代の人間。和風のワンピースを着たサクラは、それこそ弓と槍が現役で活躍するような昔の人間。彼女が生きているならばそもそも僕がカレン達と出会う事など無かった、歴史上の人物として一生を終えていた筈なのだ。だが、目の前のカレンは僕を知っているし。妹は生きて、動いている。

なのに何故？ どうして？ 何があった？ ——自答の無い自問だけが脳内を埋め尽くす。

「さっきからなんだかおかしいですよ兄さま？ わたし達家族とナナリーさんとそのお兄様が住んでいるのはこのクラブハウスですし、生徒会室もクラブハウス内にあるのですから何もおかしいことなど無いですよね？」

「……それに顔色も悪いし……はっ！ もしかして私が原因？ 床に落ちたりしたから……大丈夫？ 本当にごめんなさい！」

「いや、別にどこも異常は無い……けど。ちょっと悪い夢を見ていただけだ」

唐突に青ざめて頭を下げて来るカレンを落ちつかせるためにとりあえず嘘を吐く。

正直何がなんだか分かっていない、もう少し僕に余裕があればきっと心に渦巻くありとあらゆる感情の波に吞まれて泣き崩れていたかもしれないし、懺悔を始めていたかもしれない。そういった意味では余裕を持てないこの受動的な状況とカレンに感謝すべきか。

「そう？じゃあ早く生徒会室に行きましょう。」

「は？え？いや、ちょっと待ってくれカレン」

「遅れてルルーシュにどやされるのは私なんだから待たないわよ。それとも遅刻大魔王の称号でもミレイ会長から授与する気？」

そう言うと、カレンは僕の着ていた服（どういうわけか学生服で寝ていたらしい）の襟を掴んで引きずるように部屋を出る。

何があだか分からず、抵抗する理由も無い僕は、傍から見れば親に運ばれる子猫のようにも見えたかもしれない。

「生徒会のお仕事頑張って下さいね〜兄さま〜♪」

先ほどまで僕が寝ていたのはクラブハウスの二階部分。そして一階まで降りたときに上の階からサクラは優雅に手を振りながら声援を送って来た。そしてその横で静かに微笑んでいる長い黒髪の女性、大和撫子を絵に書けばきつこうなるのだろう、というその容姿、まさに見間違う筈もない――

（母上までッ!?!）

サクラや僕と同じく過去の人間で、子供と違うのは純正の日本貴族であること。

日本人の血が流れている事でとりわけ強く母上は他のブリタニア皇族に差別の対象にされていた。

そして僕が守ろうとした結果、命を奪ってしまった最愛の家族。

あまりにも短い時間で死者との邂逅を二度も果たしたものだから脳の処理速度がまったく追い付かない。

いや、それでいいのかもしれない。これが夢なのだととしても、僕は家族とどう接するべきなのか……会わせる顔が無いのだ。

泣いて懺悔すればいいのか……それは出来ない。否、許しを得ようとする事自体が『許されない』

己のエゴだけで国を動かし、民を殺し、国を滅ぼした王が直行す

るのは法廷ではなく断頭台と相場が決まっている。

だが、僕が思考の迷路で迷う時間は最初から与えられていなかった。やはりそれは幸いだったのかもしれない。

「会長、ライを連れて来ました」

僕の襟を掴んでいたカレンが唐突にその手を離し。目の前のドアを開ける。もちろんその先に待ち受ける光景は想像が出来ている。

一度だって思い出さなかった日は無く。色を持っていなかった僕に『人としての色』を与えてくれた恩人達。

家族以外に初めて守りたいと思った仲間。

「お、やっと連れて来たわね。おっそーい！」

「いつもより一時間も……遅刻です」

「ルルとスザク君の穴埋めをいつも任せちゃってるんだから今日ぐらいはよくないですか？」

「ルルーシュはともかくライが遅刻かよ」

「おいリヴァルそれはどういう意味だ。そもそも生徒会の仕事をサボるのは俺だけじゃないだろう。なあ、スザク？」

「残念でした。僕の場合はサボりじゃなくて仕事。休む時はいつも連絡を入れてる筈だよ」

「そうですね。文化祭前に皆さんに迷惑をかけたら、めっ、です。お兄様」

「うっ……すまない、ナナリー」

ミレイ会長、二ーナ、シャーリー、リヴァル、ルルーシュ、スザク、ナナリー。

みんなが定位置についてそれぞれ自分のやるべき事をやっている。席が二つ開いているのは僕とカレンの定位置だからだ。

「あ、ああ————」

まともな声にもならない呻き声が喉を通して室内の空気を震わせた。

そこに広がるのは、僕の記憶にあるごくごく普通の生徒会。ミレイ会長がたまに思いつく突拍子もないイベントを除けば実に平凡な光景。

そして確信する。ここは……この世界は僕が望んだ理想の世界。どんな金銀財宝や権力も足元に及ばない色鮮やかな光景。

望んだとしても絶対に取り戻す事が出来ない……あり得ない世界。空想や夢物語と違って実感がある光景。

死んだはずの家族は生きていて。生徒会のみんなは僕の事を覚えている。

これを上回る幸せがどこにあるのだろうか？僕には想像もつかない。

「どうした、ライ。今日はいつもと様子が違うが、何かあったのか？」

艶やかな黒髪と紫水晶のような不思議な色の瞳をした少年——ルルーシュが横の席を指さして問う。聡い彼が異常を察知するのはいつも早い。

「いや、ちょっと悪夢を見ただけだ」

「む、そうか。夢など深層意識の作り出す幻影に過ぎない。あまり気にするなよ」

「心配かけてすまないな。仕事が終わったらチェスでもするかい？」

「ならば決着をつけよう」

謝辞を述べてからルルーシュの隣に腰を下ろす。同じように横でカレンも席に着いた。

滑らかで活気に満ちたそのさり気ない同級生の動作にちょっとした記憶との齟齬を覚える

そういえば、僕の記憶が確かならカレンは学校では「病弱設定」を通していたはずだ。なのに今は騎士団でそうするように素の姿をさらけ出している。

「カレン、身体の方は大丈夫か？調子が悪いとかそういうのは無い

かな？」

「はあ？ 私はいたって健康体よ。ここ数年風邪も引いてないわよ」

何言ってるんだコイツは？——そんな視線が、目の見えないナナリーを除く一同から向けられる。本人達に悪意が無いのは分かっていても少し傷付く。

だが同時に、カレンは何も隠す必要無くありのままの自分として生徒会のメンバーと接している事になる。ここにも一つの齟齬があった。

「はは、そういうのをバカは「スザク：それ以上言ったらクロス」：ごめんなさい」

そして何か言おうとした茶髪の少年——スザクをカレンは封殺。その光景は目新しくもあるけどカレンもスザクもいたっていつも通りだ。二人とも異常は無い。黒の騎士団の零番隊長とユーフェミア皇女殿下の騎士——という敵対関係ではなく、ごく普通の生徒会役員としての関係。

ついでに、カレンの静かな殺気に引き攀った笑みをうかべるスザクに対してさらに追加の書類をルルーシュが手渡した事でさらに笑みが引き攀った。（……ルルーシュ、それはあまりにも酷だよ）

そして、自然に僕の視線もテーブルへ——

目の前に積まれているのは書類の山、比喻や冗談は抜きにしてもこの規模の量を今まで見た事がないというレベルの書類の山。

不思議な事に、身体は目の前の日常に早くも復帰しつつあるのか、無意識のうちに手元に処理すべき書類が掴まれていた。

企画書らしきそれに書かれているのは『KMFで巨大ピザ作り』に関する食材の管理や許可関係の申請書類……

（なんというか無茶苦茶にも程があるというか。ミレイ会長が喜びそうというか……）

書類の山の何割かは似たような書類の類らしく。既に仕事を始め

ていたメンバーの何割かはどことなくげっそりとした表情で仕事を続行している。その表情に浮かぶのはもはや一種の悟りというか諦め。頑固な会長に文句を言っても何も始まらない事を熟知した顔。

「はあ、それにしても同級生の美女と可愛い妹にモーニングコールされるお前がマジで羨ましいよ。それなんてギヤルゲ？」

「うん？すまない、意味がよく分からないんだが略語なら教えてくれないかな」

「うおう、女子比率の高いこの部屋であえてそれを言いますか。なんというかそれは酷過ぎるぜ」

「：？」

仕事に疲れたのか、ふとりヴァルは顔を上げて、意味の分からない話を僕に振ってきた。

友として僕を扱ってくれるのは実に嬉しいが、時々よく分からない専門用語というか俗語を使ってくるのでリヴァルは時々対処に困る。

仕事から意識を逸らすため——かどうかは分からないが、もう一人女生徒が手元の書類から視線を外し、僕とリヴァルの会話にさり気なく割り込む。

「というか『同級生の美女』とか、『可愛い妹』とかの部分に関しては一切否定しないあたり、君は凄いいね」

「シャーリーもシャーリーでどうしたんだ？それ自体は当然の事だと思っただが……」

「——ッ！？」

ゴッン！！——何か吹き出すような音と共に横で作業を始めていたカレンがテーブルに頭をぶつけた。

同時に響くのは額がテーブルの角に衝突するかなり鈍い音。カレンは仮にも女の子。おでこは大丈夫だろうか？痣やたんこぶになら

なければいいんだが。

「そういうこと素で言うからあなたは見ていて面白いのよね、うふふ」

「ミレイちゃん……ちよつとそれは悪趣味だよ」

「ルル同様に鈍いというか、大胆というか」

「話切り出した俺が言うのもなんだけどお前のそういうところが本当に羨ましいよ」

不思議と向けられる奇異の視線——いや、これは好奇の視線とでも言うべきか。

記憶が戻る以前も度々こういう事があったが、記憶が戻ってもいまいちこの視線の意味が分からない。

カレンは耳を赤くしてテーブルに突っ伏し「うー」とか「あー」とか言葉にならないにならない声を発しているし。会長、シャーリー、二ーナにリヴァルはニヤニヤと僕に謎の視線を送るだけ。ナナリーはナナリーで口元に手をやってくすくすと笑っている。

ならば、必然的にこの状況の解説を頼める相手は限られてくる。

「なあ、スザク」

「なんだい？」

「なぜみんなは珍獣でも見るような目で僕を見るのだろうか？」

僅かに少年らしさの残った顔を傾げて友人は数秒間軽く唸る。

「さあ？　なんでだろうね。珍しくライが寝坊したからじゃないかな？」

「ああ、たしかにそうかもしれない」

なにか違うような気がしないでもないがとりあえず他に可能性も思いつかないので納得する、そもそもそこは本題ではない。僕が直面している『異常事態』の中でそれは実に些細な事。今僕に必要なのは冷静に思考を纏めて形にする為の時間。

「おい、みんな。話が脱線して手元が厳かになっているぞ。この調子では文化祭までに間に合わない」

「むう、ルルーシュ。それは私の台詞でしょう」

「なんだかんだで最終的に会長の言いたい事は『ガッツの魔法』に集約されるんですから別にいいでしょう。これも副会長としての務めです」

「なんだったらルルーシュがガッツの魔法をみんなに「結構です。全力でお断りします」………いつにも増してうちの副会長が冷たい」
ぶつぶつと文句を零しながらも、ミレイ会長は軽く息を吸い込む。
そして――――

「ガァァアツツツツッ!!」

運動部員顔負けな激励。目が見えず、聴覚の良いナナリーに配慮して一応声は控えめなのだろう。

会長の、ボリユームのある長い金髪がさらりと揺れる。これがミレイ会長秘伝の『ガッツの魔法』

ただの大声に過ぎないと言えはそれまでだが、なんだかんだで生徒会役員には効果があるらしい。会長に好意を寄せるリヴァルを筆頭に、それぞれが役割を果たすため手を動かし始めた。

手元の書類を黙々と処理する傍ら――――思考をフル回転させて現状を理解しようと勤める。

僕は、闇の書の管制プログラムと戦っていた筈だ。少なくとも山積みの書類との格闘ではない。

ごくごく当たり前な再確認。だが、こうして意識しなければ何もかもが―――家族を失った事も、ギアスを暴走させてしまった事も、生徒会の人々などの別れも、海鳴市に飛ばされた事も、はやて達との出会いも―――【ライ】という一個人を形成し、今に至らせる過程の全てが夢幻^{ゆめまぼろし}であったかのような錯覚に陥る。

この世界が、目覚めて以来起きている事象の全てが魔法の産物である事は恐らく間違いない。多分先の戦闘の際、単独戦闘など全く行えないほどに弱った僕を包みこみ、現実と隔離した例の光のせいだろう。

でなければ失われた日常や家族が再び僕の手の元に戻ってくる事などあり得ない。

過去を変える事は出来ず、死者も決して蘇らない。過去に犯した罪を無かった事にするなど許されない。

これは僕の『夢』だ。

心の奥底で望む『こうであってほしい』という『理想』

哀しい事の無い優しい世界。そして――――

世界は紅く染まっていた。

夕暮れ―――昼と夜が曖昧になる境界線。部屋を染める紅い光に比例して、二人の人影は細く伸び、床と壁の境目で屈折する。

声を発する者はその空間に居ない。

時折響くのは、こつつ、こつつ、こつつ、という小さな音。

こつつ……こつつ……こつつ

歩兵が魔導師を打ち倒す。

白と黒のせめぎ合い―――

チェスの駒と盤が接触する小さな音だけがそこに響く数少ない音。例外があるとすれば制服のこすれ合う衣擦れの音くらい。

「チェック、メイトだ」

心地の良い静寂に初めて生物の声が加わる。

白い騎士^{ナイト}が黒の王^{キング}を打ち倒す。これで疑似的な戦争は終焉を迎えた。

もしもこれが現実ならば、騎士の構えた刃は王の胸を貫き、倒れた王の血は大地を汚したのだろうか――

「日も暮れてきたし、これくらいにしておこう。

それにしても、今回は俺の負け……か」

何がおかしいのか、艶のある黒髪を揺らして敗者――ルルーシュはくつくつと笑う。

「もしかして手を抜いたんじゃないのかい」

「ふっ、ライはチェスで俺がそのような事をすると思うか？」

「あ……すまない」

「いや、いいんだ。全部終わった事……だからな」

そう言い、アメジストのようなルルーシュの瞳は盤上に向けられる。その瞳に一瞬、何か形容しがたい光が宿ったように見えたのは僕の気のせいだろうか？

まるで――白の騎士が王を打ち倒す――その事に意味があるかのような、そんな不思議な視線に感じられた。

ルルーシュを見ても、どこか達観した笑みをこぼすだけで何も分らない。ただ、何かを成し遂げた後のような満足気な表情に見える事だけがどうしても拭いきれない違和感を残す。

「なあ、ライ」

「どうした？ルルーシュ」

どこか瞳に真面目な光を灯した親友。その光に惹きつけられるように、片づけを始めていた僕の視線も自然と合わさる。

「お前は、世界の選択を迫られた時……どちらを選ぶのだろうか？」

誰にも等しく平和な明日が訪れないとしても未来へ向けての邁進を選ぶか、停滞と安寧に守られた変化無き過去に留まるか――」

「っ!?!?——ルルーシュ、それは…」

息が詰まる。

僕の現状をあまりにも正確に表現するその言葉に、どうしようもなく後ろめたい気持ちを抱いてしまったからかもしれない。

そして、同時に目の前の友人の姿がかつての上司こと、仮面の男ゼロとダブって見えたのも一つの要因であろう。

「ルルーシュ……君はもしかして」

何と、言いたかったのだろう。自分でも分からない。でも、ルルーシュはそれを遮るようにふっ、と笑う。

「あまり気にするな、ただの戯言さ。だがな、選択には結果と責任が付く纏う——そして覚悟も必要だ。

どんな選択肢を選ぼうとそれは変わらない。お前はそれを忘れるなよ、ライ」

友人の忠告——これは、確かにルルーシュの言葉だ。だが、同時にこれは僕の知るルルーシュの言葉とは少しだけ違うような……そんな不思議で曖昧な感覚。

「ああ……分かってる」

「そうか」

そこで友は満足気に頷き、壁に掛けられた時計を見て一瞬だけ思案顔になる。

気がつけば夕刻を過ぎ、外は既に夜の帳が下りていた。耳を澄ませば虫の鳴き声でも聞こえてきたかもしれない。

「もうそろそろ風呂の準備が終わった筈だ。夕食までは時間もあるし、先に入ってきたらどうだ?」

「ああ、お言葉に甘えさせて貰おう」

バスいっぱいには張られたお湯が心の冷え切った体を温める。

湯気が凝結し、髪を伝い、頬を伝い、顎を伝った水滴が重力に負けて水面に落ちた。

ぽちゃん！

そんな音と共に波紋が広がり、水面に映った自身の顔を歪める――まるで心の醜さを象徴するかのように。

この世界は、僕の理想だった。夢だった、幸せだった。

だが同時に、作り物で、偽りの世界でもある。

最初から全て分かっていたんだ、そんな事。これが、「夜天の魔導書」という真の名を失った魔導書が見せる夢だなんてのは百も承知だ。

なのに――――なのに――――

「何で僕は――――ここに留まりたいと望んでしまっただッ！！！」

勢いに任せて壁に叩きつけた拳から血が滴る。

どうしようもなく悔しかった。腹が立った。

そんな感情を抱いてしまう事が、同時に「はやて達を守りたい」という決意を否定するようで。それがさらに自己嫌悪へと繋がる。

自分の決意はそんなちっぽけなものだったのか、こんな幻想の前に揺らぐ程度の物だったのか？

己の内に隠された、どうしようもなく昏くて歪んだ心が声を上げる。

僕そっくりに形を得た真っ黒な“影”が鏡に映る。

『ソノ願いのナニがワルイ？』

「五月蠅い！！」

『オマエが守りたかったモノはナンダ？最初からキマッテイタだろ

う?』

「五月蠅い!」

『はやてトカ言うガキやコワレタ人形共ナンテ放ってオケバ良いだろう? 所詮、偶然デアッタだけの他人だ』

「五月蠅い」

『オマエは、自分の守りたかった者をあの少女と重ね合わせていただけだ。だからこれは畢竟に過ぎない』

「うる…さい」

ムクムクと膨れ上がる心の“闇”に——己の心の醜悪さに吐き気を覚える。

返す言葉が見つからない。

この『声』は、確かに僕という人間の本質を反映している事に気付いてしまったからだ。

なにかとても大切な事がある筈なのに、それが靄に隠されたかのように見つける事が出来ない。

そして残酷な事に、この“闇”に屈しても幸せな夢が待ち受けているだけという現実が、思考を鈍らせる。

「久々に見つけたと思えば…何だ、この荒れ様は?

ルルーシュの奴が見れば嘆くぞ…いや…身内に甘いアイツの事だ、親身に相談に乗るかもしれないな」

声が——響く。

僕の内から発せられる魔の誘惑ではない。老獪な少女のような落ち着いたような、呆れた様な声。そしてとても聞き覚えのある——

「もしかして……C・C・か?」

「何だその間抜けな顔は？ 私のような絶世の美少女が他に居るとい
うのならご紹介願おう」

エメラルド色の長髪をたなびかせ、遠慮容赦なく他者を罵倒する
その少女。

そこにふんぞり返っていたのは、紛れもない“魔女”だった。

——第十二話 完了——

第十二話 夢の味（後書き）

『あとがき』

今更な報告ですが、ライの家族に関しては血筋を除けば、名前とか性格的な事は原作に明確な描写が少なかったのでオリジナル設定が多々入っております。

さて、今回の夢の世界ですが、ちょっと補足的な事でも――

イメージ的にはロスカラ本編の学園篇と黒の騎士団篇カレンルートとかを意識しております。まあカレンが素を出している時点で元も子もありませんが（汗）

ついでに、ランペルージ兄妹が居るので、この世界でのライの名字は『皇』^{すめらぎ}だったりするという限りなくどうでもいい裏設定も（笑）

次回の更新も間が開くでしょうが、出来るだけ早く更新出来るように頑張ります。

第十三話　そして二人は秘密を持った（前書き）

またまたお待たせしました。

徐々にライのオリキャラ化が進行しているような気がするので、スカラファンの方々から叩かれなかヒヤヒヤしております。誤字脱字の報告や感想お待ちしております。

第十三話　そして二人は秘密を持った

夢の世界にも季節はある。

ライの頬を撫でるのは12月の身を切るような寒風ではなく、生命の活動を加速させるような優しい秋の夜風。

日本の四季の移りを考えれば肌寒く感じる筈の風も、冬の海鳴に居た彼からすれば十分に温かい。

場は、先ほどまでのタイル張りの浴室から移動し、アッシュフォード学園の屋上。固いコンクリートも、バリアフリーを考慮していない段差も、日を追うごとに一つずつ増えてゆく壁の『×印』も彼の記憶通りだ。

かつての彼なら何の『色』も見出さなかったであろう————平和で温かな光景。

「それで、君はなんでこんな所に居るんだ？」

湿って肌に張り付く銀髪からタオルで水気を払いながらライは問う。

行き過ぎた自己嫌悪で蒼白になっていた顔色も、入浴の最中に侵入して来た魔女との予想外すぎる再会でとりあえず生気を取り戻していた。根本的な解決ではないが、一時的にでも気を紛らわす事がプラスに働いたのだろう。

「それは……」

魔女——C・C・の白磁のような肌がほんの僅かに朱に染まる。「お前に恋焦がれるあまり我慢できなくなって会いに行った……と言ったら…信じるか？」

恥ずかしげに指をからめ、瞳を潤ませながらライを上目づかいに見上げる姿勢。

見目麗しい少女に、まるで恋する乙女のような姿を間近で見せられれば、大抵の男はそれだけで魅了されてしまうだろう。

が、それもあくまでこの魔女の本質を知らない場合の話。

「芸が細かい所申し訳ないけど。前にも言った通り、本当に僕に恋焦がれていたら君は服を着たまま来ないと思う」

「ちっ、騙せると思ったんだがな」

演技が通じないと分かるや速攻で素に戻り、どこから持ち出したのか、湯気の立つピザを頬張るC・C・にライは苦笑する。ついさっきの光景が幻だったのでは？と錯覚するほどの変わりようだ。

そして、沈んでいた心を少しだけ軽くする魔女の小粋なジョークは見事にツボにハマったらしい。

「同じシチュエーションを再現したら思い出さざるを得ないよ。

……でも服が違うな」

「む？ ああそうか、お前はこの服装を見慣れていないんだったな」
フリルを始めとした装飾が付いた服装に、翡翠色の髪をサイドで括ったC・C・の服装は少しオシャレをした少女。というカテゴリに十分当てはまる程度の物だ。ライの記憶に在る彼女のお決まりの『ちよっと特殊な服装』でないだけで特におかしな所など無い。

「こちらの方が見慣れているんだろう」

刹那——C・C・の服は光の粒子に変換され全身を包み込むように拡散し。髪型はストレートに、服はベルトが複数付いた白い拘束衣に変化し、形を得る。

「手順はCの世界の応用でも何とかなるのか。

それにしても、普通の服より拘束衣の方が良いとは……お前もとんだ変態だな」

「うん、ものすごく不名誉なレッテルだね。まあ、いつも通り元氣そうで何よりだ。」

久しぶり……とは言っても最後に会ってから一か月も経っていないか」

神根島から海鳴に飛ばされたのが十二月上旬、そして管制プログラムと戦闘に入ったのがクリスマス・イブ。日付を脳内で計算し直して自分の台詞が不適切だったとライは悟る。密度の濃い時間だったとはいえ、そのうち一週間以上は気絶したまま過ごしたので体感時間にしてみるとかなり短かったりする。

「ん…一か月ぶり？」

そうか…：そちらではまだ一月しか経っていないのか…：」

「どうかしたのかい？」

「いや、なにこっちの話だ。お前は知る必要がない」

怪訝な表情を浮かべるライをC・C・は冷たく突き放す。

だが、ライにはそれ以上問い詰める事が出来なかった。原因はどうあれ、既に元の世界と接点を切り離してしまった以上、それを知っても無価値だと悟ったからだ。

そしていつも足りないのは情報。自分の理解の及ばない範囲での物事の展開に若干の慣れを覚え始めた少年の行動は早かった。

「それで…『何故君がこんな所に居るのか？』という疑問に対する明確な答えをまだ貰っていないんだけど？」

君もまた、僕の夢が作り出した幻想だ…なんてオチは勘弁だよ」

「やはりココは夢の世界だったか。なに…私がお前の望む形で表れるというのなら、一糸纏わない美しい肢体をお前の眼前で披露していたと思うぞ」

諧謔を交えた言葉というものは使う時と場所を間違えると相手の気を逆撫でするものだ。

「おいC・C・ いい加減冗談は————」

「これがあながち冗談ではないんだ」

「なに？」

「どういうことだ？———そうライが不審そうに眉をひそめる前で、手品師でも気取ったかのような華麗な動きで一つの箱を取り出す。」

箱、と言っても厚紙を折れば出来上がるような安っぽい物で平べったい、そしてライにとっても見覚えのあるピザの配達店のロゴがプリントされている。どこからどう見てもピザの宅配に使われるそれにしか見えない。

「この中に何が入っていると思う？」

「なについて……そりゃあピザだろう」

「ああ、ピザだろうな」

すんなりと同意したC・Cが箱を開ける。案の定、中に在るのは円状のピザ、香ばしいベーコンの匂いとチーズの独特な匂いが鼻腔を刺激する。毎日その匂いを密室でかがされてそう思うかどうかは別だとしても一般的には食欲をそそられる匂い、という事になるだろう。

「この箱の中には“つい先ほどまで”ピザが入っていた。ピザは私の胃の中だ」

「だけどピザは今ここにある」

「ああ、“お前がこの中にピザがある”と勝手に誤認したからだ。本当ならば、ピザの入れ物にピザが入っているかどうかは開けてみるまで分からない」

「おい、僕はシュレディングーの猫について講義するつもりは……いや、要するにこの世界は僕の夢で、僕の思い通りになる、という事を証明したかったのか？」

「ふむ、お前の持ち得る情報からはじき出すには上出来な答えだな」

（随分と人をおちよくったC・Cの態度もそれなら説明がつく

けど…)

だが、それは仮説の証明であって現状の説明ではない。

そして同時に、一つの事柄にライは思い当たる。

(C・C・も現状を百パーセント理解しているわけではないのか？)

確かにこの魔女は、たかだか二十年も生きていない少年に比べて信じられないほど長い年月をその身に積み重ねてきた。ギアスを始めとしたとんでもない世界の裏側に関する知識も豊富な筈だ。その全貌は計り知れない。

(でも、彼女として全知全能ではない)

目の前で飄々とピザを頬張るC・C・を見つめる。

デウス・エクス

舞台の袖から介入して全てを終わらせることのできる見えざる神マキナの腕や物語の全貌を把握出来る神ではない。会えて表現するなら傍観者というのが近いかもしれないが、傍観者と言うのは本来《全てを知る者》という意味でもない。

無論、答えか、もしくはそれに近い核心のようなものを彼女は知っていてもおかしくはないのだが。

「ここは、思考そのものが一つの物理法則として成り立つ世界。現実のどこにでも存在して、どこにも存在しない場所。

即ち、お前の認識野を媒体として存在する『夢』だ。そして、同時にCの世界とリンクした『黄昏の間』でもある」

その声に絶対の自信は無く、それがあくまで彼女独自の知識や経験を元に作られた『推測』に過ぎない事を物語っていた。

「いや、そうでなければ、数少ないギアス保持者であるお前の夢とはいえ根源の渦に還る事の出来ない私は介入できない筈なんだ」

魔女は不満気に唸り、金色の瞳は粗探しでもするかのように偽物の夜空を睨みつける。

だが、流れる雲はどう見ても本物で、雲の合間から顔をのぞかせる満月は悔しいくらいに美しく幻想的。

傍から見ればC・C・は、満月にウサギの影を探している子供のようにも見える。

「要するに、君にも何が何だか分からない。という事でいいのかい？」

「バカかお前は、少なくともこの場で私が最も現状を把握しているぞ」

「把握できているのならば是非とも魔女様にご教授願いたいな。この摩訶不思議な空間に関しては現時点の僕にとっての最重要課題だ」
「その質問の意図は——ここから脱出する為か？それともここに残り続ける上でこの場を知りたいが為か？」

「っ！——それは……」

「一つ言っておくが、私はそこまで優しくないぞ。魔女だからな」

あまりにも手痛いカウンターにライは何も言えなかった。

意識的に振り払っていた最も大きな問題で、答え次第では完膚なきまでに決意を砕く残酷な鉄槌。

どちらにでも傾く可能性を秘めた天秤は今、両の皿に余りにも重すぎる分銅を乗せられ、ミシミシと音を立てて歪な音を奏でている——心に内包した矛盾と闇が生み出す苦悩と嫌悪の原因。

「まあいい————幸いにも『時間』だけはたっぷりとあるはずだ」
そのあまりにも情けない姿をあえて無視して魔女は話題を元に戻す。

「私にも、分からない事くらいある……だが、いかに『黄昏の間』が不安定で曖昧な空間だとはいえ、こんな形で他者の夢と混ざり合うなどあり得ないんだ————まあ、Cの世界こちらでも最近それなりに大きな変化があったわけだが……それでも都合が良すぎる。

考えられるとしたらお前の夢に形を与えているこの『依り代』に何らかの異常が起きた。まあそんな所だろう。

こうして私がこの空間でも実体を得るまでになったのは本当について先ほどの事なんだ。逆にそれだけ『綻び』が大きくなっているという事でもある。———なにか心当たりは無いかな？」

「……そう言われても———あっ」

「どうやら思い当たることくらいはあるようだな」

———愚直なまでに道具である事を徹頭徹尾貫き通そうとしている妖精が居た———

———お伽噺のように心を閉ざしたその妖精の心に、少年は一つの波紋を広げようとした———

———小さな波紋一つでは何もできない、だが、それに続いて波紋を広げようとした少女達を少年は知っている———

———幾つもの波紋が重なりあい、共鳴して大きな揺らぎを作り出したのだとしたら———

「たぶん、この魔法を展開している駄々っ子も悩んでいるんだ。外の魔導師達は何かしたのかもしれない」

「む、魔法？」

再びピザ切れを口に運ぼうとしていたC・Cは意外そうに瞬きをしてそれを中断。熱で溶けたチーズがとろりと下に流れ落ちる。

突飛な事を言い出した事への対応というよりは、ただ単に懐かしい単語を聞いたといった感じだ。

「薄々そんな気がしていたが———なんとも厄介な世界にお前は招待されたようだな」

「…驚かないのかい？」

「私は魔女だぞ？ 魔女が魔法に驚いてどうする」

「そう言われればそうなんだが……それに、異世界についても知っているような物言いだ」

「並行世界の存在自体は別段珍しいものでも無い。並行世界に広がる可能性宇宙の数などそれこそ星の数ほどもある。」

「何を、どこまで知っている？」

幾星霜もの時を重ねてきた気まぐれな魔女は答えず、どこか遠くに思いをはせるように瞳を細めるだけ。

身体を束縛するための拘束衣に身を包んでいるが、その心を束縛出来る者はどこにも居ない。勝手に寄って来きても、掴もうとすればするりと抜け出してしまう。

そんなC・C・はいつだって予測の出来ない行動や発言をするものだ。

「おい、ライ。服を脱げ」

「は？突然何言って」

「いいから脱げ。下を脱ぐなんていうボケは詰まらんから却下だぞ」

「……分かったよ」

何か意図があるのだろう、そう思ったライは洪々と頷いて制服のボタンを外し、シャツをはだけける。

先ほどまで入浴していたせいかほんのり赤くなり、湿気を帯びた鎖骨と、少々不健康にも見える色白の肌が外気に触れた。夢の中の季節は夏の終盤とはいえ少し肌寒い。

「ふむ」

ひんやりとしたC・C・の指が無遠慮にライの胸板に触れた。

何かを探るように上下していた指は目当ての物を見つけ出したと言っても言うように、丁度心臓の真上辺りで止まる。

「っ！———」

同時に、異物が体内に侵入するかのような感覚がライの背筋を走

った。

C・C・が何かをしているという事は分かって、それ以上が彼には分からない。

時間がたつにつれ、頭痛が始まり、吐き気が大きくなる。

——これ以上は止めてくれ——彼がそう言おうとした時だった。

「これは…鎖か？」

やはり、ギアスに封印が施されている、発動プロセスの阻害……

いや、空き要領の拡張と供給の妨害もか——

どちらにしろその場しのぎではあるが有効な手立てだ。……体系化された魔法の利点と利便性は馬鹿にならないな」

一人で謎の論理を展開して、勝手に納得したように頷くC・C・

「C・C・…一体…さっきから…何を言ってる」

「いちいち説明するのは面倒なのだがな…」

もう用は無いとでも言わんばかりにC・C・は、息も絶え絶えなライからひょいと離れる。

始まりと同様に、悪寒が去るのも唐突だった。

「さて、何から話すべきか」

珍しく迷うように首をかしげるC・C・に対して不審そうにライは視線を向ける。

「どうせ何でもかんでも僕の質問に答えてくれるわけではないんだろう。」

「だったら要点を纏めてくれるとこちらとしても助かるんだけどな」

「やれやれ、形式美とやらをもう少し重要視すればいいものを」

「君がそれを言うか」

「まあ、こちらとしてもその方が楽だから良いのだが……その前に一つだけこちらから質問をさせて貰おう。その上で私が決める」

「……僕に決定権はないんだろうね」

「質問から逃れて、私から逃れて幸せな夢への逃避行なら出来るぞ」

「……分かった、初めてくれ」

その時のC・Cの声は、冷たく平坦だった。

「お前は、どうするつもりだ？」

かつて失った者達や、守りたいと思った者達と暮らせる偽りの日常で過ごすか――――

私が知らない、新たな居場所へ戻るか――――

ここでならそのどちらも選択出来る。お前が望めばここに留まることも、ここを去ることも出来る」

「僕は……」

避けようの無い真っ直ぐな言葉に言葉を詰まらせる。

答えない……などという生ぬるい選択は許されない、有無を言わせない空気がそこに在った。

白くなるほど拳を握りしめ、唇を噛んでライは首を振る。聡明な少年の姿はそこに無い。

「僕には分からないんだ」

「ほう？」

「はやてやヴォルケンリッターを……新しい居場所やその人達を見捨てる事はしたくない。

だけど、偽物だと分かっているでもそれを切り捨てたくない自分も居るんだ……

新しい居場所で生きて行く覚悟もした、だけどそれが揺らぐんだ……家族やルルーシュ達の居る日常を目の前にしたら……どうしようもなくそこに留まりたいと願ってしまう」

ライの声は、震えていた。

己の本質が生み出す矛盾が故に、大切な者を捨てる決断が自分を壊してしまう事を――――

過去の罪や過ちから逃れて幸せな墮落に身を委ねてしまう事を――
今まで自分を騙し続けて隠していた心の闇を――――恐れていた。

「情けないな。そして無様で、みっともなく過去への未練を捨てきれない。

お前はそうやって惨めに悩み続ける姿がお似合いだ」

「……………」

魔女は、そんな少年を罵倒する。

少年は、返す言葉など持っていなかった。

「未練はある――――だから、未練は無い」

「え？」

続くであろう罵倒の言葉を噛み締めるように俯いていたライは予想外の言葉に顔を上げる。

C・Cの発したその言葉は、なぜなら――――

「生徒会や騎士団で過ごす日々を失いたくない。だからその日々を失わせる自分はそこに居るべきではない。

お前が学園を去る時に私に言った言葉だぞ――――もしかして忘れたのか？」

「いや……そんなことは」

違う、とは言えなかった。ここ最近の密度の濃すぎる時間のせいでそれは少年の記憶の隅に押しやられていた節も少なからずある。

「私の知るライという人間は、意味も無く自己を卑下して悩み。どうやって未練を切り離せない弱くて馬鹿な人間だ。

今のお前は見事にそれを体现している。――――いつもどおりじゃないか」

「でも……だけど……」

「弱くても、悩んでも、未練を捨てられなくてもいいんだ……私を

失望させるな、ライ。

お前は『人間』だろうか？」

その声はとても静かで、穏やかだった。

今思えば、C・Cの事に関してライが知っている事など実に少ない。

誰に対しても大胆不遜、ギアスに精通しているコード保持者で、三度の飯よりピザが好きな、不老不死の呪いを受けた少女。

自らを魔女と呼称するその少女は、その実とても優しい心の持ち主だ。そう、魔女として致命的なくらいに。

「…その言い方は卑怯だよ」

「別にかまわんだろう、私は『魔女』なのだから。

で、答えをまだ聞いていないんだが？」

「ここまでして、まだそれを訊くか？……どうせ答えは分かっているだろう」

「形式美を重んじようという私の気持ちもわからんようだな、お前は。」

まあ、別にそれでも私は一向に構わんが？」

人を振り回す言動はいつだって魔女の十八番

情報を引き換えに出されれば従わないわけにはいかない。何かが吹っ切れたようにライは息を吸った。

澄んだ空気が彼の肺を満たし、空気を震わせる準備を整える。

「僕は、かつての日常をそう簡単に諦める事が出来ない」

「ふむ、未練な男だ」

「だけど、それが原因で今を生きている大切な人たちを失う事がどうしようもなく怖い」

「情けないな」

「だから、かつての日常への未練をどうにかすることは出来ないし、悩みもするけど。『今は』この『夢』から出て行こうと思う」

「うむ、綺麗な解決は何一つ無いな、後味が悪い」

いちいち魔女の相槌は人を小馬鹿にしたような台詞が付録として付いてくる。

だがそれに気を悪くする事無くライは笑う。

魔女が礼儀正しい聖女を装う場合が最も恐ろしい。その場合は大抵子供を喰らう時や王侯貴族を欺き利用する時と相場が決まっている。

「何とでも言え、僕はそういう人間だ。」

「開き直るか、私の共犯者はまた違う答えを出すのだろうが……その答えは嫌いじゃない」

遠い空に浮かぶ空に視線をやってC・C・はピザを頬張る。すっかり冷めたそれを美味そうに咀嚼して飲み込んだ。

「じゃあ、いろいろ訊かせて貰おう」

「ああ、私が答えたくない問い以外なら答えてやろう」

「……やっぱりそれって卑怯じゃないかい？」

「知った事か、私は魔女だ」

月光を照り返す緑色の髪と金色の瞳が煌々と妖しく輝く。
そして二人は秘密を持った。

—————・・・・・……………

『夜天の主の名において汝に新たな名を送る——
強く支える者——幸運の風——祝福のエール——リインフ

オース』

優しい月光が夢の世界に降り注ぐ。

空を見上げれば先ほどより大分高く昇った満月が夜天をバックに二人の人影を投影していた。

茶髪の小柄な少女——夜天の主八神はやてと

主に抱かれるような形で真紅の双眸に涙を浮かべた銀髪の女性——

——名を得た妖精リインフォース。

年齢を考えれば後者が年上である筈なのだが、不思議とそれも逆転して見える。

「あれがお前の新たな居場所か」

「ああ……」

夜空に浮かぶ月へ金色の瞳を向けてC・C・が問う。

問いに答えるライの表情は涼やかだ。

「ナナリーに対する態度からも常々思っていたが……お前は幼女趣味だったのか」

「……それに関しては全力で否定させてもらうよ」

「……………」

「なんだい、その露骨に意外そうな顔は？——君の僕へ対する認識が物凄く気になるんだけど」

「冗談だ」

「冗談は嫌いなんじゃなかったっけ？」

「ちっ、なかなか口の減らない奴だな」

ちょっと陰悪な雰囲気が二人の間に漂うが、それも直ぐに霧散する。

世の中には様々な別れの形があるが、この摩訶不思議な逢瀬の終わりもまた別れなのだ。

「本当に、行ってしまうのだな？……夢とはいえ、お前の家族に別れを告げる時間くらいならあるぞ？」

「ああ。弱い僕が今みんなの顔を見れば、きっと決断出来なくなる」

「これからお前を待ち受ける運命は……いや、別れの瀬戸際にする話では無いな、何より私らしくない」

「なんなら無事を願って祈りでも捧げるかい？ 礼拝堂ならここにもあったはずだろう」

「ふっ、魔女の祈りを受けた船は沈没するぞ？」

ライの何気ないジョークが琴線にでも触れたのか、けらけらと可笑しそうに笑う。

その笑みに含まれるのは寂しそうな色。

「なあ、ライ」

「どうした？」

「おまえが目覚めた世界はおまえに優しくかったか？
目覚めた事を後悔してはいないか？」

「C・C……」

かつて生きる事に絶望して眠りに入った少年へ、魔女は最後の問いを投げかける。

その問いは、本来なら誰の耳にも入らず、答えを得られない筈の問いだった。

「目覚める事がなければ二度と別れの悲しみを味わうことも無かった。だけど代わりに僕はずっと人間未満のままだった。

世界は僕に優しくかった……僕は幸せだったよ」

「そうか……その答えを聞けただけでも私は————」

少年に背を向けた魔女の緑色の髪を風がなびかせる。C・Cがどんな表情をしているか誰にも見えない。

そして言葉の最後は、風にさらわれて少年の耳へは届かなかった。
いや、それで良かったのだろう

「これは私からの選別だ、ありがたく受け取っておけ」

月光を反射する小さな“ナニカ”が二人の間を放物線を描いて飛び、ライの手の平に長年連れ添った愛馬の手綱のように納まる。

それは今更どうというものではない、彼からすれば見慣れたデバイス——月下の機動キー

ただ、見慣れない意匠の変化を始めとした細部の変更点が真っ先に目に付き、疑問を抱いた。

「月下…なのか？」

＜肯定。システムバージョンアップや搭載装備の大幅な変化こそあれ、私の人格AIは貴方の知る月下先行試作機のそれと子細ありません＞

中心部に埋め込まれた桜色の宝石を点滅させて事務的に報告する己の愛馬から視線を上げてライは再びC・C・に視線を向ける。咎めるような目線だ。

「いつ盗った」

「ついさっきお前が制服を脱いだ時だ、嬉しい変化が訪れている筈だぞ、俗に言うパワーアップというやつだ」

「………はあ、感謝する」

いけしゃあしゃあと真顔で宣言するC・C・に何を言っても無駄だと悟って、ライは少々不満気に謝辞を述べる。

そして何より、『パワーアップ』という単語から少なからず魔女の厚意を感じ取ったというのもあった。

「さよならだC・C・——出来れば他のみんなは元気かどうか訊きたかったんだけど……」

「……それを知りたいなら自分の目で確かめろ、他人を介して知っ

たところで何の意味も無い。

さあ、夢を見る時間は終わった。良い子は目覚める時間だぞ」
「君はいつだって変わらないな」

少年は苦笑いを堪えながらも月に手を伸ばすように己のデバイスを天に掲げ、叫ぶ

「月下……起動！」

それは止まった歩みを再び進める小さな一歩。

夢に囚われた少年を無理やり現実に戻す魔法の呪文。
願いを力に変える、意味のある言葉。

ライを中心に空間が球状に蒼く塗り替わり、人を丸々内包した光球は重力の網から逃れてふわりと浮きあがる。

ただひたすら飛翔する鷹のように、夜空を蒼く切り裂き、昇り、昇り、昇り……消えた。

「行った……な」

夜空に蒼の残滓を残して前へ踏み出した少年。

C・Cを一人残して他に誰も居なくなった筈の屋上に“男性”
の声が響いた。

「盗み聞きとは趣味が悪いぞ。……やはりこちらに来ていたのか“ルルーシュ”」

「ああ、アイツの夢が生み出したルルーシュ・ランペルージの幻影に乗り移る形で、だがな。全くの偶然と言い換えてもいい」

艶のある黒髪と、紫水晶のような少年の瞳は月光の下では妙な美しさを醸し出している。

魔女の共犯者————魔王の姿がそこにはあった。

「思い出していたのだな」

「死ぬとギアスは解ける……皮肉な話だ」

魔女の肩に寄り添うように並び、夜空を見上げてルルーシュは呟く。

死者に願いは届かない、死者の願いも本当の意味では生者に届かない。

「記憶を消されていた事……どう思った」

「勿論、怒りを覚えたさ。ライがどう考えてその選択肢を選んだかは想像が付く。だが、記憶の中からライが失われるくらいなら別れの悲しみを皆と共有した方が良かった。アイツがした事は、皇帝がかつて俺にした事と同じだ」

「ふっ、やはりお前は身内に甘いな」

過去に抱いた怒りを思い出したのか、肩を震わせ、拳を握りしめ、瞳に憤怒を滾らせるルルーシュにC・C・は背中合わせに体重を預ける。

偽りとはいえ、存在を確かめるように。

「だがそれも終わり、主を失った夢は覚めるものだ」

「ふっ、それでいいんだ。世界に憎まれた悪逆皇帝が他人の夢の余録に預かるわけにはいかない」

黒い髪も、華奢な指も、ルルーシュの身体は光の粒子へと変わり、少しずつ空間に溶け込むように霧散してゆく。

それを満足気に眺めながら魔王は笑った。

「ライは……どんな道を歩むのだろうか。出来れば俺と同じ道は歩んで欲しくない」

「本質的にはお前と似ている、意外と似たような道を歩むかもしれないぞ?」

「世界を壊し、世界を創る……か」

「どうした、お前も後悔しているのか」

「まさか…全ては俺の計画通りだ、不満などあるわけがない」

心外だとしても言わんばかりに魔王は魔女を睨む。

その言葉が嘘かどうか、それを知るのは魔王本人だけ。

さすがの魔女もそこだけは見抜く事が出来ないのか、早々に諦めて瞳を閉じた。

もうルルーシュの身体は夜空に輝く星の光を透過するほど希薄に、制服越しにC・C・へ伝わる感触も徐々に弱くなる。

「王の力は人を孤独にする————」

それをライはどう否定してくれるのか見物だ。なあ、ルルーシュ」

「さあな——俺はライじゃない」

甘く囁く魔女に答える魔王の声はいつだって素っ気ない。

C・C・が瞳を開くと、そこには崩れゆく夢の世界があるだけで共犯者の姿は無かった。

第十三話　そして二人は秘密を持った（後書き）

『あとがき』

ひとまずC・C・のターンは終了……

ギアスの性質上や、私が勝手に作ったオリ設定のせいで予想以上にキーパーソン化が進んでいるのでそうやすやすとは出せないのです（涙）

ちなみに余談的な話をする、ここのC・C・は一応コードギアスの正史をR2終了までルーシュと共に過ごしている（要はアニメ版終了後）なので好感度というか信頼度のな物はライよりルーシュの方が上……だと思われます。まあ、だからなんだ、ってわけですが（汗）

ちゃっちゃとA' S篇も終わらせたいところですが、皆様もう少し付き合って頂けると幸いです。

第十四話 帰還（前書き）

前回の投稿から一カ月近くも開いてしまったorz
学生生活が忙しかったんです、仕方なかったんです。決して紅蓮と
ランスロット見たさにスパロボプレイしまくってたわけじゃあ……
すいません、スパロボしてました。

なんかあんまり見せ場が無いような気がします、感想お待ちして
ます。

第十四話 帰還

愛おしく、苦しい夢。捕らえられれば、静寂に包まれた緩やかな死を約束する心の監獄。

その闇の中から少年は這い出た。

行く先が幸福だとは限らない、迷いもするし悩みもする——だがそれは間違いなく前進であった。

重要な手土産といくつかの秘密を携えて彼は帰還する。

空には曇天の帳が掛かり、下に視線をやれば黒く冷たい海水と、邪悪な龍の卵を連想させる昏く濁った漆黒の球体。

遠く離れた沿岸に眼をやれば、現実より隔離された位相結界の中を煌々と照らし、天を突くように立ち上る巨大な炎柱が何本も。

見ればだれもが世界の終末を連想しただろう。

12月の寒気と死の気配が支配する世界で——骨と骨、肉と肉がぶつかり合う音が響く。

「歯をくいしばれ」

「ぐっ！」

厳密に言うならばそれは人が殴り飛ばされる鈍い音。

そして、結果に原因が先立つ以上殴った側と殴られた側も必然的に存在する。

最後の夜天の主——八神はやてと、新しく名を得た魔導書の妖

精リインフォースの凱旋に伴った守護騎士プログラムの再生という一つの奇跡。

殴り飛ばされたのは、それに際する感動の再会に少し遅れる形で闇の中から生還した少年。

殴ったのは、筋骨隆々の肩を静かに怒らせる盾の守護獣ザフィーラ。

普段の彼の寡黙で静寂に包まれた言動とは裏腹に、固く鍛え上げられた筋肉に包まれた拳は、本物の獣のそれに等しい荒々しさも内包されている。

本気では無かったのだろうが、その拳打の威力は馬鹿に出来ない。

だが、突然の奇行とも呼べる行為に目を白黒させているのは八神家のメンバーを除くミッド魔導師、要するに今回の闇の書暴走に際して前線で尽力した高町なのはを始めとした管理局所属もしくはそれに類する魔導師や使い魔達だけ。

「げほっ！ 一体何なんなんだ、ザフィーラ」

「己が胸の内に訊くといい」

中空で足場の役目を果たす巨大な魔法陣の上で苦しそうに身をよじって姿勢を直したライは、血の滲む頬に手を当てて考え込む。

久しぶりの再会の筈なのに随分と周囲からの扱いが酷い気がしないでもないが、シグナムを始めとした守護騎士メンバーから明確な擁護の態度を取る者が居ない事と何か関係があるのだろうか。

はやてや守護騎士達が存ぜぬ所でも色々と危険な目には遭っているのだが、とりあえず彼女達が把握しているであろう範囲の中から幾つか怒りを買うような節を見つけ出す。

事実上の方便に過ぎないが故に彼自身殆ど失念しかけていた台詞。
(そう、あれは……アースラ襲撃を提案した後だったかな)

「ええと、『必ず無事に帰って来る』という約束を守れなかった事……ですか？」

「それもある……だが、本当にそれだけか？ ライよ」

「ええと、なんのことでしょう？」

ライ自身、色々と思いついた節が無いわけでもないが、第三者に知られる可能性の限りなく低い物ばかりなので、下手をしてボロを出すわけにはいかない。

特に、夢の中でのC・Cとのやり取り。夜空を煌々と照らす月の下で聞かされた『アレ』に関しては絶対に気取られてはならない。向こうに鎌かけの意思が無くとも、時として雄弁に働く口のように所作から感情が漏れ出る事も無きにしも非ず、だ。

そして、鎌をかける意思など端から無かったのだろう。

「さっき執務官さんから聞いたわよ、ライ君」

「殺人用のナノマシン……何故話さなかった、ランペルージ」

執務官・殺人用ナノマシン——さり気なくシャルとシグナムの発したその単語で大方の見当が付いた。

管理局の中で執務官、という立場の人間がどれほどの割合で存在しているのかライには知る由もないが、先ほどから事態を静観するように浮遊していた黒髪の少年——クロノ・ハラオウンの表情に僅かな変化が訪れたのを見逃すはずが無い。

「君の体内に注入されていたナノマシンの事だが、つい先ほど首謀者達を捕らえたからもう心配は無い。そういった趣旨の事を僕が伝えただが……やはり、そちら側でも色々と事情があるようだな」

「出来れば内密にして欲しかったです……」

要するに、重要度の高いと思われる情報の共有。情報の錯綜が時

として大きな悲劇を引き起こす事を鑑みれば現場指揮を任される者として当然の行為なのだが、今回はそれが裏目に出た。

かつて生きる事に絶望したとはいえ、今のライは決して死にたがりというわけではない——ただ、彼にとって、自分の命というものは単に優先度が低いだけなのだ。

だからこそ、自分の命を天秤に乗せて思考をしてしまう。

けれど、その天秤は壊れていて、彼自身の命を乗せても小さく揺れるだけ——それがライの異常性。

客観的に自己の生命を扱うという事は、近しい者にとって忌むべき事以外の何物でもない。

「我ら守護騎士が『守る』のは主の御身だけではない、その御心も守って初めて我らは騎士としての本懐を全う出来る。」

ライ、お前も我らと志を同じくするのならば、自身の死が主の心を傷付ける事を心得ておけ。」

盛り上がった肩の筋肉を誇示するかのようにザフィーラはより一層凄みの効いた声を発する。

盾の守護獣——その言葉の意味する通り、蒼き狼に与えられた騎士としての役割は『守護』という色合いが実に強い。

その固い意志と強靱な肉体はまさに役割に適していると言ってもいい。敵を打つ刃の役割をシグナム達に一任している事もあり、寡黙な彼が敵意や怒りを表に出す事は少ない。

だが、『守る』という行為は、時として害となる敵を排除する最初の攻撃性も同時に備えているのだ。

それ故に野性を内に秘めた獣の牙と爪は時が移ろう中でも『力』

の象徴として扱われる。

嘘を吐くだとか、騙すだとか以前に、野性の本能の前では表層を覆う仮面ベルソナなどいともたやすく剥がされる。

言うべき事は全て言い尽くしたとでも言わんばかりに後退するザフィーラ。

それに安堵するライだったが、一難去ってはまた一難。

「ライくん……私の言いたい事、分らんゆうことは無いよなあ？」

「あ、いや、ええと」

祝福の風との融合で、髪色は明るいクリーム色へ、瞳は澄んだライトブルーへ。その身に纏うは騎士甲冑。

姿形に変化はあれど、立腹した八神はやての迫力というのは9歳児に不相応に大きかった。

ライは若干表情を引き攣らせて足場となる魔法陣の上で後退するも、すぐにその縁ぎりぎりまで追いやられてしまう。

「ちよお、そこに正座しい！」

「はい……」

肩を落として慇懃に足を折る少年を、その少年より十近くも齡の小さい少女が説教する場面などそうそう見られないだろう。

平時ならば十分に微笑ましいとも取れる光景なのだが、残念な事に今は現在進行形で世界の破滅の危機に直面していたりもする。

若干、周囲からの視線も白々しいものが含まれていたりいなかったり……

「ああ、ごほん。僕は、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。」

すまないな、水を差してしまうようで悪いんだが……

君、八神はやて。今はそれくらいにしてももらえないだろうか？」

「ああ、えと。すいません」

守護騎士やライによるちよつとした情報隠蔽のせいで時空管理局に対してアバウトな認識しか持っていないはやてもさすがにこのままではマズイと思ったのか、素直にペコリと頭を下げた。

自分の忠言が八神家内に置けるライの立ち位置を危うくした事を薄々察したのだろう。

微妙に申し訳なさそうな表情のクロノが助け舟を出す。

「ライ・ランペルージ臨時協力者。君のその装備は今までの戦闘データに記録が無いんだが？」

「そういえばさっきと少しだけ格好が違うの」

「背中に付いてるのは…飛行用のユニット、かな？」

「見た目が変わったからってなんだってのさ」

「へえ、そうなん？」

少年執務官のさりげない指摘で、場の全員の視線がライが纏うナイトメアデバイスの装甲へと移る。

変化以前の月下を知らないはやてだけは話の流れに置いて行かれる事に若干の不満を覚えていたが。

闇の書の闇より帰還した折のちよつとしたゴタゴタで誰も触れようとしなかったが、今の彼は闇の書の管制プログラムに取り込まれる寸前より多少の変化が見られるのだ。

「話せば色々と長くなるんですけど、少なくとも戦力の底上げにはなと思います」

＜肯定。今ならば執務官殿にも遅れを取らぬ筈です＞

「いや、さすがにそれは……」

かつての敗戦を想起して苦い表情になるライだったが、とりあえずは曖昧に頷いて場をやり過ごした。

（まあ、魔女からの餞別だ、なんて言っても場を混乱させるだけだしな）

胸中で呟きながらも、改めて装備の点検をする為に自身の格好を視界に納める。

緩やかな曲線を描いた流線的な装甲や、足回りの装甲や各種装備自体には目に見えて大きな変化が無いのだが、その中でも一際人目を引く変更点が幾つか――――

背には蒼い魔力光を灯したX字を象ったのパーツ付属し。その形状はどことなく、風を切る戦闘機の羽根を複数組み合わせたようにも見える。

そして、最も目を引くのは装備全体の均衡を崩すような無骨さを前面に押し出した左腕部。

元々は、ぎこちない動きしか出来ない紅い三本爪だったが、より力強さを感じさせる『五本爪』へ――――

何も知らない者ならばそれらの変更点をただ”強化”と捉えるのだろう……だがライにとってはそれ以上の意味が――――

（これは……カレンの）

彼のよく知る、騎士団のエースにして、安心して背中を預ける事の出来る数少ない戦友。

別れ際に交わした約束という名の命令を果たせるかどうか……その事がライにとっては気がかりな仕事の上司。

燃えるような赤い髪と空色の瞳に闘志を秘めた生徒会のメンバー。シュタットフェルトの名を毛嫌いする偽りの令嬢。

色の無かった彼にとって、眩し過ぎる太陽のような存在だった女性。

紅月カレンの搭乗KMF―紅蓮式―に搭載された武装にして、最強の矛―――簡易型ではない真の輻射波動機構に今の左腕部は酷似しているのだ。

（いや、今はそれどころじゃないか）

月下《げっか》夜昇式《やしうしき》

それが顔を覆うバイザーに表示される新たな愛馬の銘だった。不思議と身体に馴染む左腕部にライは笑みを溢した。

だが、誰にとっても時間に余裕があるわけではない。手短に事態を把握したクロノは次の本題へと移っていた。

眼下の海中で蠢く闇の塊を指さし。

「あと数分で闇の書の防衛プログラムは暴走を開始する。

僕らはそれを何らかの方法で止めなければならない。停止のプランは―――」

まず一つと、懐から取り出した一枚のカードを場の全員が見えるように掲げた。

「極めて強力な氷結魔法でプログラムの活動そのものを停止させる。事後処理が色々あるが、それ自体は現場の君達が気にする事じゃない」

「ええと、それは多分難しいと思います。主のいない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り闇の書の無限再生機能は止まらない」

シャルとシグナムのアドバイスに、そうか、と短く呟くクロノ。

「二つ目は……軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシエルで消滅させる………筈だったんだが」

そして、とここで軽く咳払いをして、それとなく八神家の方向————厳密にはライを————に視線を送る。

「現在はその砲そのものが満足に起動するかどうか定かじゃ無い」
なぜなら……と続けようとしたクロノを遮るように彼の丁度目の前に、場のメンバーからクロノの顔を隠す形で空間モニターが展開される。

そのモニターに映っているのは、切れ長な金色の瞳に苛立ちを隠しきれない女性局員ことリルカ・プリウスの姿であった。（何故か局員用の制服をバリアジャケットの上に羽織っている）

『どこかの犯罪者さん達がアースラに襲撃をしかけたおかげで、アルカンシエルの発射シークエンスに関する機類が軒並みショートしてるからね。』

まあ、軌道上のアースラを大気圏内まで降下させて、特攻するくらいのもりでアルカンシエルを発射すれば、良くて撃破、悪くてもメルトダウンしたエネルギー炉の爆発に防衛プログラムを巻き込んで消滅させることも出来るって寸法よ』

「」「」「うっ!!」「」「」

面識の無い管理局員から顔見世早々に、クロノでさえ言う事を躊躇った事実を片っ端から突き付けられたヴォルケンリッター十一人は、心底氣まずそうに肩を縮こめるしか無かった。

アースラ襲撃の立案から仮面の男への協力の取り付け、エネルギー炉への襲撃実行までしておいて執務官に敗北して捕らえられたライはもう立つ瀬が無いとも言わんばかりに申し訳なさそうに頭を垂れる。主人公のくせに面白いくらいにここまで格好が付かないというのはちょっとした死活問題ではなからうか？

「おい、リルカ。君たちは災害防衛班の援護に向かったんじゃないか？　現場の君の判断で」

『ああ、結界から漏れ出た被害が位相空間——人の居る方の海鳴へ甚大な被害を及ぼす前に処理するってアレでしょう？

そうは言っても、専門じゃない局員だと結界の綻びが大きくなるのを防ぐのが手一杯でこれ以上はすることが無いのよねえ。

今その小さな主さんとユニゾンしてる管制プログラムさんにやられた不甲斐ない武装局の残りじゃあ単純にマンパワーが足りないし』

モニターの奥で肩をすくめるリルカに対してクロノは、将来なんとかして絶対にコイツをクビにしてやろう、と。とても普段の彼に似つかわしくない職権乱用じみた考えを抱いたのだった。

『うう、申し訳ない』

「ん？　ああ、管制プログラムってリインのことやったね」

続く連撃で、はやてとユニゾンしていたリインフォースも色々と申し訳なく思ったのだろう。

その場に居た者たちは、はやての後ろでしょんぼりと項垂れる紅目の妖精を幻視したという。

「わあ、リルカさん容赦ない」

「すごい……ね」

「お願いだからなのはああいう人を見習わないでね」

「フェイト、絶対にああはなるなよ。君は純粹に育ってくれ」

なのはとフェイトがほんの少しだけ憧れのようなモノを抱きかける、という気の迷いのせいで額に汗した少年が二人居たがそれはそれで切羽詰まった状況なりのご愛敬だろう。

閑話休題。

「要するにコアをどうにかすればこの状況を脱却出来るんですよね？」

軽くお先真っ暗な危機的状況で、それは暗闇に差す一条の光明だった。

声を発した主は新たな力と共に帰還した少年——ライ。アルカンシエルも使えない、デュランダルも効かない、闇の書の一部たる守護騎士達も良い手段を思いつかない。それなのに魔導に関して初歩的な知識しか持たない人間に何が出来るのだろう。

古代遺失物の暴走、もはや災害といっても言いレベルの状況をどうにかすると言うのは、通常ならば与太話と断じられても文句は言えない。

だが、少年の言葉には確固たる“ナニか”があった。

「ランペルージ、それは本当なのか？」

詰問するシグナムの声はどことなく冷たい。冗談や過信で言ったのならば容赦しない——そんな声色だ。

「ええ、一重にこの状況を生み出したのも僕が原因です。僕さえ居なければきっとこんなことにはならなかった。

だから責任を取るのは僕一人だ……って言いたいのは山々なんですけど。やっぱりみんなの力添えがないとどうにもなりそうになります」

「そんな事はこの際関係無い。時間が無いんだ、僕たちは何をすればいい？」

かつて自分を打ち破った少年執務官に問われて、ライはその表情をより引き締めた。自然と左拳も握り締められ、金属と金属の擦れる甲高い音が響く。

彼の口から語られる言葉は、文字どおりに最後の手だ。場がシんと静まりかえる。

それを確認してから、過去に王として軍に指示を飛ばした少年は誰の耳にもハッキリと聞こえるように告げる。

「これから僕が指定する座標に、僕と防衛プログラムのコアを転移させてください」

第十四話 帰還（後書き）

『あとがき』

なんでオリキャラのリルカがここまで出しやばるのか自分でもよく分かりませぬorz

出す気は毛頭無かったんですが、クロノに言わせるよりしくりくる台詞が複数あったので、要するに汚れ役みたいなものですww

最近ちよつとずつギアス要素が出てきた本作ですが、次回もギアス要素が……出ると良いですね↑

第十五話 神の島（前書き）

なんというか一カ月置きにしか投稿できない自分の執筆ペースが恨めしいです。

原作の展開とか結構端折ってしまった感が否めないなので、正直自信が無いのですが、読んで頂けると幸いです。

第十五話 神の島

過去の王は魔女の囁きを胸に、再び彼の地へ降り立つ。

かつての望まぬ逃避ではなく、ほんの僅かな前進の為に――――
己の犯した罪を償う為に。

その地の名は――――

sideライ――――伊豆諸島南西五十キロ地点

足を一步踏み出すごとに足元の砂利と、遠くの砂浜で静かに鳴る
さざ波の音が不思議と子守唄のように聞こえてくる。

また――――戻ってきてしまった。

いや、それは言い得て妙だ、厳密に言えば『この世界でこの地を
訪れる』のはこれが初めてだ。

人の住まない未開の孤島、その洞窟を丸々一つ使って作り上げ
られた古代の遺跡。ここだけは時が移ろうと、世界が変わろうと確
固として存在し続けるのではないかという錯覚を抱くほどにその空
間は外界と隔絶されているように思う。

頭上の暗闇に吸い込まれるように乱立した大理石の柱も、遺跡の
中心に在るサークルも、僕の記憶にあるものと子細ない。

ただ一つ、違いがあるとすればこの遺跡は崩落の憂目に会ってい
ない事くらいだろうか。

当然だ、この世界にはブリタニアも無ければゼロやスザクも居な
い。原因が無ければ結果は生まれない。

空気が死んでいる――――そう感じ取ってしまうほどの厳かな静
謐さ。

否。時の止まった空間とでも言うべきなのだろうか。

風の流れさえも緻密に計算されつくして作られた石柱群と、古代の通気口。完成された美術品のようにそれぞれの要素が影響しあって更なる高みへと昇華された世界の遺物。

現代建築にも匹敵する空調システムの供えられたこの遺跡内の空気は常に新鮮で、湿度も常に一定。

進展も無ければ後退も無い。ただそこに存在するだけの異質な世界。

そして、地震多発地帯である日本の付近にこんな石造りの遺跡が数百年以上形を保ったまま存在している事自体がすでに奇跡。

ここの遺跡をこの世界の考古学者や地質学者に見せればどんな反応を示すだろう。

僕の知る限り人類の各文明が本格的な交流を持つ大航海時代以前————いや、下手をすれば数千年、ここの地球の基準で言えばキリストの生誕以前から、これと同様の遺跡が世界各地に点在していた事になる。

かつて古代の人々は、文化の接点が無くとも『同じ存在』を超常のモノとして信仰し、崇めていたという事実は世界史の常識を一から塗り替えるには充分。

この世界で最も神に近い島、神を夢見た聖職者たちの。『神』に近づこうとした愚か者たちの作り上げた夢幻郷。

神を崇め、儀式を行う神殿がここだ。

過去に存在した神官達が神に何を望んだかは知らない。だが一つだけ言える事は————

「まったく、“あれ”は神なんかじゃ無い。神なんて存在しないんだ」

誰に向けるでもなく投げかけた否定の言葉が大理石に木霊する。
……いや、これ以上答えの無い無駄な思考は止めておこう。

なにしろ専門家ではない僕が分かる事などたかが知れているし。
観察者にして、記録者の役を担う学者になるというのもおかしい話だ。

むしろ僕は『こちら』側に属してしまっている人間、すなわち当事者なのだから。

「————っ！」

＜バイタル反応にブレがあります。大丈夫ですかライ様＞

「いや、問題無い」

声にならない自分の悲鳴。

身に纏う騎士甲冑の胸部装甲に埋め込まれた月下の核が点滅し、
僕の身を氣遣う電子音声が胸元で上がる。

つい先ほど、はやて達の目の前では気丈に振る舞ったつもりだったが。それもやはり限度があったかもしれない。

僕の右腕と両足を中心にした筋肉や骨格の類にはかなりのダメージが蓄積している。いや、現に筋繊維の何割かは千切れているだろう。

リインフォースという名を得る以前の管制プログラムとの戦闘。

開き過ぎている彼我の実力差を埋めようと無理を通した結果がコレだ。夢の中ではともかく、現実の傷はどうしようもない。

よく五体満足で生き残ったと、今更ながらに生を実感する為の激痛に顔を歪める。特に酷使した右腕からはつつ、と真紅の液体が滴り落ちた。

「幸いにも、時間はもう少しある。もう少しすれば“ここ”に防衛プログラムのコアが転移して来る。その時が、僕の出番だ」

へ彼女達が失敗する可能性もありますが？

「それは無いさ」

明確な根拠があるわけではない。ただ、あの小さな魔導師達の瞳の奥に秘められた意思はとても強い。

だから、体力の消費を抑える為に少しだけ壁に体重を預ける。いや、見覚えのある幾つかの文様に象られたソレはどちらかというと『扉』と呼ぶべきか。ここと異なる場所を繋げ、そして明確に隔絶するするための境界線

休むためとはいえ決して座り込む事はしない。体中に走る痛みのおかげで気を失う事は無いだろうが、一度腰を下ろしてしまえば二度起き上がれないのではないかという錯覚に陥る。

（僕が何もできなければ全てが水泡に帰す。それだけは避けなければ）

魔女——いつも自嘲気味に己をそう表現する少女から告げられた真実の通りならばここは……神根島は——



夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせる原因となった防衛プログラム『闇の書の闇』

それを言葉として表すならば只一つ『異形』としか形容できない。止まる事の無い無限再生と侵食、過去に書が蒐集した数多の生命をデータ化する事で再構築し、取り込んで現出する異常性。

曇天に覆われた空の下、黒く染まった海に浮上するその怪物の中心部に、まるで船旅の安全を司る女神のように——不気味であると同時に怪しい美しさも兼ね備えた女性のような生体パーツが現れている辺り、皮肉としか言いようがないだろう。

闇の書の闇自体が自ら沈みゆく船のそれに他ならないというのに

魔導的要因と物理的要因を内包した複合型四層式バリアをも展開し、維持する莫大な魔力を有した生きる要塞。

常識的に考えるならばそれを打ち破るなど到底、不可能。

だが、そう。広い次元世界においても常識を逸するほどの過剰戦力を個々が有する集団を前にその常識は容易く瓦解する。

全ては、『こんなはずじゃない現実』をこれ以上、生み出さないために——未来を変える為に——

人の想いは時として世界を変える動力源にさえ成り得るのだから。

薄緑と橙色の鎖が異形の触手をねじ切り。輓が薙ぎ払い。

全てを押しつぶす鉄槌と、全てを飲み込む桜色の奔流が壁を削り。夜空を染め上げる焰の矢と、暗闇を断ち切る稲妻を宿した大剣が守りを崩す。

銀月の槍が何億年という月日を掛けて石化するべき命を貫き、石へと変える。

穿ち、砕き、切り裂き、貫き、飲み込む。

言葉にするならば凄絶、圧倒。魔導に携わる者なら一度は憧れるような高ランク魔法の威力がただ一点に対して放たれる光景はある意味圧巻と呼ぶべきなのだろう。それこそ、その破壊力の向く先を分散させても街一つを消し去るような——

戦乱と言う言葉が過去の物になり果てた今日の次元世界ではまずお目にかかる事の無いような破壊力。

だが、それだけの威力を持ってしても古代ベルカの残した凶悪な遺物に止めを刺すには至らない。

苦しみもがきながらも、防衛プログラムはその姿を変容させながらこの世界に存在すること続ける。

その悲しげな悲鳴が夜空を震わせながら、盛り上がるように怪物や異形のキメラじみた巨体が再生を続ける有様は、見る者に言いようのない悪寒を与えるほどのおぞましさを有していた。

「うへえ…」

「なんだか、凄い事に」

「うねうね…だよ」

「ほんま、どうするん？」

『やっぱり並みの攻撃じゃ通じない、ダメージを入れたそばから再生されちゃうよ』

『ここまですると進化論完全無視だけど。どうすんのよ“アレ”』

全力の一撃が徒労に終わったのでは、という不安を抱いた現地メンバー達の戸惑いの声と、客観的に戦況を分析して判断を促す空間モニター越しの声等に対して答えは決まっているとばかりに力強くクロノは返答する。

「だが、攻撃は通ってる。プラン変更は無しだ。

そもそも、彼の言葉の真偽は別にしても僕達がコアを飛ばせなければ海鳴に未来は無い」

『背水の陣ってことかな』

「そんなところだ。これからが大詰めなんだ、通信を切るぞ」

くるり、と蒼氷色の核を埋め込まれた氷結の杖を回転させてクロノは未だ再生を続ける闇に向き直る。

彼とて多くを告げずに守護騎士の転移魔法で跳んだライを完全に信じたわけではない。

接する機会も殆どなければ、立場上も現在は守護騎士達同様に次

元犯罪者。

そして、彼の今までの行動を考慮しても自身の命を軽率に扱う態度に対して好印象を抱いているわけでもない。

（だが、彼がヴォルケンリッター達と八神はやてに接する時の表情だけは信じるに値する。あれは本当に心の底から彼女達のことを想っている）

だからこそ、現時点で唯一の可能性に全力を尽くせるように思考を切り替えただけ。

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永久の眠りを与えよ」

かつて師と仰いだ使い魔達とその主人が資金と技術力、歳月を経て蓄積された執念をつぎ込んで完成された杖。

造り手達の本来の意図とは正逆の用途で緻密なミッド式魔法陣が展開され、術師の魔力光と同じ色の蒼氷が世界に顕現する。

海が、大気が、闇が、全てがゆっくりとその熱を奪われ、氷に侵食される。

全てが凍りつき、分子でさえもその運動を停止させるほどの絶対零度。

「凍てつけ！」 〈エターナルコフィン〉

現象の完成を意味するワードが叫ばれると同時に――

防衛プログラムを中心に小山ほどの大きさの氷塊が出来上がる。

本来ならば凍てつかせた人間を殺すことなく、永劫の時を眠りに誘う強力な氷結魔法。

だが、それでもなお闇を屠るには足らず。闇を足止めするには十分だった。

「行くよ！ フェイトちゃん、はやてちゃん」
「「うん」」

真っ黒な夜空にびっくりするほどよく映える白色の魔導師——
高町なのはの掛け声にあわせてフェイトとはやてが頷く。
各々が魔導^{デバイス}端末を構え、魔力を紡ぎ出す。

「全力全開！ スターライトオ……」
「雷光一閃！ プラズマザンバァ……」

戦場に色濃く残留する大量の魔力が膨れ上がるように桜色の球体を生み出し——

鉛色の雲から轟く雷が雷光の大剣に帯電し——
網膜を焼く魔力の光と鼻をつくオゾン臭の中、今日初めて魔導の杖を握り、魔導を行使したとは到底思えない高度な攻撃魔法を発動した夜天の主も杖を天頂に掲げる。

リインフォースとのユニゾンを果たしてライトブルーに染まったはやての瞳に映るのは、見るも無残に歪な形に成り果てて蠢く夜天の魔導書の一部。

彼女達の鼓膜を震わせるのは、物悲しげに響くプログラムの断末^{ノイ}魔——意味など分らない、法則性も見出せない、そんな悲鳴だが、はやてだけには聞こえた。

気のせいかもしれない、詰まらない願望が生み出した幻聴かもしれない、だが確かに聞こえた。

——守る護るマモルまもる rhu守護 dhi u d i f e n c r
d h p 隔 d h o ——

闇の書の闇の『声』が——夜天の主が本来持つ権限の生き残り

か、運命の悪戯か。聞こえたのだ。

（この子は自分の役目を果たそうとしてるだけなんや）

防衛プログラムは、ただ本来の役割——悪意ある改竄で、機能が破損し、冷静な判断機能が麻痺して、何を守るかさえ忘れても——その名の示す通り『守る』という行動を実行に移そうとしていただけかもしれない。

ひたすら盲目に、使命を果たそうともがく姿が——はやての目にはとても悲しく映った。

『守る』と口で言うのは簡単だが。拡大解釈をすれば、対象を守護する為には守護対象を傷付ける可能性のある存在全ての排除にも繋がる曖昧な概念なのだ。

だからと言って、放っておけば全てが滅ぶ。

「ごめんな…お休みな…」

だから、はやては一度だけ悲しげに目蓋をつむり、静かに謝罪する。まがりなりにも一つの命を奪う事に対する少女の決意の瞬間であつたのかもしれない。

「響け、終焉の笛ラグナロク」

展開される三角の魔法陣のそれぞれの頂点で、白い光が膨れ上がる。

「「ブレイカアアア！」」

はやての魔法の完成を皮切りに、三人の魔法少女達はそれぞれの想いを乗せた一撃を放った。



時を、少しだけ戻そう。

夢によって具現化されたアッシュフォードの屋上で、二人の人影

が交わした密かな逢瀬。

魔女の告げる囁きがどれほどの重さを持つのか、知るものは決して多くない。

「ギアスの力の源は…魔力と同質だって？」

「厳密に言えば、本質は正逆なのだがな。

相反するからこそ、その在り様が似通うのかもしれないな。太極図の陰と陽などがその典型的な例だ」

少女——C・C・は、出来の悪い生徒に講義する女教師さながらに熟知り顔で語る。……まあ、ピザを頬張りながらだと威厳もシリアスも半減するのは言うまでも無いが。

「お前は『魔法』のある世界に飛ばされたと言ったな？　そして、

魔法を使って戦った、とも。この際その原因について究明はしないが、今までの人生で積み重ねてきた常識や感覚とは異なる摂理の技。

初めて使ったのなら当然覚えるであろう『違和感』を、お前は覚えたか？」

「それは……無いな」

一瞬口ごもるが、ライはそれを肯定する。———今思えば、本当に初歩的な事実だったのだ。

いくら『ギアス』という超常の力と共に生きるという『非常識』を経験して生きて来ても、感覚的にはそれこそが彼にとっての『常識』となる。

だからこそ、完全に異質な『常識』に触れれば感覚的な違和感を覚えた筈なのだが———彼にはそれが無かった。それ故に魔法と言う異文化の習得から実戦までのスパンが短くても対応できたのだろう。

「要するに、僕が今まで魔力だと思って使っていたのは……」

「有体に言えば『ギアス』から派生する力だろうな。だが、本質的には魔力と大差がないから十分に互換性がある。」

さしずめ、お前が使っていた力をガソリンに例えるならば魔力はバイオエタノールと言ったところか、燃料が違うものでも結果としてエンジンが動くのならば問題あるまい」

ならばギアスは石油から精錬された重油みたいなものか————と、C・C・の話を自分なりに噛み砕いて理解したライは幾つかの疑問点に気付いた。

（僕の知る限り、僕やマオのようなギアス能力者はギアスを使うほどにその力を増大させていった……まさか）

「ということは、魔法を使えば使うほど僕のギアスは……」

自然と、喉の奥がカラカラに干上がったような錯覚に襲われ。ごくりと生唾を飲み込む。

「増大する事になる……な。」

勿論、ギアスを直接行使する事に比べれば魔法の行使など本当に微々たる物。プールの水とバケツの水くらいの差はある。

だが、それは早いか遅いかの些細な差だ。お前のギアスの力が抑え込まれていても所詮、先延ばしに過ぎない」

「どれくらい持つ？」

「さあな暴走は明日かもしれないし数年後かもしれないし数十年後だってこともあり得る。だがそのリミットもギアス一回の使用で一気に縮まるだろう。」

お前の意思次第でギアスの力に抗うのならば結果はもっと違うのかもしれないが……地獄の苦しみだぞ？」

その緑の長髪を月光に照らしながらC・C・はぼそりと答える。
魔女はいつだって希望的観測や希望を持たせるように曖昧な発言

はしない。だからこそその魔女であり。それが彼女の残酷さと優しさを同時に現してもいた。

C・Cの警告を聞いて——ただ、ライは満足そうに頷く。それは、まるで今日の天気さえ分かれば問題ないとも言うかの如く。

「それだけ分かれば十分だよ。いや、違うな。聞きたい事はもっと他に在る——」



sideライ

眠っていた——みたいだ。

鉄のように重い瞼を無理やり開く。

耳元で鳴り響くのは月下の警告音、瞳に映るのは座標転移魔法の予兆とも言える曖昧な空間の揺らぎ。

「来たか」

予言に近い確信を抱いてはいたが、予想よりずっと早い。……いや、僕がああ騎士達や魔導師達の事を見くびっていただけか。どちらにしても今度は僕の番だ。

良いところ取りみたいで気に食わないけどこの際それは気にしない。元より、僕が居なければこんな事態にはならなかったのだから。

転移魔法が終了——遺跡の入り口付近に、もはやどう形容すべきかも分からないほどに醜悪に姿を歪めた防衛プログラムが現れる。

「世界から外れた者同士——決着を付けようじゃないか」

胸の奥に意識を集中——思い描くのは鎖に繋がれた不死鳥。使用者の身体を蝕む呪いは——異なる摂理に僕を導いたもう一つの扉であり鍵。

大気が——震えた。

違う、震えたのはこの神根島の遺跡そのものだ。立っているのもやっとなという揺れの中——背後の門に意識を集中し、そのゴツゴツとした石質に手を乗せる。

異質な感覚が背を撫でて、身体の髄にまで沁み込むように行き渡る。

感じ取るのは、個人の認識野の枠を遥かに超越した「——

——言葉で表せない何か。

遺跡の扉を通して伝わるそれがギアスという力の根源の一端なのだと感覚的に識る。

（なるほど、C・C・の言った通りだ。頭で考えるよりずっと早い）

だが、思考を止め、自我を捨てればきつと帰って来れなくなる。せつかく帰る場所が見つかったんだ、そんな結果は好ましくない。

「ギアスユーザーの権限を最大行使する！」

だから紡ぐ、力ある言葉を。僕にしか出来ない事を成し遂げる為に。

遺跡の揺れがより一層大きくなる。そして、再生を始めた防衛プログラムが遺跡の壁面を押し上げるように歪に胎動し、肥大化。結果として遺跡の崩落も同時に始まった。数千年という時を沈殿した遺跡が消え行く事自体には何の感慨も懷かない。

所詮、この遺跡はCの世界と現世を繋ぐ境界を無理やり視覚化し、肉体を持った人間がそのままそちらにアクセスするためのデバイスに過ぎない。

「他の地の『扉』とのリンクは不要！ 第二フェーズから第五フェーズまでを省略。^{オミット}

今この地で行使出来る限りの力を最大出力で」

自分でも何をしているのか理解は出来ていない。だが……どうすればいいのかは識っている。いや、本来知らない筈の知識が……過程が流れ込んでくる。

「出力端子を指定する。

引き金は僕自身の意思を

ギアスユーズー

銃口はその左腕を」

しん、とうなじの辺りが震える。

意識はこれまでに無いほどに先鋭化。

自然と脳内がクリアに、よりシステムチックに切り替わる。それがまるで、僕という『個』を否定するようで――――

だから、『ライ』という個人が積み重ねてきた沢山の記憶を溢さないように僕は抑え込む。

「神を殺すシステム――――黄昏の呪い

用途はそのままに、対象は眼前の敵に」

かつての簡易型輻射波動から更に進化した徹甲砲撃左腕部を今なお蠢き、悲しい唄を謳う異形に向ける。

真紅の五本爪がカチンと擦れ合う金属的な音が、不思議と戦友の顔を想起させた。

「『形』は『不要』――――その力の一端持ちて、この世に顕現せよ――――“アーカーシャの剣”」

轟――――音は、しなかった。

ただ、何か、不可視で不可侵な認識外の大きな『力』がその場に満ちた事だけが僕には分かった。

【ギアスの力の源は魔力との互換性を持つ】 【そして、僕が今まで行使していた魔法の燃料はその力】

ならば、莫大な力が在れば。その力を叩き込めば――――

「名前も無いプログラム……君は僕が看取る。

君の役目も『僕が引き継ぐ』……だから、安心して逝ってくれ」

その言葉が『彼女』に届いたかどうか、意味があったかどうか僕には分からない。

自分の気休めの為や、自己の正当化だと言われても否定はしない。ただ、無念を残して逝って欲しくない。何故かそう思ってしまったからで……

カチリ、カチリ、小気味良い音を立てて、左腕部から円柱状のパーツが飛び出した。

六連発で空気が破裂するような音がして、薬莢が左腕部から排莢される。

引き金は――――引かれた。

「――――っ」

徹甲砲撃左腕部から、真紅の光が迸る。それは指向性を持った一種の砲撃……いや、奔流と呼ぶべきか。

未だかつて僕が見たことも無いほど強く、大きく、畏ろしく、儼く――美しい

その光が、洞窟の半分を埋め尽くすほどに肥大化した防衛プログラムを丸ごと飲み込んだ。

みしり、そんな音が響くほど強い衝撃が全身に掛かる。ぎしり、骨が軋んだ音が鼓膜を震わせる。

だけど、それで良い。

この痛みは身に刻むべき刻印——目の前で散る命の役目を引き継ぐ証。そのための反動だと思えば軽いものだ。この痛みを思い出す度に僕はここで交わした独りよがりで一方向的な契約を思い出すのだから。

【—————ありがとう—————】

そんな声が聞こえたのは気のせいだったのだろうか。

伊豆諸島沖南西五十キロ地点

その日、その小島で夜空を切り裂いた紅色の柱は、雪の降る夜に真紅の綺麗な粒子を散らした。

—————第十五話 完了—————

第十五話 神の島（後書き）

【あとがき】

ふう、なんというか、非常に疲れました。

本来やらなければならぬ学業関係の云々をすっばかして六月四日（はやて誕生日中）に無理やり仕上げたので、本来想定していたよりも若干無理やり感が増してしまった感じですよ（汗）

この手のオリ設定を好意的に受け取って下さる方が多いのか、そうでない方が多いのかが非常に心配なわけですが。今後ともこんな感じで精一杯精進していきますので生温かい目で見守って下さると嬉しいですよ。

第十六話 夜天の光―雪色―

清潔感漂う部屋に、薬品や包帯の匂いが充満する中、体中に包帯を巻いた少年――ライは医療用ベッドの上で伸びをするようにこきりと肩を鳴らす。

それが原因で体中に走る激痛が筋肉を硬直させて、結果。苦悶の表情で呻く羽目になったのはちよつとした愛嬌か。

「はあ、どうにもここ最近ベッドにかつぎ込まれる事態によく遭うような気がする」

とほほ、と肩を落として嘆息する。

神根島の遺跡で防衛プログラムを撃破したのが数時間前。その直後に時空航行船アースラの医療ルームに運ばれて、最低限の治療を施し、つい先ほどそれが終えた所だ。

そんなライの怪我の状況は、というと。無茶苦茶な身体強化のツケとして全身の筋繊維の裂傷に加え、骨や臓器に大なり小なりダメージが蓄積――という繰り広げてきた戦いから鑑みれば軽いのか重いかよく分からない怪我――命に別条は無いのだが絶対安静であることは確実だろう。

「貴方は…無茶をし過ぎです。将達が駆けつけなければ今頃は岩盤の下敷きですよ」

「ええと、まあ……そこに考えが至って無かったのは仕方ないというかなんというか」

そんな彼の唯一の見舞い人――リインフォースは、その真紅の双眸に若干の非難の色を込めて諭すように告げる。

そう、防衛プログラムを倒したは良いものの、あの後。その余波で崩れる遺跡から一人での脱出が困難だったという絶体絶命の状況

にライは置かれていたのだ。まあ結果は見ての通りなのだが。

言い返す言葉もなく視線を泳がせていたライは無理やりにも話題を逸らす事を敢行した。

「そういえば、シグナムさん達やはやてはどうしたんだい？　はやてもここに運び込まれたって聞いたけど？」

「主は：初めての魔法戦の疲れが出ただけで、今は将達と共に八神家に居る筈です」

「そうか。で、君だけがここに居るといふ事は」

「貴方と個人的に話をしたいとリンディ提督に私が頼みました」

やっぱりか、と納得したようにライは頷く。

彼がこうして次元世界の壁を越えた地球に飛ばされて、闇の書の一件に関わる事になったのも、恐らくは彼の眼前で所在無さげにイスに座っている魔導書の妖精が原因といっても良いのだ。

「一応の確認だけど。リインフォース、君が僕をこちらに呼んでくれた、という認識で構わないね」

「はい、今更ではありませんが、こんな事に巻き込んでしまってもうしわけ：むぐ？」

「おっと、そこまでだ」

謝罪しようと口を開いた妖精の唇に少年は人差し指をそっと当ててそれを制す。

戸惑いに瞳を揺らすリインフォースに対してライは穏やかに語りかける。

「別に君が謝る必要なんて無いさ。この怪我も僕が弱い事の証拠だ。それに、最初に出会った時、君が助けを求めたとき。僕は答えた、『この力がある限り僕には無理だ』と」

ライは悲しげに自分の喉へと手を当ててぼんやりと遠くを見つめ

る。かつてその声を引き金にどれだけの命が散ったか思い返すように……

「それで、君は言ったね？ 『これは契約だ』 って。

結果として暴走寸前だった僕のギアスは抑えられた。

それが協力することへの見返りだというのなら。これは立派なギブアンドテイク、君の言った通りの『契約』だ。謝られる筋合いなんて最初からどこにも無いんだよ」

だから君には落ち度が無い——やんわりと諭すライにリインフォースも申し訳なさそうに……

「そう……でしたね。すみま——」

「ほら、また言った」

「う……その、“ありがとうございます”」

終始相手のペースに吞まれたリインフォースはどうにも居心地が悪そうに札の言葉を述べる。

仮にも、数時間前には魔法を使った高機動戦で激闘を繰り広げた相手にどう接するべきかの戸惑いや、長年心の内に秘めていた感情を吐露した事の気恥かしさが少なからずあるのだろう。

——からかうと面白そうだ——そんな認識をひっそりとライは懐くのだった。



「僕や、他のギアス能力者は使えば使うほどその力を増していく。

それは、僕達がギアスギアスユーザーを発動させるための手段として【Cの世界】と己の内を繋ぐ繋がりを持っている……いや、ギアスそのものがCの世界から力の一端を借りる為のパイプといったところかな」

知り合いの魔女からの受け売りだから僕も詳しくないのだけれど、

と前置きをして若干逸れてしまった話題の路線を少年は修正した。
長い銀髪を揺らして戸惑うリインフォースを見て少しだけ良心が痛んだ——というのも少なからずある。

少し話してみた印象としては、謙虚を通り越して卑屈の域にまで達している。というのがライの見解だったが。目の前に居るのは本来ならばどんな学者や賢者でも経験しえない程に長い時を経た博識な魔導書なのだ。

訊きたい事も少なからずある。

「迂遠なのも面倒だ。

率直に訊くけど、君は【ギアス】や【Cの世界】についてどれほど知っている？」

「そう……ですね」

その返答自体は最初から想像していたであろうリインフォース——だが少しだけ言い淀む。

椅子の上で萎縮する姿はまるで答えを忘れてしまった生徒のようだ。

「実は……私自身、その事について殆ど覚えていないのです」

「覚えて……いない？」

「はい。私が夜天の魔導書としての役目を果たしていた時に、なんらかの形であなたの言う【ギアス】に関連した知識に触れたというおぼろげな『記録』はあるのですが……」

「記録があっても、記憶は無い……ということか」

こくん、と頷くリインフォース。

長い歲月による知識の劣化か、プログラムの改悪による情報の錯綜か——

どちらにしても肝心な知識が得られないという点においては大差

ない。

「夜天の魔導書としての本来の機能が私の中に残っていれば、まだバックアップに期待出来たのかもしれませんが……

私にできたのはあの契約の時、貴方を解析して得た情報と僅かな記憶の残滓を手掛かりに力を抑える鎖を造ることだけでした」

「まあ、どうせ知ったところでどうするわけでもないから構わないんだけどね」

再び頭を垂れようとしたリインフォースを戒めるかのごとく、妙にさっぱりとした声で言葉を紡ぐライ。

これといって落胆した様子も無い。

「知識は多いに越したことは無いんだろうけど。

ギアスに関して仕組みが分からなくても、使用法さえ分かれば当面の所は僕も困らない。

それに、世の中はそんなもので溢れかえっているだろう」

こつん、とベッド脇に設置されたモニターを叩いて薄く笑う——
——日常だってブラックボックスで沢山じゃないか、と。

——確かに、今時の電子機器は内部の複雑化が進み過ぎていて素人が手出しできる範疇を越えている。だが、細かい事を理解はできなくても使えるかどうかは別の話——

陰気だった妖精の表情もつられて少しだけ綻ぶ。

「完全な異能の力と身近な電子機器を同列に扱う人なんて初めて見ました」

「……ええと、さすがに言い過ぎたかな。

まあ、どちらにしても僕にとってギアスや魔法の力は目的を成すための手段に過ぎない。そう言う意味ではどちらも本質は同じなん

だよ。

結局のところ責任もハンデも背負うのは僕自身だ」

そうやって場の雰囲気が少しずつ氷解していくような緩やかな変化。

だが、その空気を心底名残惜しそうにしながらも、こほんと咳払いするリインフォース。

そして、そっと懷に手をやって鎖に繋がれた小さな十字架のネットレスを取り出した。

「これは？」

「有体に言うと、貴方の力の暴走を抑える鎖の核のようなものです」
「契約履行の報酬、みたいなものかな」

怪訝そうに首を傾げるライに十字架を託すリインフォース。

その動作はとても慎重で、神聖な儀式を想起させるほどに静謐。まるで他の何かと一緒に託すように――

「本当ならば元の世界にも返して差し上げたいのですが……それが私の残された力で出来る精一杯です。それさえあれば私が居なくなってもリミッターは解けない。

貴方はこれで自由です。私との契約を果たす必要はもうありません。

望むのならば誰にも縛られずに生きること可能でしょう。

ですが、出来るのならばこれから主と、その守護騎士達のことをよろしく頼みます」

「そう……か」

ライは神妙な表情で手元で鈍く光を反射する十字架を眺めて、頷く。

そして――――

「君は……“逝くつもりなんだね”」

「貴方は……不思議な方です。まさかこうも簡単に気取られるとは思っていませんでした」

「それでも嘘を吐くのは得意だね。他人の隠し事には敏感な性質なんだ」

「放っておけば、私の中で眠る防衛プログラムは再び活動を開始して再生します。もう……直す術が無いのです」

「はやては……知っているのか？」

「いいえ、知っても悲しむだけです。ならば別れの悲しみは少ない方が良いでしょう」

私に選べるのは最善の策のみです」

一瞬、悲しげに真紅の双眸を細めたリインフォースは諦観とも悲観とも取れない曖昧な表情で肩を落とす。

その姿はうたかたの夢のように酷く儂げで、折れる寸前の百合を連想させる。

「貴方も……それを知って私を止めますか？」

「いいや、僕に君の決意に口出しする権利は無い」

というか、今の僕じゃあ君一人止めるほどの体力も残って無いよ」

痛々しげに体中に巻かれた包帯を指さしてベッドの上の少年は不服そうに答える。

ならば怪我が無ければ引き留めたのか——そんな問いが喉元まで出かかるリインフォースだったが、その問いに意味が無い事を知って口をつぐむ。

（これでは……この世に未練があるようではないか）

自分は世界で最も幸せな魔導書———そう言い聞かせて心の揺らぎを抑え込む。

（事実、最後に……主を任せるにふさわしい者達とも出会えた）

「貴方と過ごした時間は決して長くはありませんでしたが。最後に貴方のような方に出会えた事は光栄なのかもしれません」

「ならば最後くらい名前で呼んでくれるとありがたいんだけどね」

「そう……でした」

そういえば、彼を名前で呼んだことが無かった事をリインフォースは思い出す。

ならば最後くらい――――

「ありがとうございます、ライ。そして……さようなら」

儂げな微笑と、遺志を残してリインフォースはその部屋を後にした――――



「ありがとうございます、ライ。そして……さようなら」

絹のように細い銀髪が翻って、ついに視界から姿を消す。

それを見届けた僕は呆と、ため息を漏らした。

胃の中に鉄でも詰め込まれたんじゃないかというくらい深く思いため息を――――

「僕が彼女の決断に口を出す権利は何処にもない……そのはずなんだが」

そのはずなんだが、ひどく心が揺れる。

この感情は、そう――――苛立ち

だが、その原因が分からない。彼女の判断はこの状況下において正しく。同時に、他に選ぶ道が無い。

ならば、僕はその決断を尊重する。

「そもそも、僕だって選んだ道は同じなんだ」

同じ道を選ぶだろう、という推量ではなく。同じ道を選んだ、という変えようの無い過去。

事実、暴走寸前のギアスで学園や黒の騎士団の皆の人生を壊さなためにも僕という存在を世界から抹消した上で僕は眠りに就こうとした。

まあ、結果として今こうしてこの場所にいるわけだが、それはこの際関係無い。

彼女の決断を否定することは僕の過去の決断を批判する事に他ならない――――

「いや……そういうことか」

苛立ちの理由。懷いたのはリインフォースに対してでは無い。

“僕自身”に対してだ――――

なんて傲慢で、自己中心的な考えなんだと頭を壁に打ち付けたくなる。

そして現金な事に、するべき事が定まってしまえば毎度、僕は行動に移すのが早い。

ずるり、と泥袋のように重たい身体をベッドから下ろす。

床越しにひんやりとした心地の良い感覚が力の入らない足裏に伝わる。

辺りを見回せば、ここ最近着る事の無かったアッシュフォード学園の制服がハンガーにかけられていた。おそらくシャルさん辺り

が気を効かせて持って来たのかもしれない。

黙考する事数秒。

意味は無いと知りながらも緩慢な動作でその制服に袖を通す。

壁際に立てかけられていた松葉杖を頼りに、言う事を聞かない身体に鞭を打って僕はその部屋を抜け出した。

アースラ艦内——クロノ・ハラOWN執務官の業務室——

本人の人柄を表したかのように不必要な物が排除されて整えられた個室。

仕事に必要な物以外はほとんど見当たらないデスクに備え付けられた椅子。

一般的な局員基準で造られたサイズのその椅子は、小柄な執務官が体重を預けてもちいさく軋むだけであった。

過度のハードワークが原因で疲れが押し寄せたのか、クロノの目蓋は薄く閉じられている。

そんな彼のデスク上に表示されるのは艦内の監視カメラから送られてくる映像の一つ。

その映像の中では、くすんだ色の銀髪と海色の瞳が特徴的な体中包帯だらけの少年が転送ポートを使って転移する光景。どこを指しているかは今更考えるまでもあるまい。

「あらら、勝手に出ていっちゃったみたいだけど、放っておいていいの？ クロノ君」

椅子に身を預ける少年執務官の半歩後ろ——何枚かの書類を胸元に抱えた執務官補佐——エイミィ・リミエツタが随分と軽い口調で長年の相方に問う。

こんな時、気真面目な彼から帰って来る答えはそう多くない。

「まさか。放っておいて良い筈が無いだろう」

「ですよね」

局員襲撃、業務執行妨害、艦船アースラ襲撃の現行犯に違法技術による身体改造の容疑。これだけ聞いたらとんでもない次元犯罪者だよ。

まあ、今のところそのあたりはヴォルケンリッターと似たような扱いだからこの程度は許される範疇なんだろうけど……」

数時間前——第九十七管理外世界・現地名称【日本】の南端に位置する小島で検知された莫大なエネルギー

人間が扱える容量を大きく逸脱した非常識なエネルギー数値をはじき出した以上、それを易々と見過ごす事は管理局員の責務に反する。

それに関する簡易報告書に眼を通してエイミィは淡々と読み上げる。

「未確認古代遺失物——それも滅多に見つからない推定Aランク以上。

その使用容疑が掛かっている容疑者。

常識的に考えたら問答無用で独房に放りこまれても文句は言えない。そのへんは執務官ならどうするのかな？」

「決まっている。執務官として捕らえるだけだ」

待機状態のデュランダルがモニターの発する光を反射して鋭く光る。

クロノが発する言葉は揺らがない。

何故なら彼の言う事は何時だって正論で——正論であるが故に強い。

それが、時として法の番犬と揶揄されることもある執務官の姿。

「こんな時くらい大目に見てくれても良いんじゃない？」

「未確認ロストログアの使用容疑さえなければな。」

A級以上の古代遺失物の取り扱いを学んでいないわけじゃないだろう」

不愉快そうに椅子をキイと鳴らして反論するクロノ。

彼の後ろに立っているエイミーからではその表情を窺い知ること
は出来ない。

だが、と一息ついて若い執務官は書類を読み上げるような淡々と
した声で呟く。

「クロノ・ハラオウン執務官は防衛プログラムとの戦闘で蓄積し
た疲労が原因で只今就寝中

ついでに、警戒態勢の引き下げに従って艦内のアラームは鳴らず。
だからライ容疑者の一時的な脱走に気付く者は居なかった”

……管理局上層部も、執務官に人間以上の働きを期待はしないさ。
眠っていたのなら異常に気付ける筈が無い」

表情一つ変えることなく、“終始目蓋を閉じていた”クロノは“
ただの寝言”を口にした。

それを聞く執務官補佐も、分かってますよとでも言いたげな笑み
を浮かべている。いや、悪戯をする直前の悪ガキのような表情と言
った方が適当か。

「ああ、もう……なんというか。

クロノ君はそういう素直じゃないところが可愛いな、もう！」

「うおわっ！抱きつくな！頬ずりするな！寝苦しいだろうが
！」

「大丈夫、大丈夫。今だけ”クロノ・ハラオウン執務官は爆発でも

起きないかぎり目が覚めないほど深い眠りに就いてる”んだから」
「何か様子がおかしいと思ったらそういうことかあああ!」

悲痛な“うなされ声”がその後、クロノ執務官の部屋から聞こえたのは言うまでもない。



しんしんと降り積もる雪が世界を白に染める。

小高い丘から眺める街の風景も、今日だけはひっそりと静まり返っているようにも見えた。

日付の上で今日はクリスマス。キリストの生誕を祝う日……というよりは家族や友人と穏やかだったり賑やかだったりする食卓を囲んで、子供はクリスマスケーキとプレゼントに胸を躍らせる日でもある。

だが、今この時、この場所においてそれはむしろ異世界の事のようにその場の誰もが思う。

———何もこんな日に———

誰がそう口にしたかはこの際意味の無い事。

死んでもあの世にゆけない精霊が、空に還る為の儀式魔法陣。

リインフォースを中心とした三角形の頂点のうち二つで、儀式の一端をそれぞれ担うように各々のデバイスを構えているのはトフエイトの表情も自然と曇る。

いや、むしろ儀式の最中にその場へと現れた夜天の主——八神はやての悲壮な表情に、己の無力さに、感じる必要の無い罪悪感を覚えていくからかもしれない———

「破壊なんかせんでええ。私がちゃんと抑える。
大丈夫や、こんなんせんでええ！」

今にも泣きだしそうに表情を歪めて哀願するはやての叫び――
だが、そこには具体的な解決法も何も無い。本当ははやても薄々と分かつている。

リインフォースを救う方法があるのなら。自分よりずっと魔導に
長けたエキスパートの集まりがそれを実行に移さない筈が無い。
分かつてはいても、滅多に言わない我儘を言わずにはいられない
のだ。

「主はやて…よいのですよ」

「いいこと無い…いいことなんてなんもあらへん！」

何よりも愛おしそうに、柔らかな言葉を投げかけるリインフォー
スに対しても拒絶するようにはやては首を振る。

もしここでそれを受け入れてしまったら、本当に彼女が居なくな
ってしまうとでも言うように。

「随分と長い時を生きて来ましたが。最後の最後で、私は貴女に綺
麗な名前と心を頂きました。

とても幸せな夢も見させてもらいました。

騎士達や…ライも貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

「心配とか、そんな…」

「ですから…私は笑ってゆけます」

駄々っ子をあやすように微笑を浮かべた妖精は、やはりどうして
も儚く。希薄な存在なのだとはやては悟ってしまった。

南国に降る雪のように、それ自体が奇跡の産物と同義。

誰もが喜んでそれを受け入れても、長くこの世に留まる事は叶わ

ず。最初から何も無かったかのように溶けて消えてしまう。
ただ違うのは、心の奥に大きな穴を遺していく事だけ。

もう一度、はやてを安心させようとリインフォースは優しく言葉を紡ごうとする。

が、その時――――

「本当に……その笑顔に嘘は無いのかな？」

声が――響いた。

決して大きくは無い、むしろ周囲の雪に吸い込まれて消えてしまうような声量。

責めるような色も、必要以上に悲しむような色も、咎めるような色も含まれない。ただ純粋な問い。

本来ならばアースラの病室で数日間は療養していなければならぬ少年の声。

「ライ……くん？」

「なぜ……」

周囲の白と不思議と溶け合う黒色の学生服に身を包み。

近代的なデザインの杖に体重を預けた怪我人の足取りはどこかおぼつかない。

だが、その目指す先は決して揺らがないからこそ彼は雪を踏みしめて進む。

「僕が使える唯一の魔法を唱えに来たよ」

二羽の不死鳥を内に秘めた“真紅の双眸”――明滅させながらライは微笑んだ。

第十六話 夜天の光―雪色―（後書き）

【あとがき】

さて、現実には蒸し暑い中、そろそろ扇風機やクーラーのお世話になる方も増えてきたと思いますが。作中では真冬真っ盛りです（笑）。流石にそろそろ冬の風景を描写するのに違和感が半端無くなってきましたよ。

本来ならば去年の12月中にはここまで書きあげたいなあ、とか滅茶苦茶言っておりましたが、なんとかここまで辿りつけました。あと数話でアニメ版A・S本編は終了。それまでお付き合い願います。

第十七話 ライが命じる

真冬に降る雪は世界を凍らせるように冷たい。

街灯の明かりだけが白いヴェールに抵抗している。

周囲から聞こえる音は無く、自分の足が降り積もった雪を踏む軽い音が不規則に音を発した。

「僕の使える唯一の魔法を唱えに来たよ」

凍った大気が僕の身体から緩やかに、しかし確実に体力を奪っていく。

泥袋のように重い足を、松葉杖を頼りに歩ませる全身包帯だらけの怪我人というのはさぞ滑稽なのだろうな、と他人事のように自分の姿を評価してみる。

少なくとも魔法使いのようには見えまい。

「ランペルージ……お前」

「どうしてライくんがここに居るの？」

「そんなボロボロの身体で無茶してんじゃねえよ！」

周囲の視線が僕に注ぎこまれる。
イレギュラー

かつての敵味方関係なく、闇の書の事件に関わった守護騎士達に少年少女。

そして……この世を去る妖精と、その主。

「……………」

バラバラに投げかけられる質問や気遣いの言葉を止める為に手で制す。

精神的にも肉体的にもボロボロな今の僕は、本当にギリギリの境

界線にかりうじて立っているにすぎない。

ちよつとした言葉で全てを歪めてしまふギアス……何かの拍子に誤った暴走が始まれば僕はまた居場所を無くしてしまふ。

「どうして？」

戸惑いを隠せないのか、微かに震える声でリインフォースが僕に問う。

はやてとの離別を前に気丈に微笑を湛えていた彼女は、純白の世界に溶け込むように、儚く、脆い――

そんな彼女の瞳は、僅かにだが湿っているようにも見える。

嗚呼、と僕はここで気付く――彼女は泣き虫だ――

「どうして？ ……貴方は、私の旅立ちを邪魔しないのではないのですか？」

その声に込められているのは非難とも、哀愁とも取れない。いや、そのどちらもが縋い交ぜになったような不明瞭な感情。

多分、彼女は僕と同じなんだ。

大切な人を傷付けることが恐いから、全てから自分を切り離す――

――それしかないと思いこむ。

だからこそ。誰かが自分を引き留める言葉はその心を鋭く傷付ける。

「まさか、僕は邪魔なんてしないよ」

「では何故――」

「訊きに來たんだ。君の笑顔は本物なのかい？」

ぽん、と僕ははやての肩に手を乗せてもう一度問う。

「君は、本当に望まないのかい？ この色づいた鮮やかな世界に残りたいと」

周囲は一面がキャンパスのように真っ白。

だが、シグナムさんが、シャマルさんが、ヴィータが、ザフィーラが、かつては敵だった筈のなのはが、フェイトが――

――誰もが君の為に心を痛め、想っている――

その光景は、かつて僕に色を与えてくれた生徒会の皆の姿と不思議と合致する。温かくて優しい幸せのカタチ。

僕と違うのは、彼女にはまだ選択肢が残っている事。

「そうや！　お願いや、リインフォース、いかんといて！」

はやての叫びに、心を痛めるように唇を噛むリインフォース。

そして、もう一度、口を開く。

「出来ないのです。私がここに居れば、再び防衛プログラムは活動を開始する。

私が居なくなる事こそが主はやての為。現状でこれが最善の策なのです」

「リインフォース……」

ああ、当然だ、そうでなければ。

はやてを愛しているからこそ、彼女の決意は揺るがない。でなければ意味が無い。想いが強いからこそ、自分が傷つく。

そんな彼女に、僕は極力穏やかに抑揚の無い声で――揺さぶりを掛ける

「良いのかい？　君が居なくなれば、優しいはやてはきっと生き急ぐ事になるよ」

「っ！？」

我ながら、己の卑劣さに反吐が出る。最低で、最悪で、はやてを

想う妖精の心を逆手に取った醜い詭弁。

そんな事、僕が言える筈が無いんだ。

誰の記憶にも自分を残さず世界を後にした僕が、そんな事を言う資格なんて無い。

だが、敢えてその可能性を突き付ける。

「その結果、ゆっくりと心と体をすり減らして、最終的には――」
「それ以上……言わないで下さい」

聞きたくない、と首を振るリインフォース。

多分、立場が逆なら僕も似たような事になるのだらうなとぼんやり考える。

未だ頬に残る熱い衝撃と痛み。怒りで肩を盛り上がらせたザフィラの静かな威圧感。

つい数時間前に彼が僕に投げかけた一つの言葉、

『我ら守護騎士が【守る】のは主の御身だけではない、その御心も守って初めて我らは騎士としての本懐を全う出来る』

ならば、僕は――

「答えてくれリインフォース。」

今、僕が聞いているのは【何が最善か】じゃない【君がどうしたいか】なんだ」

「貴方は……」

僕の問いを聞いた途端。

きつ、とその切れ長な真紅の双眸に初めて攻撃的な色を浮かべて僕を睨みつける。

だけどそれはかつての氷のような冷たさにはあまりにも程遠くて

……

「貴方は！　そうやって私を揺さぶって何がしたいのです！

私にはこれ以外に方法はないというのに、最後に未練だけ抱かせて……二度と私が手にできない幸せを見せ付けて何の意味があるというのですか！」

多分、彼女を空に還す儀式魔法陣さえ無ければリインフォースは、僕の元まで歩み寄って来て頬を叩きでもしたのだろう。

突然の怒声にはやても守護騎士も言葉を失う——それだけ異色な怒りの感情。

だが、それを皮切りに抑えの利がなくなった感情が濁流のように溢れ出す——同時にその瞳からは一筋の滴が。

「私だって生きたい、主と共に同じ時間を過ごしたい、将達と共に主の飛ぶ空を駆けたい！」

望まない筈などないでしょう？

だけどそれ以外に方法が無いから、こうして未練も断ち切って、想いを託そうと……したのに」

「やっと聞けた——君の本音が、心の叫びが」

余裕がなくなったからこそ、心の鎧を取り払った純粋な言葉。

誰もが心の底で臨む幸せな色への偽りなき欲求。

これで僕は——魔法を使える。

「やっぱり……リインもここに残りたいんやね」

「えっ？ あっ」

はやての嬉しそうな呟きで、自分の失言に気付き口元を押さえるリインフォース。

だがもう遅い、その言葉はこの場に居る全員が聞いている。いや、恐らくアースラ側でもこちらの光景をモニタリングしているのだろうからもっと数は多いかもしれない。

「謀ったな」——そう言いたげな視線が突き刺さるが、もう遅い。

「リインフォース。今から僕は魔法を使うよ」

「何を言って……まさか!？」 私が託した十字架は？^{リミッター}」

「今でもアースラの病室に置いてあると思う。」

魔法を使うのに余計な枷は不要だ。わざわざ錘が付いた箒で空を飛ぶ魔法使いなんて居ないだろう?」

「貴方は馬鹿です!」

非難の声を無視して。僕は、わけがわからないとでも言いたげに今のやり取りを静観していた少女二人に声をかける。

「僕一人では荷が重い。儀式魔法陣の維持は一任して構わないかな?」
「なのは、フェイト」

「もちろん!」

「任せてください」

笑顔で顔を合わせた魔法少女二人の協力も得られた。

(さて、後は僕のやり方次第か)

ここで失敗したら全てが水泡に帰す。松葉杖を握る手も、悴んでいる筈なのに自然と脂汗が吹きだす。

「いいかい?」これから僕が行う魔法は、必ず成功するとは限らない。

例え、君がこのまま生きて行く事が可能だとしても、もしかしたら僕のせいでもっと辛い現実を味わうかもしれない。

その時は僕を憎め、恨め、それでも足りないというのならこの喉を抉ってもらっても構わない」

「そんな……では貴方はやはり」

聡いな、そう思う。

ならばわざわざ言う必要も無いのだろうが、決意を固める為に僕は敢えて言葉にする

「これから、僕のギアスで“君のプログラムを書き換える”

防衛プログラムが機能出来ないようにすれば問題ないだろう」

「滅茶苦茶ですっ！

貴方のその力は人にしか効かない、如何に私達が人間に近い存在だとしてもそんな事をすれば――」

「そう、これは賭けなんだ。正直な話、僕にもどうなるか予想できない。だから君の意思を知っておきたかったんだ。

そして、これならば――僕は命を賭ける事が出来る」

勿論、負けるような賭けことはするつもりがないけどね。と付け加えて微笑んでみる。

このまま悪戯に時間を消費するのも問題だ。

早速松葉杖を放り投げて、アースラからこっそり持ち出した月下

――光の粒子は廻転刃刀のみを展開する。

街灯の明りを反射して鈍く輝く刀身を魔法陣の最後の一点へと突き立てる。

刀を通して伝わってくるのは固い地面の感触。

「刀をそのように雑な用途に使わないで下さい」という非難がましい月下の声が聞こえて来るが、今ばかりは勘弁だ。

「ライが……命じる」

「止めてくださいっ！」

制止の声を無視して言葉を紡ぐ――

両の瞳から羽ばたくのは二羽の不死鳥――

人の運命を歪める魔法の力は――伊達では無かった。

「――っ！」

全身を走る激痛に体をくの字に折り曲げる。

体中の血管に溶けた鉛を流し込まれるような悪寒。

神経に走る電流。

こみ上げる吐き気。

悲鳴を上げる筋肉。

ぐらりと歪む視界。

既に慣れさえ覚えた暴走の感覚。予想は出来ていたが、それがまさかここまで強いとは。

「リイン……フォース……君は…生きる！」

「お願いです…止めてっ」

願うのは、かつて夜天の魔導書と呼ばれた彼女の【完璧な姿】では無い。それでは時計の針を戻す愚に過ぎない。

ただ、望むのは彼女が笑って過ごせる八神家の姿。

出来るのならそこで僕も共に笑いたいと思う——

「闇に……囚われる必要なんて無い……」

「それ以上は——」

ごぼり、粘性の高い朱色の液体が制服を汚す。

足元の雪は赤く染まり、湯気を上げる。

口の中に広がる鉄の味は酷く濃厚で、身体が上げる悲鳴を如実に表していた。

「祝福の風は……消える必要なんてない。生きる」

頭がガンガンと音を立てて割れそうに痛い。

脊髄は焼けた鉄棒を押し込まれたように熱い。

さすがに僕の身を案じてくれたのか、近寄ろうとする皆を片手で制す。

皆が発する声も、どこか遠くから発せられたように現実感が無く、くぐもって聞こえる。

多分、ギアスを本来の用途と明らかに違う使い方をしたせいだろう。

リインフォースは、人のようであって悲しい事にその実、プログラムの集合体に過ぎない。

人間の持つそれとは比べ物にならない情報に対する干渉の過負荷——誤った電気回路に莫大な過電流を流すのとそう変わらない。

「君は、君の好きなように生きればいい」

どさり、そんな音が遠くから聞こえて来る。

それが、僕自身が膝から雪の中に倒れ込んだ音だと気付くのに数秒の時間を要した。

余計な思考をする余裕さえ今の僕には無い。

それどころか、悲鳴を上げまいと力一杯に歯を食いしぼるのが精一杯。【命令】に余計な文言が含まれればギアスは狙い通りの効果を発揮しなくなるだろう。

僕の身体を蝕む呪いが内側から出鱈目に暴れ出す。

ここでギアスに屈したら、きつと……僕は全てを失う。

（それは……嫌だ）

視界が真っ赤に染まってまともに物も見れない両目で、カタチの無い存在を睨みつける。

今まで幾度となく苦しめられた元凶。いや、望んで力を手に入れたのは僕だ、ならば僕が元凶というべきか。

この際何でもい——ソレが全てを台無しにするというのならソレがなんであろうと僕は——

（邪魔を——するな!!!）

ただ一度、全ての威厳とプライドをかけて吼えた。

ぴたり、身体の内側で荒れ狂う激痛と衝動が治まる。

それがただ、許容量を遥かに超える情報に対して脳が痛みを遮断したからか、一時的にも僕が王の力を抑え込めることに成功したからかは分からない。

だが、口を開いて言葉を紡ぐ事さえできれば問題ない。

「好きなように生きて。好きな人と添い遂げて、本当に望む時に永遠の眠りに就けばいい。それまでは生き続けろ！」

命令はこれで完結。我ながら、実に傲慢な命令だと思う。
この命令自体が、妖精を地に縛り付ける強固な鎖になる。
だけど……それで良い……んだ。

成し遂げた。そんな満足感を胸に僕の意識はブラックアウトした。



「私にも……未来があるというのですか」

力無く地面にへたり込む。

意識を失い、ボロボロの身体で倒れたライに駆け寄る守護騎士達や魔導師達。

それを尻目に。というよりは目の前で起きている事の全てが信じられないとでも言いたげにリインフォースは呟きを漏らした。

ただ、己の内から消えた防衛プログラムの存在と、肌から容赦なく体温を奪う雪だけが、これは現実だと証明していた。

だけどまだ実感が湧かない。

幸せを享受する権利が自分にあるということも。

血だらけで倒れながらも、満足気な寝息をたてる異界の少年の姿も。

だから妖精は主に一つの頼みごとをする。

「主はやて……」

「ん？ なんや？ わたしに出来る事ならなんでもするで」

「私の頬を抓っては頂けないでしょうか。これが夢かどうか確認したいので」

「えいやっ！」

「……いたい」

それはとある寒い夜の出来事。

一人の優しい少女と、たくさんの騎士や魔導師達。

一人の少年の手によって、幾星霜もの歳月に渡って妖精を苦しめた呪いの鎖は断ち切られたのであった。

第十七話 ライが命じる（後書き）

『あとがき』

いつも私の作品を読んでくださってありがとうございます。

この話は、私がこの作品を書き始めた割と初期の段階から構想に入っていた話だったりします。

描写の癖だとか細々とした設定やストーリーのプロットが変更あってもこの話はそれほど変更が無かったはずです。

初期の段階からここを目指して書いてたのにそこへ到達するまでに半年以上かかるとは微塵も思ってませんでしたがねww

アニメ本編に換算すると六話〜七話を書くのに半年って……人によっては無印から初めてSTSの中盤まで入ってたりしそうで恐いです（笑）

そしてなによりこの速度で進んでいくとA・Sエピローグとか何年先になるのやら……

まあ、とりあえずこのあたりで闇の書篇は終了となりそうですね。
新章の構想もある程度は出来上がっているので気の長い方はまだ付き合って下さると嬉しいですよ。

断章 蠢く悪意

闇の書事件の静かな終結。

だが、それを機に再び闇は胎動する。

どろり——始まりは誰にも気づかれないような小さな変化。微かな淀み。

砕け散った闇が、磁石同士が吸いつくように集合し、光も通さぬ小さな異界が完成。

人の目には知覚できず、それでいて内包する情報量たるや凄まじい。

原始の海が生命を作り出したように、そこには幾つものカタチが作られた——

「構築素体の自我確立、分離共に98%完了。
マテリアル

個体プログラムの形成——収集データより魔導と技術の抽出により大幅にオミット完了。

思念体の自律行動までには数日かかります」

感情の色の灯らない声が深遠の闇に響く。

否、この場においては『彼女達』にとって空気を伝播するというプロセスを介した意思疎通は不要。

一種の電気信号を介した——意思——が闇に浸透する。

そして、意思の浸透と同時に、闇の中に浮かび上がる二つの人影。地球で起きた今回の一件に関わる者が見れば間違いない息を飲むであろう意外な外見。

「うむ、でかしたぞ星光
シュテル

これで心地よき永劫の闇を我の手で統べる事が出来る」

「なんだかよく分からないけど、これで僕も飛べるんだね！」

灰色の短髪に翠色の瞳——幼い外見に似合わない不敵な笑みを浮かべる最後の夜天の主、八神はやと

水色のツインテールと薄紫の瞳——外見相応な幼さを残す言動のフェイト・テストロッサ

その二人の姿に酷似しているが故に、二人を知る者ならば言動に違和感を覚える異質な二人組。

「まだ現時点では自立プログラムの構築が完了ただけです。闇の素体となる思念体へのリンクを繋げなければ闇の復活は果たせません。」

もう少し考えて行動して下さい

ロード・デ・アーチェ
レヴィ・ザ・スラッシャー
闇統べる王、雷刃の襲撃者

あなた達が現時点で欠ける事は大願成就の大きな妨げとなります」

そして二人を制するように声をかけるもう一つの人影。

短い髪から受けるボーイッシュな印象とは逆に、理知的な瞳と無感情な表情を兼ね備えた高町なのはの姿。

同じ外見、同じ声といえども、こちらでも例外ではなく本物から明らかに逸脱した言動。

「うん？……うん、もちろん僕がそんな大切な事忘れるわけじゃないじゃないか。おバカさんだなあ、シュテルは」

「理のマテリアルたる貴様がそのようでは先が思いやられるぞ、シュテル・ザ・デストラクター
光の殲滅者」

失念していた事を隠すように不機嫌な表情を作る八神はやと
フェイト・テストロッサ——もといロードとレヴィ

まあ、あんまりな言い分に対して眉一つ動かさず『わざと致命的なバグ残しますよ』というシュテルの軽い脅迫に数秒で屈したわけ

だが。

閑話休題

ゴムのように間延びした時間。

致死量の毒を溶かしたように濃密な瘴気。

呪詛とも怨念とも取れない雑多な思念が奏でるバックコーラス。

それらをゆっくりと堪能するように瞳を閉じていた闇統べる王が唐突に問いを發した。

「それで我らの完全稼働までどれほどの時を要するのだ？」

「防衛プログラムの破損から約96時間。

これまでの処理速度から計算すると、最短ならば23時間、最長ならば60時間ほどです」

報告書を読み上げるように事務的な声。だが、だからこそ客観性と確実性には信頼が置ける。

それを聞いたうえで、遅いな、とロードは呟いた。

「もっと早くならぬのか。障害になりそうな塵芥ごときなど今の我らでも十分に淘汰できよう」

「そうだよシュテル、僕達だけでもあいつ等なんて殺せるって」

「それは……」

（永遠の夜を求める私達の行動原理。……しかし、現状では客観的に判断しても危険過ぎる）

理を司るが故に、贅を求める二人の本能と、理論的な自我との間で理のマテリアルは逡巡する。

彼女としてこんな偽りの小さな闇の中で息を潜める事にはこりこりなのだ。

有機生命体が求めるのは『生』それに対して闇の書から分離した彼女達が求めるのは『死』

いや、求めるのではない。起源に還りたいという抗いような無い

混沌衝動。

だからこそ、選ぶべき言葉に迷う――

「愚かだな――実に愚かだ。

本能に従って行動するなど、犬や猫と大差あるまい」

「あなたは……」

ロードでも、レヴィでも、シュテルでもないもう一つの声。

何時からそこに存在したかもわからない【影】がそこには在った。濃密な昏い色は周囲の闇と相まってその輪郭を酷く曖昧にしている。

こうしてここにある以上、それも闇を構築するマテリアルの一つ。だが、犬猫呼ばわりされた事でロードは露骨に表情を不愉快そうに歪める。

「はっ、自分一人では塵芥共に勝てぬから僻んでいるのか？

己の核を維持するだけで外装スキンさえもロクに構築できぬバグ風情が調子に乗るでない」

明確に向けられる悪意の刃に対しても【影】はさして気にした風でも無く言葉を紡ぐ。

全てを事実として受け止めるその声には一切の色が含まれない。

「確かに、私の力では敵わぬだろうな。だが、敵を過小評価するのも考えものだ。

仮にも王を名乗るならば慢心など愚の骨頂。

歴史を紐解けば見下していた民や部下の反乱で消え去った王権などいくらでもあるように」

「それは非力な人間の場合だ。

我にそのようなつまらぬお約束が通じるものか」

「それはどうかな？ 人の意思は時として思いもよらぬ力の源とな

愛など多種多様。

愛の選ぶ結果に世界が含まれないとしても、あり得ない事ではないだろう」

「ふん、気に食わぬな。賢者でも気取るつもりか？」

賢者、その単語をロードが口にした瞬間、【影】の輪郭がぴくりと揺れる。

まるで、出来の悪いジョークでも聞いたかのようにその揺れは直ぐに薄れて消えた。

「それこそあり得ない。悟りを開く事が出来れば私はこんな未練と怨念渦巻く世界の底辺から顕現などしない……」

言葉の間に合わせて、空間の淀みと歪みが微かに増大する。

同時に、闇色の幾何学が織り成す魔法陣を展開。

「今の私は愚者こそが相応しい。」

さて、そんな愚者から再度の、そして最後の忠告だ——」

最後に、魔法陣の発する昏い光がより増大する。

不完全で未完成な異界が少しだけ軋んだ。

「王を名乗るならば常に背には気を付けろ。」

さもなくば、意外な相手に寝首をかかれる事になるぞ」

返答など聞く必要は無いとでも言わんばかりに。

その言葉を最後に、空間は切り取られ。【影】は姿を消した。

残るのは、転移魔法の余韻となる空間の揺らぎと静寂だけ。

「反応消失。それと同時に、構成の完了していた幾つかの魔法発動・構築のプログラムと外装スキン情報の切り取りを確認しました」

「……僕、あいつ嫌いだよ。何言ってるんだか分かんないし。なにかこう……違うんだ」

表情一つ崩さないシュテルと、感情を表す言葉を模索するレヴィ。気に食わぬ。それを見て闇統べる王は再度不満を漏らす。

「追撃しますか？」

「よい、捨て置け。」

あの程度の力の総量ではリンカーコアを内包した魔導師や騎士を見つけても倒す事など叶わぬだろう。

精々、己の無力さを噛み締めせてやろうではないか」

「そう……ですか」

イレギュラーの混入こそあれど、流れは変わらない。

——闇の胎動はまだ続く——

◇

長い時が過ぎたような気がする。

故郷の地は遠く、かつて描いた夢もまた遠い。

失ったモノは多く。それでいて死ぬことも出来なかった。

天に昇る事さえもできなければ

地獄に墜ちる事も出来ない

魂と呼ぶにもおこがましい罪に塗れた思念は、夢半ばで果てた同族の思念と捻じれ、絡み、溶けた。

俺、僕、我、朕、あたし、汝、オマエ——

知らない筈の人間の残滓が、記憶が、知識が流れ込んでくる。

違う、チガウ、ちがう。それは違う——

個が薄れ、境界の歪んだ闇の中で『私』は確立した。新たな肉体を得た。

これは僥倖なのかもしれない。

地を踏むことが出来る？

空を駆ける事が出来る？

世界を見る事が出来る？

美食を堪能することが出来る？

女を抱ける？

巨万の富を想うがままに出来る？

莫大な権力で誰かをこき使える？

圧倒的な暴力で誰かを従わせることが出来る？

思考に混じるのは過去の敗者と死者の懐いたであろう雑多な夢の欠片。

違う——それは私のしたいことではない。

そんな下らない事では無い。

私が望むのはいつだって一つ——

断章 蠢く悪意（後書き）

『あとがき』

いえーい、新章突入？ですよ。

初っ端から断章だと新章って雰囲気もしませんね（笑）

とりあえず有名といえば有名な闇の書の闇事件、なのポのストーリーはどうやって文章にするか悩みどころですがぬるぬると頑張っていきます（笑）

怪しさ抜群の新キャラ（？）が出て来ましたが。皆様の期待にはお応えせず、それでいて意表を突く、を基礎コンセプトに（ネタバレ

STAGE 1 お見舞い（前書き）

今回は割と普通の日常パートです。
なのでいつもよりは若干短め？

STAGE 1

お見舞い

「わたしが退院したら折り紙教えて貰う約束やったけど、この感じやとライくんの方がベッド生活は長くなりそうやね」

「う……申し訳ない」

数日前、雪の降る丘の一件。ギアスの過剰行使によって倍近くに増えた包帯や医療機器に若干……いや、かなり辟易しながらも僕は眼前の小柄な少女に謝罪する。

内出血だの靭帯損傷だの、体中が内側からボロボロだったというのにたった数日でここまで回復できたのは一重に管理局の医療技術のおかげ。医療サイバネティクス方面に強かったラクシャータさん辺りがもしもこの場に居れば歓喜のあまりキセルを取り落としていたかもしれない。

とにかく、そのあたりの事情でアースラの医務室には新しい包帯や薬品の匂いが充満しているわけなのだが。幼少より通院生活を送っていた少女、八神はやてにとってそれはどうという事の無い日常の延長に過ぎないのだろう。これといって臆する様子も無い。

「あはは、ヘンやねライくん。何も謝る事なんて無いやんかー」

三食昼寝付きの優雅なお休みやん、と関西弁を話す少女は笑みを浮かべる。

唐突な話だが、八神はやてという少女は笑みを使い分ける早熟性のようなものを十にも届かない齡で習得している。

例えば、生来の人懐っこい性格から来る柔らかい笑みと、幼少より大人の世界に接して来た事で得た『外向け』の笑顔。

本質はどうあれ『笑み』に違いは無いのだが、多分、今僕に向けられているのは『外向け』の笑みに近い気がしてならない。というか目が微妙に笑っていないあたり地味に怖いのだけれど。

「それでも、約束を中々守れない事に関しては悪いと思っているん

だ」

「せやから気にせんでもええって。わたしは怒ってへんよ？」

それに、誰もライくんにそこまでの甲斐性は求めてないし」

「……やっぱ絶対怒ってるよね？」

言の葉は人を殺せる、これは冗談やギアス抜きで案外可能ではないのだろうか？

「もー、しつこいなー、怒ってへんってー」

ぺしぺし、小さな手の平で僕の膝の辺りを叩くはやて。

正直な話、なんとか歩けるまでは治りかけているとはいえかなり痛い。

肉体と心にチクチクとダメージを蓄積させるよう真似をするあたり、はやての怒りのボルテージはなかなか高いらしい。

死ぬつもりは無かったとはいえ、数日前に立て続けで僕が重ねた無茶は彼女の許容する範囲を大きく逸脱してしまったということなのだろう。

結果としてあのまま消えてしまう筈だったリインフォースは今もこうして生きているわけなのだが。妙に敗残兵みたいな気分だ。

とりあえず今回の件について全くの無関係というわけでもなく、はやての付添として僕の見舞いに同行していた物静かな銀髪の妖精に（助けてくれ！）と必死にアイコンタクトを送ってみる。

リインフォースは数秒間、その真紅の双眸を戸惑いに揺らして、そして……

ぺこり、はやての後ろで申し訳なさそうに頭を下げて、顔を逸らされる。その瞳が（無理です）と如実に語っていたのは言うまでも無い。

嗚呼、どうやら……僕は孤立無援らしい。

「ごめんごめん、ちょお怒り過ぎたわ。」

せやから氣い落とさんでやー」

「うん……なんかもう……いいよ」

げっそりと生氣を無くした僕の顔でも見たのか、はやてが許してくれたのはそれからしばらく経った後の事だった。

あまり物事を根に持たない生来の性格に助けられたと言い換えても良いだろう。

「それにしても、私達が来る前に何人も見舞いが来たようですね」
ずっと気まずそうに黙っていたリインフォースが名誉挽回とばかりに話題を切り替える。

その視線の先には、ベッド脇に積まれた見舞いの品が作り上げた小山が。

「ほんまやね。これやお見舞いの品持って来れなかったのが申し訳ないやん」

「いや、氣にする必要は無いよ」

ここ数日、一度に見舞いに来れる人数は多くて数人前後だった。闇の書事件の事後処理で誰もが時間を自由にできなかったというのもある。

今回の件の際重要参考人のはやて含むヴォルケンリッターは、事情聴取を含めた細々とした調査やプログラム切り離しの際の悪影響が何か無いか調べたりもしたらしい。

そして、管理局にとって完全に未知の領域の能力の行使ギアス、もしくはこちらの言葉で言う未確認ロストログア使用嫌疑だとか、その他諸々の事情を抱える僕も当然ながら取り調べの嵐に会うべき、もしくは牢獄に直行すべき身なのだが。自力で出歩けるようになるまではその義務も免除してもらっている。

これは推測だがリンディ・ハラオウン提督と交わした司法取引や、彼女なりの配慮の結果なのだろう。

「あは、このアイスなんかはヴィータの見舞いの品やね」

「そこにある竹刀は将の物でしょうか」

「僕の頬に張ってある湿布はザフィーラの持ってきた物だよ」

他にも【翠屋】とロゴの入ったケーキの箱やら色々ある。

どれも厚意の証なのだと思うと自然に胸が熱くなる。

「あれ？ この土鍋、うちにあるヤツやよね？」

きよとん、と小首をかしげてソレを指さすはやて。

だが、聡い少女はそれとなく事実思い至ったようだ。

そして、恐る恐る事実を確認するように……

「あの……もしかして、これシャマルが持ってきたやつ？」

「中身は雑炊……と呼ばれる病人食だったよ」

土鍋の蓋を開けて、空っぽの中身を覗き込むはやてに僕は淡々と答える。

「味、どうやった？」

「なんというか、うん。異世界の雑炊というのは……個性的な味付けがされているんだね」

「本音は？」

「……台所用洗剤の味がしました」

だけど仕方が無いじゃないか？

純粹な厚意から作られたであろう食べ物を、作り主が嬉しそうに眺めている前でマズイと切り捨てるのは道徳的にいけない事のような気がしたんだから。

今でも胸の奥は妙な胸焼けみたいな感覚が続いている。

そんな僕を見て、うわあと、憐みのような視線を向けて来る二人。

「なんか……意地悪してほんまゴメンな」

「胃薬を貰って来ましょうか？」

ここは素直に喜んでも良いところなのだろうか？

そんなこんなで僕の面会許可時間と、はやての病院の外出許可時間が残り少なくなるまで取り留めの無い談笑は続いた。

曰く、クリスマス・イヴの日ははやての無断外出という事で石田先生にこっぴどく怒られたらしい。

例え医者と患者でも、相互の関係性が希薄になった現代で彼女のような人柄はとも好ましく思える。多分、はやては意識していないだろうがある意味では石田先生もはやての家族と言い換えても良いのかもしれない。

「ほんなら、さいならな」

「私はこの後少し用事があるので最後までは付き添えませんが転送ポートまではお連れします、主はやて」

手を振って別れを告げるはやてと、軽く会釈してはやてを抱きかかえたリインフォースが部屋を出て行く。

視界から外れる寸前――――

自らを抱っこしているリインフォースに心底嬉しそうに笑みを投げかけるはやてと、それに答えるように微笑みを返すリインフォースの二人組の姿が妙に神々しく、そして温かく優しい印象を僕に与えた。

（もう絶対にその幸せを離しちゃ駄目だぞ）

胸中でなんとなく呟いたその言葉が、どちらに対して向けられたものだったのか、僕自身にも分からない。いや、もしかしたら自身に言い聞かせる戒めだったのかもしれない。

だけど、二人の幸せそうな姿が不思議と僕の胸の内に幸福感や充実感をもたらしたのは確か。

失ったモノが穿った心の穴を埋めようとするその行為が果たして正しい事なのか。

その時の僕には分からなかった。

STAGE 1

お見舞い（後書き）

『あとがき』

はやて&リインを書ければそれで良かった……じゃなかった、かなり久々の日常パートなのでコツを取り戻そうと奮闘しましたが、ちよっと未消化気味っす。

なのでこれといってあとがきで書くような事も無かったり。

強いて言うならば元々もつと長くする予定だったものを適当な所で分割したとでも言っておきましょうか。

それでは！

STAGE 1・5 お見舞いあふたー（前書き）

今回も結構中途半端な区切り方で投稿です。

夏の暑さにやられたせいかな、どうも最近上手く字数を調整できない

……

STAGE 1・5 お見舞いあふたー

ギシ、そんな異音を幻聴した。骨が軋む感覚に顔をしかめる。

老朽化の進んだ木造家屋で子供が無邪気に走りまわればこんな音がするのだろうか？

別に何か過度の運動をしたわけでは無い。

ここ最近、筋肉を滅茶苦茶な酷使の仕方をしたせいだろうか。ロボットのようになぎこちない動きをする手足を見て思う。

意外な事だが、身体の内部の傷の方は大方直っている。

なんでも例の仮面の男達が僕に打ち込んだ監視用のナノマシンは元々医療分野の技術が発達した物だとか。

だからと言って傷が治れば完治、というほど人の身体は上手く出来ているわけでも無くて――動かさなければ筋肉は劣化してしまう。

「これはリハビリが必要かな？」

リハビリテーション
尊厳の回復と言うあたり、僕にとっては何とも皮肉な事だ。

はやて達が見舞いを終えて帰った後、そんな事を考えながら僕はのろのろとアースラの通路を進んでいる。

照明が薄暗いのは自分が行なったアースラ襲撃が原因なのだと考えるとなんとも申し訳ない気分で一杯だ。

だが、リンディ提督に許されていた事情聴取の免除期間というのは『僕が一人で歩けるほど回復するまで』だということで、ぎこちない動きながらも提督が居るであろう部屋を目指して僕は確実に歩んでいる。

多分、もう少しのんびり療養していても構わないのだろうが、なんとなくそれは嫌だ。

最悪、懲役刑になったとしてもそれは僕の犯した罪が原因であるし、八神家のみんなと死に分かれるわけではないので受け入れる覚

悟くらは決めている。

「どうしたのですかライ？　こんなところで」

後ろから投げかけられた清楚な声に振り返る。

すると、腰まで届く銀髪を揺らして怪訝そうに首をかしげた女性
が一人。この場で見かけるには意外な人物だった。

「ああ、リインフォースか……ちょっと用事があってね。

そう言う君こそなんでここに？」

さすがに事情聴取に向くとは言いつらく話を濁すと、彼女も何
か言い難そうに曖昧な表情になった。

「ええ……少し用事がありまして、主はやてには先に帰って頂きま
した」

書の主であるはやてが居ないということは何か私情の絡んだ話な
のだろうか？

「そうか。どうやら行く方向は同じようだし途中までご一緒願える
かな？」

余計に詮索するのは失礼なので適当にその話題を切り上げる。

触れて欲しくない部分を上手くスルーするのは人付き合いの基本
でもある。

こくりと頷いたので彼女もそれに賛成なようだ。

とは言っても、まだ病み上がりの僕とリインフォースでは体力と
いうか歩行速度に少なからず差は出るわけで……

きっと上手くペースを合わせてくれているのだろう。

ぎこちなさの残る僕の横をリインフォースは適度な速度を維持し、
悠々と歩いている。

これで『肩を貸しましょうか？』などと言われればちょっと傷付
くかもしれない。

「ありがとうございます…」

「は？」

暫くの無言期間を破るようにリインフォースがぼつりと呟く。

一瞬、何の事だか分からずに彼女へ顔を向けると、ルビーのような真紅の瞳が真つすぐにこちらを見据えていた。

「暴走した防衛プログラムを破壊した事と、こうして私がこの世に留まっている事……です」

「だとしたら真つ先に礼を言うべきは他の皆だな。防衛プログラムの件は僕一人では何も出来なかった。

こうして君が今ここに居る事に関しても、生き続けたいと思わせてくれたはやて達に礼をすべきだ。僕じゃない」

そう言ったら少しだけ恨めしげに睨まれた。

どこも不当な所は無い筈なんだが、なんとなく反論がし辛い空気だったので黙っておく。

「貴方は忘れています。

最初の契約の文言には私のことは含まれていなかった。貴方には私を助ける義務など……」

「忘れてなんかないさ。

『優しい主と一途な騎士達“だけでいい”、救っては貰えないか』……確かこんな事を言って君は僕をこちらの世界に飛ばしたんだろう？

それでも記憶力には自信があるんだ、舐めて貰っては困るよ」

すっかり僕が忘れていたと踏んでいたのだろう。

少しだけ呆氣にとられた表情でリインフォースは言うべき言葉に迷ったのか見つめてくる。

この会話の向かう先が読めない僕も何を言うべきか迷って、結果見つめ返す形になる——

「ならば……何故、貴方はああも容易く私にあの力を使ったのです

か？

下手をすれば命を落しかねないというのに」

「うん？」

今度は、今更そんなことを聞かれるとは思ってなかった僕が呆氣にとられる番だった。

それともプログラムとして生を授かった彼女にとって僕の行動というものは余程奇特に見えたのだろうか。

理由————

ごく単純に八神家という幸せのカタチを守りたかったというのもあるし、過去の自分と似た境遇のリインフォースに何らかの共感を持ったというのもある。

行動に至る理由なんてのは挙げてゆけば山ほどあるんだ。

だが……確かに、こういったことはどう言葉にすべきか迷う。

答えを期待してじっと見つめて来るリインフォースに半端な返し方をするのは出来そうにない。

かといって長々と口上を垂れるのも僕の本質に合わないと思い、短い言葉で簡潔に纏めようと試みる。

「多分……好きだから、じゃないかな？」

「……はいっ!？」

びくり!——肩を震わせてリインフォースが硬直した。

真っ赤なその双眸にはありありと戸惑いの色が浮かんでいる。

瞳の色も相まって、まるで天敵に見つかった兎のようだ——不謹慎だと分かっているけど少し面白い。

だが、こんな反応を返されるほど僕の答えは変だったのだろうか？

「朝に降り注ぐ日差しも、日毎に変わる献立も、時折交わすちょっとした会話も、どこにでもあるような平凡な日常が僕は大好きなんだ。」

たまにはハプニングがあっても良い、時々喧嘩をするのも構わない……そんな生活を守るために命を張るのはおかしいことなのかい？」

「……え、ああ、はい。そういう……ことでしたか……」

どうやら納得はして貰えたようだ。

だけど、しゅんと肩を落としてぶつぶつと呟かれたのでは何か期待を裏切ってしまったようであり良い気分はしない。

「どうしたんだい？　もしかして僕が何か粗相をしてしまったとか……」

「い、いえ……私が早合点してしまっただけなのでお気になさらず」
ぷい、とそっぽを向いて少しだけ落ち込んだように俯く。

妙な部分で容姿にそぐわない子供っぽい雰囲気があるのは地なのだろうか？

その微妙な距離感と沈黙がなんとも心苦しい――

でも、そんな気まずい空気もやがて終わりを迎える。

元よりこのハイテク技術の産物みたいな船はいくら大きくても所詮は船。半怪我人の足でもそんなに長時間歩き続けられるような代物では無い。

もしくは医療用の区画が船の中心部近くに配置されていたという
ものもあるだろう。

脳内にある艦内マップと照合して目の前の部屋が提督室なのだと
確信を得る。

この時間帯はリンディ提督もまだ自室で勤務しているというので
僕の行くべき部屋はここで間違いない。

「「じゃあ僕（私）はここで」」

二人とも提督室に用があるとは思ってもいなかったが――

オマケ

提督室の戸を開ける二人組の姿を視界に納めていた人物が一人。

「ほほう、今回の事件の重要参考人二人が提督室に……中々に気になる組み合わせね」

先端だけが若草色に染まったワインレッドの長髪をなびかせてリルカ・プリウスはその切れ長な金色の瞳をまるで値踏みでもするよう細めながら輝かせる。

噂に興味を示す年頃、というよりは何かしらのコネを作るのに役立つかどうか脳内でソロバンを弾いているだけなのは意外に知れ渡っていない。

だが、今回の闇の書事件。裏で『闇の書に記された古代の記述』を入手しようと画策して失敗した以上、彼女もどうにかして採算を合わせたいというのが正直な心情なのだろう。

（よし、となればどうやって盗み聞……話の内容を伺うのか、ただど。

ハッキングや盗聴アイテムの類は提督室クラスのセキュリティに對してはリスクが高過ぎる……ならば正攻法で忍びこむ？）

要は話が聞ければいいのだ——リルカの脳内で数十パターンの手段とそのリスクが天秤で量られる。

こういう方面にめっぽう強い辺り、案外女スパイとしての素質が彼女にはあるのかもしれない。

が、突入を決め込んだ彼女の袖を引っ張る手が二つ。

「先輩？ 自分達に割り当てられた部屋は反対方向ですよ」

「……方向音痴？」

「くっ！」

振り返れば、うず高く積まれた書類の山を筋肉質な腕に抱えたりルカの部下ことゼリガン・ヒューイットと。エメラルド色の瞳をぼうつと向けて来る不思議少女な部下その2ことエリイ・ファインズの姿が――

リルカ自身思索に耽り過ぎて軽くその存在を失念していた二人である。

「どういうわけか知りませぬが、書類の処理が辛いようなら不肖、このゼリガン・ヒューイットが助太刀を――」

「いいわ、お前に任せたら仕事量が倍になる。素直に荷物運びに徹底しなさい」

「了解いたしました！」

「……騒音規制」

なんだかんだで上司が道徳上よろしくない方向へ技能を行使しようとするれば意図せずストッパーになる二人だったりする……

「つくづく運が悪いわね、まったく……人がメインコンピュータに忍び込んだだけでこんな量の仕事を押し付けるなんて。……この借りはいつかかならず返すわよ、クロノ！」

「……どうかした？」

「いえ、なんでもないわ」

邪魔が入ったせいとか、諦めたように肩を落として業務部屋に歩を進めるリルカであった。なんだかんだで根は気真面目らしい。

だが、その思考はいつだって昇進欲全開なルーチンで回っているのを忘れてはいけない。

（せめて例のデバイスに使われている【サクラダイト】とかいう鉱物の出所さえ掴めれば良い土産にはなったのでしょけどね）

恨めしげに提督室のドアを睨みつけて胸中で呟く。

常温下での超電導に加え、魔力伝導率の異様な高さ。

それ単体ではまだ大した物ではないかもしれないが、それは使い所によっては大きく化ける可能性を秘めていることは一目瞭然。

（あれを電導回路や魔力回路に組み込んだら今よりもっと安価に高性能なデバイスが作れるようになる。そうなれば技術革新なんてことも……）

と、そこまで思考してはあ、と嘆息。

「捕らぬ狸の皮算用は私の悪い癖ね。

何よりも“そこから先”は私の専門分野でもないわけだし」

技術革新をもたらすのは個人では無い、いつだって世界の需要が先立っているのだから。

STAGE 1・5 お見舞いあふたー（後書き）

『あとがき』

さりげなくリインを可愛く書こうとしたのですがまだまだ精進すべきだと自覚。

基本的に女性キャラのデレイベントなんざ滅多に書かないんで腕が錆付いている模様です。

なんだかんだでこのライも無自覚にアレなセリフを吐くくらいには原作の設定を再現出来たとは思いますがww

オマケとか言っても容量の半分を占めたリルカ小隊ですが、そこは勘弁して頂けると助かりますww

こっちは露骨ですが一応、今後へのちんまりとした伏線的な物を残せたので全くの無意味では無かったんですがね（笑）

STAGE 2

過去の清算（前書き）

一カ月以上開けてしまった事に関しては弁解のしようもございません。
というか本格的にスランプに突入です。

STAGE 2

過去の清算

「それで偶然にも二人同時に提督室に訪れたというわけか……」

「別にいいじゃない、クロノ」

小さく嘆息するクロノ執務官をリンディ提督が湯呑片手に窘める。何が入っているか良く分かっていない横のリンフォースはともかく僕はその中身から顔を背ける——緑茶のアイデンティティが壊されるのは見たくない。

しかし、提督が執務官という呼称を用いないという事は現在オフなのだろうか。

だが、となるとクロノ執務官が偶然にもこの場——提督室——に居合わせているというのはどうも変な気がする。

血縁関係にあるとは聞いているがどうもそういう様子にも見えな
いのは僕が勝手に懷いた偏見か……

どちらにしてもリンフォースも何か用があるというので、僕は機会を後にしようと軽く片手を上げる。

「あの、お邪魔なようでしたら僕が退室しますけど」

「ううん、私としては二人一緒に細々とした用事を済ませて貰っても構わないのだけれど……これはちょっとデリケートな問題ですし」
困ったわ、と肩をすくめる動作が妙に若々しいリンディ提督だが、さり気なくクロノ執務官に視線を送っているのを僕は見逃さなかった。

対処について相談するというよりは、同意を求める視線に近いような気がしたのは気のせいだろうか？

黒髪の少年執務官はどことなく無然とした表情ながらも渋々と口を開く。

「僕は気にしない。おそらく彼女との話もそう長くはかからないだろうし。彼の事情聴取にはリンフォースの協力があった方が捗る。

だったら同席云々に関しては本人達的意思次第だ」

要するに二度手間は避けたいという意味らしい。

会話の内容から察するにハラオウン母子とリインフォースは何か私的な事情があつてこの場集っている。

そんな場に僕が居ていいのだろうか？

隣で正座しているリインフォースにそういったニュアンスでアイコンタクトを送る。

「ええ……隠してもいずれ知れ渡るでしょうから、私も異存はありません」

———と言う割には複雑そうな表情で頷いた。

結局のところ、こういう深入りした話に同席すべきかどうか自信はないままだったが、リンディ提督直々に緑茶を注がれたので退室するタイミングを失ってしまう。

（こうなったら置物に徹底して場の空気を乱さないのが得策かな……む？）

リンディ提督が沸かしてくれた緑茶（無論、砂糖なんて入れさせない）が美味しいのが微妙に癪だった。



「私に懺悔を乞う権利など、本当は無いのかもしれませんが」

「頭を上げてください、リインフォースさん。あなたにその意思は無かったのですから」

この部屋に入って——いや、ハラオウン母子と対面していた時からその兆候はあったのだが、まるで呪縛が解ける以前のように陰鬱な表情に戻って頭を垂れるリインフォース。

急に重苦しい物へと変貌を遂げた部屋の空気は、事情を解してい

ない僕にとって非常に居心地の悪いものだ。

今回の闇の書事件について何か言っているのだとも考えたが、それならハラオウン家の人間だけを呼び出すのもおかしい話に思える。

「ハラオウンの名を聞いたときにもしやとは思いました。

たとえどんな理由があったとしても、11年前……前回の闇の書事件で私があなた方の家族を奪ってしまったのは変えられない事実です。

クライド・ハラオウンは私が居なければ死ななかった」

後悔と未練の入り混じった悲しい声。それで大筋は理解できてしまった。

闇の書は何百年も前から転生と蒐集を繰り返していた。

その度に繰り返される悲劇——力が引き金となって、本来そうあるべきであった人生を狂わせられた人達。

かつての闇の書が引き起こした悲劇を僕は知らない。

だが、目の前で並んで座っている親子が本当ならばそこにもう一人、存在していた筈の人物が居た事は分かる。

リンディ提督のように捉えどころのない笑みを浮かべる人だったのかもしれないし、クロノ執務官のように仏頂面な人だったのかもしれない。それをリインフォースは奪ってしまったのだ。

お伽噺のように、妖精に奪われた家族は戻っては来ない。

（これは……また、なんとも）

部外者が立ち入るには深すぎる——

ただ静かに彼女の言葉に耳を傾ける親子を見てそう思う。

「それで……君は何をしに来たというんだ？ その様子だとただの謝罪……という訳でもなさそうだが」

「私は、優しい主達や……彼のおかげで幸せを得ました」

ちらり、横のリインフォースの視線が自分に向けられるのを感じ

る。

そして彼女は何かを決意したかのようにぎゅっと拳を握りしめて

「ですが、同時に過去の罪と向き合わなければならないという現実にも向き合っています。

それらから目を背けて私は生きてゆけないでしょう……いや、これは過去の清算の機会なのかもしれません」

気まずい空気から逃れるためにちびちびと湯呑に口を付けていた僕だが、ふとここで一つの可能性に思い至る。

多分、リインフォースと似たような境遇にあるからこそそのシンパシー

いや、そんな問題じゃない！——だとしたら彼女は

「許せとは言えませんが——あなた達が望むならば私はどんな償いを受ける覚悟も出ています。

だから——」

その言葉は最後まで紡がれる事は無かった。

瞬間、部屋を満たすのは——網膜を焼く強い光。

だんっ！——誰かが跳躍する気配。

かちり——金属的な異音

「だから——主の罪の清算の為ならば自分の身を差し出すとも言うつもりか」

「ええ、それで満足するというのなら。私はいかなる苦痛にでも耐えます」

今まで聞いた中で最も冷たく、平坦な声を発するクロノ執務官。その声は鋭く研ぎ澄まされた氷の刃を連想させる。

何かを決意したように瞳を閉じたリインフォースに“起動したデ

バイスの切っ先を突き付けている”のは彼だった。

一瞬前と何も変わらないのは達観したように湯呑を啜っているのはリンディ提督ただ一人だけ。

（どうする……止めるべきか）

一瞬迷ってしまったが故に反応が遅れてしまった。

家族を失う苦しみも、その理不尽さもよく知っている。

そして、残された遺族が復讐に走る事の是非に関して善悪を持ちだすなんてことはナンセンスだ。

【人を殺すのはよくない】

そんな道徳心を貫き通せる人間なんてそうは居ない。ただ、失えば辛い、殺されれば憎い。それだけだ。

復讐心との決着を付けるのは自分の立ち場でも、周囲との関係でも、理性でも道徳でも無い————他でも無い自分自身。

「僕は闇の書のせいで父を失った。こんなはずじゃない人生を歩まなければならなくなった。その原因に対して思うところなら山ほどある」

「承知しています」

「現時点での君の処遇を第一級危険物として“始末”したとしても誰も罪には問われない……そして今の君相手ならばそれは容易だ」
「分かっています」

機械的に繰り広げられる執務官と妖精のやり取りに冷や汗する。身柄がアースラ預かりとなっている僕の手元に武器となるデバイスは無いからだ。

そうになると武装した魔導師を鎮圧するには骨が折れる。

いや、かつて敗北に喫した相手を止めるのならば文字通り相討ち覚悟で挑むしかないだろう。

今の状況で黒光りする魔導師の杖は酷く不吉だった。

そして何よりも裁きを待ち受ける罪人のような彼女に腹が立った。
【好きに生きてくても、過去の罪がそれを邪魔する】——そんな在り方を彼女が実践するだなんて馬鹿げている。

恐らく、今後のはやて達がどんな生き方を実践しようとも【闇の書事件の犯人】というレッテルは一生付いて回る事になる。

その重石は決して軽くない、時にはその背を傷付け、心を摩耗させるだろう。

賢い妖精は誰よりもそれを知っている——だが、それゆえにとても愚かだ。

そんなハンデに彼女達が負ける道理など何処にも存在しないというのに……

「今の僕はどうしようもなく君が憎い、腹立たしい……それが何故だか分かるか」

いいえ、と首を振るリインフォース。

その態度が執務官の琴線に触れたのかもしれない。

魔導師の杖の先端に青白い燐光が灯る。

「どうして皆……そう容易く自分の命を犠牲にしようとする」

ぽつり、と聞きとるのがやっとなほどの声量で執務官が呟く。

「……はい？」

クロノ執務官は声を荒げない、その瞳に憎悪の炎を灯しているわけでもない。

いや、もしかしたらその瞳は今亡き誰かの背中を見ているのかもしれない。

「君が僕の父の命を奪ったというのなら、父の命を無駄にするな」

驚いたように瞳を開くリインフォース。

「君の為に命を賭けた彼のことを踏みにじるな」

僕の事を指しているのだろう。一瞬だけ目が合う。

「君を想う家族の想いを侮辱するな。

それでもさっきと同じ事を言うというのなら、僕が君の存在を完膚なきまでに消滅させてやる」

怒りで眉根に皺を増やすクロノ執務官。

ああ……彼が腹を立てていたのは親を殺された事にじゃない、純粹にその身を案じていたんだ。……最後の言葉は本気なのだろうけど。

それが分かると、安堵のせいか身体から力が抜けていくのを感じる。

「私は……主達と共に時間を重ねても良いのですか？」

「バカか君は、そんな事は君が決める事だ」

「雨降って地固まる、というのはこういう事を言うのかしら。知らぬ間に息子が成長してくれて母としては万感の思いだわ」

「そう言うあなたも随分と意地の悪い」

「さて、なんのことでしょう？」

さっきと何ら変わらずに緑茶だったものを啜るリンディ提督は最初からそれが分かっていたのだろう、食えない人だ。

出来ればこんな人を敵に回すのは控えようと密かに決心する。

視線を横にやると、なんとも複雑そうながらも少しだけ憑き物が落ちたような顔でリインフォースがお茶を啜っていた。

（まったく、世話の焼ける駄々っ子だ）

とりあえず、今回の件ははやてに密告でもしておこう。そんなに罰が欲しいならば主に貰えば良い。

緑茶の苦みを堪能しながらぼんやりとそんな事を考える。

「さも当然のように自分は関係ないとも言いたげな顔をしている

わけだが……今までの行動事例から鑑みたら全く同じ事が君にも言えるんだぞ、ライ・ランペルージ」

「……え？」

邪魔にならないように、と終始無言を貫く結果になってしまった僕だが、ぎろり——と年下の筈の少年に冷ややかに釘を刺される。そんなことはない——言い返せるような根拠が何一つ見つからなかったので反論も喉まで出かかったが止まってしまった。

最初の出会いからして、どうやら僕は彼から軽く敵認定されてたらしい。

「まあまあ、少し気を落ちつけて」

そのまま放っておけば延々と小言で責められそうな雰囲気だったわけだが、その点についてはこの手の場を仕切る事に長けたリンディ提督の一声もあって、何か言いたそうに渋々とクロノ執務官が引き下がることで決着が付いた。



「ねえ、リインフォースさん」

「……はい」

硬直した空気をほぐすような声色でリンディ提督が語りかける。

11年前の犠牲者の妻——その肩書はこの場においてどんな法よりも力を持っている。決して大きくないその声は一種の託宣のように響き渡った。

「私の言いたい事の殆どは息子が言ってくれました。これ以上私が何か言ってもあなたには重荷にしかならないのだろうけど……」

ことん、と湯呑をテーブルに置いて、何かを懐かしむように遠くを見つめる。

「私は夫を愛していました、いえ……今でも愛しています。

あの人はとても優しくて強い人だった、それこそ私とは不釣り合いな位に、ね。

そんな人を奪った闇の書の事を恨みました。

『海の人間が陸で死ぬると思うな』訓練所で一番最初に教官に教えられた事を痛感しました。

彼の残した子が居なければ当時の私はもしかしたら闇の書の完全破壊の為にその人生を費やしていたかもしれない

「では、何故？ 提督が懐く感情は正常なものです。

愛していたのなら尚更、失った時に湧き上がる負の感情は強くなる」

そんな問いを発したのは自分でも意外な事にリインフォースでは無く僕だった。

多分、似たような疑問をリインフォースも懐いていたのだろう。失う苦しみを知っているからこそ、その問いは必然的に湧いてくる。ただ僕達が特殊なのは被害者であると同時に加害者であるという事だけ。

クロノ執務官も母の意外な告白に複雑そうな表情で耳を傾けていた。

場に会した一同の視線を集める中、教卓で弁を振るう教師のような面持ちで提督は語りを続ける。

「死んだあの人は復讐を望まない、なんて事は私も言いません。故人の言葉を借りてもそれは私の言葉——結局のところ只の自己暗示にしかありませんからね。

でも、今言った通りに、私には母としての義務が残っていました。私の命は私ひとりだけの命じゃない——軒並みな台詞ですけど、これって真理じゃないかしら？」

「そう……なのでしょうか？」

「ええ、リインフォースさんにも子供が出来ればきつと分かるわ」
そう言ってリインフォースに対して悪戯っぽく微笑むリンディ提督。相変わらず一児の母とは思えない若さだ。

……というか、人工生命体は子供を作れるのかというちょっとした疑問も残るが、僕がそれを口にするのも微妙に憚られた。

要するに、二人の言いたい事はたった一つだけだ。

【人は生きている限り誰かとの絆を持たざるを得ない。そして強い絆ほど失った時は相手の心を傷付け、穿つ】

無責任ではいられない。停滞した時間も関係も、それが続く限り絆は強く大きくなってゆく。

頭では分かっていた、だからそれを利用して僕はリインフォースを現世へ縛り付ける鎖にした。そして今、ハラウン母子は同じ事をしている。

ある意味、死にたがりな妖精にとってそれはとても重い罰だ。

そう、理解はしていても実感が足りなかったのかもしれない――
――穏やかに微笑みながら“僕を”見つめるリンディ提督を見て思う。

（まったく、厄介な人だ）

僅かな触れ合いや情報でここまで自分の本質を見抜かれるとなると、本格的にマオのようなギアス能力者である可能性を疑いたくなる。

「あの……ありがとうございました」

「さて何のことかしら？。それより、こんな湿っぽい空気のお茶会はそろそろお開きにしましょう。」

私達も働かないと給料泥棒のレッテルを張られそうですしね」

「僕としても先ほどの発言は忘れて欲しい……その、執務官としてあるまじき失態だった」

律義に深々と頭を下げるリインフォース。

何もかも水に流したようなリンディ提督と、恥じるようにそつぽを向くクロノ執務官。

こんな人達に任せればきつとはやて達の未来に心配は無い。

と、妙に年寄り臭い感慨を胸に抱きながら僕は湯呑を啜るのだった。

「忘れているようだが、次は君の事情聴取だぞ」
「あ……」

STAGE 2

過去の清算（後書き）

『あとがき』

どうしてこうなった！

本当はハラウン家との対談パートはさっさと終わらせたかったのですが、どうにも上手くいきませんね。

プロットの都合で無理やりライを同席させたおかげか扱いに困りました……主人公なのにな？

相変わらずクロ助が主人公の座を狙ってるんじゃないだろうかと思いたくなるようなスポットの浴び方をしますがそこはご了承ください。さい。

やっぱりどうしても【闇の書の最後の犠牲者】であるクライド・ハラウンに関するしがらみを解こうとしたらこうなるわけでww

さて、次回こそ事情聴取篇（仮）を終わらせますよ。

……さっさと魅力のあるパートに突入したいものです、はあ。

STAGE 3 宣告（前書き）

最近はちとクオリティが低下気味。なんとかしてリハビリしたいものです。

STAGE 3 宣告

「……嘘、ではないんだな」

「ええまあ、初っ端から胡散臭いと自覚はしていますけど」

調書用の書類でも書く為なのだろう、手元のパネルに指を走らせるクロノ・ハラオウン執務官がその瞳を胡乱気に細めて睨みつけて来る。

少なくとも事情聴取という体を取る以上、余計な主観を入り混ぜずに話した結果がコレではあんまりだと思う。

もう一度、確かめ直す為に纏めたデータを読み上げるクロノ執務官の声もそこはかとなく疲労の色を含んでいるのは僕が原因だろう。実際に質疑応答を繰り返すのは僕と執務官だけなので、脇で湯呑を啜るリンディ提督は時々不明瞭な点に口を挟むだけな分気楽な物だ。

同じように、個人的な事情で偶然居合わせたリインフォースもリンディ提督に振る舞われた緑茶にちびちびと口を付けながら興味深そうに僕の身の上話を聞いている。もしかしたら彼女は猫舌なのかもしれない。

「君の出身が、管理局のデータバンクにある第九十七管理外世界”地球”とは異なる”地球”だというのは分かった」

「……そこは疑わないんですか？」

そこを真っ先に突っ込まれるだろうと思っていたのだが予想外に反応が軽くて少しだけ拍子抜けする。

そんな僕を見て『君が言いだしたんだろうが』とでも言いたげに眉を顰めて執務官は軽い咳払いをした。

「所謂パラレルワールド、というのは発見こそされていないが理論上では存在されると近年の研究論文にあるんでね。プリウス一族が話題作りの為に今でも躍起に研究をしていたはずだ。」

そもそも次元世界と平行世界の差なんてのは観測する側の都合上の問題でしか無い。運が良ければ帰還の可能性も出て来るかもしれないぞ」

それは逆説的に『その世界が見つからなければ帰る術は無い』と言外に語っている。

けれど、元より二度とあちらの風景を拝む事など無いだろうと諦めかけていた身としては喜ばしいことなのかもしれない。

——少しだけ眉を顰めた執務官が手元のパネルから顔を上げた。「そして、その世界の勢力図が九十七管理外世界と大きく異なり、戦場の主役がナイトメア・フレームと呼ばれる質量兵器だということも理解した。」

ついでに君がその世界で『ブリタニア』という体制に対するテロリストであったというのもこの際はお咎め無しだ。

君が管理世界の住人だったのなら間違いなく罪状がもう一つ追加される場所だが、未発見の世界の内政事情に口出しするほど管理局も暇じゃない」

「出来るならば……レジスタンスと呼んで貰いたいんですけどね」

「第三者として公平に判断するための呼称だったのですけれど、彼の発言で気を悪くしましたか？」

「いえ、お気になさらず」

大分冷めてきた緑茶の水面に視線を落として肩をすくめる。

完全な第三者の視点を借りればそういう呼称で呼ばれるのは仕方ない。そんな諦観が水面に映る自分の表情をほんの少しだけ曇らせた。

ブリタニア側でも日本側でも無かった昔の僕だって彼らと同じ主観を抱いていたのだと思うと妙な気分にならざるを得ない。

もちろん、僕の感傷なんて関係なく事情聴取は続行。

リンディ提督が興味深げに手元のデータを覗き込んで、僕に問う。

「こちらの世界に飛ばされて一月以内ということは、あなたの肉体

が人為的な改造を施されたのは元居た世界での出来事、と考えてもいいのかしら？」

「長い間液体に満ちた容器に閉じ込められてたので明瞭な記憶は無いんですが……それで間違いないです」

むしろ鮮明に記憶が残っていればそれは地獄だっただろう。

今でも時折焼き付いたように思い出す。

世界を満たす冷たい液体、異物が体内を駆け巡る堪えようのない違和感、脳の中に知らない筈の知識が流れ込んでくる恐怖。

……そして、ガラス越しに僕を見据える白衣の男達と金色の瞳。

「異常に高い数値を示す活動電位とニューロフィラメントはそれが原因か……」

むう、と考え込むように俯くクロノ執務官。

「何か問題でも？」

「いや、話を聞く限り君の住んでいた地球の技術レベルも総合的にはこちらの地球と大差ない。だというのにここまで無駄なく人間を改造する技術があったというのはどうも信じ難くて」

そんなこと言われても僕としては反論に困る。

人体改造された知り合いに心覚えなんてものは無いので比較対象だって存在しない。

「ああ、気にしないでくれ。分野ごとに技術レベルのバラつきがあってもおかしくないし、今後数十年で改造の副作用が現れる可能性も否定できないからな」

————さらりと不吉な事を言う人だな。

気休めを言わない分、信用は出来るのだろうけど真面目な顔で言われるとそれが決定された事実みたいに思えて気分が盛り下がる。

自分の身には過ぎた借り物の力と知識——本来なら長い時間をかけて蓄積されるべきそれらを今まで行使して来た代償だというのは僕はそれを受け入れざるを得ない。

恩恵に預かってしまった以上、バトラー達に文句を言う資格も無くなってしまった。

「とりあえず、”ここまでは”多少特異であっても特別あなたの罪状に直接関係する問題は無いようですね。

人体改造の件については罪に問われるべき当事者を確保する事も出来ません。

今後のあなたの身の振り方に関しても次元漂流者としてならばある程度の保障が効きます」

そう言って心底美味しそうに湯呑の中の液体を啜るリンディ提督——言葉の末尾に『それが本当ならば』と付け加えるように呟いたのは聞き間違いでは無さそうだ。

そして、多分——彼女らにとって最も優先すべき問題はここから。

「私達が訊きたい事に心当たりはありますね」

「ここでシラを切り続けられるほど僕が往生際の悪い人間だと思いますか」

にこり、と笑うリンディ提督のその姿はある種の老獪さを備えていた。

私情と組織の建前を使い分けるからこそ、この人はこういう場ではとても強い。

率直に、そして見据えるような視線は心の内のやましい部分を浮き彫りにしようとするように鋭い。

「ならば訊きましょう——」

一拍の間を開けて一言。

「あなたの力は何なのです」

僕と、隣で慇懃に座っていたリインフォースの両方に視線を移して——

この人は感付き始めている。

僕の力は知らずに放っておくにはあまりにも面倒な力だというのを。

教えてください————とも、言わず。語尾は一切上がらない。
拒否は許されなかった。

一瞬、力を使うという手段が脳裏を巡る。そうすれば僕はこの力を隠匿して今後の生活を謳歌出来るだろう。

……答えは決まっている。

嘘つき（ライ）が大嘘をつくのは大切な人の為だけと決めている。

それに、この人たちはきつと信用できる。

その後の説明は随分と拙いものになってしまった。

一度だけどんな命令でも強制出来る王の力。人の身には余る越権。それを授ける不老不死の存在。

ギアスの根源から派生する魔力の相似的能力と、Cの世界という存在。

そして——遺跡で眠りに付く筈だった僕が異界に跳ぶキツカケとなった本の妖精との契約。

こうして説明する段階になって改めて気付く。

僕自身、あの時C・Cからギアスに関して大まかな説明は確かにされた。

けれどそう、僕はギアスという力を始めとした超常の力に関して記憶し、扱う事は出来ても本当の意味での【理解】は何一つしていない。

例えるならば、特殊な機械を所持し扱う事は出来ても、それが内部構造まで理解している事とイコールで無いのと同じだ。

だからこそリンディ提督は僕とリインフォースが同席する事を許したんだろう。

なぜなら————

「……なるほど、魔力素無しで彼が魔力を生み出すという訳では無くて、あくまで類似の力を別個の【Cの世界】という源泉からパスのようなものを通じて供給されていてだけという事か。

信じるには随分と滅茶苦茶な話だが火の無い所に煙は立たないと言うしな。ギアスそのものが【Cの世界】の存在の証明……か。

ならば後天的なリンカーコア保持者ではなくロストロギア保持の可能性も——」

「いえ、厳密にはギアスは大本のロストロギアから派生した特殊技能^{レアス}として扱うべきではないでしょうか？

ベルカ戦乱期にはそうしてレアスキル保持者を増やす実験が行われていた例もあります」

「核となるロストロギアが個々人のリンカーコアに介入して本質を変貌させるというアレか？ 確かに、その手の実験は各国で行われていたという資料が残っているが、この場合その核となる【Cの世界】というもののからどういう経緯で力が派生したか……いや、そもそも【Cの世界】というものをただのロストロギアという分類で纏めるには多少無理がある気も」

「話を聞く限り、下手をすれば古代ベルカ成立以前から存在しかなないものね」

「そのあたりに関しては一応、遺跡の専門家^{スクライア}に頼んで調べて貰っているが、遺跡の破損度が大き過ぎて特定出来るかどうかは運次第……だそうだ」

「それよりも、彼が搭乗していたという機動兵器がデバイス化している事はどう説明しましょう？」

「一応、過程ですが——」

——さつきから魔法技術だとかロストロギアに精通した三人組が先ほどこらずとこんな感じで話し込んでいるから。

当然と言えば当然なんだが、話に付いていけないのがちょっとだけ悔しい。

大まかに話を自分なりに噛み砕いてみようにも節々に意味さえ理解できない単語や人名が飛び出して来るのではどうしようもない。そう言う意味では素人の僕なんかよりもプロフェッショナルのリインフォースのアドバイスはとても役立つのだろう。

言いかえれば話題の渦中に居る筈なのに僕だけが手持無沙汰な状態。

訳も無く呆、と傍らで提督たちと熱談するリインフォースを眺める。

理由も根拠も何も無い。ただあるのは奇妙な既視感。

すう、と吸い込まれそうな真紅の瞳。精緻な陶磁器みたいな白くて滑らかな肌。室内の淡い照明を反射して輝く絹糸のような銀髪。

少しだけ意外なのは、頼りない、だとか泣き虫だとか、本人が聞いたら気を悪くしそうな僕の勝手な先入観などどこかへ置き去りにして来たかのように滔々と意味不明な単語を紡ぎ続けている事——知識の蒐集が原初の目的である彼女にはそれが本来の姿であり、役割。

素直にその在り方を——美しいと思っていた。

恐らく守護騎士達に対して抱くものと同じ感情。

完成された不変のカタチと、内に宿した人の心——それはどことなく知り合いの魔女の姿によく似ているような気が……

「難しい顔をしてどうしたのです？」

「ん、ああ……何でも無い」

考え事に集中していたせいかな、気が付けば専門家達の論議は終了していた。

自身がその渦中の存在だという自覚はあっても実感はまだ曖昧。そもその部分で知識が足りない現実味というのは足りなくなるらしい。まあ、知識だけあってもそれは似たようなもののだが。

「とりあえず、現時点での判断ではありませんが。ライさん、あなたの持つ【ギアス】という力は暫定的にレアスキルとして扱われる事

になりました」

やんわりと、だが真剣な口調で告げるリンディ提督。

「ロストログアとして扱われる事になった場合はどうなるんですか？」

「危険で制御不能な物と判断されれば摘出処置、それが無理ならば封印処理が施されていた可能性が高いですね」

その言葉の差す意味をそれとなく想像して一気に顔が引きつる。

独房入りだとかなら受け入れる気だったが、そんな扱いはゴメンだ。根拠は無いが、両手足を拘束されて真っ暗闇に放りこまれる様を想像してしまう。

「正体不明のロストログア、というのはそれだけで文明崩壊だとか世界滅亡を引き起こす可能性を孕んでいるんだ。リインフォースの助言に感謝するんだな」

「それだけロストログアは危険……ってことですか」

何はともあれ、今後の人生の分岐点で最悪の道は回避できたようだ。

異世界の常識、というものについてもっと学習する必要があるそうだと心に刻む。

けれど、胸をなで下ろすにはまだ早い。

「君の罪状やその特殊な立場を考慮すれば、多少強引ながらも懲役刑なんかは十分に回避できる。」

勿論、特殊過ぎるが故に相応の処置や規定が発生する事になるのは避けられないだろうけど」

偏頭痛にでも悩まされたように額へ手をやるクロノ執務官。

彼としてもこの話はあまり気乗りのするものじゃないらしい。

「八神はやてやヴォルケンリッターは管理局への従属で罪を償う事を了承している。一応聞いてみるが、君はどうする？」

他に案が挙げられないのはきつと、それ以外にマトモな選択肢が存在しないから――――

それに、答えなんてのは最初から決まっている。

「はやて達の力になる為にはそれが一番の近道みたいですしね」
けれど、彼にとって予想外だったのは僕の持つ王の力。

「法に従えば書類上ではどうにかなる。だがな、力の大小は別にしても君の【ギアス】は例外だ。それに……」

仏頂面で口を開くクロノ執務官。

リンディ督は勿論のこと、年の割に聡明な彼はとうの昔に気付いていた。

ギアス本来の力——最初から啓示されていたその能力。その危険性

「ライ・ランペルージ、君のその力は【悪】だ。少なくとも組織と言う枠組みの中ではその力は存在そのものが許されない」

淀むことなくはっきりと、真正面から叩きつけられる現実。冷静に、冷徹に——

悪、だなんていう曖昧な表現を用いてまで形容する以上、彼にはそれだけの根拠がある。

「考えてもみろ、絶対遵守だなんていう馬鹿げた力の存在を——それが在れば相手の人格も、理念も、存在理由も歪めてしまえる。 ”使うかどうか”ではなく ”使える” という状況にある事自体が露見しただけで大問題になる」

そこに僕の人格は考慮されない。

数多くの第三者からすれば、僕がどんな人間かなんて理解は出来ないし、だからこそ絶対遵守だなんていう力は【組織の掌握】へと繋がる危険性を持った因子となる。

「それに、場合によってはあなたは常に自分の背に意識を向けて生かせざるをえなくなるでしょう。

主はやてや私達。あなたをよく知るものは別としても……疑心は人を惑わせます」

「それが、命をかけて戦う人間ならば尚の事……か」

「はい」

答えるリインフォースの言葉に余分は含まれない。

長い時を蓄積した彼女は、きっと類似の事例を多く見てきた。

だからこそ人が未知の力へ懐く根源的な畏怖を知っている。

それが人を操る力ともなれば更に話は複雑に――

どんな信用や信頼も意図的に偽造出来るならばそれは対等な関係の崩壊へと繋がる。

自分が命をかけて戦った信念が全て、たった一人の人間の言葉で強制された物だったとしたらどれ程恐ろしいだろう。

いついかなる時、自我を否定するような命令が下されるか分からない恐怖は人を狂わせてしまう。

事実がどうであるかなんて関係ない、その可能性は常に付き纏う。取り入るか、無視するか、排除するか――

一つだけ言える事があるとすれば、例え――――戦場で背後から撃たれても僕はそれを糾弾する権利なんてもものを持っていないということ。

「クロノが言った事は多少極端ですが、的を射ています。

【ギアス】が公に露見すればあなたの立場はとても危うくなる……

……それでもいいのですか？」

リンディ提督が最後の確認を行う。

自身なさげな口調に楽観や慰めは一切含まれていなかった。

それでも僕に最低限の選択肢を残したのは彼女なりの想いやりか、組織人としての体裁なのか……

「元よりそういう危険性と隣り合わせで生きてきたんです。今更そんなリスクは何の重石にもなりませんよ。

それに、この力の事を聞いて受け入れてくれたあなた達を僕は信用します」

「そう言う事を真顔で言うなんて——あなたは人好きのする性格なのね」

うふふ、と軽く口元に手をやって笑むリンディ提督。

その所作が少しだけ色っぽい。

最後まで奥の読めない人だったけれど、多分根は良い人なんだろう。

視線をクロノ執務官へやると彼は不服そうにがしと頭髪を掻きながら——

「法は人を捌くための物じゃない、人を守るための物だ。

ルールに従って君が行動すると言うのなら僕は最善を尽くしてやるさ。

ただし、確約はしないぞ」

ぶつきらぼうに呟くクロノ執務官。

最善を尽くす、と言っても彼は事実の隠匿や偽装に手を貸してくれない。

あくまで法やルールに従った手続きだけでどこまでやれるのか僕には分からない。けれど、それは不思議と信頼できた。

隣に視線をやるとリインフォースが正座を崩して薄く微笑を浮かべている。

（心配ありません）——彼女の瞳はそう語っていた。



既にお開き、と言った感じの空気を締めくくるようにリンディ提督がばんばんと手を叩く。

「さあ、これで第一回目の事情聴取は終わりです」

第一回、ということは次回もあるのだろうか？

異郷の地の律法に従った事情聴取がどれほど長引くのか、あまり想像したくは無い。

そんな時、手元に纏めたデータパネルを不機嫌そうに整理しながら

らクロノ執務官が最後の連絡事項を口にした。

「ライ・ランペルージ、君も晴れて退院だ。」

手続きの関係で明日以降になるだろうが、八神家に戻ると良い」
ぼそり、と告げられた事実は質問攻めで疲弊した今の僕にとって
一番の吉報で――

「――え？」

「帰りたくないと言うのならアースラに残れば良い。その方が監視する側としては楽だからな」

「いえ、その処遇に感謝します。やっぱり良い人だったんですね」

「礼ならばわざわざ厄介な手続きを事前に行っていた補佐官に言え。そして最後の一言は余計だ」

つまらなそうに言う彼の表情は不機嫌そうなおままだ。

これでまた仕事が増えるだとかぼそぼそと呟いているのはそれと無関係ではないんだろう。

けれど僕はリインフォースと共に再度礼を言って部屋を後にした。

◇そして翌日

まだ日が地平線から顔を出していないような真冬の朝。

交通量の少ない住宅地においては路上を覆う薄氷がまだ割れずにカタチを保っている。

そんな住宅地の一角で真っ黒な学制服に身を包んだ少年が一人、
一軒の家屋の玄関先で迷うような素振りを見せながら佇立していた。
何度もドアノブに手を伸ばしては引っ込める事の繰り返し。

葛藤と逡巡、期待と不安。

何がそれほど彼の心の中で行動を思い留めさせているのかは分からない。だが、迷う間にも真冬の寒風は彼の体力を容赦なく削っていく。

やがて、意を決したのか少年は確かな手付きでドアノブに手を伸

ばし――――

「た……ただいま、戻りました」

それは本当にどうしようもないほど当たり前で平凡な光景。
だからこそ何とも替え難い至宝であった。

「おかえり」

STAGE 3 宣告（後書き）

『あとがき』

ぶっちゃけ今回のお話は割と退屈な説明回……もどき。

どうも自分はこの手のイベントは纏め方が分からずクオリティが下がる傾向にあるようです。以下は補足

とりあえずルートとして八神家と一緒に管理局へ入局するならばどうしても消化しなきゃならなかったイベントその2

ギアスなんて言う訳分らない力を一切追及しないのは組織人としてどーなのよ？という至極真つ当な疑問から発生。

細かい説明を省いたのは一重に実力不足です、はい。

隠された主題としてはクロノという味方サイドの人間に【絶対遵守のギアス】を否定させる事が目的でした。

作中で述べた通りに、どんな命令でも思い通りにさせる力を持った人間が居れば大抵の人間は恐怖感を覚えるだろうなあ、というのを表現したかったんです。

『自分で決めて進んだと思った道が他人の意思によって無理やり決定されていたかもしれない』という可能性は特に命をかけて戦う人間にとって一番恐ろしいものだろうなあ、というのがヘタレ作者の主張でした。

さて、次回こそは書きたいイベントを消化しますよ！

STAGE 4 仲直り（前書き）

自分でもちよっとびっくりな更新速度です。

今回は割と普通の日常パート、それがいつまで続くか作者自身分かりませんがどうぞお楽しみください。

STAGE 4

仲直り

夢を見た。

記憶の奥深く、もうとつくの昔に忘れてたと思ってた記憶の残滓^{バグ}が墜ちる夢。

空を黒雲がどんよりと覆い、まともにお日様の顔も拝めない戦乱の時代。

そんな時代の戦場を駆けて荒んだ心を癒してくれたその蝶を墜としたのは紛れも無い——戦火。

空を舞う火の粉が引火して地に墜ちた蝶は最後の瞬間まで空へ還ろうともがいていた。悪あがきなんてしなければ、もっと長く生きられたのかもしれないのに……でもその蝶はそれが出来ない理由が在った。

その蝶はどこを目指していたのだろう。何を望んでいたのだろう。もしかしたら何も目指していなかったのかもしれない、でもその時のあたしにはそれがとっても羨ましくて／悲しくて

でも、今は違う——自信を持ってそう言えるんだ。

◇sideヴィータ

朦朧とした意識が生み出す奇妙な浮遊感に全身が包まれる。なんだかふわふわしていて自分の存在に自信が持てなかった。

もしかしたら本当に浮遊してたのかもしれない。

だめだ、そんなのがシグナムやシャルに見つかったら馬鹿にされる。

それを考えると癪で、あたしは目を覚ました。

「やあ、起きたかい？」

「……寝てる」

「意外に君も意地が悪いね」

目を開けるとそこは見慣れたはやての部屋。

でもベッド脇に座っていたのは肩をすくめるライだった。

ぼんやりと記憶の綱を手繰ってみる——確か、コイツが帰って来たのが今朝で、あたしは昨日の夜辺りから体調を崩してたから軽く顔を合わせただけで直ぐにベッドに戻った。

……正直寝起きに見たい顔じゃない、はやての顔が見たい。

と、そんなあたしの不機嫌そうな表情を見て何を勘違いしたのかライは——

「やっぱ体調が優れないのか」

ずっと色白な手を伸ばして熱を測ろうとしてくる。男のくせに線の細い指先。

なんとなくそれが気に入らなくてあたしはその手を軽く弾いた。

「心配なんていらねーよ。闇の書の蒐集とこの間の決戦まで色々は無茶したのと、闇の書本体からプログラムが切り離された時のショックが重なったただけだ。

栄養とって寝てたら直ぐに自己回復する」

「そうか、なら安心だ」

これといって気を悪くした様子も無くコイツはベッド脇の椅子に座って、テーブルに積み重ねていた本から一冊引っ張り出してページを捲る。

星の王子様——そんな本を持ってるとは思えないから多分はやてのコレクションから引っ張り出してきたんだろう。

積み重ねている本の背表紙に目をやってもこれといってジャンルに統一性があるようには見えねえ。

その後は長かった。

気づいた事は、コイツは無駄に口を開くタイプじゃないって事と。基本的にはやたら表情を変える性格じゃないってこと。

全くの無言——時々聞こえるのはページを捲る音だけ。

続く静寂。ライにとってそれは苦痛じゃないらしい、むしろザフ

イーラみたく心地よく思ってるのかもしれない。

いちいち病人に気を使ってたんじゃ逆にあたしの気が休まらない。だからといって、まったくの無言と言うのもあたし的には気に食わなかった。

（よし、これでいいか）

頭の下から枕を取りだし振り被って——投擲！

ぼふっ！——そんな音を立てて枕は見事ライの顔に着弾。

「……何をするんだ」

数秒後、枕の下から覗いた顔は微妙に不機嫌そうだった。

読書の邪魔をされた事が不満だったらしい——避けられなかった所を見ると意外に読みふけていたのかもしれない。

「いつまであたしの横に居座るつもりだよ」

「……さあ？ 君の体調次第じゃないかな」

看病ってそんなもんだろ、としれつとした顔で言うあたり結構イイ性格してやがる。

あたしが聞きたいのはそんなことじゃない。

「はやてやシャル達はどうしたんだよ」

「はやては病院へちよつとした検査をしに行ったから居ない。

シグナムさんは近所の剣道場へ用があったらしい。

シャルさんは夕飯の材料を買いに。

ザフィーラは……フェイトの使い魔、アルフだったかな？ に連れて行かれたから所在は分らない」

要するにみんな留守だって言いたいようだ。

それであたしはコイツと二人っきりって訳か。

でもそこで、一人だけ抜けている事に気付く。

「アイツは？」

「……？、リインフォースならそれを張り直したと思ったら下へ降りていったよ。洗濯物を見て来るとかなんとか言って」

ライがあたしのおでこのあたりを指さす。

今まで気付かなかったけど——冷たい。

張られていたのは、ひやペタだがなんだか言う名前の冷却シートだった。

ベッド脇に置かれているごみ箱には同様のシートが数枚——温くなったら直ぐに張り替えられていたらしい。

そういえばさつき、ライの手を弾いた時に伝わってきた感触は少し冷えていた。あたしの看病をしてずっと暖房の効いた部屋に居たにしては冷た過ぎるような気がする。

ということは——

……むう

「彼女も顔を合わせにくそうだったけど、喧嘩でもしたのか」

「喧嘩した相手を甲斐甲斐しく看病するなんて普通思うか？」

「いや」

ちっ、コイツ分かってやがる。

腹が立ったからまた何か投げてやろうと思ったけど、枕はもう投げちまったから手の届く範囲に掴めるものは無い。

はやてに買ってもらったウサギの人形があるにはあるが、これだけは絶対に手放したくない。

仕方ない——

「待て待て、病人がハンマーなんて振り回すものじゃない。鍛冶屋だってそんなことはないよ」

「だったら病人相手にそんなまどろっこしいやり方すんじゃねえ！」
「すまない」

アイゼンを起動して肩を怒らせたあたしに申し訳なさそうに頭を下げるライ。

そこまで素直なら最初からそうしてればいいんだ。

「あんな迂遠なやり口だったことは謝る。」

……だけどさ、根が深いように僕には見えただ。君とリインフオースの距離感は」

「……そこまで深刻なもんじゃねえよ」

実に気に入らない事だけど、コイツは本当によく物を見ている。たった半日たらずでそこまで見抜かれたとあつたらなんだかあたしが単純みたいで面白くなってそっぽを向く。

「深刻な問題じゃねえ、だけど今更どんな距離感で接したらいいか分かんねえんだよ」

そこから先はあたし自信でも驚くぐらいよく話してしまったと思う。

もともとあたしと闇の書の管制プログラム——リインフォースはそれほど折り合いが良く無かった。

何かアイツに落ち度があつた訳じゃない。もしかしたらあつたのかもしれないけど、そんなものは忘れてしまった。

空を埋めるベルカの戦船や、デバイス、質量兵器の区別なく武器を構えた有象無象の集団。

世界を、空を汚す事しか出来ない連中の為に戦うって事が当時のあたしにはどうしても受け入れられなくて。そんな在り方をただ諦めたように受け入れるアイツの姿に無性に腹が立った。

自分の事なんてどうでもいいクセにあたしの心配ばかりするアイツが気に入らなかった。

ずっとそんな事を繰り返していくうちにどうして自分がイライラしているのかも分からなくなって、後に残ったのはリインフォースとのどうしようもない距離感だけ。

どうして? ——なんで?

あたしが話している最中、決してライはそんな質問をしようとしなかった。最低限の相槌やあたしの言った内容の再確認しかしなかったと言い換えても良い。

その在り方はただの鏡みたいだった——決して主の意に反する行動をとらず、覗きこんだ本人自身気付かなかったような些細な事を気付かせてくれる。そんな在り方。

だからだろう、自分の中でもよく分からなかったもやもやとした感触を少しだけ整理出来たように感じたのは――

カチ――カチ――

時計の針の音が妙に間延びして聞こえる。

あたしが話し終えると部屋に残ったのは微妙にむずがゆい静寂だけ。話の内容を反芻するように無言で瞳を閉じて考え込むライの姿は意外に様になっていた。

考え事をするときに難しい表情になるコイツは、まるで沢山の本に囲まれて年がら年中考え事をしてるじいさんみたいだ。

「……ようするに」

呆と、軽く息を吐き出す。

「君はリインフォースの事が好きなんだろ――ぐっ！」

「殴るぞ」

「アイゼンで殴打しておいて言う台詞か？」

痛みを堪えるように頭を押さえたライはアイゼンを構えたあたしから距離を取って悶えていた。

惜しい――あのまま二撃目が入っていたら昏倒させられたのに。

「少なくとも嫌ってはいないんだからそれでいいじゃないか」

「だとしても他に言い方ってもんがあるだろうが！」

「一応聞いておくけど、君って僕の事嫌いだろ？」

「好きか嫌いかで言えば、嫌いだな」

でも信頼はしている――言おうと思ったが気恥かしさで顔が熱くなったので止めておく。

自分の処遇に納得いかない、とでも言いたそうな顔でライは部屋を出て行った。

うん、賢い判断だと思う。

◇sideライ

どうにもヴィータとの具体的な距離感の掴み方が分からない。

というか、彼女を大人として扱うべきか子供として扱うべきかいまいち判断がつかないと言うべきかもしれない。

子供っぽい感情に任せる側面と、理を説けばすんなりと受け入れる大人の一面。

でもやはり、見た目が子供だとしても妹やナナリーと接する時のように意地悪を試してみたくなるわけで……まあ、そんな事はこの際どうだっていい。

「あの、紅の鉄騎の容態は？」

部屋を出て直ぐの所、ヴィータの着替えらしきサイズのパジャマを胸元に抱えて所在なさに佇んでいたリインフォース。

今、部屋の中で横たわっている病人の額に張られている熱冷ましのシートを定期的に張り替えていた犯人。

誰よりもヴィータの事が心配なくせに彼女が目覚ましそうになったらそそくさと部屋を後にするその姿はまるで、仲直りしたくても最後の一步をどうしても踏み出せない子供みだった。

多分彼女の中でもいつの間にか出来上がっていたヴィータとの隔たりが残っているんだろう。

傍から見ればとても単純。当人達に互いを退ける理由なんて何処にも残って無いんだから。

けれどそんなものは客観的な事実に過ぎなくて、停滞した円環は当人達を苦しめているのもまた事実。

「はあ……」

「もしかして何かあったのでしょうか？」

不安そうにおどおどと問いを発する姿は余計にため息を誘った。

「そんなに気になるなら自分で確かめればいいだろう」

がっしりとリインフォースの肩を掴む。

「え……？」

そのまま方向転換して部屋のドアノブを捻る。困惑した表情のリ

インフォースはそこで僕の意図に気が付いたらしい。

「あ、その、まだ心の準備が」

「すまないな、ちよつと用事が出来たから後は任せた」

とん、とそのまま最後の一押しで無抵抗なリインフォースは”今
ヴィータが寝ている部屋”の中に姿を消した。

最後の瞬間、ちよつとだけ泣きそうな表情が視界に入ったのがそ
れとなく罪悪感を刺激する。

まあ、この一押しが悪い方向へ転ぶようなことは無いと信じたい。
放っておいても二人の間にある溝なんてのはただの誤解や習慣が作
り出した幻みたいなものだ、手探りで進んでいくうちに勝手に距離
は縮まるだろう。

さてと、邪魔者は退散するとしようかな――――

STAGE 4

仲直り（後書き）

『あとがき』

自分でも意外な事にヴィータを書いてみたら上手くいきました。

今まであまり描写出来なかったキャラにスポットを当てるのがこの先数話の目標。

本当はなのはとフェイトも登場予定だったんですが、書いてる途中で消えてしまって（涙）

とりあえずヴィータが体調不良だったのはなのはPSPでのシャマルルートへの伏線なんて大層なものじゃ無いですよ

ヴィータルートでのリインフォースとの和解的なイベントがあったのを思い出してとりあえずそれと似たような役割を果たすイベントを無理やり押し込んだらこうなったわけでww

次回も読んで頂けると嬉しいです

STAGE 5 紅の鉄騎はその名を呼ぶ（前書き）

一話五千字前後に納まりつつある今日この頃。
感想、御指摘お待ちしております。

STAGE 5 紅の鉄騎はその名を呼ぶ

室内を満たすのは静寂。

思索に耽る賢者が纏うような静謐なものでは無ければ、通夜のような悲痛なものとも本質を隔す。

ただひたすらに気まずいだけの重苦しい静寂だ。

寝巻を汗で濡らす赤毛の少女と、そんな少女の着替えを持参した銀髪の女性。

見た目、顔立ち、もバラバラな二人の只一つの共通点と言えばその完璧な【容貌】くらいのものか。年の違いこそあれ、そこには人間の抱える肉体的な些細な不完全性の一片さえも見受けられない――まるで人の手によって造られた精緻な人形のような完全性。

けれど理想のカタチであろうとも人間が聖人君子のように完璧なココロを造る事は不可。

「あの……ヴィータ」

「……」

押しの弱そうな声で囁くリインフォースの絹のような銀髪がベツド脇で軽く揺れる――

それに対するヴィータの対応は無言を貫く事であった。否、それしかできなかった。

境遇こそ特殊であるが、現在の二人は紛れも無い【家族】である――だが、両者を分かっように互いが最後の一步を踏み出せない事情が存在した。

闇の書の管制プログラムとその守護騎士――それらに関わる呪われていた運命フレイト

それが解決された後も幾百、幾千という月の流れの間に築きあげられた一線の隔たり。

妖精は騎士が呪いから解き放たれない運命を嘆き、騎士はその運命を前に嘆くしかできなかった妖精を糾弾した。

「汗だけでも拭いておかないと、本当に風邪を引いてしまう」

「……」

ココロが未熟だった騎士は妖精に当たる事しかできなくて、優しかった妖精はそれを受け入れることが自分の罪だと誤認した。

結果、築き上げられた壁——そんなものはただの幻でも、両者の距離感を狂わせるのに十分。

心配そうにタオルを差し出すリインフォースの手からヴィータはひたたくるようにタオルを奪って、彼女へ背を向けて身体を拭こうと試みる。

だが、病床の身——しかも悲しきかな、彼女の肉体は幼児のそれ。力の入らない手では汗を拭うことさえままならない。そのストレスが彼女の苛立ちを加速させる。

（うがああ！ ライのやつ余計な事しやがってええ！）

この場に居ない少年の涼やかな表情に心中で怨嗟の声を上げてがしがしと頭をかきむしるヴィータ。

彼女だってリインフォースとの良好な関係を築きたい、だって家族だから。

けれど、こんな性急的な解決策を提示させても生来コミュニケーション能力に難ありと自覚している彼女は下手な事を言って関係を拗らせる危険性くらい知っている。

戦場では将より先に先陣を切って活路を開けるほど勇猛だと自負していた、だがこういう場ではどうしようもなく臆病。

既に二度も会話のキツカケを逃してしまった。

口を開けば素直じゃない自分の口はきっと彼女を傷付ける言葉を吐いてしまう——そんなものが鉄槌の騎士の本懐だとは信じたくない。けれど、長い時をかけて培った破壊の技術はこんな時どうしようもなく無価値。

そんな時だ、ヴィータの視界に一枚の小さな紙切れが映ったのは

枕の下からひょっこりと顔をのぞかせているそれはヴィータにか視認出来ない位置、そして丁寧な筆跡で書かれたメッセージ。

『健闘を祈る』そんな短い一文、シンプルであるからこそ嘘偽りの無い素直な感情が伝わった。

（あいつ後でぜってーブツ飛ばす）

くしゃり——書き置きを握りつぶす。

鉄槌の騎士の胸の内に灯るのは小さな怒りの炎。けれど、幸いなことにそれは彼女の内の臆病な部分を少しだけ焼いてくれた。

まるで潰された紙切れと同じように、先ほどまでヴィータを苛んでいた些細な意地も小さく丸まってしまう。

「あのさ……」

「……？」

ぐいと振り向いたヴィータの目先では申し訳なさそうに首を傾げたリインフォースの姿が——

その姿を見て今更ながらヴィータも確信する。

コイツも同じだったんだ。

「おめーは今……幸せか」

「ああ、素晴らしい主と騎士達に囲まれて今の私は幸せだよ」

「……そっか」

ゆらゆらと自信なさげに揺れていた視線がその時だけはハッキリとヴィータを見据えていて——その”騎士達”にあたしは入っているのか、なんてことは恥ずかしくて訊けなかった。

代わりに——

「病人の看護しにきたんなら背中くらい拭けよな……リインフォース」

気恥かしさで朱に染まった頬を見られたくなくてぷいとそっぽを向く。

そして一つだけ意外だったのは——

「……ヴィータ」

感極まったようにぽつりと呟く銀髪の妖精。

「ん？って、ちょ！？　なんで泣いてんだよっ？」

「：すまない、初めて名前を呼んでくれたからかな——涙が止まらない」

「嬉しくて泣くヤツがあるかよ、ばか」

◇sideライ

「ねえ、ライ君」

「なんでしようか、シャルさん」

時刻は既に九時前、窓から見える世界も闇に包まれている。

ぽつぽつと近所のどの家も明かりが点いている様は少しだけ伝え聞く”ホタル”の光に似ていた。

「夕方に私がお買い物から帰ったらリインフォースがヴィータちゃん
の背中を拭いてたんだけど」

「ヴィータは病人だから当然でしょう？　僕はちよっと老人会の方
々の相手をしてたんで見てませんけど……王手、っと」

「まあ、そうなんだけど彼女達の距離感が妙に縮まっているとい
うかなんというか——そこで貰って来たのねえ、この将棋盤」

ぱちん、僕の駒の目の前に障害物となる駒が置かれる。

ヴィータが寝込んでいるから年末は会えないという旨を伝えに行
ったら何故か貰えたこのショウギというボードゲーム。詳しくは知
らなかったんだがスザクから日本のチェスみたいなものだと言
いた通り、意外に面白い。

「なんだかんだでシャルさんもなかなかやりますね」

「一応これでもヴォルケンリッターの参謀なのよ、私」

「その割にはツメが甘いような気も……王手」

「ああ！ちよつと待って……じゃなくて、もしかしてライ君が何かしたのかな？って私は訊いてるんだけど」

「待ったは無しですよ……ついでに僕は何もしてません」

とりあえずのところ、僕は何も嘘は言って無い。

ラインフォースとヴィータに最後の一押しをしただけで結局のところは全部当人達の問題、そして解決したのも当人達。

けれど、シャマルさんは形の良い唇に指を当てて疑わしげに覗きこんできた。

少しだけ幼く見える顔でそういう大人っぽいポーズを取られると微妙に対応に困る。

ついでにプロポジションの良い身体のラインが寝巻のおかげで浮き彫りなのだから尚更だ。

「だったら頭の後ろにあるコブはなんなの？」

「暴徒に突然襲われました」

うん、これも一応嘘では無い。

家に帰ってきたらどういうわけか待ち伏せしていたヴィータの一撃が炸裂したのは事実だからだ。

とりあえず生きているから彼女なりに手加減はしてくれたんだろう。

「へえ、暴徒……って、大丈夫なの！？」

「身体だけは丈夫みたいなんで問題無いです」

「ダメよ、下手に内出血してたら色々と危ないんだから。ちよつと見せて」

「え」

ぐいと頭を掴んで引っ張られる。

ぺたぺたと傷の具合を調べるようにほっそりとした指が後頭部周辺を慎重になぞる。

けれどこの手の傷は押したりしなければ内出血の度合いは分からないわけで――――

「痛！、いや、内出血はしてませんって。さっき自分で確かめました！」

「でも一応調べておかない」と

「ぐっ！」

がっちりとシャルさんに頭を掴まれる。

守護騎士内での役割ゆえかこういう時のシャルさんは中々に強情だ。良い事なんだろうけど今に限っては勘弁願いたい。

頭を包む妙に柔らかい感触と、後頭部に走る激痛——今日は厄日だ。

先ほど入浴を済ませた彼女の髪からはシャンプーの香りだろうか——柑橘系のさわやかな匂いがした。



「痛い……」

〈結果として治癒魔法をかけて頂いたのですから問題ないのでは？〉

「いや、まあそうなんだろうけどさ」

チカチカとコアを点灯させて電子音声を発する月下へ曖昧に返答する。痛みの種類について機械に説いてもあまり意味が無い。

入浴を終えてリビングにはやてやリイン達が集まった一階に比べ二階は静寂に包まれていた。

青白い月光に照らしだされた廊下は寒々しいが中々に趣がある。熱を帯びた後頭部を冷やすには丁度いい——壁に背を付けて何の気無しに窓の外へ視線を移す。

ずっと昔、母上が月には木槌で武装したウサギが住んでいるとか何とか言っていたのを思い出したからか、自然と視線は夜空へ。

冬の澄んだ大気。

さすがに都会の夜空に星の数は少ないが、それでも天頂には煌々と輝く月が。惜しむらくはまだ満月では無いという事くらい。

「今夜は月が綺麗だ」

今までまともに月を仰ぐ暇なんて僕には無かった事に言ってから
気付く。

それでも月は人の心を惹きつける。

漆黒のキャンパスの中で一際美しく輝く月明かり。

どんな腕前の画家でも、どんな財宝を抱える王にも手に出来ない
だろう。

「まったくだ、月を眺めると心がざわつく」

「…それは君が狼だからかい？ザフィーラ」

「かもしれぬな」

最初からそこに居た、そう錯覚してしまうほど自然にそれは僕の
横に在った。

月明かりの反射する蒼い毛並みの狼が窓越しの月夜を眺めている。
ひたすらに静かに、そして堂堂と、矛盾する筈のその二つが混在
するのは彼の魅力かもしれない。

そんな狼の口から人の声が漏れる。

「ヴィータからの伝言だ、感謝してやる……と」

「やれやれ僕も信用されて無いな」

「そうでもないぞ」

「そうか？」

「あれは中々に本心を外へ出せぬからな、他者を介してでもこうい
う事を伝えるのは珍しい」

「……今日は後ろから襲撃されたんだけど」

「打ってもお前ならば大丈夫、という信頼の証だろう」

「ええと、一応喜んでおくよ」

信頼の証がハンマーで殴る事なら物凄く対応に困る。はたしてこ

の身体もいつまで保つのか……

けれど今日のザフィーラはいつにもまして饒舌な気がする。

さっき言った通りに月が何か関係している、というのは何か違う気がする。というかそういうのは満月の夜と相場が決まっている。

「アルフと何かあったのか」

「拳を交える友、というのは存外に良いものだ」

「なるほど……ね」

今朝フェイトの使い魔に連れて行かれていたのはそういう事か。

それから後はどちらから声を発するともなく長い時間を月夜を眺める事に費やした。

長い無言、けれどそれは苦痛では無かった。

この狼を包む静寂は実に心地が良い。

けれど毛皮の無い人間にはこの季節の気温は少しだけ酷だった。

今日は妙に疲れたから階下に下りず寝室へ向かおうとしたその時。ふと思いついたように蒼狼が声をかけてくる。

「そういえば明日は主はやての飛行訓練と魔法訓練らしい、お前も参加してみてはどうだ？」

「そうだね、考えておく」

月下に追加されたフロートユニット、飛翔滑走翼の存在を思い出す。そしてまだ僕はちゃんとした飛行をしてないことも——

成程、彼なりに僕の事情を鑑みてくれたらしい。

けれど、その上で少しだけ引かかる事が。

「とは言ってもまだ暫くは空を飛ぶ必要も無さそうだけどね」

病み上がりの身に空はきついよ、と軽く手を振って寝室のドアノブを捻る。

「どうにも街で嫌なにおいがした——何も無いとは思いが念の

為だ
」

STAGE 5 紅の鉄騎はその名を呼ぶ（後書き）

『あとがき』

自分で言うのもあれですがなんだかヴィータが書きやすいと思う今日この頃。

なのフェの二人組が空気になりがちなのをこの勢いで打開したいものです。

さて、今話はヴィータとリインの仲直りパート。

原作なのポの『真っ直ぐに瞳を見て名前を呼ぶ』という仲直り方式も良かったんですが、あれはなのはさんの助言ありきなので今回は敢えてリインフォースに面と向かって名前を呼ばなかった、というのが密かなこだわりだったりしますw

今更ですが、ランスロットクラブに乗るルートじゃなかったライは原作からちゃんとした飛行は未経験。

闇の書篇後編でさりげなくフロートユニット追加しても活用ゼロだったことをふまえて次回は飛行訓練篇です。

ライは割となんでも出来る子だけど訓練なしの本番で飛べるほど天才じゃないんだよ、という無駄にリアルな作者の思考故なのですw

それでは

STAGE 6 飛行訓練（前書き）

なんだか微妙に本調子なのだから不調子なのだから分らないいつもの自分の文章に戻ってきたような気がします。

STAGE 6 飛行訓練

「はやてちゃん、こっちこっち！」

「重心制御が出来てないよ、はやて！」

「え、ええと、一気にそんな言われてもよー分からんってー」

おっかなびつくり六枚の濡羽色の羽根をバタつかせて空中でふらふらとダンスを続ける齡十にも満たない茶髪の少女――八神はやて。

その身に纏うのは白と黒のバランスの良く取れた騎士甲冑と呼ばれる防護服。一重に真冬の空で吹き付ける寒風が少女の体力を奪っていないのはそれのおかげと言いだえても良い。

一種の天性的な能力――魔導――を扱う才能リンカーコアを備えた少女は眼下に広がる海鳴市の町並みが視界の中でぐるぐると回転する様を見て平衡感覚を失っていた。

才はある――だが経験と実力は別物。

今のはやては進むべき方向も、今回魔法飛行の講師を買って出たくれた友人二人の姿も位相結界内で完全に見失っている。

（あかん！コレはマジであかん、おちるー！？）

ぱたぱた……ぱたり――必死に羽ばたいていた六枚の羽根の動きが途絶える。

ここ数日、魔導に関する知識だけならば博識な師達の教えを受けていたが、肝心の魔導の単体維持と構成を行う精神力が目回してしまったはやてには残っていなかった。

飛行と呼ぶにはあまりにも拙い浮遊の末にもたらされるのは無様な落下――それが分かる程度に少女は賢明だった。

眼前に迫るコンクリートの地面を想像してはやてはきゅっと目を瞑る。瞼の裏に映るのはやっと手に入れた家族達の顔。

けれど、激突の瞬間と死の衝撃はいつまで経ってもやってこなく

て――

「ご無事ですか、主はやて？……スレイプニールの六分割制御などする必要はないので「りいんふおーすう！」え？……く、苦しいです主はやて」

代わりに、優しく包み込む柔らかい感触に全力を持って抱きつくのであった――

◆sideライ

はやてに抱きつかれて振りほどけばいいのかそのまま慰めればいいのか暫く迷うような表情をしていたリインフォースだが、結局背中をぽんぽんと優しく叩いてあやす方針に決めたらしい。

雪のように輝く銀髪がふわりと風に吹かれて揺れていた。

はやて落下の瞬間に肝を冷やしたが、とりあえずこれで安心だと安堵のため息を吐く。

「私はむしろお前が墜ちないかと内心ヒヤヒヤだったのだがな」
ぐいと手を引っ張られる。

振り向くとそこにはピンクの髪を束ねて騎士甲冑に身を包んだ玲瑯な美貌の騎士が何も無い中空で地面に立つかのような安定感のまま浮遊していた。

そこを突かれると微妙に反論し難い。

「そもそも自分の飛行訓練中に他人に気を回す余裕など無いだろうに、お前が気付かないでも私カリインフォース、高町やテストタロツサがいるのだからな。」

一人前の騎士の真似ごとがしたければまず自分の飛行スタイルを

確立しろ」

「はい」

訓練が始まってはや五分、早くも減点を貰いました。

◇

事の始まりはそう複雑では無い。

空を飛ぶ翼を得た少女が何を考えるかなんてのは子供の心を失った大人だって直ぐに見当が付く。

足、という年頃の少女ならだれもが持っている移動手段が使えない少女ならば尚更、と言ったところか。

はやての飛行訓練、同様に魔法飛行未体験の僕もそのついでというカタチで便乗させてもらっている。

だからはやて一人に対してなのは、フェイト、リインフォースが付いているのに対して、僕にはシグナムさん一人という割り当てになったのだろうか。

月下夜昇式——先日の闇の書事件以来、暫定的にその名を与えられた月下の電子情報にもその翼の名が新しく登録されていた。

飛翔滑走翼。X字のようにデバイス展開時に背中に現れる四つの突起物はフロートシステムにより揚力、推力を得るに至った——要するに飛行装置というわけである。

だが、僕の知る限りフロートユニットの実用化に成功したのはブリタニアのガウェインのみ、機動兵器が前身であるこのデバイスにそれが積まれるに至ったその過程を思い出すとどうにも違和感というか疑問が払拭できなかった。

けれど、答えを得る事の出来ないと分かっている思考ほど無意味なものも無い。無理やりにでも頭の中を切り替える。

——月下のサポートもあり、飛翔には成功した。

けれどそれはシグナムさん曰く「浮遊」ではあっても「飛行」で

は無いらしい。生まれてこのかた何時だって足元に存在していた地面、それが無いという現実には訳も無く眩暈のような衝動を覚えさせる。

気を取り直して視界を遠くに移せば、自分よりも遥かに年下の少女二人が自由自在に大空を舞う姿が。

風を切り、重力の網に引かれているとは欠片も思えないほど優雅で洗練された飛行と、その顔に浮かぶ年相応の無邪気な笑顔。

一度遠巻きに見た事があるがその姿はなんというか――

「鳥、みたいですわね」

「ああ」

素直な感想にシグナムさんも頷く。

高町なのはとフェイト・テストロッサ

彼女達がこの域に達するまでどれほどの修練を積んだのかは僕には想像できない。

その旨を呟くとシグナムさんは首を振って否定する。

「技術的な修練をどれだけ積んだとしてもそれだけではお前のような感想を抱かせるには達しないさ。

鳥は飛ぶべくして飛ぶ、ただそれだけのことだ」

「けれど僕たちは人間だ、飛ぶ事は出来ても鳥にはなれない」

「そうだ、まさにそれが正しい人間の発想だ」

「――疑問符を浮かべた僕に対して、シグナムさんはうん、と小さくうなずいて天を見上げる。

まるでそれは何かを思い出すような仕草で――

「元々な、ミッドやベルカに問わず飛行適性の検出なんてのは子供の時に行うものなんだ」

「鉄は熱いうちに打て、というわけですか？」

「そういう事だな、魔導の適性というのは若いうちに磨くに限る」

「ええと、それって僕は適応範囲内なんでしょうか……」

「さて、これはリインフォースからの受け売りだから私も言ってい

る以上の知識は無いんだがな」

一転、天上から眼下へと視線を落としてシグナムさんは語り続ける。

「元々、人間の脳には【飛行】を許容するだけの余裕は存在しないんだ。当然だろう？身体の方にその機能が存在しないんだから。そんな不要なモノは持っているだけ無駄だ、脳に圧迫をかけるくらいならば捨てた方が良い」

にべもなくバツサリと切り捨てた。おかしいことだ、人は必要じゃないものをたくさん持っているというのに。

確かに、人の視点の高さは固定されている。

飛行——とはつまりその視線を捨てる事を意味しているのだろう。けれど古代の人間は塔を作り、疑似的に空から見下ろす感覚を識った。そして近代になってその技術は発展を遂げて——

「でも、現代の人達は空を飛べます」

飛行機で、ヘリで、気球で。それはきっと彼女の知る魔法世界の人達も同様なのだろう。

ああ、と頷くシグナムさん。

「だが、それでも文明の加護を受けているという認識があるからこそだぞ。だが尚、人の認識野と言うのは未熟だ。

ランペルージ、下を見てみる」

「……？」

眼下に広がる海鳴市。

自分達の遥か百メートル以上で今もなお続けられている人間達の営み。

細い糸のような道路の上を数多の鉄の塊が交差して進んでいる。

会社の窓際ではサラリーマンがパソコンを叩き、家では主婦が昼食を作りにかかっているのだろう。

けれど、それをこの高度から事細かに見る事は出来ないし、八神家の位置さえひどく曖昧で探すのには手間取る。

その光景は美しい、何でも無い町並みでも壮観だ、けれどそれは

とても——

「遠い、ですね」

「そうさ、人はその衝動をもたらず視界を俯瞰と呼ぶ。

普段自分が属している筈の世界が遠くなるというのはそれだけ隔たりが鮮明になるということさ。

この高さからでは人一人が肌で感じる”世界”などというものはとても遠くなってしまう」

俯瞰から得られるこの衝動。多分僕は”知っている。”

あまりにも遠過ぎる世界、実感の出来ない現実。

そこに何があるのか知識では分かっている筈なのに脳はそれをどこか遠い虚構のように扱っていた。

現実との接点を失ったから——それはすなわち、”記憶喪失だった頃の僕の視点”

段々と彼女の言わんとすることが分かってきたような気がする。

「この俯瞰から得られる視界をどう主観に取り込むか、それが空戦魔導師の才能……というわけですか」

「相変わらず物分かりが良いじゃないか、教え甲斐がある」

唇の端を吊り上げて手を僕の頭の上に置いてぐしぐしと撫でるシグナムさん。

褒めてくれているんだろうけど、なんというか子供扱いされているようでそれほど嬉しくない……

「無反動旋回だとか瞬間加速なんでもものの技能はな、空間シミュレータでもしていれば素人でも身に付けられる。それにただ地を離れるだけならばそんな魔法も訓練次第で習得できる程度の難易度に過ぎない。けれどその認識野だけは訓練で培える物とは違う——

お前がテストロッサ達を鳥のよう、と称したのは彼女達がこの俯瞰風景を主観に取り込んだ真の空戦魔導師だから、なのだろうな」

僕の髪がぼさぼさになった頃によくシグナムさんは手を離す。まあ、元々自分の髪型なんて興味はないのだから良いのだけれど。

ここまではシグナムさん曰く「受け売り」の知識。

そしてここからは――

「古いベルカのことわざに『子供は空に好かれる』と言うのがあってな――

子供は軽い、だからとても浮きやすい。

縛られる責任も無いし、背負うべき人も居ない、脳を保護する常識だって未完成。そんな子供の方が『空の世界』をすんなりと受け入れられる。

けれどな、軽いという事はそれだけ飛ばされやすいんだ。

地に縛り付ける責任も無いし、背負うべき錘も無い、地上に還るための知識が未完成。

空を飛ぶ事に慣れてしまおうと今度は地で暮らす為の認識が麻痺してしまう。

そうやって空に心を奪われてきた子供は沢山いる――空を飛べる騎士は戦略の幅を広げるからな」

少しだけ悲しそうに烈火の将は呟く。

その瞳が見つめるのは僕の知らない数多の戦火。けれどその声色に後悔の色は存在しない。

きつと今のこの場所は彼女の見てきた中でもとびきり恵まれた環境だから。

ふっ、とピンクの髪を風に靡かせて小さく笑んだ。

その視界は二人の少女と一人の妖精に手を引かれて飛行する少女へ――

「正直、我らが主もその手の人種だと思う。もし“彼女”を失っていたら、と考えると特にな……

だから私は二重の意味でお前に感謝と期待をしているのだぞ？」

「……ええと」

未だに不安定な浮遊をする僕の手を掴んで真正面から見据えられる。

正直その表情は卑怯だと思う。一瞬だが不覚にもドキリとしてしまったじゃないか。

そしてその期待はやっぱり少しだけ重いような気も。

かけられた期待に答えたくないのは男の性というわけか……

「善処だけはしてみますよ」

まだ身体の節々がぎこちない動きをする、けれどそれは【飛行】の本質には関係が無い。

ただ宙に浮くだけならば月下のサポートだけで十分。

呆、と肺の中の空気を全て吐き出す。

余計な情報をカットするために目は閉じる。

僕は、なのはやフェイトのような【鳥の目】を持てるような人間ではないのだろう。

だけど本当の飛行が、俯瞰から得られる風景を主観に取り込む事ならば———簡単だ。

俯瞰なら今まで飽くほどしてきた。

記憶の喪失。現実との接点の消失。

いや、そもそもナイトメアフレームと呼ばれる人型の自在戦闘装甲騎自体、それへの登場自体が俯瞰を生み出す産物では無かったか？

全長4メートルの巨人の視界———それをただ単に『モニター越しの景色』として認識するか、自身の『知覚器官の延長』として認識するか。

魔法による飛行とそれらの兵器の視界。

根本的に違えど、本質は同じ。

思い出せ、あの感覚だ———現実との齟齬を受け入れる感覚、否、現実の主観を“今だけ封じろ”。

すう、と徐々に感覚がクリアになる様な不思議な感覚。

「ほう、自己暗示でそこまで意識を改革するとは。
お前は好きなランペルージ。空で剣を交える時が楽しみだ」

素直な賛美の言葉にゾツとするような台詞が混じっていたような
気がするが——うん、今は無視しよう。

だが、事実として先ほどまで覚えていた【足場の無い不安】はす
っかり薄れてしまった。

空を受け入れるのではない、空に適応する感覚。

もう少しだ、もう少しで僕は本当の飛行を——

「ちよおどいてえええええ！」

そう、この悲鳴……え？

何が？——そう問おうとしてその場で旋回——待ち受けていた
のは……

風を切って飛来する何か、六枚の羽根は綺麗に動き、美しい軌道
を描いて——

「うっ!!」

それが飛行制御を失ったはやてが頭から突っ込んでくる姿だと認
識した時には既に遅く、鳩尾に走る鈍い痛みが一瞬だけ意識を真っ
白に染めた。



空から見下ろす海鳴りの風景もそろそろ民家に灯る明りが多くな
って来た。

「うう……ほんまごめんなあ、ライ君。わたしが飛ぶのへたっぴや
から」

「いやいや、いいんだよ。今日一日ではやても僕も十分に飛ぶの上

手くなっただろ。

次は激突する前に受け止めてあげるよ」

「あれ？それやとまた私が飛ぶの失敗するのが前提みたいやんか！」

「ごめんごめん」

むう、と頬を膨らませたはやてに？地上と同じような姿勢で頭を下げる。”

訓練開始当初ならばこんなことも出来なかっただろうと思うとこれでも立派な進歩だ。

「でもはやてちゃんも十分に飛ぶの上手いと思うよ？

わたしだって最初はレイジングハートの助けがあってやっと飛べたのに、はやてちゃんはそういうの無いでしょ」

「うん、まだまだ高速飛行は大変だけどはやては素質あるよ」

「えへへ、そう？」

はやてだって空中でなのはやフェイトとじゃれ合う位には飛行技能が上達している。

その姿をシグナムさんもリインフォースも微笑ましげに眺めている。

訓練開始から約五時間、既に太陽は地平線の彼方に沈んでいた。

騎士甲冑の恩恵を持つてしてもさすがに肌寒くなって来た。

それはじゃれ合っていた三人の少女達も同様だったのだろう。

くしゅん、と可愛らしいくしゃみをしたのはが――

「あ、そうだみんな。

今日うちでお鍋やるみたいなんだけど、この後どうかな？」

「ナベ？地球の料理か何か？」

言葉の意味が良く分からないと首を傾げるのは次元世界人のフェイト。

ハラオウン家に身を寄せていると聞く彼女は恐らくリンディ提督

かクロノ執務官あたりに連絡を付ける為だろうか、空間モニターを開いて通信を始める。

僕とシグナムさん、リインフォースはというと、八神家の食卓事情を一身に担うはやてに視線を向ける。

「ええと、今日はお夕飯作る余裕ないって思ってたから昼の内に前頼んでたんやけど……うちで家事出来るのはシャルだけやし……」

「「「ああ」」」

納得したように三人の声が重なる。首を傾げるのは我が家の事情を知らないのはとフェイトだけ。

「うん、まあとにかくごめんなー、なのはちゃん

わたし達は行けそうにあらへんから気にせんといてなー」

「そういうわけなら仕方ないね、じゃあねはやてちゃん、ライくん、シグナムさん、リインフォースさん」

「さっきエイミーから聞いたんだけど今夜は雨なんだって、だから寄り道はだめだよ？」

ばいばい、と手を振る二人の魔法少女。

同じように手を振って僕達も我が家への帰還を急いだ。

雨雲の匂いと湿った風が酷く不快だったのは――何故だろうか。

◆side???

薄暗い路地裏、冬にしては湿った寒風がざわりと吹きつける。

ソレはそんな場所にただ在った。

冬の寒さから、自己の内に抱える空隙から、仮初だとしても自分を守るように黒いボロ布のようなローブを身に纏って――その在り方はさながら浮浪者。

何をするでもなく“影”はただ佇立して期を待つ。

「マテリアルも、管理局も存外に動きが遅い……過大評価をし過ぎたか？」

ソレは何よりも懦弱にして脆弱、胸の内に秘める空隙に耐えられないほど軽くて——まるで亡霊のよう。

路地裏から眺める海鳴の景色はあまりにも幸せが溢れている。

笑顔、愛情、恋慕、親愛。

街を照らす街灯も含めてそれらは満たされ過ぎていて、“彼”には眩し過ぎた。

それを奪え、壊せ——と、闇の書の中で混ざり合った死者達が焼き付けた妄執がどうしようもないほど渴望している、胸を締め付ける。

「やめろ、私にあれば刺激が強過ぎる」

火に誘われた蛾が焼け落ちるようなものだ、と自嘲気味に呟いて天を見上げた。

雨雲に覆われようとしている中でほんの少しだけ空いた隙間から覗く欠けた月。

いつの時代だってその在り方を変えずに空へ浮かび続ける夜の象徴。

「今夜も月が綺麗だ」

惜しむらくはまだ満月で無い事か——

——人知れず海鳴りの影で闇は蠢き続ける——

STAGE 6 飛行訓練（後書き）

『あとがき』

飛行訓練とか銘打っておいて実際にそういう描写があんまりないのは詐欺だと自分でも思ってますです、はい。

言い訳をするなら、劇場版なのは資料の中に『飛行魔法は初級の最後、中級の最初くらいの難易度』みたいな記述があったので『あれ？じゃあSTSでティアナとかが飛んでないのっておかしくない？』みたいな考えになり、飛行適性云々について色々とおリ設定を交ぜた結果あなった次第ですw

参考資料は小説版ファフナーとか空の境界……うん、自分の技量ではいまいち活かせませんでしたかねorz

さて、久しぶりに登場した謎の影。

性別が男らしいってことだけ明かしましたが極力情報は隠しすことで怪しさをドンドン上げていくつもりですw

それでは

断章 吠える鷹作 凍える雨（前書き）

なんだか最近本調子。

誤字脱字の指摘に感想お待ちします。

断章　　吠える鷹作　凍える雨

海鳴の冬は寒い――

大陸側から吹きつける乾いた季節風故かその日は一層冷えていた。予報では雨だ、などと言っているが実際は雪でも降るんじゃないだろうか？

道に張った氷の膜を見てユーノ・スクライアはそんな事を考えながら足を早める。

それでもなくても昼間のように太陽の恩恵を受けられないのだ。

柔らかい金髪を撫でる冬の寒風に小動物じみた印象の少年はぶると震える。

シャッターを下ろして店仕舞いの終わった通りは人気が無くて寒々しい。忘年会で酔っぱらったサラリーマンがふらつくにも早い時間帯であった。

「まあ、寒冷地の遺跡調査なんかよりはずっとマシなんだろうけどさ」

閉鎖された空間でたき火なんてした日には笑えない死因である世にゴ―だ。

そんな時だ、少し大き過ぎる彼のコートの中で電子音が響いたのは。

何の音だろうか？と馴染みの無い呼び出し音に一瞬首を傾げたユーノだったが、直ぐにそれがケータイと呼ばれるこの世界に一般普及した通信デバイスの事だったと思いだしてそれを手に取る。

無論、地球の知り合いなんて数えるほどしか居ない。

「もしもし？」

『あ、もしもし、ユーノくん』

「やあ、なのは。どうしたんだい？」

携帯から発せられた声は彼のよく知る少女――高町なのは――の

ものだった。

半年前にさる事情で助けられて以来、色々と縁のある少女の声に強張っていたユーノの顔も自然と綻ぶ。

『ねえ、ユーノくんは今日の夜、時間空いてるの?』

「うん?、クロノの奴に押し付けられた遺跡の調査の仕事があるけど、それくらいなら工面できそうだよ」

『いせき?、ああ……それってライクんの――』

「そう、あの人自身もあんまりアレについて知っている訳じゃないらしくて。その調査がスクライア一族の僕に回ってきたって訳」

話題に上がったのは、先日の闇の書事件の際に管理局の知る事となった南西の孤島の小さな遺跡について。

それがただの遺跡ならば問題は無かったのだろう。だが、古代遺失物の防衛プログラムを消滅させるだけのエネルギーを一時的にでも放出した以上、それを看過することは許されない。

だからだろうか、ユーノの手の内には何冊かの書物が抱えられていた。

記されたタイトルはそれぞれの地球という惑星で現在に至るまで発見されてきた古代遺跡や文明について綴られた物ばかり。

「けど、先日の一件で防衛プログラムもろとも遺跡が吹き飛んだせいでもかなり調査の方法も限られるんだけどね」

『わあ、大変なんだね。わたしはそういうの詳しくないけど、手伝える事があったら何でも言って』

「うん、ありがたいのは。で、結局どうして僕に電話くれたのさ?」

『わわ、そうだった忘れてた』

電話の向こうで可愛らしく慌てる気配。

ついでにはか数人の声が聞こえて来るから、彼女は今自宅なのだろう。

『今日、うちでお鍋やるんだけどユーノくんもどう?』

フェイトちゃんも呼んで、一緒に食材も切って用意したんだよー』

「え、行っているの？」

『もちろん。あ、もしかして何か苦手なダシとか食材があったりする？ 今ならまだ近所のスーパーも開いてるだろうしお兄ちゃんに買ってきてもらうけど……』

「ううん、これといって好き嫌いは無いから気にしないで」

『じゃあ待ってるねー、ばいばい』

「うん、ばいばい」

そこで通話を切る。

さきほどまで進んでいた道とは向きを変えてユーノは進む。

その足取りも自然と軽いものへ。

「なのはが作ってくれた料理かぁ……」

ふふ、と笑みをこぼす彼の表情はどこか晴れ晴れとしていた。

元よりスクライアのキャンプで育った彼はやたら格式ばった料理よりは、皆でわいわいと食べる料理の方が性に合う。

そして何より他ならぬなのはの誘いというのは大きかった。

なんとなく高揚した気分で人気の無い通りを左折し――――

そこで気付いた――――

果実の腐ったような甘ったるい臭い。

不自然に空気の流れが弱くなったような淀み。

断続的に揺れる視界。

――立ち止まって眉を顰める。

「これは……結界？」

否、それならば結界魔法の扱いに長けた魔導師であるユーノならばもっと早くに気付いた筈だ。

その在り様は結界を模しただけの粗悪品。

子供が形だけ真似て粘土をこね練り上げたような不完全性。
結界と呼ぶのにそれはあまりにも稚拙で不細工。

結界——とは元々、聖域と下界を隔絶するための手段に過ぎない。

積み重ねられた魔導の歴史がその使用用途を多岐にわたらせたとしてもその本質は変わらない。

区切った空間を示すのではなく、区切る境界を指して結界と呼ぶ。他者を阻む魔力の壁が結界ならば——コレはただの淀みに過ぎない。

全ての基礎であるはずの【場の指定】さえも不完全。

例えるならば水性ペンで引いたラインの上に水滴を垂らしたような……

む、と思案顔になってプロフェッショナルは空を見上げる。そもそも空に至っては境界さえ存在しない。

どんな意図で結界を作ってもこんなものは出来上がらないし、逆にこんなものは作る方が難しい。

人が居ないのは元々の時刻的な条件や、この淀みの違和感を無意識下で避けた結果なのだろう。

「闇の書破壊の二次被害……かな」
あっさりとそう結論付ける。

あれだけ巨大な魔力塊を処理したのだ、この程度の事は起こっても当然だろうし、放っておいても消える。

淀んだ魔力が偶然集まって結界のようなカタチを成したのならば説明がつく。

「無視しても構わないんだろうけど……仕方ない、破壊していくか」
変な魔力の塊が全体としての魔力素の対流に影響をもたらせばこの街に住むのはやフェイト、はやてのリンカーコアにも不必要な負担をかける。

だったらさっさと起点を破壊して魔力素の流れを正常に戻せば良い。

「とは言っても、意図的に作られたものじゃないとしたら起点を探すのは骨が折れそうだなあ」

約束に少し遅れそうだと愚痴りながらもユーノは手慣れた動作で探査用の魔法陣を展開する。

若草色の魔法陣は彼を中心に放射状に広がって知覚器官の代用品となる。

（暗いから視覚情報は不必要、魔力素と魔力のサーチに重点を置いて、念のために熱源探知……っと）

もしも一般人に見つかったらマズイ、そんな判断故に熱源探知の術式を組んだのは彼にとって幸いだったのか――

（あれ？接近して来る熱源一、それに……魔力反応も？――――待てよ、これはなのはじゃない）

直後、違和感を感じてユーノはその場を飛び退く。

「――っ！」

疾走。一つの影が先ほどまで彼の居た空間を薙ぐ。

がしゃん！――と、閉店した店の硝子を碎いてその影は店内に飛び込む。もちろんユーノにとってそこは死角となる。

「誰だ!？」

構えを取って後退する、彼の手には冷や汗が滲んでいた。

もし敵意ある第三者の襲撃ならば彼にとってあまり都合は良くない。

攻性バインドの術式を用意するもそんな物は保険に過ぎなかった。学者気質のユーノは決して戦闘に長けているわけではない。

返答は無い。

だが、低く唸る獣の声だけが在った。

その声はよく知っている物に似ている。

アースラの食堂でアレックスやランディと肉を奪い合うアルフの声、半年前に数度だけ相見えた茜色の獣の声。

——狼の声だった。

「がああああ！」

ぱりん！——再び硝子を割って影は店内から姿を現す。

頭の何処かでは予想していた、だが四足の獣の姿を視界に納めたユーノは絶句せざるにはいられなかった。

「……ザフィーラ？」

硝子の碎片を被った毛皮は街灯の下で蒼く輝いている。

だが、何かがおかしい。

その眼光には理性が一片も宿っていないし、開けられた口からだらりと垂れ下がった舌からは涎が滴っている。

息も荒い——

それはまるで狂犬病にでもかかっているかのようで——彼に根源的な恐怖を呼び起こさせる。

「どうした……んですか？　僕はあなたの敵じゃない！」

言って虚しくなる。

獣に言葉は通じない——原因は分からないが今のザフィーラは通常の状態では無かった。

いや、そもそもアレは本当に蒼き狼ザフィーラなのか？

あまりもの豹変ぶりに思考が追いつかない。だが現実には少年を待つてはくれない。

「ぐおおおおおおお！」

苦しみ悶えるような呻き声を発した後、獣は跳躍する。

その膂力だけは疑いようも無く本物のソレであった。

「止めて——下さい！！！」

躊躇う時間など無かった。

ユーノのリンカーコア内で励起した魔力が術式を通して現象となる。

詠び出された若草色の鎖が蒼き獣目がけて殺到する。

彼自身でも驚くような出来の良さだった、火事場の馬鹿力と言うやつだろうか。

だが、ほんの少しだけ獣の方が速かった――

「……え？」

獣を包むまばゆい光。

それが人型への変身だと気付いた時にはその太い腕の一閃で全ての鎖が断たれた後だった。

回避行動を取る暇など無い。

筋骨隆々の男は地を蹴ってユーノに肉薄する。

そして――

「――がっ！」

振るわれた筋肉が小柄な少年を弾き飛した。

みしり、骨の軋む音と――かはっ！という肺の中身が絞り出される音。

そして少し遅れて後方の壁に叩きつけれる鈍い音。

揺さぶられた脳がユーノから平衡感覚を削ぎ取る。

視界も歪む、聴覚もその機能を停滞させる。

それでも彼の五感は不思議と身に迫る危機だけは鮮明に知覚していた。

（まず……い）

頭の中で幾つもの魔法構築式が浮かんでは消えていく。

荒い息とギラギラと輝く眼が近付いてくる。それは狩る側の姿だった。

何が起こっているのか理解できない、だが死の危険を知らせる本能的な警鐘だけは鳴り響く。

ユーノは駄目元で魔法の構築式を練り上げる。

撃退する必要は無い――その目的は生存、ただそれだけに特化した術式を扱えば良い。

（死んで……たまるか！）
だけど——あまりにも時間は限られていた。

地を蹴ってザフィーラのカタチをした何かが喉元目がけて跳躍する。

それは死の具現であった。

防ぐには強過ぎ、逃げるには速過ぎる。

（間に……合わない！？）

ざくり！——肉を切る音が夜の海鳴に響く。

「—————があああああ！」

闇に沁み込む断末魔の叫び。それをユーノはかすんだ視界の中“凝視する”。

「……え？」

曇天の下、街灯の光をぬらぬらと反射して輝くナイフが在った。
ザフィーラのカタチをした何か。その胸から生えるようにただ在った。

そして筋骨隆々の男の背後には一つの影が在った。

「よりにもよって知性の再現が疎かになるとは、全くもって性質の悪い贗作だ。

盾の守護獣もこうなれば哀れな物だな。だが同時に、お前にとっては幸運という事か」

贗作と呼ばれた盾の守護獣は、信じられない、とても言うように後ろを向こうとする。

理性を失った中にも感情は在ったのだ。

それを——

「失せろ」

何の感慨も無い声を漏らして影は一閃する。

胸の中央部から脇腹にかけて、なぞるかのようにずっとナイフは移動する。両断。

「……………!!!!!!」

苦悶の表情を浮かべて贗作は消失した。

————消えた。

そこに在った人間のカタチ。その存在が完全に。

ひとかけらの痕跡も無く。

残っているのは風にはためくボロ布のような黒いローブだけ。

「……まがりなりにも我が身はマテリアルというわけか。形相干渉の真似ごとでも下位プログラムには十分に役立つ」

ローブに身を包んだ影は、それでもう興味も役割も失ったとも言うようにナイフを放る。見ればそれは魔道によって作られたデバイスでも何でもなく、ただのナイフに過ぎなかった。

「あなた……は？」

霞む視界の中、ユーノはその姿を観察する。

フードに隠れてその顔は全貌を隔している。僅かに覗く口元には何の感情も浮かんでいなかった。

彫像のように無駄な動きを省いて影は佇立し、地に這う少年を眺める。

「……そうか、お前はスクライアか」

「……そう、ですけど」

痛む肺に顔をしかめてユーノは声を絞り出す。

礼を言うべき相手の筈なのに感謝の言葉を紡ぐ余裕などない。

そして何より、どこかそのローブの男は忌避すべき相手のように思っただ。

影に隠れたその目は少年の姿など視界に納めていなかった。

劣る物だと見下すのではない、価値が無いから見る必要が無い。

感情が無いのではない、懐く必要が無い。

ただそれだけのことで、彼は“スクライア”という肩書だけを天秤にかけていた。

「嗚呼、参ったな。出来れば伝令役に手は出したくなかったのだが」
口元に手を当ててそれは逡巡する。

しばしの思考の末、結論付けたようにユーノのもとへ影は近付いた。

「しかし、あの遺跡について調べられては困るな」

「……は？」

「いや、それよりもお前が持つ古代遺跡の知識は何かの役に立つかもしれない」

返答など必要無かった。最初から答えなど訊かれて無かった。

ローブの裾から覗いた白い指が少年を掴み上げる。

そして空いた片手を大きく振り被って――――――――――ユ

ーノの胸に突き立てた。

肘までが少年の胸に埋没して尚、血は流れない。

この瞬間、彼は確信する。コイツは敵だと。

焼け付くような激痛の最中、構築していた魔導を発動させようと右手を伸ばす。

「させないさ、私の身体は先の贋作のように丈夫ではない」

刹那―――流れ込む情報の濁流に少年の意識はシャットダウンされた。

最後の瞬間、影は囁くように唇をユーノの耳元に近付けて言った。

「闇の書の闇が復活しようとしている―――その尖兵は先見た通りの贋作共だ、気を付けろ」



その日の夜は雨だった。

許可を得て現地の街へ降り立ったとある局員、エリィ・ファインは珍しくも眉を顰めてそのエメラルド色の双眸を天に向ける。

骨の芯まで凍るような冷たい雨。

そんなものはとても嫌いだった。

胸に抱えた雑多な食物の中から何故か稲荷寿司を取りだしてひよいと口の中に放り込んだ。むぐむぐと口を動かして嚥下する。

それと同時に彼女の嗅覚はおかしなものを感知する。

「……フレットの臭い？」

まだ食した事はない、というか美味しいとは思えない。

けれどその匂いは幾度かアースラの艦内で嗅いだ記憶がある。

気まぐれにシャッターの降り切った通りへ歩を進めてみる。

そこには――――

雨に打たれて凍える少年の姿が在った。

意識は無く、荷物であろう携帯や書物の数々が周囲に散乱した状態。

断章 吠える贗作 凍える雨（後書き）

『あとがき』

言い訳しときますが、自分ユーノもザッフィーも嫌いじゃないですよ？

ただ展開の都合上、仕方なくと申しましょうか。

どうでもいいですけど原作なのポでザッフィーだけ偽物がやたら攻撃的な例が多いのはなんででしょうね？

シグナムとかシャマルとかは稀に偽物でも自覚症状あったりするのに。

早くもシリアスモード突入ですが次回からもよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5322n/>

魔法少女リリカルなのはA'S 銀月の王と夜天の主

2011年11月13日16時14分発行